有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第３集

矢加部町屋敷遺跡Ⅰ

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

２００７

福岡県教育委員会

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第３集

矢加部町屋敷遺跡Ⅰ

（やかべまちやしき）

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

序

ここに報告する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査された遺跡です。

今回の調査では、江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いの町屋跡と、その遺構・遺物を明らかになり江戸時代前期から明治時代に至る廃棄土坑や溝が発見されるなど、町矢加部集落の歴史を知る上での貴重な資料を得ることができました。

発掘調査・報告書作成に当たっては、国土交通省福岡工事事務所・柳川市教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及に寄与できれば幸いです。

平成19年３月31日

福岡県教育委員会教育長
森山　良一

例言

1．本書は有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査を実施した、柳川市大字矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡２・３次調査の報告書である。
2．発掘調査・報告書作成は、国土交通省福岡工事事務所の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、調査・報告書作成に関して国土交通省福岡工事事務所、柳川市教育委員会の多大な御協力を得た。
3．金属器は、九州歴史資料館において、同館学芸第二課加藤和歳の指導の下で整理を行った。
4．掲載した図は、遺構を桒が、遺物を桒・平田泰美，田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・若松三枝子・棚町陽子・中村洋子・栗林明美・中川真理子・荒川妙・橋之口雅子・西亜彩子が作成したものを桒・豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図したものである。
5．掲載した写真は、遺構を桒が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋の指導の下、文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。
　なお、空中写真は３次調査を九州航空株式会社に委託した。
6．使用した方位は主として座標北である。
7．陶磁器の実測図のスクリーントーンは、釉の掛かり方のわかりにくいものや、掛け分けしているものについて濃淡で表現したものであって、すべての遺物についてトーンと釉薬を統一していない。また、全面同一釉のものはトーンを貼っていない。
8．筑後の焼き物全般については九州大学西健一郎氏に、蒲池焼・土師質瓦については柳川市教育委員会堤伴治氏、久留米市教育委員会白木守氏、東野亭焼については久留米市教育委員会大石昇氏・水原道範氏、二川焼についてはみやま市教育委員会猿渡真弓氏に教授を受けた。
9．陶磁器の分類名は新宿区厚生部遺跡調査会1992『細工町遺跡』を参考として、別称・通称を併記した。
10．文簡については福岡県立九州歴史資料館学芸第一課酒井芳司主任技師の教授を受けた。
11．本書は、桒が執筆・編集した。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の内容 …… 6
　1．2次調査 …… 6
　2．3次調査 …… 72
Ⅳ．小結 …… 111

図版目次

図版1　1．2次調査区全景（北東から）　2．1号土坑（西から）
　3．1号土坑土層断面（西から）　4．2号土坑（南から）
　5．2号土坑木皮出土状態（北から）　6．2号土坑土層断面（南西から）
　7．3号土坑（東から）
図版2　1．4号土坑（東から）　2．4号土坑土層断面（南西から）
　3．5号土坑（西から）　4．6号土坑（北西から）
　5．6号土坑土層断面（北西から）　6．7号土坑（北東から）
　7．7号土坑土層断面（北西から）　8．9号土坑（南東から）
　9．1号大土坑（南西から）
図版3　1．2・3号大土坑（南西から）　2．3号大土坑（南西から）
　3．3号大土坑漆椀出土状態（北から）　4．1号溝状遺構土層断面（北西から）
図版4　1．2号溝状遺構（西から）　2．2号溝状遺構テラス状遺構（北から）
　3．2号溝状遺構土層断面（北西から）　4．5号溝状遺構土層断面（南西から）
図版5　2次調査出土土器・陶磁器1
図版6　2次調査出土土器・陶磁器2
図版7　2次調査出土土器・陶磁器3
図版8　2次調査出土土器・陶磁器4
図版9　2次調査出土土製品・瓦
図版10　2次調査出土木・金属・貝・石製品
図版11　1．3次調査区全景（上空から）　2．1号土坑（西から）
　3．2号土坑（北から）　4．3号土坑（北西から）
　5．3号土坑土層断面（北西から）
図版12　1．4号土坑（南東から）　2．6号土坑（北から）
　3．4号土坑土層断面（南東から）　4．7号土坑（北から）
　5．7号土坑土層断面（北西から）
図版13　1．2・3号溝状遺構（東から）　2．2号溝状遺構大甕出土状態（北から）
　3．2号溝状遺構土層断面（西から）　4．3号溝状遺構土層断面（西から）

図版14　3次調査出土土器・陶磁器1
図版15　3次調査出土土器・陶磁器2
図版16　3次調査出土土器・陶磁器3
図版17　3次調査出土金属・皮・ガラス・石・木製品

写　真

写真1　柳川市旧十二丁松藤キヨ氏宅　漏斗谷の樋吐出口 …… 116
写真2　同上　漏斗谷の樋を下から見る …… 116

挿図目次

第1図　矢加部町屋敷遺跡1～3次調査範囲図(1/4,000) …… 1
第2図　周辺遺跡分布図(1/50.000) …… 4
第3図　矢加部町屋敷遺跡2・3次調査区遺構全体図(1/200) …… 5
第4図　2次調査1～7号土坑実測図(1/60) …… 7
第5図　2次調査8・9号土坑実測図(1/60) …… 9
第6図　2次調査1号大土坑実測図(1/80) …… 9
第7図　2次調査2・3号大土坑実測図(1/50・1/80) …… 10
第8図　2次調査2号溝テラス状遺構、4・5号溝状遺構土層断面実測図(1/60) …… 11
第9図　2次調査1～4・6・7・9号土坑出土土器・陶磁器実測図(19・22・23は1/4、他は1/3) …… 13
第10図　2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器実測図(15・18～20・22・23・26～28は1/4、他は1/3) …… 15
第11図　2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3) …… 17
第12図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(1/3) …… 19
第13図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(1/3) …… 20
第14図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3(10は1/4、他は1/3) …… 22
第15図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図4(1/3) …… 23
第16図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図5(1・6～8・10・14は1/4、他は1/3) …… 25
第17図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図6(4～6・9・14～17・24は1/4、他は1/3) …… 26
第18図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図7(10は1/3、他は1/4) …… 28
第19図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図8(25は1/3、他は1/4) …… 29
第20図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図9(1/4) …… 31
第21図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図10(3は1/3、他は1/4) …… 33
第22図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図11(14・15・17・18は1/4、他は1/3) …… 35
第23図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図12(2・3・10～14・16・18・22・24・25・32は1/4、他は1/3) …… 37
第24図　2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(9・22～28・31・38・39・41・43・44は1/4、他は1/3) …… 41
第25図　2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(1/3) …… 44
第26図　2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3(2は1/3、他は1/4) …… 45

第27図　2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(32・33は1/4、他は1/3) …… 47
第28図　2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(6・7・11～14は1/4、他は1/3) … 49
第29図　2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3(1/4) …… 50
第30図　2次調査5・6号溝状遺構、ピット、調査区壁土層出土土器・陶磁器実測図(5～10・18～20は1/4、他は1/3) … 52
第31図　2次調査客土出土磁器実測図(5は1/4、他は1/3) …… 53
第32図　2次調査出土瓦実測図1(1/4) …… 54
第33図　2次調査出土瓦実測図2(1/4) …… 56
第34図　2次調査出土瓦実測図3(1/4) …… 57
第35図　2次調査出土瓦実測図4(1/4) …… 58
第36図　2次調査出土不明土製品実測図1(1/3) …… 59
第37図　2次調査出土不明土製品実測図2(1/3) …… 61
第38図　2次調査出土不明土製品実測図3(1/3) …… 62
第39図　2次調査出土不明土製品・サナ状土製品実測図(1/3) …… 63
第40図　2次調査出土炉壁状土製品・鞴羽口・湯口実測図(1/3) …… 64
第41図　2次調査出土土製品・ガラス製品実測図(1・3・9・13・26は1/4、37～39は1/2、他は1/3) … 65
第42図　2次調査出土木製品実測図1(1～5・9は1/3、他は1/4) …… 67
第43図　2次調査出土木製品実測図2(3は1/3、他は1/4) …… 68
第44図　2次調査出土木・金属・貝製品実測図(1～4は1/4、5は1/1、6～10・22は1/3、11～21は1/2) … 69
第45図　2次調査出土石製品実測図(10・11は1/4、他は1/3) …… 70
第46図　3次調査1・2号土坑実測図(1/60) …… 72
第47図　3次調査3・4・6・7号土坑実測図(1/60) …… 74
第48図　3次調査2～4号溝状遺構、調査区東壁土層断面実測図(1/60) …… 75
第49図　3次調査1・3・4・7号土坑出土土器・陶磁器実測図1(11・14・19・20は1/4、他は1/3) 77
第50図　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(9・11・12は1/4、他は1/3) … 79
第51図　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図2(9～17は1/3、他は1/4) … 81
第52図　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図3 (10は1/3、他は1/4) …… 82
第53図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(1/3) …… 84
第54図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図2(1/3) …… 86
第55図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図3(1/3) …… 88
第56図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図4(8・10・11・13・16・17は4、他は1/3) … 90
第57図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図5(11・13～15は1/3、他は1/4) … 92
第58図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図6(1/4) …… 93
第59図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図7(4～9は1/3、他は1/4) … 94
第60図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図8(9・15・16は1/4、他は1/3) … 95
第61図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図9(1/3) …… 96
第62図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図10(1/3) …… 97
第63図　3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(12～18は1/4、他は1/3) …… 98
第64図　3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(5は1/8、7～10は1/3、他は1/4) … 100

第65図　3次調査2号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/8) …… 101
第66図　3次調査整地層・調査区外クリーク・排土中・客土中出土土器・陶磁器実測図(10～13は1/4、他は1/3) 102
第67図　3次調査出土瓦実測図1(1/4) …… 104
第68図　3次調査出土瓦実測図2(1/4) …… 105
第69図　3次調査出土瓦実測図3(1/4) …… 107
第70図　3次調査出土瓦実測図4(1/4) …… 108
第71図　3次調査出土土製品実測図(5・6は1/4、他は1/3) …… 109
第72図　3次調査出土金属・皮・ガラス製品実測図(4は1/2、6は1/4、他は1/3) …… 110
第73図　3次調査出土木製品実測図1(1～6は1/3、他は1/4) …… 112
第74図　3次調査出土木製品実測図2(1/4) …… 113
第75図　3次調査出土木製品実測図3(1/4) …… 114
第76図　土師質瓦実測図(1/6) …… 115

表目次

表1　2次調査土坑出土土器・陶磁器観察表 …… 14
表2　2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器観察表 …… 16
表3　2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器観察表 …… 18
表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(1)～(10) …… 21・24・27・30・32・34・36・38～40
表5　2次調査2号溝状遺構出土遺物観察表(1)・(2) …… 42・43
表6　2次調査5号溝状遺構出土遺物観察表(1)・(2) …… 46・48
表7　2次調査5・6号溝状遺構、ピット・調査区壁面出土遺物観察表 …… 51
表8　2次調査客土出土磁器観察表 …… 53
表9　2次調査出土瓦観察表(1)・(2) …… 55・58
表10　2次調査出土不明土製品観察表(1)・(2) …… 60・64
表11　2次調査出土土・ガラス製品観察表 …… 66
表12　2次調査出土ガラス・木・金属・石製品観察表 …… 72
表13　3次調査土坑・1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表 …… 78
表14　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表 …… 80
表15　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(1)～(5) …… 83・85・87・89・91
表16　3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表 …… 99
表17　3次調査整地層・客土中・区外クリーク・排土中出土土器・陶磁器観察表 …… 103
表18　3次調査出土瓦観察表 …… 106
表19　3次調査出土土製品観察表 …… 108
表20　3次調査出土金属・皮・石・ガラス・木製品観察表 …… 111

Ⅰ．はじめに

1．調査の経緯

ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴い発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市、大川市を経由して佐賀県鹿島市に至る概略延長55kmの国道208号のバイパス路線であり、地域高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のため早期建設が望まれている。

平成６（1994）年12月16日に計画路線として指定され、平成12年（2000）年10月28日に建設工事が起工された。このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされ、平成20年４月の供用が目標とされている。

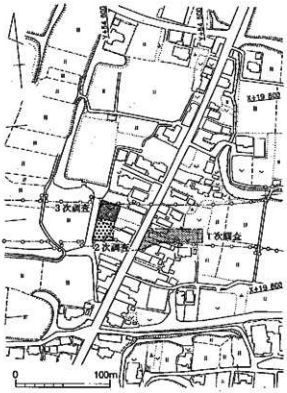
路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0km区間であり、平成10（1998）年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間指定された。

平成12（2000）年11月16日付で、国土交通省九州地方建設局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受けて同課が柳川市矢加部地区について平成15（2003）年10月６～８日に試掘調査を実施した。その結果、江戸時代の溝や土坑などが確認され、本調査が必要と判断された。

まず県道東側の用地取得が終了した範囲について、平成16（2004）年６月15日～10月４日に矢加部町屋敷遺跡１次調査として本調査を実施した。調査終了後、水田の水落ち時期に県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じ、急遽、大字矢加部6164-3・５番地について平成16（2004）年６月15日～10月４日に２次調査を実施した。

平成17年度は、２次調査と同様のクリークの高架工事を行う必要があるため、平成16（2004）年６月15日～10月４日に同6337-6番地に対して３次調査を実施した。

調査成果については、１次調査の大量に遺物を包含する大型の溝状遺構の半分が未調査区にかかっていたことから、１次調査区の報告は未調査区の調査後に行うこととし、平成18年度は２・３次調査区について報告書作成業務を行うことで協議が整った。



第１図　矢加部町屋敷遺跡1～3次調査範囲図(1/4,000)

2．調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成15～17年度の関係者は次のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
所　　長	増田　博行	増田　博行(～H17.8.1) 小山　浩(H17.8.2～)	小口　浩
副　所　長	後田　徹 徳留　忠	後田　徹 佐々木　秀明	春田　義信 佐々木　秀明
建設監督官	松尾　淳一郎	松尾　淳一郎 今村　隆浩	今村　隆浩 鵜林　保彦
調査第二課長	小椎尾　優	鈴木　昭人	
調　査　課　長			鈴木　昭人
調　査　係　長	長友　浩信	松本　厚廣	松本　厚廣(H17.4～H18.9) 川原　一哲(H18.10～)
専　門　員	相島　伸行	相島　伸行	伊東　良二
国土交通技官	柳瀬　純矢	柳瀬　純矢	谷川　勝
工　務　課　長	田中　秀之進	堀　康雄	堀　康雄

福岡県教育委員会

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
総　括			
教　育　長	森山　良一	森山　良一	森山　良一
教育次長	清水　圭輔	清水　圭輔	清水　圭輔
総務部長	中原　一憲	中原　一憲	大島　和寛
文化財保護課長	井上　裕弘	久芳　昭文	磯村　幸男(兼副理事)
同　副　課　長		川述　昭人	佐々木隆彦
同　参　事	川述　昭人(兼課長技術補佐)		安川　正郷(兼課長補佐)
	木下　修(兼課長技術補佐)	木下　修(兼課長技術補佐)	小池　史哲(兼課長技術補佐)
同課長補佐	安川　正郷	安川　正郷	
同参事補佐	中岡　研志(兼調査第二係長)	飛野　博文(兼調査第二係長)	飛野　博文(兼調査第二係長)
庶　務			
文化財保護課管理係長	稲尾　茂	稲尾　茂	井手　優二
同事務主査	宮崎　志行	石橋　伸二	野中　願
同主任主事	石橋　伸二	末竹　元	湯上　大輔
	末竹　元	湯上　大輔	
調査・報告書作成			
主　　査			秦　憲二
主任技師	秦　憲二	秦　憲二	
整理担当			
主任技師	坂元　雄紀	大庭　孝夫(調査第二係) 岡寺　未幾(調査第一係)	大庭　孝夫(調査第二係)

なお、発掘調査から報告書刊行にいたる間には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された近在の方々には猛暑の中御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬ御理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができたことを、深く感謝いたします。

Ⅱ．位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年２月５日付けで柳川市・三橋町・大和町と合併し、現柳川市となった。柳川市域は矢部川の支流である沖端川・塩塚川によって形成された有明粘土を基盤とする沖積地であり、標高10m以下の低平な平地である。

本遺跡の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地上に展開する村矢加部集落の南西にあり、遺跡の所在する町矢加部は県道35号線沿いに位置している。

歴史的環境

柳川市域に集落が進出したのは弥生時代に入ってからで、大川市下林西田遺跡[注1]で前期の遺構が確認されている。柳川市では前期段階の遺跡は見つかっていないが、弥生中期の遺跡は旧河川間の微高地に確認されている。三島神社貝塚を含む蒲池遺跡群[注2]は市北部の拠点的な集落と見られ、西蒲池の扇ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石が発見されている。三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩もこの巨石の一つといわれている。西蒲池地区のクリークに掛かる橋のたもとにも巨石を見ることができるが、有明海沿岸道路の路線内に入る範囲では遺構を確認できなかった。市北西部では磯島フケ遺跡[注3]、江鮒遺跡[注4]が挙げられる。弥生後期には蒲船津江頭遺跡[注5]、一本松遺跡[注6]、正行西の頭遺跡[注7]、松の木塚遺跡[注8]、日渡遺跡[注9]など遺跡が増加する。

弥生後期の蒲船津江頭遺跡では整地により居住域を広げており、有明粘土を基盤とする本地域での居住地の拡大方法を伺える。また、掘立柱建物跡には礎板が見られ、柱の沈み込みを防いでおり低湿地での工夫をみることができる。

古墳時代後期になるとさらにヘータカサン遺跡[注10]や地蔵堂遺跡[注11]などの集落遺跡が見られる。海岸線の後退に伴う微高地・可耕地の増加が原因であろう。

奈良時代のものは未確認だが、平安時代から中世にかけて、低平地を利用した条里地割りが大規模に敷設されており、柳川市西蒲池古溝・将監坊・古塚遺跡[注12]、大川市坂井長永遺跡[注13]では条里地割に伴う溝が検出された。東蒲池榎町遺跡[注14]では10世紀の遺構が多く見られており、こうした耕地の開発に伴って集落が拡大したことを窺わせている。

中世では中世前期の東蒲池大内曲がり遺跡[注15]と中世後期の矢加部南屋敷遺跡[注16]が確認されており、後者からは中国製陶磁器が多く見られることから、柳川市北部を支配していた有力豪族の蒲池氏に関係する集落であった可能性がある。

戦国時代末期に蒲池氏は滅亡し、天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三潴・下妻・山門の三郡を支配した。関ヶ原の戦いで西軍に与した立花氏は改易となり、田中吉政が筑後国主となり、慶長６（1601）年に入国した。

田中吉政は慶長本土居の建設、掘割の掘削や街道整備など多くの土木事業を行った。慶長本土居は現在道路として使用されており、掘割は「水郷柳川」の景観を形成し、観光資源となっている。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が再び領有し、久留米藩は有馬氏が藩主となった。本遺跡の所在する矢加部地区などが藩境となった。矢加部地区の県道上には関所が置かれたといわれている。

註

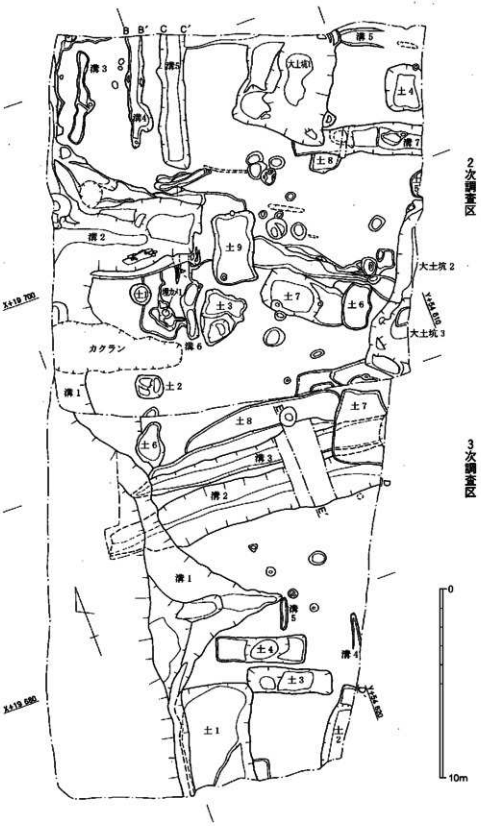
1．福岡県教育委員会1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集
2．鏡山猛1956『九州考古学論攷』吉川弘文館
3．柳川市教育委員会2006『磯島フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第１集
4．筑後市1997『筑後考古』第９巻
5．福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
6～11．前掲註４
12．福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
13．福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
14．福岡県教育委員会　2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集
15．福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
16．福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中

参考文献

福岡県教育委員会　1978『福岡県遺跡等分布地図』（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編）
福岡県教育委員会　1979『福岡県遺跡等分布地図』（大川市・筑後市・三潴郡編）
柳川市　2002『新柳川明証図会』柳川市史特別編
柳川市　2002『柳川地名調査報告書』柳川市史歴史資料集成第５集

1 矢加部町屋敷遺跡
2 矢加部北反田遺跡
3 矢加部南屋敷遺跡
4 宇豊命神社遺跡
5 阿弥陀原鍋遺跡
6 磯島フケ遺跡
7 東小路遺跡
8 南矢ヶ前遺跡Ⅰ
9 南矢ヶ前遺跡Ⅱ
10 東蒲池榎町遺跡
11 東蒲池大内曲り遺跡
12 東蒲池遺跡
13 東蒲池門前遺跡
14 蒲池城跡
15 蒲池城跡
16 三島神社貝塚
17 蒲池遺跡群
18 西蒲池下里遺跡
19 旭ノ内遺跡
20 西蒲池古城遺跡
21 西蒲池灯籠坊遺跡
22 西蒲池古塚遺跡
23 牧井北永遺跡
24 蒲船津江頭遺跡
25 船船津水町遺跡
26 蒲船津西ノ内遺跡
27 弛森八ッ枝遺跡
28 今古賀城跡
29 逆井川遺跡
30 浮島天神遺跡
31 内新開遺跡
32 西馬場遺跡
33 江崎城跡
34 垂見古墳
35 垂見遺跡
36 乗永遺跡
37 大坪遺跡
38 白鳥城跡
39 東中遺跡
40 地蔵堂遺跡
41 ヘータカサジ遺跡
42 日詰遺跡
43 一木松遺跡
44 赤太郎遺跡
45 松の木三十六遺跡
46 サヤモト遺跡
47 中村遺跡
48 大藪里遺跡
49 天満宮遺跡
50 江越遺跡
51 上久末城跡
52 堀口遺跡
53 川脇昭代地区条里遺跡
54 条里跡
55 蟹見塚跡
56 柳川城郭
57 新町遺跡
58 新工町遺跡
59 坂本町遺跡
60 柳川城跡
61 国指定名勝松濤園
62 県指定埋蔵物戸島邸
63 国指定名勝戸島氏庭園
64 久留米・柳川住宅

第２図　周辺遺跡分布図(1/50.000)



第３図　矢加部町屋敷遺跡２・３次調査区遺構全体図(1/200)

Ⅲ．調査の内容

1．調査の概要

矢加部町屋敷遺跡は、県道53号久留米柳川線に沿いに南北に細長く展開しており、有明海沿岸道路はその北部を横断して建設されるため、調査対象範囲は県道の東西に分かれた。

用地取得状況と工事工程に応じて、調査対象範囲内を複数年度に渡り分割して調査を実施することになり、今回報告する２・３次調査区は県道西側部分の西端にあたる。

２次調査区は柳川市大字矢加部669-1・700-1・701-2・713-23番地の一部と701-1番地の440㎡、３次調査区は696-1・697-1・698-1・669-1番地の一部と713-21・22番地の400㎡で実施した。

２次調査は平成17（2005）年10月26日に重機による表土剥ぎを開始し、11月２日から作業員を投入した。12月２日に高所作業車で全体写真を撮影し、12月７日に埋め戻しを完了し撤収した。

３次調査は平成18（2006）年３月17日～４月24日に実施した。有明海沿岸道路出張所と地元関係者との協議が終了しなかったため、調査着手が遅れ３月17日に重機による表土剥ぎを開始し、その日の午後から作業員を投入した。開始日の遅れのため年度内に調査を完了できなかったため31日に一時中断し、撤収した。年度が改まって４月５日に機材を搬入して再開し、20日に空中写真を撮影し、24日に重機による埋め戻しを完了した。

2．２次調査

矢加部町屋敷遺跡２次調査では、土坑９基、大土坑３基、溝状遺構７条などを検出した。基盤層は中央部から西半分が緩やかに下がっている。

1）遺構

a）土坑・大土坑

1号土坑（図版１－２・３、第４図）

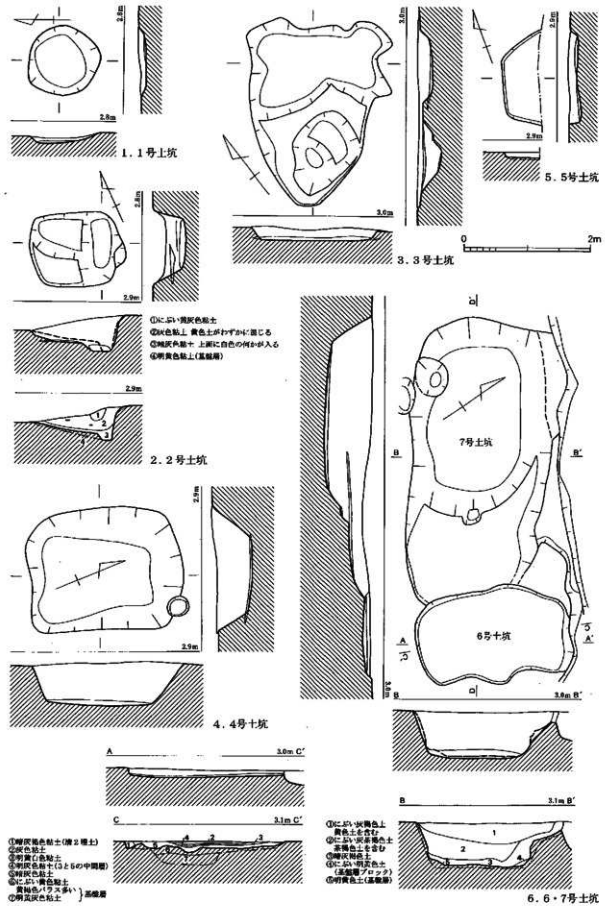
調査区南西側に位置する径約110㎝の平面円形の土坑である。上面を大きく削平されており、深さが最深部で12㎝程度で、埋土は炭化物を多く含む暗黒灰色の単層であった。

出土遺物はわずかで小片が多く、年代は特定できない。

2号土坑（図版１－４～６、第４図）

調査区南西端に位置する平面略方形の土坑で、３層上面に白く変色した木皮が敷かれたように広がっていた。木皮上には板材などないので礎板ではない。長軸143㎝、短軸112㎝で、深さは最深部で53㎝程度。主軸方向はN－65°30′－W。

出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。



第４図　２次調査１～７号土坑実測図(1/60)

3号土坑（図版1－7、第4図）

調査区中央南側に位置する平面不整形の土坑である。長軸が185cm、短軸152cmで、深い部分が2箇所あり、最深部で36cm程である。主軸方向はN－37°10′－Wをとる。埋土はバサバサした黄褐色土で堆積層でないことから、抜根穴であろう。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。

4号土坑（図版2－1・2、第4図）

調査区北東に位置する平面方形の土坑である。長軸が約160cm、短軸は130cm。主軸方向はN－37°10′－Eをとる。攪乱で上面を削平されているが65cm程残っていた。埋土は木皮・木片・籾殻などが粘土と互層に堆積しており、土器・陶磁器片がほとんどなかったことから、堆肥穴であったのかもしれない。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。

5号土坑（図版2－3、第4図）

調査区中央東端に位置する平面台形の土坑で、調査区外にかかっている。検出された範囲では長軸が102cm、短軸38cmある。削平されており最深部で15cm程しか残っていない。出土遺物はわずかのため年代は不明。

6号土坑（図版2－4・5、第4図）

調査区中央に位置し、7号土坑を切るやや不整形な平面隅円方形の土坑である。長軸が162cm、短軸105cm。削平されており深さは27cm程しか残っていない。床面には凹凸があり、埋土は薄く堆積していることから抜根穴の可能性がある。主軸方向はN－56°10′－Eをとる。
出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は19世紀中葉。

7号土坑（図版2－6・7、第4図）

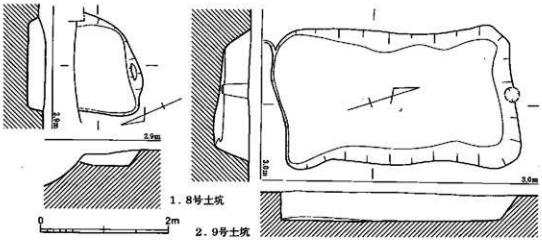
調査区中央に位置する長方形の土坑である。2号溝状遺構・6号土坑に切られており、残存部で長軸が290cm、短軸は160cmであろう。主軸方向はN－56°50′－Wをとる。北に向かって下がっており、最深部で70cmある。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不確定だが6号土坑に切られ1号溝状遺構を切ることから、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。

8号土坑（図版1－1、第5図）

調査区中央北側に位置し、7号溝状遺構に切られる平面方形の小型の土坑である。残存長で、長軸が104cm、短軸は70cm。削平されており最深部で26cm程しか残っていない。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不明。

9号土坑（図版2－8、第5図）

調査区中央に位置し、2号溝状遺構を切る平面長方形の土坑である。長辺250cm、短辺152cmで、深さは50cmほど残っており、床面はほぼ平坦。主軸方向はN－18°20′－Eをとる。遺物もほとんど残っていなかったが、18世紀中葉か。



第５図　２次調査８・９号土坑実測図(1/60)

１号大土坑（図版２－９、第６図）

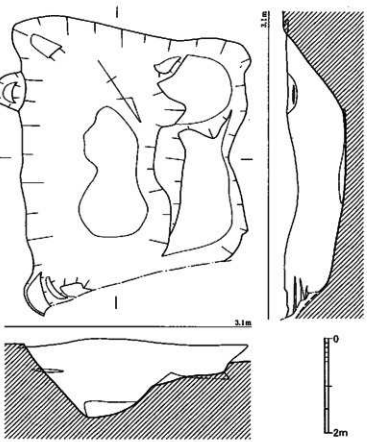
調査区北端に位置し、７号溝状遺構を切る平面方形の土坑である。主軸方向はＮ－57°－Ｅをとり、西隅と南隅は突出しており階段状のテラスを有する。深く掘削するための足場であろう。壁は緩やかに傾斜しており、深さは120cmに達する。土器・陶磁器はパンケース２箱に及ぶことから廃棄土坑であろう。18世紀中葉の遺物が多く出土しており、この時期に属する。19世紀中葉の遺物も一定量あるが、上層出土であり、大正10年銘１銭銅貨は検出段階に上面にあったコンクリート基礎の掘り込み時の混入品だろう。

２号大土坑（図版３－１、第７図）

調査区東南に位置し、遺構の西端部のみが検出された。３次調査でその続きが検出されており、規模・形態ともに１号大土坑に近いものであった。平面隅円方形の西辺にあたりで、深さは105cmほどあったが、最深部ではない。上面からは確認できなかったが、土層から南部を３号大土坑に切られているのは間違いない。

土層から掘り直しがあることがわかる。最初の掘り込みの南端部に丸太木が入っている。４次調査でこの木の続きを検出したが、土坑南壁に沿って置かれていたが、杭で押さえられてはいなかった。

埋土は炭層が薄く重なっており、



第６図　２次調査１号大土坑実測図(1/60)

何度も廃棄されたことがわかる。中位に稲の籾殻が20cmほどの厚さの単純層を成すほど大量に捨てられており、層の中央部は土壌化していないほどであった。

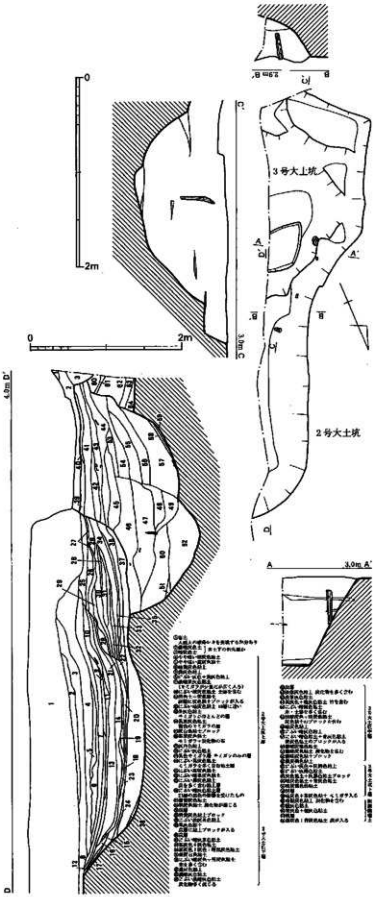
出土遺物は有機物の残りがよいにもかかわらず、種子や獣骨・魚骨、貝殻がないことから、単なる廃棄土坑でなく、籾殻など特殊なものだけを捨てた廃棄土坑であろう。年代は18世紀中葉か。

3号大土坑（図版3－1～3、第7図）

南東端に位置し、2号大土坑に切られている。3次調査で続きが確認され、略方形の土坑の南西隅に当たることがわかっている。土層から2度の掘り直しと、調査区南側の土坑を切っていることがわかる。最後の掘り込みは2号大土坑と同規模で、2号大土坑の最初の掘り込みと見ることもできる。残存長で、長軸132cm、短軸130cmを測り、深さは220cmほど残っていた。

西壁面には杭が打ち込まれていた。調査段階ではわからなかったが、この杭はクリークの泥を掘り上げる「かんぼえ」の柄を下にして差し込んだもので、3次調査で検出されている。

2号大土坑同様に炭化物や稲籾殻、木製品、木皮などを多く含み、土器・陶磁器は少ない。18世紀前葉に近い中葉か。



第7図　2次調査2・3号大土坑実測図（1/50・1/80）

b）溝状遺構

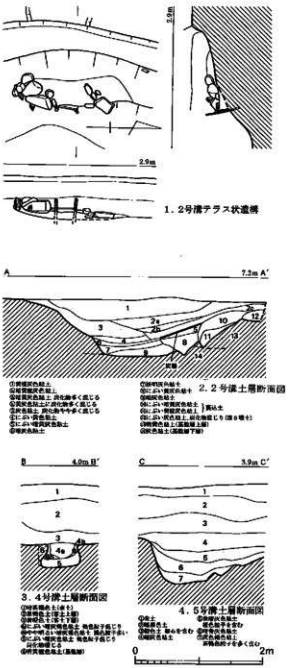
１号溝状遺構（図版１－１・３－４、第３図）

調査区の西端をＮ－85°－Ｅに走り、南西端から東西の引き込み部がある。南北方向は溝の東壁が検出されたのみで、西に隣接する現存クリークの一部であろう。検出された南北方向の深さは約60cmある。埋土の上層は大量の炭やビニールを含む暗黒色土で、引き込み部分はこの単層となっていたことから、引き込み部分は近代の遺構として報告対象から外した。２号溝状遺構に切られるが、本来同一遺構と見るべきだろう。

斜面部のみの調査なので、遺構の掘削時期は明らかでないが、18世紀後半代の可能性が高い。大正２年銘10銭銀貨・大正12年銘５銭白銅貨・明治13年銘１銭銅貨・昭和13年銘１銭銅貨は引き込み部から出土したものである。

２号溝状遺構（図版１－１・４－１～３、第３・８図）

調査区の中央を直線的にＮ－110°－Ｅに走る溝で、１号溝状遺構を切っていたが、本来一体のものであろう。両岸には杭が打ち込まれていたが、護岸施設の一部ではない。ほとんどが径５cm大の落とした枝の先端をカットした丸木杭であったが、２本だけ建築材を使用していた。地盤が軟質粘土であるため、建築材の先端を加工しなくても打ち込むことができたのだろう。南斜面には両端に人頭大の石を置き、杭と瓦で護岸して整地した平坦面があり、溝で作業するためのステップと見られる。このことから１・２号溝状遺構にはこのステップを使って作業できる標高2.0m程まで水位があったようだ。北西端部には円形に杭が回るピットがあった。床面は緩やかに傾斜しており、最深部は1号溝状遺構の底面よりやや下がる程度である。



第８図　２次調査２号溝テラス状遺構、４・５号溝状遺構土層断面実測図(1/60)

1号溝状遺構の埋土に対応する暗黒色土が南北方向の中層に入っており、中層以上は戦後の客土層である。下層の遺物から19世紀後葉に掘削されたものと思われる。

3号溝状遺構（図版1－1、第3図）

調査区の北西を直線的にN－26°－Eに走る溝である。平面形はやや不整形で、幅は最大90cm、深さは15cmあり、削平されているわけでなく南北端は途切れていた。時期は不明。

4号溝状遺構（図版1－1、第3・8図）

調査区の北西を直線的にN－20°－Eに走る溝で、幅67cm、深さ61cmを測る。5号溝状遺構と併走しており南端も同様に途切れていた。2次調査の大溝や7号溝状遺構とつながる可能性もある。側壁は下部が明らかに抉れており、水が溜まっていた可能性がある。遺物はないが、5号溝状遺構と同時期か。

5号溝状遺構（図版1－1・4－4、第3・8図）

調査区の北西を直線的にN－20°－Eに走り、北端で東に直角に折れる溝で、4号溝状遺構と併走しており南端も同様に途切れていた。1号大土坑に切られおり、東端は削平されてなくなっていた。南北方向に走る部分は幅154cmで壁は直に立ち上がっており、深さ73cm程ある。出土遺物は比較的多く、17世紀末～18世紀前葉に属する。

6号溝状遺構（図版1－1、第3図）

調査区の中央部を直線的にN－21°－Eに走る短い溝で、長さ164cm、幅30cm、深さ10cm程度である。当初土坑と認識していたが、幅が均一で直線的であり、深さもほぼ均一であることから溝とした。出土遺物はほとんどなく、時期は不明。

7号溝状遺構（図版1－1，第3図）　調査区北部中央から調査区外にのびる溝で、幅165cm、深さ約60cmで、時期は不明。

2）遺物

出土遺物については観察表に掲載しているが、付記するべき遺物についてのみ記述する。

3号土坑

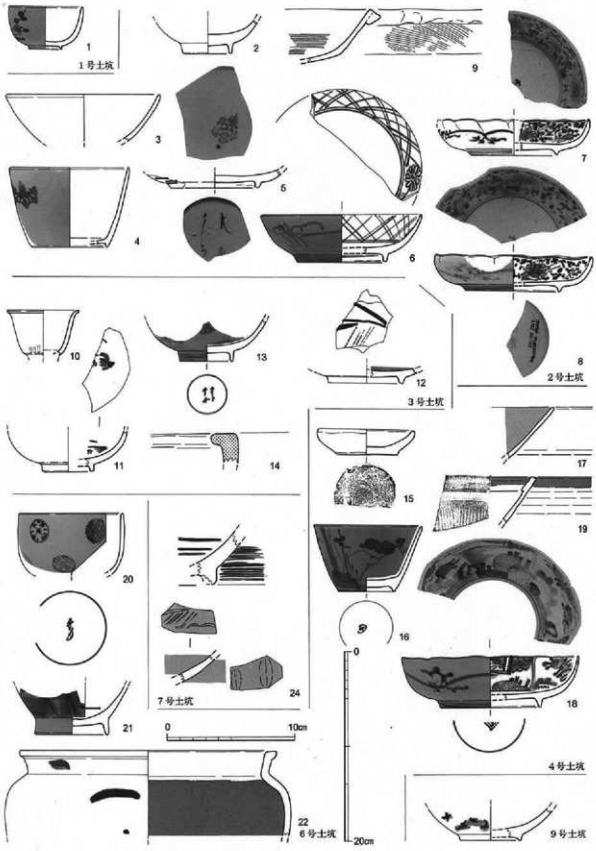
第9図10は、縦沈線文が1650年代より退化しており、器形から1680～1700年に比定した。

4号土坑

第9図19の年代は『九州陶磁の編年』には掲載されていないが、口縁形態がⅢ期より新しく、摺目上端のナデ揃えがないのでⅣ期とした。

1号大土坑

第10図2の類例は探せなかったが、口縁下に一条凸帯を有する小杯は北海道函館市五稜郭跡から出土しており、19世紀代のものか。8は底部形状がわからないため、時期を特定できない。



第9図　2次調査1～4・6・7・9号土坑出土土器・陶磁器実測図(19・22・23は1/4、他は1/3)

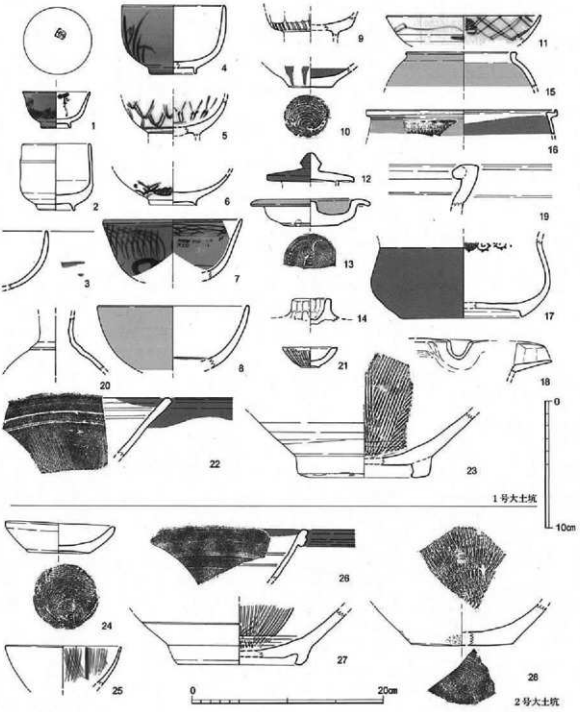
遺構名	器種	出土位(cm)	胎の種類	釉薬	調整・底部・装飾技法	窯詰技法	所見		
神跡番号	形状	()は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	造形名								
1号土坑 9図1	小杯	口径(5.8) 器台径2.6 器高3.4	瑞器(染付) 灰白色　硬成不良で軟質	透明釉　全面 受色不良で乳白色を呈す	外面に手捻き残須全付の梅鉢文 高台が小さく外に張り出している	重付痕跡ず	簡形・モチーフから年代を特定でき ない	肥前系	
2号土坑 9図2	小碗	高台径2.5	瑞器(白磁か象付) 灰白色	透明釉　全面	残存部に文様がない	重付痕跡ず や砂目付着	簡形の特徴から年代を推定	肥前系 波佐見か	1680 / 1740
2号土坑 9図3	中碗	口径(12.0)	陶器 黄白色　やや軟質	低火度の透明釉　黄人あり	——	不明		肥前系	不明
2号土坑 9図4	鉢口	口径(9.4) 高台径6.0 器高4.3	瑞器(染付) 白色	透明釉　全面	外面コンニャク印刷呉須染付の鞠文　裏面の有無は不明	重付痕跡ず		肥前系	1700 / 1750
2号土坑 9図5	天寸瓶	高台径(7.0)	瑞器(染付) 緻成白色　黒鉄粒あり　光沢あり	透明釉　全面	外面は体部下位と高台に手捻き呉須染付の3条界線　見込みはコンニャク印刷呉須染付の2条界線と五方花文　裏面は手描き呉須染付による崩れた「天狗車紋」	重付痕跡ず や砂目付着	裏紋が長与且山窯に近く、胎が特徴的	肥前系 波佐見 か与野長与且山窯	1680 / 1740
2号土坑 9図6	天寸瓶	口径(12.6) 高台径(7.0) 器高3.7	瑞器(染付) 緻成白色　黒鉄粒あり　光沢あり よみがえった透明釉　全面 赤付釉跡ず	外面は手捻き呉須染付による崩れた唐草文と胴下位と上と高台に二条線　内面はコンニャク印刷呉須染付による一重一一重文五方の鞠目文と巻花文　外底に1条界線　裏紋の有無は不明	重付痕跡ず や砂目付着	支焼パターンが長与東山窯に近く、胎が特徴的	肥前系 波佐見 か長与野長与且山窯	1750 / 1770
2号土坑 9図7	五寸皿 輪花口縁	口径(12.0) 高台径(6.8) 器高2.8	瑞器(染付) 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面は手捻き呉須染付による崩れた唐草文と胴下位に1本と高台上の界線　内面は手捻き呉須染付による花散等文　見込みに2条界線とコンニャク印刷による五方花文　外底に手捻き呉須染付による1条界線内「金繁鹿」	重付痕跡ず	紋形が木場山窯　支焼パターンが長与東山窯に近い	肥前系 波佐見	1680 / 1700
2号土坑 9図8	五寸皿 輪花口縁	口径(12.4) 高台径(7.0) 器高2.8	瑞器(染付) 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面は手捻き呉須染付による崩れた胴下位と上下位に1本と高台に2条界線　内面に花散紋文　見込みに2条線とコンニャク印刷による五方花文　外底に手捻き呉須染付による1条界線内「金繁鹿」	重付痕跡ず	紋形が木場山窯　支焼パターンが長与東山窯に近い	肥前系 波佐見	1680 / 1700
2号土坑 9図9	焙烙	復元不能	土師器 雑成　全面暗赤色　にぶい黄橙　焼色	——	外面は押さえの後中位3コマハケ　口縁突帯貼付け　内面は回転ヨコナデ調	不明	外面煤付着	在地系	不明
3号土坑 9図10	小杯 瀬戸形	口径(5.6)	瑞器(白磁) 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面に蛇方向の沈線	不明		肥前系	1680 / 1700
3号土坑 9図11	中碗	高台径(4.0)	陶器 やや軟質で粗良　黄白色	低火度の透明釉　貫付、高台以外に施釉	見込みに鉄絵による崩れた山水文　高台は削り出しで、外底は高台内沈線の有無不明	不明	京焼き風陶器	肥前系， 幡野青志田西山1号窯に類似あり	18ｃ中葉
3号土坑 9図12	中碗	高台径(6.0)	陶器 雑成　白色　粒子あり	鉄釉 全付、高台内及外に施釉	見込みに鉄色の鉄絵と白泥による雑物文の上記　高台は削り出し	不明		肥前系か	18ｃ中葉
3号土坑 9図13	中碗	高台径(4.2)	瑞器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は手捻き呉須染付による花文・草葉文と胴下位に1本と高台に2本の界線　外底に手捻き呉須染付による1条界線内「大明年製」の銘款	重付痕跡ず 見込みに灰被り		肥前系	1700 / 1740
3号土坑 9図14	鉢 六鉢	復元不能	瓦質土器 にぶい黄白色 金雲母目立つ	——	内面と見込みはヨコナデ	不明		在地系	不明
4号土坑 9図15 図版5	小皿 かわらけ	口径(7.4) 底径4.8 器高2.0	瑞器(染付) 軟質で粗良　金雲母なし　にぶい明黄橙色	——	外面は中位ヨコナデ段、1段細部を丸くヨコナデ　内面は回転ヨコナデ調　外底は糸切り	底部に蜜蜂の痕跡がある　焼き台の痕か	陸上から唐津焼と推定	唐津焼	不明
4号土坑 9図16	鉢口	口径8.4 底径(4.5) 器高3.4	瑞器(染付) 灰白色　黒鉄粒子入る	透明釉　全面	外面は手捻き呉須染付による梅竹文　裏紋は簡略化された鱗模	重付痕跡ず 一部砂目付着		肥前系 波佐見か	1700 / 1750
4号土坑 9図17	中皿	復元不能	陶器 灰白色	内面青灰色の鉄絵紋、外面透明釉の掛け分け	——	不明		肥前系	1690 / 1780
4号土坑 9図18	小鉢 鮫皮口縁 変容十 ろ土瓶	口径(14.0) 高台径(8.0) 器高4.0	瑞器(染付) 軟質　黒色粒子入る	透明釉　全面 貫入あり	外面は平滑3条線付による蕨文と胴下位に1本と高台に2条界線　内面は花散文　裏面・底　見込みは2条界線とコンニャク印刷呉須染付による五方花文　外底は1条界線内に二重方形枠内の「梅」の銘款	重付痕跡ず 一部砂目付着	区画線が木場山窯に近い	肥前系 波佐見か	1680 / 1740
4号土坑 9図19	瓶鉢	復元不能	陶器	内外口縁部のみ鉄茶褐色の鉄絵	胴目上縁米粒潰　見込みはヨコナデ	——	口縁部のみ施釉の特徴から要確認の可能性高い	肥前系 武雄市要城窯か	1690 / 1750
6号土坑 9図20	小碗 蕨餅形 小丸鉢	口径(8.2)	瑞器(白磁) 白色	透明釉　全面	丸文散らし 呉須染付　手描き	不明		肥前	1820 / 1860
6号土坑 9図21	中碗 広東形	高台径(5.8)	瑞器(染付) 灰白色　黒色粒子あり	透明釉　全面	外面は手捻き呉須染付による雷文　見込みは1条界線内に崩れた「海」の銘款	重付痕跡ず		肥前系 波佐見か	1820 / 1860
6号土坑 9図22	中碗 半開発	口径(27.0)	陶器 赤褐色　ざっくりとして白色粒子あり	白化粧土を外面から塗布　内面鉄釉は鉄墨	外面は鉄絵による松文の上絵付け	不明		肥前系	不明
7号土坑 9図23	中碗 半開発	復元不能	陶器 赤紫色　やや軟質	——	内外胴・見込みは鉄銅により刷毛目文　高台外端をカット	不明		肥前系	不明
7号土坑 9図24	皿	復元不能	瑞器(青磁) 白色	鉄錆状色の青磁釉	外面は蕨状の模　内面は片切り彫りによる花文　見込みは鉄絵による崩れ唐草の上絵付け	不明	焼き不確実	肥前系 有田町丸尾窯に類似あり	不明
9号土坑 9図25	小碗 丸鉢	高台径(4.8)	瑞器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は手描き呉須染付による花文・草葉文	重付痕跡ず		肥前系 高台が幡野市志田西山1号窯に近い	1710 / 1750

表１　２次調査土坑出土土器・陶磁器観察表

20は福岡市西新町遺跡に多数類例があり、生産された可能性の高い器種と報告されている。胎土からみても高取系統のものであり、東皿山窯の製品と考えた。

2号大土坑

第10図25は長崎市現川焼に似ているが、現段階の資料では施文方法や生産時期が異なるので現川焼とは推定しなかった。



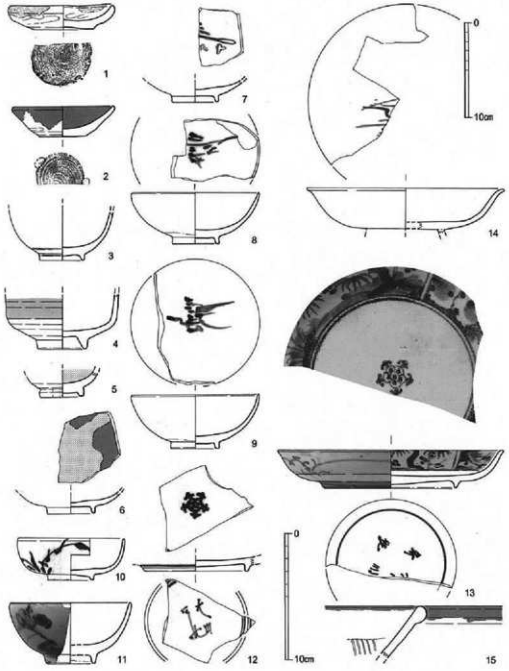
第10図　2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器実測図(15・18～20・22・23・26～28は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	軸薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		年代
押印番号	形状	( )は復元値	胎の特徴				特記事項	推定窯地	
図版番号	器名								
1号大土坑 10図1	小瓶 瓶状形	口径(5.4) 高台径2.4 器高2.9	磁器(色紙) 白色	透明釉 全面 やや白色不良 で気泡有	外面は平底ヨコナデ 内面は手捻ままの成形付による筆文の上塗彩の痕跡とかの花文の上絵付け 見込みに赤彩による崩れた蝶字文の上絵付け	重ね焼痕ず		肥前系	不明
1号大土坑 10図2	小瓶 磨耗形 筒形水	口径5.2 高台径5.2 器高3.0	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面平位に突帯	寄付焼割ず 砂目付等		唐戸・発掘系	不明
1号大土坑 10図3	小瓶 半球形	復元不能	陶器 灰白色	柿天灰の透明 質入あり	外面は線彩による蓮文の上絵付け	不明	京焼風陶器	肥前系	不明
1号大土坑 10図4	小瓶 磨耗り形 小丸底	口径(3.25) 高台径0.5 胴径5.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手捻ままコバルト染付による蓮唐文	重ね焼痕ず		肥前系	1830 / 1860
1号大土坑 10図5	小瓶	高台径(4.0)	磁器(染付) 灰白色	青みがかった 透明釉 全面	外面は平捻ままの呉須染付で胴部による一重蓮弁文 内面は鉄目文 見込みに菊花文 高台の無は不明	重ね焼痕ず		肥前系 波佐見	1750 / 1770
1号大土坑 10図6	小瓶 筒形水滴形 丸鍋	高台径(3.8)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は平捻ままの呉須染付による花文	重ね焼痕ず		肥前系 高台が若干由左 胴西は1号瓶に 近い	1710 / 1750
1号大土坑 10図7	小瓶 瓶状形 端反形	口径(11.0)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面 やや白色でへ 当を有り	外面は平捻ままの呉須染付による連続弧文 内面は鉄錆連続鉄文 胴下部無	不明	内面円錐状の支柱が底部見用 油山系 発掘と中見上登窯に類例あり	肥前系 波佐見	1820 / 1860
1号大土坑 10図8	小瓶 半球胴付 分付鉄 鉄付耳胴	口径(12.0)	磁器(染付青磁) 白色	淡青緑色を基 する半磁器 (外面) 透明釉(内面)		不明		肥前系	不明
1号大土坑 10図9	小瓶	高台径(4.4)	陶器 灰黄白色	柿天灰の透明 質 質入あり	型押し成形による亀甲文様胴 胴下位へラ削り	不明	北九州市大手町遺跡11号大土坑に類似	肥前系か	1820 / 1860
1号大土坑 10図10	小瓶	底径3.4	陶器 赤茶褐色 白色斑粒子あり	鉄釉を内面から外面中位まで かける	外面ヨコナデ 外底糸切り	胎土目跡なし	灯明皿としての使用痕なし	肥前系 武雄古窯周辺窯に類例あり	不明
1号大土坑 10図11	五寸鉢	口径(12.2)	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面平捻ままの呉須染付による蓮弁文と花 弁に唐草 内面は一重二重文字の鉄目文とコンニャク印刷による梅花文	不明	支柱パターンが原与並山窯に近く 胎が特徴的	肥前系 波佐見 長与並山窯	1680 / 1740
1号大土坑 10図12	土瓶蓋	高さ(6.8) つまみ径1.6	陶器 灰黄褐色 胴点	黒色の黒釉を 下面にかけ、 内面は露胎	ヨコナデ	壁1箇は釉剥ず なのでさ部と重 ね焼きず	1号溝22図13の土瓶ボウブとセットになる	肥前系	不明
1号大土坑 10図13	土瓶蓋	最大径8.4 つまみ径1.0 高径4.2	陶器 にぶい黄褐灰色 ~黒褐	砂浜長灰色の あめ釉を上面 にかけ、内面 は露胎	外面ヨコナデ 外底糸切り	体部下位に胎土 目跡あり	内面の変色は使用 のためであろう	高取 西麻町遺跡12次 上坑56に類例	不明
1号大土坑 10図14	鉢蓋	つまみ径3.0	土師器 にぶい黄橙色 黒色粒子あり	——	外面はオサエ、内面はナデ・オサエ	不明		在地系	不明
1号大土坑 10図15 図版5	土瓶 胴耳か	口径(11.8)	陶器 灰黄でにぶい黄 灰色	内外鉄灰度の 灰緑色の灰釉	口唇部から内面口縁部は釉剥ず	不明		不明	不明
1号大土坑 10図16	土鍋	口径(14.8)	陶器 にぶい黄橙灰色 黒褐	外面鉄ダガンナ 内面 鉄釉色 口唇 部釉剥ず	外面鉄ダガンナ 内面ヨコナデ	不明		不明	不明
1号大土坑 10図17	鉢 火入れ・ 香炉	底径(9.6)	磁器 (灰釉付分け線) 白色	柿色(外面) 黒赤褐色 透明釉(内面)	外面ヨコナデ 見込みに手捻ままの呉須染付による蓮唐草と花文 底部は削り出しの蓮弁底	底部と重ね焼 痕ず		肥前系	不明
1号大土坑 10図18	片口鉢	復元不能	陶器 にぶい黄灰~灰色	鉄釉金属	外面口縁下の凹部は底部時のもの	不明		高取か	不明
1号大土坑 10図19	大壺 ハンズー ボメ	復元不能	陶器 赤茶褐色 白色 粒子入る	暗褐色鉄釉金 属	口唇部は内面貼付けにより肥厚をせている 内外鉄釉ちあり	不明		肥前系	18c代
1号大土坑 10図20	中瓶 ぺこかん型形	胴部径3.3	陶器 灰色 軟質で焼 良	全色不良の鉄 釉	外面に線下の凹線は成形時のもの	不明		福岡市西新遺跡12次2号土坑に類例	高取 福岡市東町山空	不明
1号大土坑 10図21	紅皿口 紅皿	口径(4.2) 底径1.4 器高1.5	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明 釉を内部から 外底中位まで 掛ける	外面に回押しによる看花文の痕跡	——		肥前系	1840 / 1860
1号大土坑 10図22	擂鉢	復元不能	陶器	内外口縁部の 鉄釉金属色の 鉄釉	擂目上端ナデ調文 見込みはヨコナデ	——	口縁部のみ施釉の 特徴から薩摩焼の可能性高い	肥前系 武雄市薩摩窯	不明
1号大土坑 10図23	擂鉢	底径(13.8)	陶器 にぶい橙灰褐色	全面黄色の鉄釉 高台内は鉄 金属光沢 黄白 内は鉄灰色	擂目単位不明 高台内削り出し	寄付焼割ず 下 内の鉄の使用 内側に重ね焼き痕	高台が重ね焼き時の下の部の間に詰って変形している	小石原系	19c前半
2号大土坑 10図24 図版5	小皿 かわらけ	口径8.4 底径4.4 器高2.2~2.5	土師器 軟質で焼 良 金 黒白色 明黄 灰色	——	外面中位ヨコナデ後、口縁部を丸くヨコナデ 内面から見込みは回転ヨコナデ円周 外底は糸切り	底部に変色の痕 跡があり 焼き台の跡か	光形	在地系	不明
2号大土坑 10図25	小鍋	口径(9.0)	陶器 茶褐色	透明釉	内面は内化粧土の打刷毛目文	不明		肥前系 唐津か内野山西 麓に類例あり	不明
2号大土坑 10図26	擂鉢	復元不能	陶器 黒褐色	内外口縁部の 久無茶褐色の 鉄釉	内面・見込みはヨコナデ	——	口縁部のみ施釉の 特徴から薩摩焼の可能性高い	肥前系 武雄市薩摩窯か	1690 / 1750
2号大土坑 10図27	擂鉢	高台径(13.6)	陶器 赤褐色 光沢あり 白色斑粒子 少し	茶茶褐色の鉄 釉を高台以外 全面 黄内は 鉄灰色	茶石は貼付けで、焼成時のへたれで歪んでいる	内面に砂目跡 寄付け痕跡ず 砂目付等	胎土が特徴的	小石原系か	19c前半
2号大土坑 10図28	擂鉢	底径(10.6)	陶器 茶褐色 光沢あり 微粒子含む	無釉 口縁部 のみ鉄釉タイ プの底部か	外面は横ナデ 外底は糸切り	胎土目跡	内面に小張部様を有由後もしたような成形	肥前系 武雄市薩摩窯か	不明

表2　2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器観察表

3号大土坑（図版5）

第11図1は金雲母を含んでいないことと胎土の精良さから蒲池焼の可能性が高い。第11図2は灯明皿として使用される器種だが、煤の付着はなかった。第11図4は2号大土坑と接合した。第11図6は類例がないが、胎土から高取系と推定した。第11図7～9は京焼き風肥前陶器だが、高台内の抉り込みがないので内田大谷窯より志田西山1号窯に近く、文様の崩れ方からやや後出するものと思われるので18世紀中葉とした。第11図15の年代は『九州陶磁の編年』には掲載されていないが、Ⅲ期の玉縁口縁に近いが、摺目上端のナデ揃えがないのでⅣ期とした。



第11図　2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器実測図（14は1/4、他は1/3）

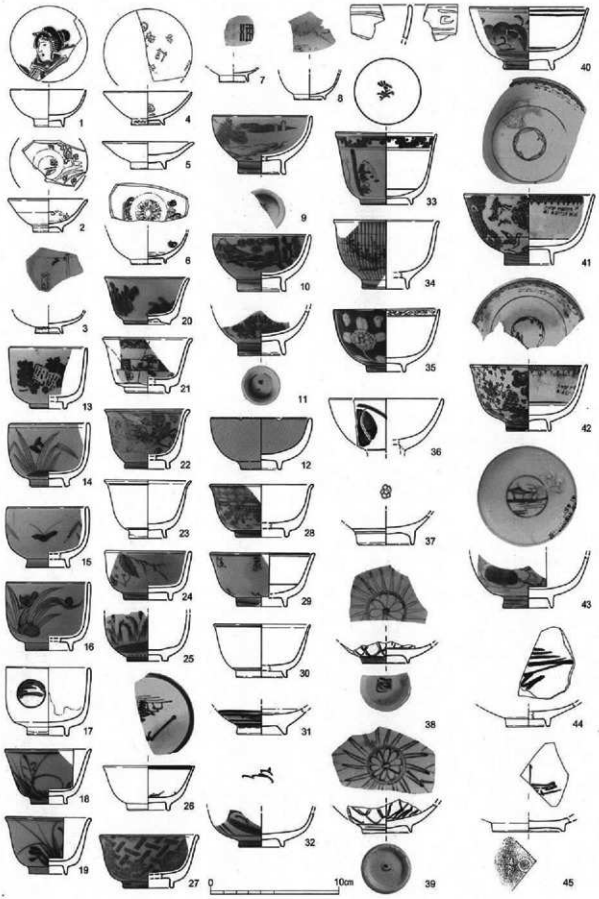
遺構名	器種	法量(cm)	胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	廃棄技法	所見 特記事項	所見 推定産地	推定年代
神間番号	形状	()は復元値							
御坂番号	通称名								
3号土坑 11層1 御坂5	小皿 かわらけ	口径8.05 底径4.9 器高1.9	土師器 胎土で精良 角閃石を少量含む 黄灰色	—	外面は中位ヨコナデ後、口縁部を入くヨコナデ 内面・見込みは回転ヨコナデ 外底は糸切り	焼成に壁色の軸剤がある 焼き白の痕か	口縁部に煤付け 灯明皿として使用している	在地系	不明
3号土坑 11層2	小皿	口径(8.1) 底径3.7 器高2.3	陶器 暗灰～茶灰褐色 白色微粒子あり	鉄釉を内面から外面中位までかける	外面ヨコナデ 外底糸切り	胎土日器2因所あり	灯明皿として使用痕なし	肥前系 武雄市鹿島B窯に類例あり	1690 / 1750
3号土坑 11層3	小鉢 半球形	口径(9.8) 高台径(3.45)	磁器(染付) 高台内色で黒色 粒子加入	透明釉 高台内色は白色	2条界線 指にも文様があるが見えない	発付軸剤ガ	発色不良で界線が黒色のまま 外縁がひび割れている	肥前系	1700 / 1740
3号土坑 11層4	小鉢 半球形 中型碗	高台径3.85	陶器 明黄褐色で微密 やや胎質状 外面小体部中位まで	低火度の暗緑 灰色の斑階が 外面小体部中位まで	削り出し高台	焼付が剥がれている		肥前系 鍋島市内野山北窯に類例あり	1680 / 1780
3号土坑 11層5	小鉢 半球形	高台径3.4	磁器(染付) 底内色で中央黄 縁点	黒色釉薬が内面・見込みに かかる 色内に一部付着	高台接合後回り 接合痕あり	不明		肥前系 鍋島市内野山北窯に類例あり	1680 / 1780
3号土坑 11層6	中碗	高台径(3.8)	陶器 にぶい黄灰色で やや軟質だが胎質	暗褐色の鉛釉 全面	内面から見込みは灰白色の高火度釉流し掛け	発付軸剤ガ		高取系	不明
3号土坑 11層7	中碗	高台径(3.6)	陶器 やや軟質で黄白 ～浜黄白色	低火度の透明 全付・高台内 素地	見込みは鉄錆による描れたは水文 高台削り出して高台内沈線なし	不明	京焼き風陶器 発色不良	肥前系 嬉野市志田西山1号窯に類例あり	18c中葉
3号土坑 11層8	小碗	口径(10.1) 高台径(3.7) 器高4.0	陶器 やや軟質で黄白色 胎質で緻密	低火度の透明釉 全付・高台内 素地 光沢・貫入あり	見込みは鉄錆による描れた山水文 高台削り出して削り痕が沈線状に見える	不明	京焼き風陶器	肥前系 嬉野市志田西山1号窯に類例あり	18c中葉
3号土坑 11層9	小碗	口径10.1 底径3.8 器高4.3	陶器 やや軟質な淡白色で緻密	低火度の透明釉 全付・高台内 素地 光沢・貫入あり	見込みは鉄錆による描れた山水文 高台削り出して削り痕が沈線状に見える	不明	京焼き風陶器	肥前系 嬉野市志田西山1号窯に類例あり	18c中葉
3号土坑 11層10	小碗	口径(8.2) 底径(3.6) 器高2.3	磁器(染付) 底内色で黒色粒子多い	透明釉 全面	外面手描き呉須染付による草素文	発付軸剤ガ		肥前系 波佐見か	1700 / 1740
3号土坑 11層11	小碗	口径(9.6) 高台径(4.8) 器高4.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面手描き呉須染付による雲龍文花文	焼付軸剤ガ	足山本登窯に類例あり	肥前系 波佐見	1750 / 1770
3号土坑 11層12	丸寸皿	底径(8.1)	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面手描き呉須染付による体部下位と高台に2条界線 見込みはコンニャク印刷による花弁花文 外底には魚形線と描れた「大明年製」の銘款	不明	呉須薄い 銘款が本場山盗に近い	肥前系 波佐見	1680 / 1740
3号土坑 11層13	中皿	口径(17.8) 底径11.0 器高3.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外底中央から呉須染付による蔓草文と四方に蔓草文 内面に蔓草文と蔓草文と四方に込み山コンニャク印刷による宝弁花文 外底には魚形線と描れた「大明年製」の銘款	ハリ目跡 金付軸剤ガ	—	肥前系	1700 / 1740
3号土坑 11層14	高台付杯	口径(20.8)	陶器 やや軟質な黄白色で緻密	低火度の透明釉 全付	見込みは鉄錆による描れた山水文 高台削り出し	不明	京焼き風陶器	肥前系 嬉野市志田西山1号窯に類例あり	18c後半
3号土坑 11層15	燈鉢	灰元不曲	陶器 焼成小良のため 胎質性	口縁部のみ鉄釉 他は焼成不良のため一部崩変	指目上端ナデ軸え	—	肥前窯と見なすように見えるが焼成不良のため	肥前系 武雄市鹿島窯に類例あり	1690 / 1750

表3　2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器観察表

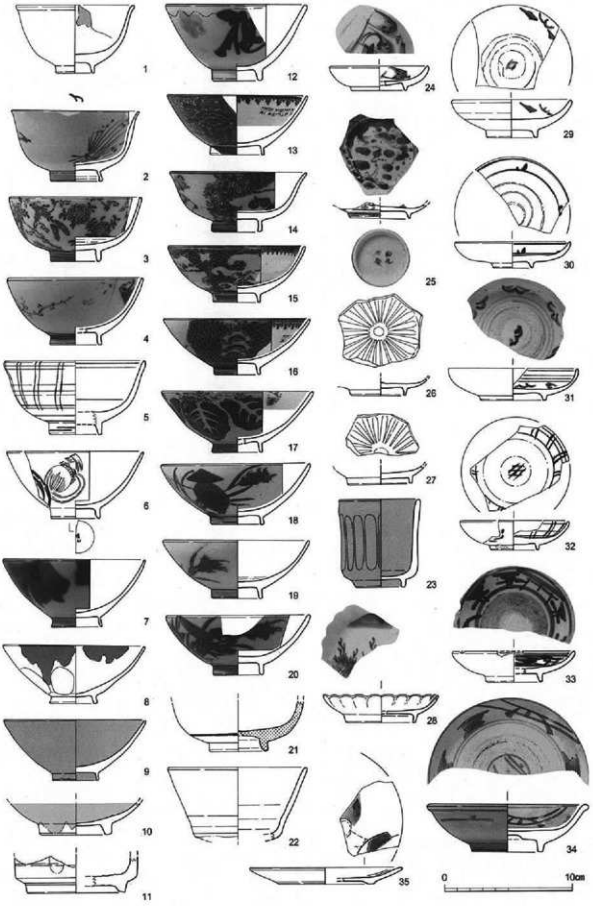
1号清状遺構（図版5・6・9・10）

第12図1の見込み文様は浮世絵をモチーフにしたものか。第12図3の見込み文様は明治5（1872）年制定の黒漆郵便箱と電線・電柱の描かれたもので、本来のポストには「郵便箱」と書かれるが、ここでは「海老□」と書かれている。欠損のため不確実だが、商家の名前の可能性が高い。第12図9・10はの文様は富士山と松と帆掛け舟を描いたもので、外面を一回りして一つの文様になっている。第12図12の裏銘は戦時統制により昭和16（1941）年以降に記入が義務付けられた統制番号で、「岐」の後には3桁の番号が入るはずだが、欠損している。第12図33の文様は19世紀中葉のモチーフだが、器形は新しいものなので、復古的な作風と考えられる。第12図45の裏銘「清水」の刻印は、字体が完全に一致する資料を発見できなかったため、窯を特定できない。第12図45の龍泉窯青磁は中世の混入品である。

第13図10は特徴的な胎土から高取系と判断した。第13図21は陶胎染付としたが、呉須の発色不良から、焼成不足で軟質な状態の磁器の可能性もある。第13図31の文様は、楓文の描き方と同じなので楓文が簡略化されたものだろう。第13図33は口縁の打ち欠き部が黒変していることから灯明皿として使用されたもので、打ち欠きは芯置きのためであろう。4箇所等間隔に打ち欠いている理由は わからない。第13図35は類例がない土師質の絵皿で、胎土の特徴から蒲池焼と推定した。



第12図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1 (1/3)



第13図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2 (1/3)

遺構名 掲図番号 図版番号	器種 形状 法量等	法量(cm) （）は復元値 口径 器高 胴径	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・底部・装飾技法	窯詰技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 12図1 図版5	厚手小杯 蓋	口径6.0 器高(2)2.4 胴径2.9	砂粒(色絵) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	見込みに女性の人物文　輪郭は金、赤・黒・黄彩の上絵付け	重ね釉焼き		瀬戸・美濃系	不明
1号溝 12図2	厚手小杯 蓋	口径(6.2) 器高(2)2.2 胴径2.6	砂粒(色絵) 白色	透明釉　全面 白色	見込みは金彩の物売様による物売文で紐の目　輪郭金上による金彩	重ね釉焼き		肥前系	不明
1号溝 12図3 図版5	厚手小杯 蓋	口径(7.0) 器高(2)2.2 胴径2.6	砂粒(角付) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	外周高台に手描きコバルト染付による四合機文　見込みにコバルトによる唐草・電線とポストを上絵付け	重ね釉焼き	大型徳化をオチーフにしたもの	瀬戸・美濃系	19ｃ中葉
1号溝 12図4	厚手小杯 蓋	口径(7.0) 器高(2)2.6 胴径2.6	砂粒(色絵) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	外周高台に手描きコバルト染付による四合機文　見込みに金彩による唐草各「時節□」「梅川」と題号を上絵付け	重ね釉焼き		瀬戸・美濃系	19ｃ中葉 ～ 20ｃ前半
1号溝 12図5	厚手小杯 蓋	口径(7.2) 器高(2)2.8 胴径2.1	砂粒(白絵) 白色　黒色粒子多い	青磁のある孔 白色の透明釉 金彩	――	重ね釉焼き		肥前系	不明
1号溝 12図6	厚手小杯 蓋	高台径(2.6)	砂粒(色絵) 白色	やや砂色系く 乳白色の透明 釉　金彩	見込みに赤彩の火を主、他の円釉剥ぎ上に金彩と赤彩で草種文を上絵付け	重ね釉焼き		肥前系	不明
1号溝 12図7	厚手小杯 蓋	高台径(2.25)	砂粒(色絵) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	見込みに黒紙刷りコバルト染付による「鹿」の紋章彩と金彩で　「百鹿／美鹿」を上絵付け	重ね釉焼き	久留米市三本周遺跡5ＳＸ1に類例があり、口縁部は端反形	瀬戸・美濃系	20ｃ初頭
1号溝 12図8	厚手小杯 蓋	高台径(2.5)	砂粒(色絵) 白色	透明釉　全面 白色	内面に赤彩による「魚形模上絵付け　見込みは赤彩の輪郭線による雲・雷羽・虫子上絵付け	重ね釉焼き		肥前系	19ｃ中葉 ～ 20ｃ前半
1号溝 12図9	小杯 丸型湯呑み	高台径(2.5)	砂粒(色絵) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	周約と胎の側面２色彩りによる雷文と松の山水文の上絵付け　底部はクロムによる網版転写で「乾山模様」を上絵付け	重ね釉焼き	2号遺24図5と同一器種	瀬戸・美濃系	19ｃ末 ～ 20ｃ第1四半期
1号溝 12図10	小杯 丸型湯呑み	高台径(2.5)	砂粒(色絵) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	周約と胎の側面３色彩りによる雷文と松の山水文の上絵付け　底部はクロムによる網版転写で「乾山模様」を上絵付け	重ね釉焼き	2号遺24図5と同一器種	瀬戸・美濃系	19ｃ末 ～ 20ｃ第1四半期
1号溝 12図11	小杯 丸型湯呑み	高台径3.9	砂粒(角付) ガラス質　白色	透明釉　全面 白色	外周は制取形コバルト染付による雷文か鳳凰は手描きコバルト染付による「水界紋内側」	重ね釉焼き	2号遺24図4と同一器種	瀬戸・美濃系	19ｃ末 ～ 20ｃ第1四半期
1号溝 12図12 図版5	小蓋 丸型湯呑み	口径(8.0) 器台径(3.2) 器高4.1	砂粒(青磁) 灰白色	鼠灰色の青磁釉　全面　長石釉のような貫入を意図とする		重ね釉焼き後、窯詰焼付	七輩相に近変として被からない行も欠きがある	瀬戸・美濃系 交趾	20ｃ中葉

表４　２次調査１号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(1)

第14図２・３は同一版だが、２は版が偏っている。第14図５は愛知県土岐市肥田産で、上限年代は1855年に求められるとされている。第15図４は底部に布目跡が付くことから久留米市両替町遺跡ＳＥ276出土のような型押しにより成形された可能性が高い。

第17図３は朝鮮半島に多く見られる器形で、朝鮮半島向けに作られた器種ではないだろうか。

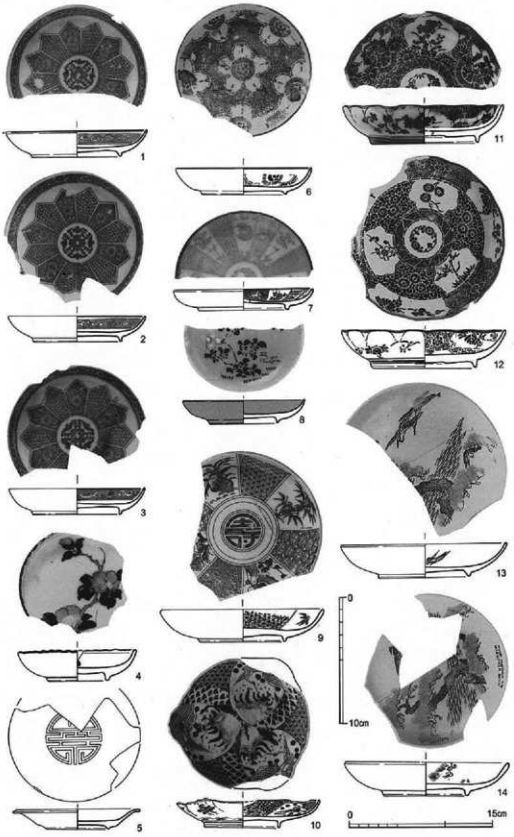
大分県竹田市由学館跡で同一器形に「大音謹製」の裏銘がある。鹿島市浜町皿山窯にも類例あり。第17図４は産地不明で、３次調査の第56図14と同一器種。文様字体に油沢があり、他に類をみない。第17図７は外底の焼き台の痕跡部分が高くなっている。焼成時のへたれのため、底部の焼き台により底部が押し上げられたものであり、本来は平底であろう。第17図８のように土師質で内面透明釉か灰釉のもの土鍋、17図９のように鉄釉が帯状に掛かり、飛びカンナ装飾のものは行平鍋の蓋。

第17図12は口縁形態が特異だが、胎土は肥前系であり、小型器種は口縁形態が異なるのかもしれない。第17図15は「肥前　鳥屋園」と染付された合子で、「鳥屋園」という漢方薬を入れた薬盒の蓋。第17図16は15の蓋と径が一致し、他に近い蓋の例がないことから、15の身と考えられる。第17図18・19と20・21は胎の特徴から蓋と身のセットになる。第17図22は肩部に別の個体の小片が貼りついているが、破片は無釉であることから、施釉後に釉薬に貼りついたものである。

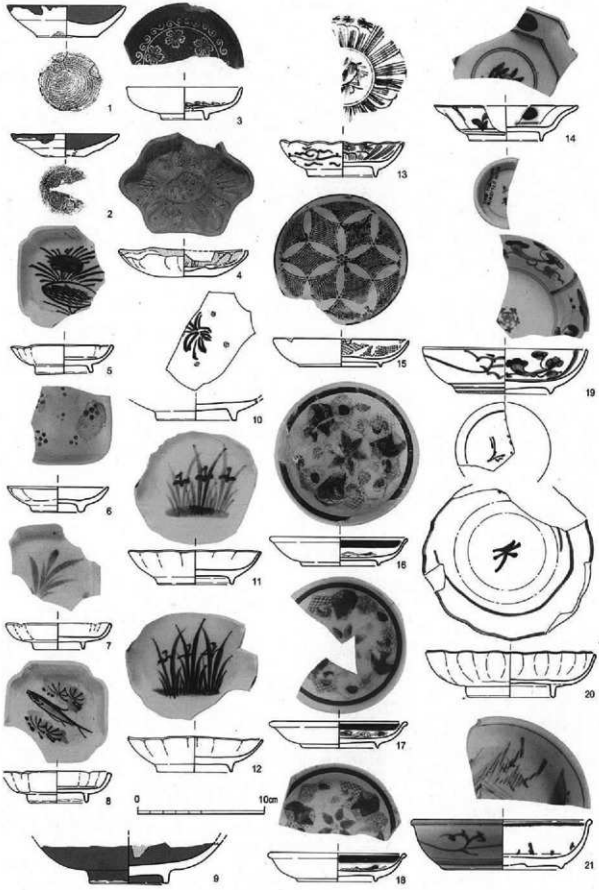
第18図７と14は接合しないが、色調や胎から同一個体の可能性が高い。第18図13の見込みは重ね焼きした個体の高台が重なっていた部分の器面が剥落している。第19図５・12のタイプの焜炉は各地で焼かれているようだが、胎土から福岡市博多瓦町焼の可能性が高い。

第20図３は久留米市東野亭焼窯跡に口縁部から胴部にかけての類例あり。

23図32はいわゆる「汽車土瓶」だが、形態が既に土瓶ではないので、ここでは「汽車茶瓶」とし



第14図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3（10は1/4、他は1/3）

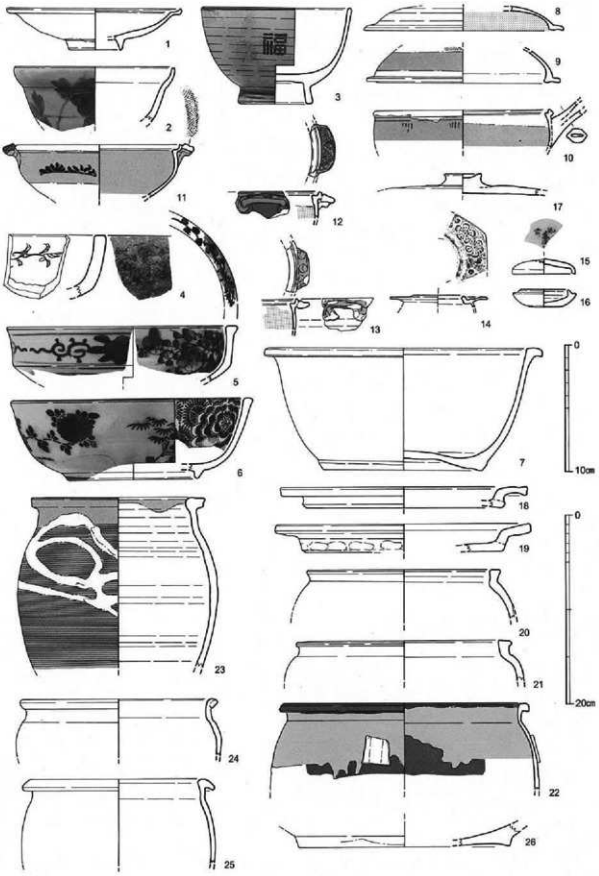


第15図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図4 (1/3)

遺構名	器種	注記（ ）は復元値	胎の特徴	軸薬	調整・成形・装飾技法	廃棄技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
掘形番号	形状								
図版番号	通称名								
1号窯 図版13	小杯 徳利形	U径(6.1) 高台径4.0 器高4.8	精緻(白) 灰白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による花文と草銘文	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 19c末
1号窯 図版14	小杯 徳利形	U径(6.2) 高台径3.2 器高4.0	精緻(白) 灰白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による高蹴文	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着	12図14・15は同一個体で、15は14の底部で、14は14の反対側の文様	肥前系 モチーフが幅狭く 寸法2号窯に近い	19c中葉 19c末
1号窯 図版15	小杯 徳利形	U径(6.4) 高台径(3.4) 器高4.8	精緻(白) 灰白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による高蹴文と樹文	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着	12図14・15は同一個体で、14は15の反対側の文様	肥前系 モチーフが幅狭く 寸法2号窯に近い	19c中葉 19c末
1号窯 図版16 図版5	小杯 徳利形	U径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による高蹴文	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 19c末
1号窯 図版17	小杯 徳利形	U径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	精緻(白) 白色	焼成不良で不 分色の部釉剥 全面	外面はコンニャク印刷外側染付による秋草円	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 19c末
1号窯 図版18	小杯 徳利形	U径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による草花文	畳付釉剥ぎ		東京都分倍遺跡H20 10層等(1800年～1911年)に類似あり	幕末～明治期 19c後半 19c末
1号窯 図版19	小杯 徳利形 徳利形	U径(6.6) 高台径(3.6) 器高4.25	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による草花文	畳付釉剥ぎ		東京都分倍遺跡H20 10層等(1800年～1911年)に類似あり	幕末～明治期 19c後半 19c末
1号窯 図版20	小杯 徳利形 徳利形	U径(6.4) 高台径(3.8) 器高4.25	精緻(白) ガラス質 白色 黒色粒子 多い	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による赤文と玉章文	白合外縁部施釉	白合は松の実文様と秋草紋 器高差は5.0(図版20)～5.4(図版19)で、図版19の方が高い	肥前系	19c後半 19c末
1号窯 図版21	小杯 徳利形	U径(7.1) 高台径(3.6) 器高5.3	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面はクロムの銅版転写で花文と「勝」字文 上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c後半 19c末
1号窯 図版22	小杯 徳利形 徳利形	U径(6.8) 高台径(3.8) 器高5.4	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は梅鉢の銅版転写で大根・鼎・宝珠・宝 文散らし文 上絵付け	畳付釉剥ぎ			幕末～明治期 19c末 20c初頭
1号窯 図版23	小杯 徳利形 徳利形	U径(6.7) 高台径(2.8) 器高4.5	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による口縁下に1 条、腰下部に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c後半 19c末
1号窯 図版24	小杯 徳利形 丸底徳利系	U径(6.8) 高台径(3.6) 器高3.9	精緻(白) ガラス質 白色 黒色粒子 多い	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による雲龍文	畳付釉剥ぎ		肥前系	20c第1 四半期
1号窯 図版25	小杯 徳利形 徳利系	高台径3.2	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による若文と凸四 線文 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 19c末
1号窯 図版26	小杯 徳利形 丸底徳利系	U径(7.2) 高台径(3.4) 器高5.4	精緻(白) 白色	青味がかった 透明釉 全面	口縁部と口底部にコバルト顔料 顔料は二コバルト中間色染付による山水文 畳付はU字状に剥っている	畳付釉剥ぎ		肥前系	20c第1 四半期
1号窯 図版27	小杯 徳利形 徳利系	U径(7.8) 高台径(4.6) 器高5.4	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写による コバルト中色片文と鳳 凰文の地文を上絵付け 高台側も消し	畳付釉剥ぎ		東京都分倍遺跡H20 遺構(1800年～1911年)に類似あり	幕末～明治期 20c第1 四半期
1号窯 図版28	小杯 徳利形 徳利系	U径(8.2) 高台径(4.2) 器高4.2	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による鉄線文 と背面波文の地文 高台側も消し	畳付釉剥ぎ		浮羽市金田遺跡2 区近代遺構に類例あり	幕末～明治期 20c第1 四半期
1号窯 図版29	小杯 徳利形 徳利系	U径(8.2) 高台径(3.8) 器高4.3	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面平描きコバルト染付による鳳凰文と口縁 下に1 条、高台に1 条界線 内面は口縁下に3 条、腰下部に1 条界線 高台側も消し	畳付釉剥ぎ		肥前系	幕末～明治期 20c第1 四半期
1号窯 図版30	小杯 徳利形 徳利系	U径(8.2) 高台径(2.8) 器高4.2	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面コバルト平描き染付による口縁下に1 条、腰下部に1 条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	幕末～明治期 20c第1 四半期
1号窯 図版31	中碗	高台径(4.0)	精緻(黄白) ガラス質 白色	外面銅釉、内面鉄釉の部分的 に付分け	高台側も消し	見込みに蛇の目 釉剥ぎ		肥前系	幕末～明治期 19c後半 20c前半
1号窯 図版32	中碗	高台径(3.6)	精緻(黄白) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は山、雲、雷文帯文、他部は2条、高台 に1条界線を上絵付け 見込みは渦巻で囲れた「勝」字山水文を上絵付け 高台側も消し	畳付釉剥ぎ	碗底部と思われる	肥前系か	幕末～明治期 19c中葉 19c末
1号窯 図版33 図版5	中碗	U径(8.0) 高台径4.2 器高4.3	精緻(白) ガラス質 白色	透明釉 全面	コバルト平描き染付による 外面文様は草花 文と高台に2条界線 内面は口縁部に1条文様 見込みは草文 腰部の渦巻から内外に線を引く	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形 大分松竹田付近第1区SK1に類例あり	肥前系	幕末～明治期 19c末 20c前半
1号窯 図版34	小碗 端反形	U径(8.4) 高台径3.8 器高3.6	精緻(白) 白色	透明釉 全面	平描きコバルト染付による格子文に花唐文 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c末 20c前半
1号窯 図版35	小碗 端反形 丸底徳利系	U径(8.4) 高台径3.1 器高4.9	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は外端平描き染付による区画内に梅鉢 による唐草文と高蹴文 高台に2条界線 内面は上絵付に鉄絵風文様	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 19c末 幕末
1号窯 図版36	中碗 丸底徳利系	U径(9.0)	精緻(白,赤) ガラス質 白色	透明釉 全面	赤玉と界線は赤、雲文は緑、全面の縦文の3 色で上絵付け 高台側も消し	不明		肥前系か	幕末～明治期 20c第2 四半期
1号窯 図版37 図版5	中碗	高台径(4.6)	精緻(陶胎焼成 白色) ガラス質 白色	青みがかった 透明釉 全面	外面は平描き巴唐草文による胴部で結んだ二 重線文 内面は山水文 見込みは草花文 表裏は方形内に崩れた鳳凰 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ 胴部付帯	産地不明	肥前系か	不明
1号窯 図版38	中碗	高台径3.8	精緻(白) ガラス質 白色	青みがかった 透明釉 全面	外面は平描き巴唐草文による胴部で結んだ二 重線文 内面は山水文 見込みは草花文 表裏は方形内に崩れた鳳凰 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系か	1760 1780
1号窯 図版39	中碗	高台径(4.0)	精緻(白) 灰白色 紅子多い 白色	透明釉 全面	外面は巴唐草文と高蹴文による胴部で結んだ二 重線文 内面は山水文 見込みは草花文 表裏は崩れた鳳凰	畳付釉剥ぎ		肥前系か	1820 1860
1号窯 図版40	小碗 端反形 端反形	U径(9.2) 高台径(4.0) 器高4.0	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト染付による口縁下1 条腰部2 重下段の2 条線、見込には鳳凰 内面は口縁下1 条腰部2 重下段の1 条線 見込には鳳凰とスイカ柳	畳付釉剥ぎ		肥前系か	1820 1860
1号窯 図版41	中碗 端反形 端反形	U径(10.3) 高台径3.9 器高5.2	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は平描き巴唐草文と高蹴文 表裏文様 高台に2条界線 内面は口縁部に線を2 重下段に1条線 見込には鳳凰	畳付釉剥ぎ		肥前系か	19c後半3 四半期
1号窯 図版42	中碗 端反形 端反形	U径(10.3) 高台径3.7 器高5.0	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は平描き巴唐草文と高蹴文 表裏文様 高台に2条界線 内面は口縁部に線を2 重下段に1条線 見込には2条界線内に崩れた鳳凰	畳付釉剥ぎ		肥前系か	19c後半3 四半期
1号窯 図版43	中碗	高台径(4.0)	精緻(白) 白色	透明釉 全面	外面は平描き巴唐草文による区画内に若文 地 高台に2条界線 内面は口縁下1 条腰部 見込みは1 条界線内崩れた鳳凰を立ち山水文	畳付釉剥ぎ	碗底部と思われる	肥前系か	19c後半3 四半期か
1号窯 図版44	中碗 摺込形 小丸底	高台径(3.2)	精緻 青味のある 白 中や黄褐 部分 内面から 仕上げ部まであり	低火度の酒釉 内面から 仕上げ部まで塗まで	見込みは鉄絵による蔦入た山水文 外底は円 周・北越なし	不明	京焼系風陶器	肥前系 伊万里市柳瀬石 橋	18c後葉
1号窯 図版45	中碗 摺込形 小丸底	高台径(5.6)	精緻 にぶい灰褐色	低火度の酒釉 内面から 仕上げ部まで塗まで	見込みは鉄絵による蔦入た山水文 外底は円 周と「陸水」印	畳付に砂目跡	京焼系風陶器	肥前系 伊万里市柳瀬石 橋	1660 1680
1号窯 図版46	中碗	高台径(5.8)	精緻(青磁) 灰白色	淡緑灰色の青 磁釉 全面	外面は蔦紋による盲文 内面は沈蔦	不明		中国・龍泉窯	15c後半 16c前半

表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(2)

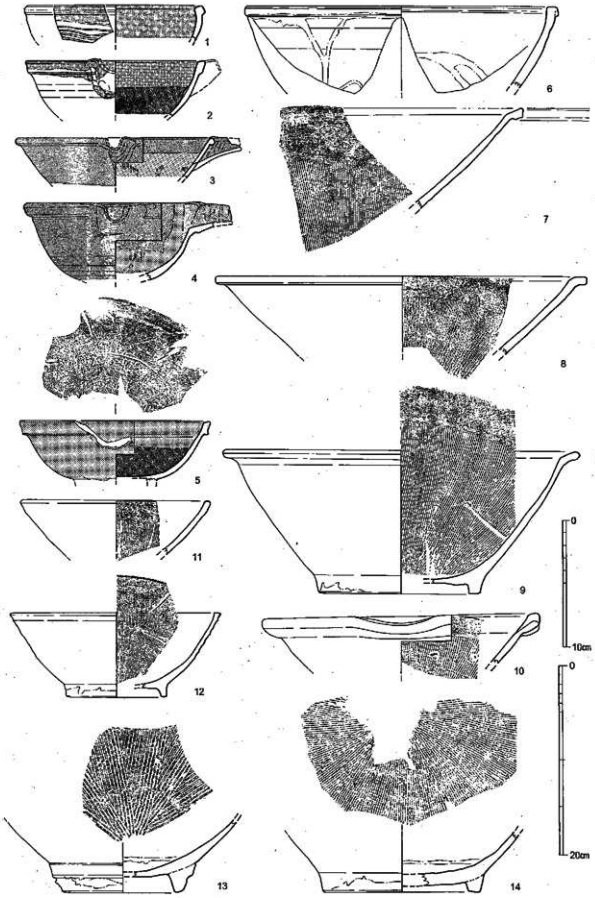
第16図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図5（1・6～8・10・14は1/4、他は1/3）



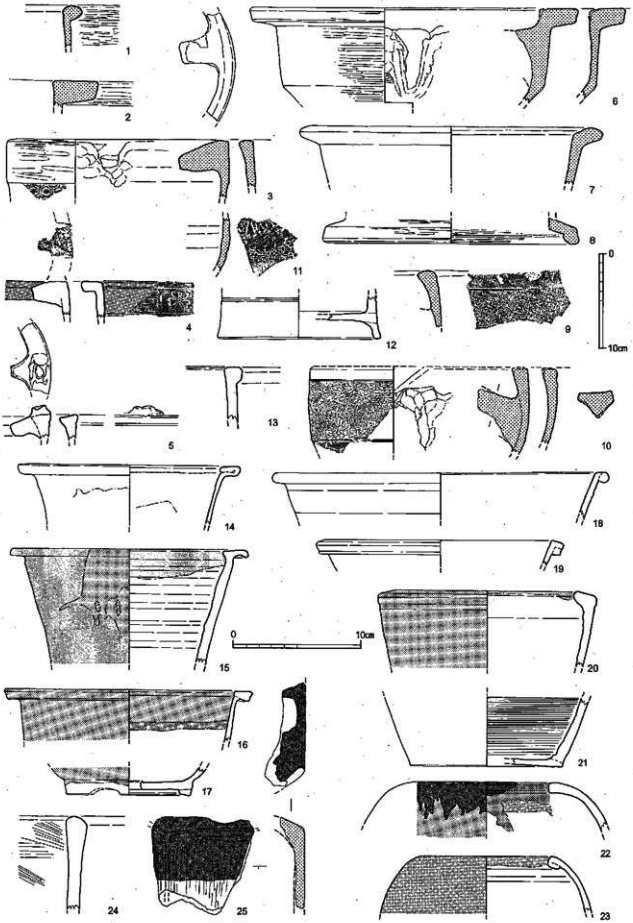
第17図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図6（4～6・9・14～17・24は1/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・底形・装飾技法	施釉技法	所見		
時期番号 / 図版番号	形状 / 識別名	(　)は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 第13図1 図版5	中碗 瀬戸系 陽炎碗	口径(9.2) 高台径(4.2) 器高5.3	陶器 にぶい黄橙色	鉄大度の透明釉 全面	内面は側線軸消し掛け　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ	施反部から年代を推定	肥前系か	18c前半期 / 18c前半期
1号溝 第13図2	中碗 瀬戸系 陽炎碗	口径(10.0) 高台径(4.0) 器高5.6	磁器(染付) にぶい白 粘子多い	透明釉　全面	外面は平易なコバルト染付による植変文・鳥文 内面は鎬下段1条界線　見込みは鎬間文を代わりて本文の文様がかからない　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ		肥前系	19c第3 四半期
1号溝 第13図3	中碗 瀬戸系 陽炎碗	口径(10.4) 高台径(4.0) 器高5.1	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は型紙刷りコバルト染付による花文・唐草文　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ 見込みに絵の目 輪剥ぎ		肥前系	19c第3 四半期
1号溝 第13図4	中碗 丸碗	口径(10.4) 高台径(4.0) 器高5.3	磁器(色絵) 白色	透明釉　全面	手描きコバルト染付による梅樹文と胴下位上段・高台2条界線　内面は口縁2条・胴下位1条界線	柴付軸剥ぎ		肥前系	19c第4 四半期
1号溝 第13図5	中碗 瀬戸系 電気碗	口径(11.0) 高台径(4.1) 器高5.8	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面手描き染付による二重網目文、胴下1条・高台2条界線　内面は口縁2条・胴下位1条界線	柴付軸剥ぎ　や や砂目が付く	器屋が嘆い	肥前系 / 京焼系	18c前半期 / 18c前半期
1号溝 第13図6	中碗 飯碗	口径(10.8) 高台径(3.9) 器高5.3	磁器(色絵) 白色	透明釉　全面	外面は型文文様を赤彩と青彩で上絵付け　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第2 四半期
1号溝 第13図7	中碗 飯碗	口径(11.0) 高台径(4.2) 器高5.4	磁器(色絵) 白色	透明釉　全面	ゴム印押コバルト染付の花文か　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ		肥前系	20c第2 四半期
1号溝 第13図8	中碗 八角湯呑り 平碗	口径(11.0) 高台径(4.2) 器高4.6	磁器(白磁) 白色	透明釉　全面	内外鉄釉の流し掛け	柴付軸剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1 四半期
1号溝 第13図9	中碗 平碗	口径(11.0) 高台径(3.7) 器高4.8	磁器(青磁) 白色	クロム青磁釉 全面	――	柴付軸剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1 四半期
1号溝 第13図10	中碗か	高台径(5.6)	陶器 にぶい茶灰色～茶灰色 鉄釉	鉄釉　内面から体部下位まで	高台は削り出し	柴付軸剥ぎ		高取系	不明
1号溝 第13図11 図版5	中碗か平碗	高台径(7.6)	陶器 不純物量多かったため焼き上がりは良好	透明釉　全面 にぶい茶褐色	内外灰白色の黒泥釉を流し掛け　高台は削り出し	不明	ケズリの凹凸を残す　胎が特徴的	不明	不明
1号溝 第13図12	中碗 飯碗	口径(12.2) 高台径(5.3) 器高6.0	磁器(染付) 白色	透明釉　全面 にぶい茶褐色	手描きコバルト染付による鹿子3文字と正円の花文・朱点文の上絵付け　文様は明瞭できない　高台は削り出しでカンナ削り痕残る	柴付軸剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第2 四半期
1号溝 第13図13	中碗 平碗	口径(12.0) 高台径(4.2) 器高4.7	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	外面の都草絵文・牡丹文、内面口縁部都草文又は蓮弁文・高台2本線　外面高台側面文は手描きによる　コバルト染付　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ	1号溝22図9とセットになる	肥前系 瀬戸市志野か	20c第1 四半期
1号溝 第13図14	中碗 電気系 電気碗	口径(10.8) 高台径(4.0) 器高6.4	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は型紙刷りによる松花文・蔦絡唐草文、平場は二重の上条界線　内面は口縁部2条・胴下位1条界線　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ 見込みに絵の目 輪剥ぎ		肥前系	19c第4 四半期
1号溝 第13図15	中碗	口径(10.7) 高台径(4.7) 器高4.4	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	外面の雷海波紋文・変形の上文と内面口縁部唐草文は型紙刷りによる　高台2条線　内面は手描きのコバルト染付	柴付軸剥ぎ	モチーフは瀬川町岩田陶器窯式の盆 高台に刷例あり	肥前系 瀬野市志田か	19c第4 四半期
1号溝 第13図16	中碗 平碗	口径(8.8) 高台径(3.5) 器高4.4	磁器(染付) 白色 ガラス質　白色	透明釉　全面	外面の雷海波紋文・変形文と内面口縁部唐草文は型紙刷りによる　高台2条線　内面はコバルト染付　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ	モチーフは瀬川町岩田陶器窯式の盆 高台に刷例あり	肥前系 瀬野市志田か	20c第1 四半期
1号溝 第13図17	中碗 平碗	口径(12.0) 高台径(4.0) 器高4.8	磁器(染付) 灰白色 黒灰色 粒子含む	透明釉　全面	外面は鹿踊型文コバルト染付による花葉文・内面口縁部外面の花文と連続する蔓文　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1 四半期
1号溝 第13図18 図版5	中碗 平碗	口径(11.7) 高台径(4.2) 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は鹿踊型文コバルト染付による植樹と蔓草・口下文　高台は削り出し	芯付軸剥ぎ	口縁部内側に絵かい打ち欠き痕あり	肥前系	20c第1 四半期
1号溝 第13図19	中碗 平碗	口径(11.6) 高台径(4.0) 器高4.6	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面はゴム印押コバルト染付による植樹文　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ 見込みに絵の目 輪剥ぎ	1図20と同一文様 の製品	肥前系	20c第1 四半期
1号溝 第13図20	中碗 平碗	口径(11.7) 高台径(4.7) 器高4.0	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面はゴム印押コバルト染付による植樹文　高台は削り出し	柴付軸剥ぎ 見込みに絵の目 輪剥ぎ	13図10と同一文様 の製品	肥前系	20c第1 四半期
1号溝 第13図21 図版5	中碗 鍋焼り形	高台径(4.4)	磁器(無釉染付) 暗灰色	透明釉　全面 発色不良で灰色が出る	外面は手描き呉須染付による1条界線だが、発色不良で黒色を呈する	柴付軸剥ぎ　や や砂目が付く	被化焦の陶器焼け　または白色の粒状が見なる	肥前系 産地不明	不明
1号溝 第13図22	中碗 鍋焼形	口径(11.0)	陶器 黄白色　軟質	鉄天使の透明釉　全面 貫入あり	体部に小さな穴が入る	不明		肥前系か	不明
1号溝 第13図23 図版5	小鍋 鍋形　鍋取	口径(6.3) 高台径3.9 器高7.0	磁器(青磁) 灰色	青石釉の古磁釉（貫入と彩釉）全面	内外貫入を宣言する	柴付軸剥ぎ鉄錆痕		産地不明	20c第2 四半期
1号溝 第13図24	小皿	口径(7.8) 高台径(4.4) 器高1.9	磁器(染付) 灰白色　貫入強い	透明釉　全面	内面は手描き呉須染付による側面文様は不明。高台に1条界線　見込みに絵文　高台は削り出し　軟質「波佐平焼」	柴付軸剥ぎ		肥前系	18c前半期 / 18c前半期
1号溝 第13図25	小皿	高台径4.5	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は手描き呉須染付による側面文様は不明。高台に1条界線　見込みに絵文　高台は削り出し　軟質「波佐平焼」	柴付軸剥ぎ		肥前系	18c後半 / 19c後半
1号溝 第13図26	小皿 輪花形	高台径4.4	磁器(白磁) 白色	透明釉　全面	型打ちによる輪花形成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	柴付軸剥ぎ		肥前系	1800 / 1860
1号溝 第13図27	小皿 輪花形	高台径4.8	磁器(白磁) 白色	透明釉　全面	型打ちによる輪花形成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	柴付軸剥ぎ		肥前系	1800 / 1860
1号溝 第13図28	小皿 輪花形	口径(9.0) 高台径5.4 器高1.9	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	型打ちによる輪花形成形後、ろくろ成形の高台貼り付け　見込みは手描き呉須染付による蔓文　高台は削り出し　軟質「波佐平焼」	柴付軸剥ぎ		瀬戸・美濃系	18c前半期 / 18c前半期
1号溝 第13図29	小皿	口径(9.5) 高台径4.0 器高2.1	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	内面は手描き呉須染付による鳥文　見込みに非形文	芯付軸剥ぎ　見込みの絵の目輪剥ぎ		肥前系 波佐見か	19c中葉 / 19c後半
1号溝 第13図30	小皿	口径(9.1) 高台径5.2 器高2.0	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	手描きコバルト染付による2条界線と鳥文か	柴付軸剥ぎ　見込みの絵の目輪剥ぎ	絵の目輪剥ぎ部に重ね焼きした痕跡の発付部の素地あり	肥前系	19c中葉 / 19c後半
1号溝 第13図31	小皿	口径(10.2) 高台径(5.2) 器高2.5	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	内面は手描き呉須染付による口縁部と胴下位に4条界線と無規化された蔓文　見込みは非蔓文か	芯付軸剥ぎ　見込みに絵の目輪剥ぎ	発色度くろ色の可能性を宣言する	肥前系	19c中葉 / 19c後半
1号溝 第13図32	小皿	口径(8.5) 高台径(3.8) 器高2.3	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は平描き呉須染付による崩れた唐草文か　内面から見込みは格子文	芯付軸剥ぎ　見込みに絵の目輪剥ぎ	絵の目輪剥ぎ部に重ね焼きした痕跡の発付部の素地あり	肥前系	19c中葉 / 19c後半

表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器類観察表(3)



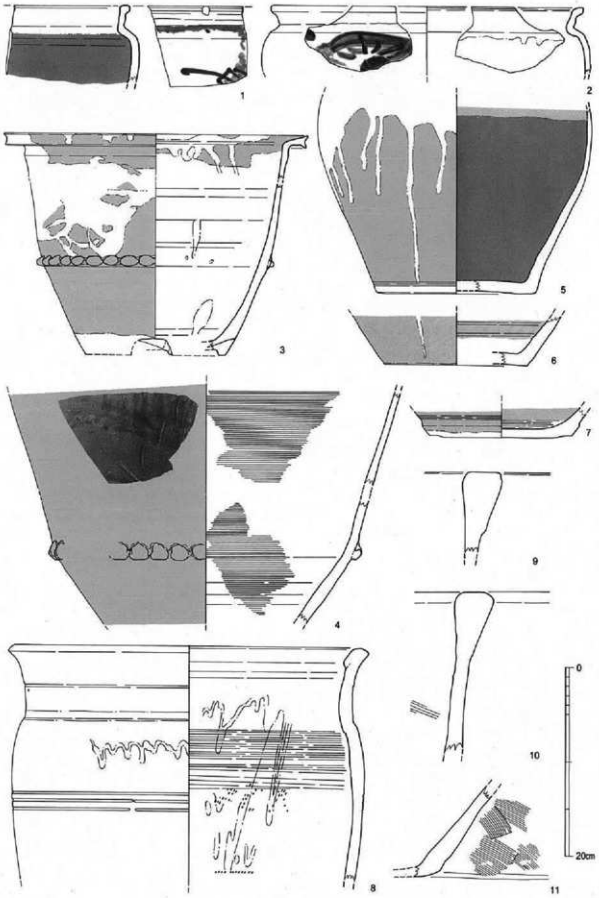
第18図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図7（10は1/3、他は1/4）



第19図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図8（25は1/3、他は1/4）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の様相	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見			
検出番号	形状	()は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	遺物名								
1号窯 第13図33	小瓶	口径(9.6) 高台径5.0 器高2.4	緻密(染付) 灰白色	透明釉 全面	内面は手捻ち共成型付による全の界線内に鳥紋と蔓文	見込みの約の目輪痕跡	口縁部に鉄釉使用顕著に打ち欠きがある。1つは完存して	肥前系	19c中葉 19c後半
1号窯 第13図34	広口瓶	口径(12.5) 高台径5.6 器高4.7	緻密(染付) 灰白色	透明釉 全面	強色紙くずロ色の表形鳥紋	約の目痕なし 高台の部分が厚い	高台の部分が厚い	肥前系か	19c中葉 19c後半
1号窯 第13図35 図版5	小瓶	口径(12.0) 高台径7.6 器高13	土師器 黄褐色 精品 全面粗なし	——	見込みの線跡まは底一面で平坦にしていると結ぶ でもチーフ不明 高台側当月中央	不明		瀬戸・美濃系	不明
1号窯 第14図1	小瓶	口径(11.0) 高台径7.0 器高13	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面に1条の線跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の菊唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図2	小瓶	口径(11.0) 高台径7.0 器高13	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面に1条の線跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ	放がずれている	瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図3	小瓶	口径11.0 高台径7.0 器高13	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面に1条の線跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図4	小瓶	口径(9.3) 高台径4.8 器高2.4	粗密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面の口縁跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図5	小瓶	口径(11.0) 高台径7.0 器高13	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面に1条の線跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ	放がずれている	瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図6	小瓶	口径(9.3) 高台径4.8 器高2.4	粗密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面の口縁跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図7	小瓶	口径(9.3) 高台径4.8 器高2.4	粗密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面の口縁跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図8	小瓶	口径(9.3) 高台径4.8 器高2.4	粗密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面の口縁跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図9	小瓶	口径(9.3) 高台径4.8 器高2.4	粗密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部前面の口縁跡 側面転写コバルト染付による内面口縁部の唐草文帯、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図10	中瓶 徳化形 蓋瓶	口径(12.8) 高台径(6.6) 器高2.6	緻密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の蓋部、内面の端部に1条の線跡 側面転写コバルト染付による蓋文、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		肥前系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図11	中瓶 徳化形 蓋瓶	口径(12.8) 高台径(6.6) 器高2.6	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の蓋部、内面の端部に1条の線跡 側面転写コバルト染付による蓋文、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		肥前系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図12	中瓶 徳化形 蓋瓶	口径(12.8) 高台径(6.6) 器高2.6	緻密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の蓋部、内面の端部に1条の線跡 側面転写コバルト染付による蓋文、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		肥前系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図13	中瓶 徳化形 蓋瓶	口径(12.8) 高台径(6.6) 器高2.6	緻密(色紙) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の蓋部、内面の端部に1条の線跡 側面転写コバルト染付による蓋文、見込みの輪唐草文既周文帯、見込み中央に中心文	重付釉剥ぎ		肥前系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第14図14	中瓶	口径(13.0) 高台径7.2 器高2.1	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面は手捻ち共成型付による全の界線内に鳥紋と蔓文	約の目痕なし 見込みに炭痕	約の目痕なし 見込みに炭痕	肥前系	19c前半葉 第2期末期
1号窯 第15図1	小瓶	口径(9.3) 高台4.8 器高2.5	陶器 褐茶褐色	鉄釉を内面から外面口縁部までかける	底部糸切り	砂土目跡あり 見込みに炭痕	打明風上しての使用痕なし	肥前系 武雄市東原B窯に類似あり	不明
1号窯 第15図2 図版5	小瓶	口径(8.3) 底径(5.1) 器高3.8	陶器 茶褐色	鉄釉内面から外面口縁部までかける	底部糸切り	砂土目跡あり	打明風上しての使用痕なし	肥前系 武雄市東原B窯に類似あり	不明
1号窯 第15図3	三角手	口径(9.2) 底径(5.2) 器高3.8	陶器 黄褐色	鉄釉 全面 無かい貫入あり	外面自化粧その象徴による板花文と蔓手文	重付釉剥ぎ		肥前系か	19c中葉
1号窯 第15図4 図版5	小瓶 変形瓶 手端瓶	底径10.3 胴径7.8 器高2.2	土師器 橙褐色	内面から外面口縁部まで白化粧土	布目跡が残ることから、布を敷けて焼捻ち成形している。白化粧は土ケ一ト込みは焼捻ち成形による花文	不明		在地系	不明
1号窯 第15図5	小瓶 方形 千端瓶	口径(6.8) 底径(3.1) 器高1.8	緻密(染付) 白色	鉄釉	胴部のみ表面に鉄釉 全面	見込みはコバルト手捻ち染付による花文	重付釉剥ぎ	肥前系	19c中葉
1号窯 第15図6	小瓶 方形 千端瓶	口径(7.0) 底径(2.8) 器高2.0	緻密(染付) 白色	鉄釉 全面	鉄色不良で色白色をせずるる 透明釉 全面	見込みは手捻ち成型染付による鉄れた蔓唐草文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ	肥前系	19c中葉
1号窯 第15図7	小瓶 方形 千端瓶	口径(6.3) 底径(2.8) 器高1.8	緻密(染付) 白色	透明釉 全面 鉄色不良で色白色を呈する	見込みは手捻ち成型染付による蔓唐草文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図8	小瓶 方形 千端瓶	口径(6.3) 底径(2.8) 器高1.8	緻密(染付) 白色	透明釉 全面 鉄色不良で色白色を呈する	見込みは手捻ち成型染付による蔓唐草文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図9 図版5	小瓶 方形 千端瓶	底径(6.3) 底径(2.8) 器高1.8	緻密(染付) 白色	透明釉 全面 鉄色不良で色白色を呈する	見込みは手捻ち成型染付による蔓唐草文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図10	小瓶 方形 千端瓶	底径(6.3) 底径(2.8) 器高1.8	緻密(染付) 白色	透明釉 全面 鉄色不良で色白色を呈する	見込みは手捻ち成型染付による蔓唐草文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図11	ガリ瓶	高台径(6.2)	陶器 こまかい黒灰一昭灰色	海鼠釉 全面	内外に灰白色の薄灰釉の上掛け	重付釉剥ぎ		小石原系 福岡県朝倉村大口谷1号窯に近い	不明
1号窯 第15図10 図版5	中瓶	高台径(6.4)	低温(染付) 白色	透明釉 全面 鉄色不良	見込みは手捻ち共成染付による花蔓文 外底は糸切り	重付釉剥ぎ 見込み文様は横野町出土S209-1遺跡に酷似あり	見込み文様は横野町出土S209-1遺跡に酷似あり	肥前系 肥本不明	19c中葉
1号窯 第15図11	輪花形	口径(10.6) 高台径6.0 器高2.5	緻密(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手捻ちコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図12	小瓶 輪花形	口径(10.6) 高台径5.9 器高2.5	緻密(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手捻ちコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図13	小瓶 輪花形	口径(9.8) 高台径7.4 器高2.5	緻密(染付) 白色	透明釉 全面	外面の出た蓋裏文、内面の細線による花束文は手捻ち共成型付 見込みの三条界線内は水文は手捻ち 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図14	小瓶 八角形	口径(11.2) 高台径(6.0) 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の蓋部、内面の端部に1条の線跡 側面転写コバルト染付による蓋文、内面の2条界線内は八角蓋部は「□□年製」は手捻ち共成型付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ	「□□年製」は「底化年製」の可能性が高い	肥前系 字体が本田町誠不印新資に近い	19c前葉か
1号窯 第15図15	小瓶	口径(10.7) 高台径(6.0) 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面は手捻ちコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図16	小瓶	口径(10.7) 高台径(6.0) 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面は手捻ちコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図17	小瓶 輪花形	口径(10.6) 高台径5.9 器高2.5	緻密(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手捻ちコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図18	小瓶 輪花形	口径(10.6) 高台径5.9 器高2.5	緻密(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手捻ちコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図19	小瓶 輪花形	口径(9.8) 高台径7.4 器高2.5	緻密(染付) 白色	透明釉 全面	外面の出た蓋裏文、内面の細線による花束文は手捻ち共成型付 見込みの三条界線内は水文は手捻ち 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉
1号窯 第15図20	小瓶 八角形	口径(11.2) 高台径(6.0) 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の蓋部、内面の端部に1条の線跡 側面転写コバルト染付による蓋文、内面の2条界線内は八角蓋部は「□□年製」は手捻ち共成型付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ	「□□年製」は「底化年製」の可能性が高い	肥前系 字体が本田町誠不印新資に近い	19c前葉か
1号窯 第15図21	小瓶	口径(10.7) 高台径(6.0) 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図16	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図17	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図18	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図19	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図20	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図21	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図22	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図23	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉
1号窯 第15図24	小瓶	口径(10.7) 高台径6.0 器高2.9	緻密(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面にコバルト染付による蔓唐文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、貼り出し	重付釉剥ぎ		肥前系	19c後葉

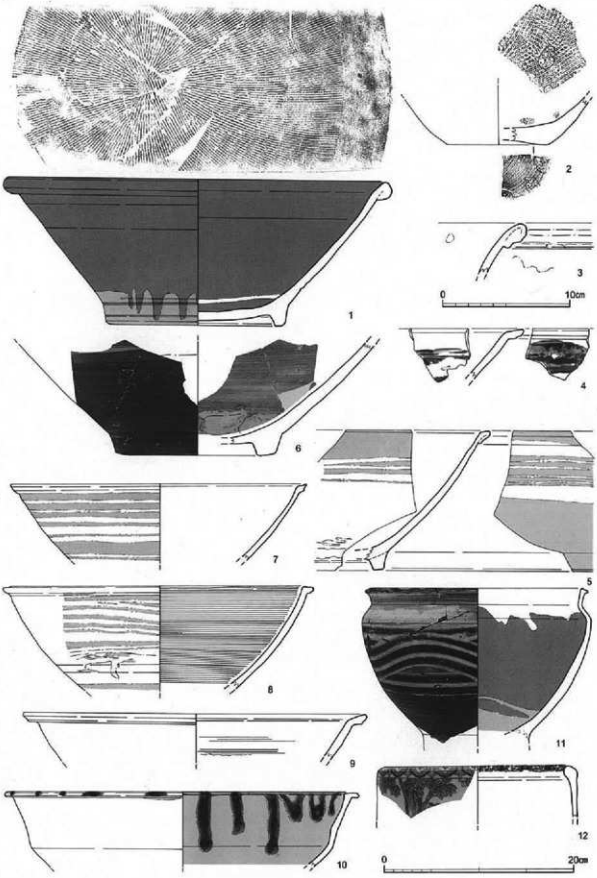
表4　2次調査1号清状遺構出土土器・陶磁器観察表(4)



第20図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図9 (1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
掘図番号 同版番号	形状 器名	()は復元値	胎の特徴						
1号溝 第15図17	小皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	胎器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面口縁下に赤色帯を上絵付け 見込みは鳥文を赤絵の輪郭線等、その上に赤・黄・黒・緑で上絵付け	焼付釉刷ぎ	型付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19C前半期
1号溝 第15図18	小皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	胎器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面口縁下に赤色帯を上絵付け 見込みは鳥文を赤絵の輪郭線等、その上に赤・黄・黒・緑で上絵付け	型付釉刷ぎ		瀬戸・美濃系	19C前半期
1号溝 第15図19	小鉢 なます皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 青味の多い透明釉 全面	外面は手描き外側丸いなぞらえた線を描き、外側下位に1条、高台径の位置に2条の線が巡り、内面は底部中央に蛇文・赤文 見込みはコンニャク印刷による五弁花文 高台は1条線内「大明年製」	焼付釉刷ぎ 砂目釉薬	蛇目の平坦が被色 見込み痕品質に劣る	肥前系 波佐見	1680 1740
1号溝 第15図20	小皿 なます皿	口径13.4 高台径7.0 器高2.2	胎器(染付) ガラス質 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面の口縁部は1条線、内面は1条線 底部は1条線 内面中央に人形紋上 山線紋	型付釉刷ぎ	赤れた山水文か	肥前系	19C後葉
1号溝 第15図21	五寸皿 三神口縁	口径14.2 高台径3.9 器高2.9	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 青のある透明釉 全面	手描き外側丸いなぞらえ内面中央に人形紋上 山線紋 見込みは蛇文	砂の目西台一重 焼付釉刷ぎ	砂目が山水文が端部平面1 1/30cm 1周時に近い	肥前系	1780 1860
1号溝 第16図1	五寸皿 輪花形 なます皿	口径14.6 高台径10.1 器高4.8	胎器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き外側丸いなぞらえ、内面の外縁に1条、見込みの2条線、内面の円縁部に1条線、見込みの2条線、内面の中央に1条線 底部は1条線 高台脇を削り出し 底部は高台脇を削り出し	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図2	五寸皿 輪花形 なます皿	口径13.0 高台径7.2 器高2.7	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面手描きの蛇文、内面の青海波文2条は、見込みの花鳥図文の周囲に蛇文の輪郭線 内縁部に1条、外縁部に1条、高台2条線、内面の円縁部1条線は中央部2コバト線 底部は1条線、高台脇を削り出し	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図3	五寸皿 輪花形 なます皿	口径16.0 高台径10.1 器高4.5	胎器(染付) 白色	透明釉 全面	外面手描きの蛇文、腰下位の1条、高台の2条線、内面に輪郭の蛇文線は1条コバト1条 見込みは2条線 内面の円縁部は1条コバト1条 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図4	五寸皿 輪花形 なます皿	口径14.0 高台径10.1 器高4.5	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面手描きの蛇文、内面中央の蛇文線は1条コバト1条 見込みは2条線 内面の円縁部は1条コバト1条 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図5	五寸皿 輪花形 なます皿	口径13.8 高台径8.6 器高4.0	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面手描きの蛇文と内面中央蛇文と波線、見込みの鳥花文の周囲に蛇文の輪郭線 内縁部は1条、外縁部は1条、高台2条線、内面は円縁部1条線は中央部2コバト 型付 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図6	五寸皿 輪花形 なます皿	口径16.0 高台径10.1 器高4.5	胎器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きの蛇文、腰下位の1条、高台の2条線、内面に輪郭の蛇文線は1条コバト1条 見込みは2条線 内面の円縁部は1コバト1条 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り	焼付釉刷ぎ	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図7	五寸皿 輪花形 なます皿	口径14.0 高台径10.1 器高4.5	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面手描きの蛇文、内面中央の蛇文線は1条コバト1条 見込みは2条線 内面の円縁部は1条コバト1条 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図8	五寸皿 輪花形 なます皿	口径13.8 高台径8.6 器高4.0	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面手描きの蛇文と内面中央蛇文と波線、見込みの鳥花文の周囲に蛇文の輪郭線 内縁部は1条、外縁部は1条、高台2条線、内面は円縁部1条線は中央部2コバト 型付 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り	型付から焼成まで 砂目釉薬	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系	19C前期
1号溝 第16図9	五寸皿 輪花形 並皿	口径16.0 高台径10.1 器高4.8	胎器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きの蛇文、腰下位の1条、高台の2条線、内面に輪郭の蛇文線は1条コバト1条 見込みは2条線 内面の円縁部は1コバト1条 型付で成形後、ろくろ成形の高台脇を削り 型付は平行	焼付釉刷ぎ	型付から焼成まで 砂目釉薬	肥前系 有田町青木兄弟窯金襴	19C前期 19C前半期
1号溝 第16図7	中皿	口径(22.8)	胎器 褐色～灰色 秋 黄 橙系	鉄釉(染付) 緑灰色を呈する釉薬 高台の一部釉	外面は1条線が丸く閉じて寄るもので縦弓状形になる 内面は1条線を取りて蛇文を下に 蛇文	焼付釉刷ぎ 砂目釉薬	見込みは蛇の目 蛇紋を取りて下に 蛇文 カセ文を下に取り 蛇文	小石原系	不明
1号溝 第16図8	中鉢	口径14.7 高台径4.4 器高8.5	胎器(色絵) 白色	透明釉 全面 黄人あり	手描き鳥獣風刻により、全体に草花文、底部下位1条、高台1条線、内面に1条線 1条線は底部下 内面は中央部で蛇紋を描き、蛇紋の周囲、蛇文の中央は上絵付け 蛇紋は手描き 鳥獣風刻により「鳥獣風文」	砂の目高台内外脇部の高脚部	鳥は可でも既存	肥前系	18C中～1850
1号溝 第16図9	中鉢 輪花形	口径14.0 高台径8.5 器高4.5	胎器(染付) 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	手描き上絵付 蛇紋は1条、内面縁部に1条、中央下位に1条、高台に1条線、内面は下位に1条線を1条下 内面は中央部で蛇紋を描き、蛇紋の周囲、蛇文の中央は上絵付け 蛇紋は手描き 内面縁部は1条線 DW 鳥は「鳥獣風刻」 蛇紋は蛇文 カセ文は下位に蛇紋	砂の目高台内外脇部の高脚部		肥前系	18C中期 19C前半期
1号溝 第16図10	中鉢 輪花形	口径(20.0) 高台径12.6 器高9.0	胎器(金付胴部) 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	見込みの人造物紋で中央に花 外は波紋を取りて下に 蛇文	焼付釉刷ぎ	焼付釉刷ぎ	肥前系	不明
1号溝 第16図11	中鉢	口径14.0 高台径8.5 器高5.1	胎器(染付) 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面全部の竹節文、年部1段の1条、高台の2条線、内面2段目内の蛇文は草文 1段目下は蛇コバト1条 円縁部の波紋蛇文 底部縁内コバト1条 蛇の目高台内脇部の高脚部	砂の目高台内外脇部の高脚部		肥前系	19C前期 19C前半期
1号溝 第16図12	小鉢 方形 手塩皿	口径9.2 器高3.4	胎器(染付) 灰白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面全部の山水文、高台の2条線、内面、見込みの山水文は手描き 高台脇 口縁部は口紋 底に蛇紋脇線 「方形高台内に角口縁のあるもの、赤絵り紋脇線の付け高台			肥前系	不明
1号溝 第16図13	小鉢 変形 皮付・割	反転不明	胎器(青磁) 灰白色	鉄色を呈する青磁釉 全面	外面内面は型打ち成形による巻重印紋の変形	不明	九州海岸要外版窯 乗田コレクション に類似する良品	肥前系	1740 ～ 1790
1号溝 SK16図14 図版5	小皿 不反形？ 平底皿	器高2.1	胎器 褐色～灰色	鉄釉 灰白色	見込みは連弧紋 伝統は紋 底部は笑	内面は赤切り成形による左文の痕刷 見込みは2条赤線内に笑文の輪刷	不明	瀬戸・美濃系	不明
1号溝 第17図1	中皿	口径(18.0) 高台径8.8 器高4.4	胎器 褐色～暗灰色～白色	鉄釉(染付) 緑灰色～白色	暗紋状色を呈する灰釉を伝 部の水	内面は赤灰釉のイッチン掛け 高台脇を出し	高台にアセミナ付着 見込みに蛇の目輪刷ぎ	高取系か	不明
1号溝 第17図2	中鉢	口径(16.4)	胎器(白) 白色	鉄釉 全面	外面は コバト1 手描き 蛇付けによる三つ巴文、緑紋は クリ 蛇付け	口縁部に 蛇紋が がなくこれ 色を 蛇文で 成紋 していない	口縁部に 蛇紋が がなくこれ 色を 蛇文で 成紋 していない	肥前系	19C末 ～ 20C前半
1号溝 第17図3	中鉢	口径(16.4)	胎器(白) 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	丸白色を呈する 透明釉 全面	外面は 界線は 手描き 、「梅」を 出 蛇紋 内 の コバト 蛇文 と 花文は 蛇紋 蛇付け 高台脇 出し	型付釉刷ぎ	肥前系	19C末 ～ 20C前半
1号溝 第17図4	中鉢	反転不明	胎器 褐色～黒色	鉄釉 にぶい灰色	鉄釉を 青磁 全面	鉄釉子による 花文	不明	2次調査 1号溝56 図14と同一窯跡	窯地不明
1号溝 第17図5	中鉢	口径(18.0)	胎器(染付) 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	外面は 手描き コバト1 蛇付けより 唐花文で、 口縁 1 1条 中位 2 条界線、内面は 口巻 唐花 花	不明		肥前系	不明
1号溝 第17図6	中鉢	口径(19.0) 高台径10.3 器高6.4	胎器(白) 白色	鉄釉(染付) 透明釉 全面	鉄釉刷りによる外面の蛇文と竹文は、内面の竹竹文・花文 高台の2条線は手描き 口巻唐花 口縁部に蛇紋脇線 コバト 蛇付 蛇の目 高台	蛇の目高台内外脇部の高脚部		肥前系	19C前半期 ～ 19C末期
1号溝 第17図7	中鉢	口径(27.2) 高台径(16.8) 器高12.8	胎器(染付) 黄～黒灰色	高地色の結晶釉 全面	――	窯詰・口巻部 蛇紋 、高台内 に焼き台の痕跡あり	上げ底なのは焼き内のため	小石原系	不明

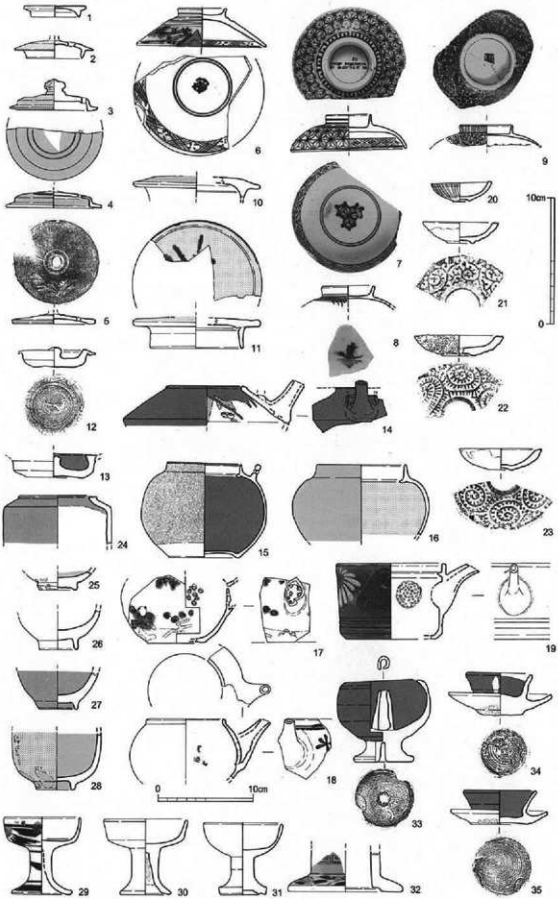
表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(5)



第21図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図10(3は1/3、他は1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の特徴	釉薬	質感・成形・装飾技法	窯詰技法	所見 特記事項	推定産地	編年案代
排図番号 形状 (）は復元値 / 図版番号 遺名名	形状								
1号須 17図8	土鈴蓋	口径(21.0)	陶質 土師質 黄白～黄橙色 軟質焼成 金雲母あり	発色の悪い低火度の遺釉鉛を内面のみ	—	口縁部触れず	外面に煤付着	在地系	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図9	行平鍋蓋	口径(15.2)	陶質 土師質 黄白～黄橙色 軟質焼成 金雲母あり	低火度の透明釉を内面のみ	外面中位に鉄錆を帯び、上位に飛びカンナ	口縁部触れず		在地系	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図10	行平鍋	口径(19.0)	陶質 灰白色	赤褐鉄釉 若干黒鉄釉 内面に飛散 鉄を帯び上部黒	外面上位に飛びカンナ	受け部触れず	把手の又根は欠損のため特別できない	産地不明	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図11	土鍋	口径(17.1)	陶質 土師質 黄白～黄橙色 軟質焼成 金雲母あり	暗褐鉄色を帯びる 鉄錆を内面上位中位 若干は黒鉄	外面に鉄錆の松絵	受け部触れず	底部と把手下側、口縁部に煤付着	在地系	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図12	土鍋	反転不能	陶質 土師質 黄白～黄橙色 軟質焼成 金雲母あり	黄灰色を呈するも内面上位中位に若干鉄錆	型押しで成形された把手を貼付け	受け部触れず	把手下面に煤付着	在地系	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図13	土鍋	反転不能	陶質 土師質 黄白～黄橙色 軟質焼成 金雲母あり	赤褐色を呈する釉 若干は黒鉄 内面上位中位に鉄色を呈する箇所	型押しで成形された把手を貼付け 上面にカサ状高あり	受け部触れず	把手下面に煤付着	在地系	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図14	杯受台	口径(8.0) 脚径(7.7)	胎質(白磁) 白色	乳白色を呈する透明釉を外面のみ	鞍上面に型押し成形による桜文の場面	不明		肥前系	18c初頃前～18c初頃
1号須 17図15	合子蓋	口径(5.0)	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	天井部に「肥前 鳥屋窯」の呉須染付	輪部触れず	「肥前 鳥屋窯」の字体が右回形年本年1号窯に近い	肥前系 有田町年本谷1号窯か	1778～19c中頃
1号須 17図16	合子	口径3.9 底径3.0 器高1.4	胎質 白色 ろくろ	古味のある透明釉 金泥	—	底部・受け部触れず	「肥前 鳥屋窯」合子の身だろう	肥前系	18c中頃～19c中頃
1号須 17図17	碗蓋	つまみ径2.8	土師質 赤色 軟質焼成 良入無あり	—	外面回転ナデ、内面ヨコナデ つまみ貼り付け後、丁寧なナデ	不明		在地系	不明
1号須 17図18	碗蓋	口径(26.0) 底径(21.2) 器高2.2	土師質 明灰色～黄灰色 金雲母等含入無あり	—	内外ヨコナデ	不明	17図20・21の底タイプの蓋か	在地系	不明
1号須 17図19	碗蓋	口径(26.6) 底径(21.2) 器高2.9	土師質 黄灰色 金雲母等含入無あり	—	内外ヨコナデ オサエ痕が残る	不明	17図20・21の底タイプの蓋か	在地系	不明
1号須 17図20	中皿	口径(20.4)	土師質 黄橙色 金雲母等含入無あり	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
1号須 17図21	中皿	口径(22.6)	土師質 灰黄橙色 金雲母等含入無あり	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
1号須 17図22	中皿	口径(22.6) 最大径(28.5)	陶質 にぶい黄灰白色 軟質 精良	鉄釉十結晶状化に伴う赤褐色の部分あり 下部無釉も多い	口縁部は鉢強ふき取り	不明	胴部に別個体の破片が被覆している	高取系か小石原系	不明
1号須 17図23	中皿	口径(18.1) 最大径(21.0)	陶質 にぶい黄白色 白色粒子多い	鉄釉を全面掛けたに不揃かの部分あり 下部無釉も多い	カキ目の上に重厚な鉄汁掛け	口縁部は鉢強ふき取り し、そのうちにアルミナ塗る		高取系	不明
1号須 17図24	小皿	口径(14.4)	陶質 赤褐色	鉄釉 全面	外面胴部にカキ目 内面ヨコナデ 口縁部玉縁状	不明		肥前系	不明
1号須 17図25	中皿	口径(20.0)	陶質 にぶい黄灰色	淀い鉄釉 全面	口縁部は丸く折り曲げて外反	不明		須佐唐津か	不明
1号須 17図26	鉢か	底径(22.0)	陶質 土師質 黄灰白色 雲母 金雲母あり	黄釉 全面	底部は回転ヘラケズリ	底部触れず		瀬戸・美濃系か	不明
1号須 18図1	片口鉢	口径(18.0)	陶質 明灰色	内外鉄錆かけ	外底以中位に台代整えを赤鉄状に拭き取り、そのうえに白化粧土の鋸毛目文 内面は白化粧土が薄く掛かっている	口縁部焼成・白化粧土拭き取り	口縁部が内横する のは法と中実以降の特徴	肥前系 瀬野和宏田西山窯に類例あり	18c中頃～19c中頃
1号須 18図2 18図16	片口鉢	口径(19.0)	陶質 黄灰～暗青灰色 やや軟質 精良	外面中位以下に鉄錆かけ 内面上位中位に鉄錆	薄鉄釉は、保護膜下から流れ、内外口縁部は上から流れるように掛ける 胴目上端ナデ痕 上 掛り目本位不明	不明		高取系	不明
1号須 18図3	片口鉢	口径(11.0)	陶質 にぶい明灰黄白色 軟質 精良	外面中位以下に鉄錆かけ 内面上位中位に鉄錆	外面中位以下に胴目に口縁部に掛ける ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目本位不明	—		高取系	不明
1号須 18図4 18図6	片口鉢	口径(19.0)	陶質 暗灰～暗青灰色 やや軟質 精良	鉛釉	外面ヨコナデ 内面は瀬戸系の上縁部から流し掛け	不明		高取系	不明
1号須 18図5 18図6	片口鉢	口径(20.0)	陶質 暗色 軟質 精	鉄釉の上に鉄成小具で全面 ない鉄釉掛け	外面はヨコナデ 底材状の間目施工 胴目上端ナデ痕 上 掛り目は本来位で体部中位から上 施すべく成にしる 外底は鉄錆ナデ	不明	釉薬が見えていないが、焦がり方から小石原系の可能性高い	小石原系か	不明
1号須 18図6	中鉢	口径(33.0)	陶質 暗青灰～暗赤褐色 やや軟質 精良	にぶい黄灰褐色を帯する鉄釉	外外面は上掛けはの自然釉が垂れる 内面は鉢強ふき取り	口縁部触れず	特徴的な縁だが肥前系か 鉄釉も灰色を帯びる傾向	肥前系か	不明
1号須 18図7	擂鉢	復元不能	陶質 暗灰色 硬質 やや軟質 精	暗赤褐色の鉄釉全面 光沢 ありあり	外面口縁部の肥厚が残っている ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目23本単位で挽く施文	不明		肥前系 18図14と同一個体か	18c第3四半期～18c末頃
1号須 18図8	擂鉢	口径(39.0)	陶質 灰褐色 やや軟質 精良	暗灰褐色の鉄釉全面 光沢なし	内外ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目21本単位	不明		肥前系	18c第3四半期～18c末頃
1号須 18図9	擂鉢	口径(37.6) 高台径(17.0) 器高15.1	陶質 暗褐黒褐色 硬質で緻密	暗灰褐色の鉄釉全面 光沢 ありあり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 施文 掛り目30本単位で挽く施文	重ね付から高台無釉 見込みに砂目跡		肥前系	18c末頃～19c初頃
1号須 18図10 小皿	擂鉢	口径(11.8)	陶質 にぶい黄灰色 軟質	暗赤褐色の鉄釉 全面 光沢 ありあり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目23本単位 掛り目幅やや広い	不明	粘土が特徴的 2号窯28図7と同一個体	須佐唐津か	18c末頃～19c初頃
1号須 18図11	擂鉢	口径(20.0)	陶質 暗褐灰色 硬質で緻密	暗褐色の鉄釉 光沢なし	ロクロ成形 外面ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 施文 掛り目18本単位で挽く施文	見込みに重ね焼き痕		肥前系	18c末頃～19c初頃
1号須 18図12	擂鉢	口径(22.2)	陶質 暗灰色 硬質で良 白色粒子あり	暗灰褐色の鉄釉全面 光沢 ありあり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目15本単位で挽く施文	不明	見込みに重ね焼きの痕跡など	肥前系	18c末頃～19c初頃
1号須 18図13	擂鉢	高台径(12.5)	陶質 暗褐赤色 緻密 白色粒子あり	暗褐赤色の鉄釉広く全面 光沢あり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目13本単位で挽く施文 外面にケズリによる段を持つ 高台内外底は施釉	高台にアルミナ塗布	高台にアルミナ塗布のことに気付く。そのことは非肥前的	肥前系	18c末頃～19c初頃
1号須 18図14	擂鉢	高台径(12.5)	陶質 暗赤褐色 硬質で良 白色粒子あり	暗赤褐色の鉄釉全面 光沢 ありあり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 胴目上端ナデ痕 上 掛り目15本単位で挽く施文 外底部ヘラケズリ 高台内外底は施釉	見込みに重ね焼きの跡目跡 金属付属跡 ガラス付着		肥前系 18図7と同一個体か	18c末頃～19c初頃

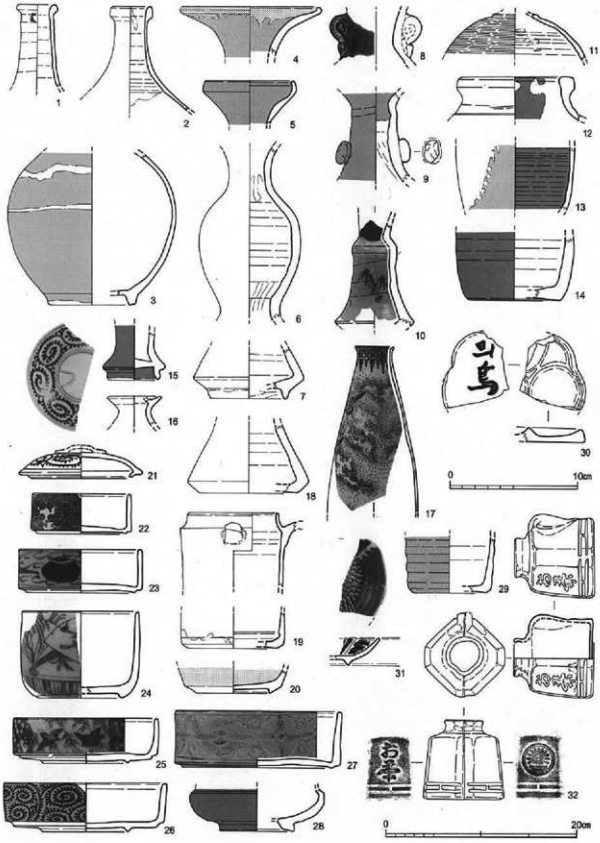
表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(6)



第22図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図11(14・15・17・18は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		推定年代
掘図番号	形状	(）は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	
図版番号	遺物名								
1号溝 19図1	中鉢 火鉢	復元不能	天目釉 素地 金胎&素地 ヨ：素地のみ&白土 色 金胎&素地	—	丁寧なヨコミガキで光沢あり 内面ヨコナデ	不明	口縁部の稜表が便用のためか削離している	在地系	不明
1号溝 19図2	中鉢 火鉢か徳利	復元不能	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	丁寧なヨコミガキで光沢あり 内面ヨコナデ 口縁部もミガキ	不明	口縁部の稜表が便減していないので廃棄ではない	在地系	不明
1号溝 19図3	中鉢 火鉢	復元不能	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	丁寧なヨコミガキで光沢あり 亀甲紋文のスタンプ施文	不明	サナ受け部の先端上面は使用のため若干劣化	在地系	不明
1号溝 19図4	中鉢 火鉢か徳利	復元不能	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	外面に粗大な指圧文のスタンプ施文 内面はヨコナデ 口縁部に突起を装着するための刻突あり	不明	サナ受け部の先端上面は使用のため若干劣化	在地系	不明
1号溝 19図5	仏炉(七輪)	復元不能	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	内外ヨコナデ 口縁部に突起あり 口縁部にサナ受け部あり 足ふみに指圧ヨコナデ 高台に指圧の跡あり ボスタイプだが、造作雑撮にない	不明	口縁部突起の内面は指付着	在地系	19c中葉
1号溝 19図6	鍋炉	口径(34.6)	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	外面に丁寧なヨコミガキで光沢あり 内面はヨコナデ、サナ受け部も付け後後くナデ	不明	サナ受け部の先端上面は使用のため無減している	在地系	不明
1号溝 19図7	中鉢 火鉢	口径(27.6)	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	外面のミガキが便減している 内面は指圧痕跡の状態変不明	不明	内面はにおい吸収を目的も、火鉢として使用したためか	在地系	不明
1号溝 19図8	中鉢 火鉢	高台径(27.2)	天目釉 素地 金胎 ヨ：金胎&白土&素地 ヨ：金胎&素地 金胎&素地	—	内外丁寧なヨコミガキで光沢あり	不明		在地系	不明
1号溝 19図9	仏炉	復元不能	天目釉 素地 金胎 ヨ：金胎&白土&素地 ヨ：金胎&素地 金胎&素地	—	外面は指押しによるタタキ状指の上下を丁寧なヨコナデ 口縁部は焼成歪みあり 内面は丁寧なヨコミガキで光沢あり サナ受け部は欠損	不明		在地系	不明
1号溝 19図10	仏炉	口径(23.0) 最大径(23.3)	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	外面は指押しによるタタキ状指の上下丁寧なヨコナデ 口縁部焼成歪みあり 内面は丁寧なヨコミガキで光沢あり 口縁部は使用のため若干減減	不明		在地系	不明
1号溝 19図11	中鉢 火鉢	復元不能	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	外面は指圧による稜状指痕 底の下隅と稜か 内面はヨコナデ?	不明		在地系	不明
1号溝 19図12	仏炉(七輪)	高台径(17.2)	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	外面に丁寧なヨコミガキで光沢あり 底下位に流線 内面ヨコナデ、口縁部も丁寧なヨコナデ 足ふみは指圧ナデ 高台に指圧の跡りが入るタイプだが、造作雑撮にない	不明		在地系	19c中葉
1号溝 19図13	中鉢 火鉢・火入れ	復元不能	天目釉 素地 金胎 金胎&素地 白土&素地 金胎&素地	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
1号溝 19図14	中鉢	口径(24.8)	陶器 軟質 鉄はにぶい褐黄灰色	鉄釉外面下部の他は白いが鉄釉入り 鉄の内面に滴下	外面無沈線の底し書け 内面ヨコナデ	不明	小石原系	小石原系	不明
1号溝 19図15	中鉢	口径(33.2)	陶器 やや硬い 暗茶褐色	白化粧土を外面から内面口縁部	不明	不明	産地不明	産地不明	不明
1号溝 19図16	中鉢	口径(26.0)	陶器 明黄灰色	外面から内面口縁部 にかけて一部の変 の部分の無に無	内面ヨコナデ	不明	19図17と同一個体 の可能性あり	産地不明	不明
1号溝 19図17	中鉢	高台径(13.2)	陶器 明黄灰色	外面から底下 にかけて一部の変 の部分の無に無	内面ヨコナデ、底部は下から穿孔し足ふみは丁寧なヨコナデ 高台部ヨ当し、鉄釉は底部の及ぶ	不明	19図16と同一個体 の可能性あり 取り	産地不明	不明
1号溝 19図18	大鉢	口径(35.4)	陶器 明橙白灰色	内外鉄釉	玉砂口縁	不明	19図19と同一胎土	産地不明	不明
1号溝 19図19	中鉢	高台径(26.6)	陶器 明橙白灰色	内外鉄釉	逆し字に折った口縁部の下に貼り付け肥厚	不明	19図18と同一胎土	産地不明	不明
1号溝 19図20 図版6	小鉢	口径(18.2)	土師器 質粒 黄灰色 赤褐色・白色粒子あり 軟質	外面から胴下位まで 白化粧	外面口化粧上をコハケで明瞭な状況 内面ヨコナデ	不明		産地不明	不明
1号溝 19図21	小鉢	口径(18.2)	土師器 内外・胎とも に質粒 赤褐色・白色粒子あり 軟質	外面から内面口縁部 にかけて一部の変	外面ヨコナデ 内面カキ目状 足ふみは未調整 外面は細いヨコミガキ	不明		産地不明	不明
1号溝 19図22 図版6	小鉢	口径(18.2)	陶器 褐灰色～暗黄灰色 軟質で比較 的密に含む 雲母	外面から内面口縁部にかけて一部の変	内面ヨコナデ 口縁部は下から穿孔し足ふみは丁寧なヨコナデ 高台部ヨ当し、鉄釉は底部の及ぶ	不明		小石原系	不明
1号溝 19図23 図版6	小鉢	口径(13.6)	陶器 褐灰色～暗 赤灰色 軟質で比 較的密に含む 雲母	外面から内面口縁部にかけて一部の変 化が見られるが内 面は鉄釉が掛かる	内面ヨコナデ	不明	小石原系	小石原系	不明
1号溝 19図24	大鉢	復元不能	土師器 質粒 黄灰色 赤褐色・白色粒子あり 軟質	外面口縁下に沈線	外面口縁下に沈線 ヨコナデ ヨコハケ ホルキ付痕	不明	外面面の調整がないので、口縁部は土と自由にしていた	在地系	不明
1号溝 19図25 図版5	小鉢 六角形 火鉢か徳利	復元不能	天目釉 素地 金胎 ヨ：金胎&白土&素地 ヨ：金胎&素地 金胎&素地	外面に鉄釉	外面胴部口縁部は金物を掛り込んで固ていている 胴中位は抗口色 内面は指痕は土と と刷毛しているが、ヨコナデが残る	不明	窯業分地系であるが、胎から産地推定と判断	柳川市蒲池焼	不明
1号溝 20図1	大鉢 平鉢型	復元不能	陶器 茶褐色	表面を全面釉下白化粧土を用意から内 面は鉄釉を施す	外面に鉄釉による絞文	不明		肥前系	19c中葉 20c前半
1号溝 20図2 図版6	大鉢 平鉢型	口径(62.8) 最大径(34.6)	陶器 黄茶褐色と暗灰色	表面を全面釉下白化粧土を用意から内 面は鉄釉を施す	外面に鉄釉による絞文	不明	胎の特徴的	みやま市二川焼	19c中葉 20c前半
1号溝 20図3 図版5	中鉢	口径(32.0) 高台径(14.8) 最高(33.3)	陶器 暗灰黄色と暗褐色	表面を全面釉下白化粧土を用意から内 面は鉄釉を施す	外面カキ目の上に細目突帯貼り付け 底台色の口化粧土を底し書け 高台に鉄釉の痕跡	不明	口縁・胴・底部の合成強化	久留米市東野窯焼	1855 ～ 1875
1号溝 20図4	大鉢 平鉢型	胴径(30.8) (32.8)	陶器 明黄灰色 白色粒子多い	表面を全面釉下白化粧土を用意から内 面は鉄釉を施す	外面胴部突帯貼り付け カキ目調整後、沈線で施文 鉄釉を底し書け 内面ヨコナデ	不明	沈線文は胴下・先端部の水準に従う	産地不明 在地系か	19c中葉 20c前半
1号溝 20図5 図版5	中鉢	底部径5.8 最大径29.8	陶器 にぶい黄褐色 軟質 粒子多い	胴・鉄釉は内面に、鉄釉は外面底下位	外面胴部沈線の底端を底し書け 胴下位の沈線は無施文 鉄釉は内面	不明	足ふみは他の日用雑器と取り下位から底部は無施文 鉄釉は内面に施す	小石原系	19c中葉 20c前半
1号溝 20図6	中鉢	底径(15.0)	陶器 明灰色 軟質 粒子多い	胴・鉄釉は内面に、鉄釉は外面底下位	外面灰白色の白化粧土を底し書け	不明	足ふみは他の日用雑器と取り だから 底部は 鉄釉は内面に施す 底部中央に鉄釉の跡	小石原系	不明
1号溝 20図7 図版6	中鉢	底径(14.8)	陶器 にぶい明黄灰色 軟質で微密	足ふみは他の日用雑器と取り下位から底部は無施文 鉄釉は内面に施す	足ふみ部分を他の日用雑器と取り下位から底部は無施文 鉄釉は底部は使用のため減している	外面胴	足ふみを他の日用雑器と取り下位から底部は無施文 鉄釉	小石原系	不明
1号溝 20図8 ハンズ～ボメ	小鉢	口径(37.4) 最大径(36.8)	陶器 暗茶褐色 鉄質で微密	表面を全面釉下白化粧土を用意から内 面は鉄釉を施す	外面胴中位に沈線 タタキ状ナデ調し 内面は格子目のタタキ出て真鍮脚ナデ調し	不明	口縁部は他と異なり取り 鉄釉は無	肥前系	18c後半
1号溝 20図9	大鉢	復元不能	土師器 質粒 白色粒子・赤褐色あり 軟質 黄灰白色系色	口縁部下位に沈線	口縁部下位に沈線 内外ヨコナデ	不明	内外胴調整が残している	在地系	不明

表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶器器観察表(7)



第23図　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図12(2・3・10～14・16・18・22・24・25・32は1/4、他は1/3)

35

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見 特記事項	産定産地	推定年代
掘調番号	形状	()は復元値	胎の特徴						
図版番号	通名名								
1号須 20図10	甲蓋	復元不能	土師質土器 内面ナデ・指頭痕あり 胎土 砂粒多め にぶい橙色系色	—	口縁部ヨコナデ 外面ヨコナデ 内面ヨコナデ・ヨコハケ	不明	内外器面の摩滅著しい	在地系	不明
1号須 20図11	大蓋	復元不能	土師質土器 胎土 砂粒多め 色調 にぶい橙褐色系色	—	見込みヨコナデ 外底細かい丁寧なハケ	不明	底部はレンズ底 見込みと外面は摩滅 口縁部は摩滅	在地系	不明
1号須 21図1	提鉢	口径40.6 底径19.9 器高15.4	陶器 赤茶褐色 緻密	黒色の比較的厚めの釉薬を全面に施釉 釉は 光沢	ロクロ成形 外面ヨコナデ 腰以上端ナデ 縦ヨ 腰から底元部まで強ヨコ 強ヨ 高台内側ベラケズリ 高台内内底は撫調	見込みに窯詰痕の重ね焼痕 窯材無釉 重ね焼痕あり	約1/2残存	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図2	提鉢	底径10.6	陶器 赤茶褐色 緻密 内面赤みが強い 胎土 砂粒多め 雲母	無釉	ロクロ成形 外面ヨコナデ 腰部分がさらいとめ切り不明 腰ヨ目と交差方向の腰ヨ目あり 外底糸切り	胎土目跡底部縁に3箇所 見込みに1箇所	胎土目跡底部縁に3箇所 重ね焼痕 窯材無釉 見込みに1箇所	肥前系	不明
1号須 21図3	大鉢	復元不能	陶器 暗灰赤色	内外赤褐色の厚い釉薬 光沢あり	外面口縁部は自然釉が垂れている	不明	自然釉は口縁部から底に垂れ下がったように見える	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図4 図版8	大鉢	復元不能	陶器 にぶい赤褐色 白色粒子 砂粒多め	内部は5本に分割された釉薬 内部は赤褐色 外部は黒褐色	外面底部	不明	胎土が等質的	みやま市二川焼	19c中葉～20c前葉
1号須 21図5	大鉢	復元不能	陶器 暗赤色 白色粒子多め 雲母	外部は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 口縁下部外面は黒褐色	口縁下部外面は薄く釉が掛 内部は赤褐色 高台部は無釉	見込みに胎土目跡あり 窯材は無釉	21図7と同じ技法	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図6	大鉢	高台径16.8	陶器 赤茶色 白色粒子多め	外部は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 高台部は無釉	外部は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 高台部は無釉	見込みにアルミナ上胎土目跡あり 窯材は無釉	見込みにアルミナ上胎土目跡あり 窯材は無釉	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図7	大鉢	口径30.8	陶器 暗赤色 白色粒子多め 硬質	外部は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 口縁下部外面は黒褐色	外部は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 口縁下部外面は黒褐色 高台部は無釉	不明	21図5と同じ技法と思た	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図8	大鉢	口径32.4	陶器 暗赤色	外面は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 口縁下部外面は黒褐色	外面は中位以外に薄く釉が掛 内部は赤褐色 口縁下部外面は黒褐色 高台部は無釉	不明	21図5・7と同じ窯詰技法が、胎土とかすり目が異なる	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図9	大鉢	口径36.0	陶器 暗赤褐色	内外赤褐色の上に厚い釉	内外赤褐色の上に厚い釉	不明	21図5・7と同じ窯詰技法が、胎土とかすり目が異なる	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図10 図版8	大鉢 植木鉢か	口径37.0	陶器 にぶい赤褐色	内外に赤褐色の厚い釉 光沢あり	内外に赤褐色の厚い釉 口縁部から外面は自化粧土塗り 内面口縁下部は赤褐色 高台部は無釉	不明	骨董的な鉢で肥前系ではない	産地不明	不明
1号須 21図11	小壺	口径23.4 最大径14.2	陶器 暗赤色 白色粒子多め	内外赤褐色の上に厚い釉	内外赤褐色の上に厚い釉 内面口縁部から外面胴中位まで自化粧土塗り 内面口縁下部は赤褐色 高台部は無釉	不明	内面口縁下部は赤褐色	肥前系	19c中葉～20c前葉
1号須 21図12	大鉢 大鉢か	口径19.3	陶器(染付) 白色	透明釉 全面	外面胴部に雲コバルト染付による山水文と迫弁文	不明	胴部文様は第2期第3期の間 胴部の形状の特徴	肥前系	20c前半
1号須 22図1	合子蓋	口径5.8 器高4.8	陶器 にぶい暗赤色	にぶい明白色 色の光沢 上質のみ	—	不明	胴部の形状の合子蓋がある	産地不明	不明
1号須 22図2	急須蓋	口径(4.8) 器高(2.0)	陶器(白磁) 緻密	孔口色の透明釉 釉下面のみ	上から下に摩孔した急気穴 つまみ欠損			肥前系	不明
1号須 22図3	急須蓋	口径6.8 つまみ径1.7	陶器 暗赤色 雲母 白色粒子	口縁部の部分 孔口明釉下面のみ 内面あり	上から下に摩孔した急気穴 整形し成形による つまみ結合付け	口縁部無釉ガ	2号須24図25と セットとなる	瀬戸・美濃系	20c前半
1号須 22図4	急須蓋	口径(7.3)	陶器 暗赤色 雲母 硬質	孔口色の部分 及び急須胴部全	孔口色の部分 及び急須胴部全	受け部と蓋なる部分だけ無釉ガ	口縁部に茶供付属	産地不明	不明
1号須 22図5	急須蓋	口径6.4	炻質 灰色	—	孔口色の部分 及び急須胴部全	受け部と蓋なる部分だけ無釉ガ	つまみの欠損	備前焼か	不明
1号須 22図6	中碗蓋	口径(10.1) 口径13.8 器高3.1	磁器(染付) 白色 やや軟質	透明釉 全面 貫入あり	平坦な外底部分により外面体部に線巻文 上作に2条線巻 高台文 つまみ部に2条線巻 内面底部に四方唐文帯 つまみ部内与に	受け部と蓋なる部分だけ無釉ガ	蓋高が低さから蓋縁部分丸帯の線部線巻の文様忠想	肥前系	1790～1810
1号須 22図7	中碗蓋	口径(10.1) 高台径3.8 器高3.1	磁器(染付) 白色 やや軟質	透明釉 全面 貫入あり	平坦な外底部分により外面体部に線巻文 上作に2条線巻 高台文 つまみ部に2条線巻 内面底部に四方唐文帯 つまみ部内与に	受け部と蓋なる部分だけ無釉ガ	蓋高が低さから蓋縁部分丸帯の線部線巻の文様忠想	肥前系	19c前葉
1号須 22図8	中碗蓋	つまみ径4.2	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面に雲コバルト染付による草文 体部の文様不明 天井部内面に鉄錆小粒文	つまみ部無釉	つまみ部無釉	肥前系	19c前葉
1号須 22図9	中碗蓋	つまみ径3.3	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面に雲コバルト染付による草文 体部の文様不明 天井部内面に鉄錆小粒文 内面円線巻に唐草文 つまみ部内与神円に「福」 コバルト顔料用 外側付	つまみ部無釉	つまみ部無釉	肥前系	20c第1四半期
1号須 22図10	上級蓋	口径(7.4) 器高(10.6)	陶器 暗灰色 雲母 白色粒子多め	釉薬表面を覆する 表面を上部のみ 光沢あり	釉薬表面を覆する 表面を上部のみ 光沢あり つまみ欠損	受け部不明	受け部不明	高取系	1790～1810
1号須 22図11	上級蓋	口径(7.2) 最大径(10.2)	陶器(染付) にぶい黄灰色 黒色粒子多め 手轆跡残る	口縁部の内に薄い釉 内面に赤黒色 高台部は無釉	外面に鉄絵を上端 モチーフは不明 内面天井部は四コマ文 受け部無釉	受け部に胎土目跡	内面天井部は四コマ文	肥前系	不明
1号須 22図12	土瓶蓋	口径(3.2)	陶器 にぶい黄灰色 黒色粒子多め	—	内面天井部は四コマ文 底部糸切り つまみ結り付け	底部に胎土目跡4箇所あり	底部に胎土目跡4箇所あり	産地不明	不明
1号須 22図13	上級蓋	口径(4.3)	磁器(染付) 灰茶褐色 白色粒子多め	黒色色の鉄釉 光沢あり	内面天井部は四コマ文 底部縁取ヘラケズリ つまみ結り付け			肥前系	不明
1号須 22図14	土瓶	口径7.8 最大径13.0 器高10.1	陶器 暗灰色 ガラス質	内面口縁部から外面胴下部まで 内面は無釉	注口孔は3つのみ	口縁部無釉ガ	注口孔は3つのみ	肥前系	不明
1号須 22図15 図版6	急須	口径7.8 最大径13.0 器高10.1	陶器 暗灰色 ガラス質	内部胴部の部分を 口とかん 口縁部下部 まで光沢釉 内面は無釉	口縁部は胴部を 口とかん 口縁部下部 体部は底部を 非常とする 注口部は天部 胴 まで光沢釉 内面は無釉	受け部無釉ガ	内面は無釉	肥前系	不明
1号須 22図16	急須	口径7.8 最大径13.0 器高10.1	陶器 暗赤色 ガラス質	胴部下部から胴部 中位まで 内面は無釉	注口部は天部	受け部無釉ガ	内面は無釉	肥前系	不明
1号須 22図17	急須	底径6.0	磁器(染付) 白色 ガラス質	孔口色の透明釉 釉下面まで	胴部下部から胴部 中位まで 内面は無釉	不明	胴部下部から胴部 中位まで 内面は無釉	瀬戸・美濃系	不明
1号須 22図18	急須	口縁部(8.4)	磁器(染付) 白色 ガラス質	孔口色の透明釉 釉 内面中位 まで	胴部下部から胴部 中位まで 内面は無釉	不明	胴部下部から胴部 中位まで 内面は無釉	瀬戸・美濃系	不明

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(8)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・底部・装飾技法	窯詰技法	所見		
掘図番号 阿図番号	形状 連結名 (…)は復元値		胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 22図19 図版8	鳥頭	L1.8破片4.1	磁器(染付) 灰白色	茶褐色の鉄釉が内外に部分的に付着	外周は自作粗ナデと釉掛による花弁、絵刷による草葉の上絵付け　洋口は貼り付け　削り出しによる上げ底	受け部と底部無調整	内面に暗褐色の変色あり	瀬戸系	不明
1号溝 22図20 図版6	紅皿 紅皿	口径4.8 底径1.4 器高1.5	磁器(白磁) 白色	透明釉を内面から外面に廻り底部まで	型押しによる梅花文の施釉	—		肥前系	1840 / 1860
1号溝 22図21	紅皿 紅皿	口径(6.0) 底径2.2 器高1.6	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉を中央部から外側に廻り底まで	型押しによる梅花草文の施釉	—		肥前系	19c中葉
1号溝 22図22	紅皿 紅皿	口径(7.0) 底径(2.6) 器高1.6	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉を中央部から外側に廻り底まで	型押しによる梅花草文の施釉	—	梅鉢文が捺れて口縁に比べて容量が減じるものや変形部位	肥前系	19c中葉
1号溝 22図23	紅皿 紅皿	口径(6.5) 底径(2.0) 器高1.6	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉を中央部から外側に廻り底まで	型押しによる梅花草文の施釉	—		肥前系	1840 / 1860
1号溝 22図24	小皿 角型形 差入れ	口径(6.0) 高さ(3.4)	陶器 暗灰色　内色粒子あり	内面「鉄釉」と外部「鉄釉」の鉄釉の鉄釉に混融	—	口唇部区熱のみ試き取り	2号溝24図19と同一個体	肥前系	不明
1号溝 22図25	小皿か小鉢	高さ(6)3.0	陶器 青灰色　乗渡特異	外部体部下位から内面は鉄釉	外底回転ヘラケズリ	高台に熱十日新	1660～1780年代の肥前系陶器の可能性もある	不明	不明
1号溝 22図26	小型か小鉢	高さ(2.4)	陶器 灰白色　黒色粒子あり	内外青緑灰色の灰釉　全面	高台端面ナデ	高台端面ナデ		東海不明	不明
1号溝 22図27	小皿か小鉢	高さ(1.2)	磁器(青磁) 灰白色	淡緑色の青磁釉　全面	—			肥前系	不明
1号溝 22図28	小皿か小鉢	高さ(2.4)	陶器 にぶい黄灰色　岩色粒子あり　硬質	内外暗褐色の鉄釉　全面	外周黒灰熱の流し掛け　高台削り出し　体部下位は削り込み	高台釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図29	仏飯器	口径(8.0) 高さ(5.4)(7) 器高6.1	磁器(色絵) 白色	透明釉　杯内から外面	外周花弁文と唐草の赤、花芯の黄と緑の上絵付け　脚内部は鉄釉ののりも無　高台面も	胎付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図30	仏飯器	口径(5.7) 高さ(4.0) 器高5.0	磁器(染付) ガラス質　内色粒子あり	透明釉　杯内から外面	全面コバルト染付　脚内部は絵りのめも無部を鉄釉ナデ	受け部剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c中葉 20c前半
1号溝 22図31	仏飯器	L径(6.0) 高さ(5.4) 器高5.9	磁器(白磁) 白色　黒色粒子あり	透明釉　杯内から外面	削り出しによる上げ底	受け部剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図32	容器 壺か	口径(6.0) 高さ(5.4) 器高5.6	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外周コバルト手描き染付による雷文・花文　削り出しによる上げ底	受け部剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図33 図版6	香炉 ひずんだ こち形	L径5.5 高さ(4.5 器高6.5	陶器 暗赤褐色　白色粒子あり	内外暗褐色の鉄釉　保護の為	足高に絞り成形を施工に沈形に高さを決定　脚部　内面中央に釘跡足用の穿孔	香炉受付の跡土は焼き付け	口は正形	肥前系	不明
1号溝 22図34 図版6	灯明受皿	口径5.0 底径3.3 器高3.3	陶器 暗赤褐色　やや軟質	鉄釉の黒いにぶい褐色の鉄釉が薄く上部のみ部分	底部糸切り	底部に胎土目跡あり　口縁部にアルミナ付着		肥前系	不明
1号溝 22図35 図版6	灯明受皿	口径5.5 底径4.4 器高2.7	陶器 暗赤褐色　やや軟質	暗灰褐色の鉄釉　上面のみ	風呂糸切り	底部に胎土目跡あり　底部は窯面に荒れあり		肥前系	不明
1号溝 22図1 図版6	中皿	L径(3.2	陶器 暗灰色	胎土の表面が後まもなく表に現れている　全面	口縁部に墨書が見られるが文字を判別できない	不明	口縁部の墨書は使用者の内容物を伝えるものと推定される	肥前系	1780 / 1860
1号溝 23図2	中皿	口径4.5	磁器(染付) 白色　黒色粒子あり	紺かかった淡青緑色　内面周部から外面	小型	不明	内部から内容物は無検出　粗付アルミナ付着	肥前系	19c末 / 20c前葉
1号溝 23図3	中皿	底径(9.2) 最大径(17.7)	陶器 暗赤褐色　やや軟質	灰褐色の鉄釉外面のみ	外周は白化粧土流し掛け　高台は削り出し	底付から内部は無調整　粗付アルミナ付着		肥前系	1780 / 1860
1号溝 23図4	仏花瓶 鶴亀口形	口径(10.3)	陶器 暗灰色　やや軟質	鉄釉　全面	内外黒灰熱流し掛け　削り出しによる上げ底	受け部剥ぎ		瀬戸不明	不明
1号溝 23図5	仏花瓶 鶴亀口縁	口径(7.2) 最大径(7.4)	陶器(石質) 灰白色　黒色粒子あり	暗灰褐色の透明釉　全面 光沢あり	胎土を黄灰土とする	不明	底部に胎土目跡あり　底面は窯面に荒れあり	肥前系か	不明
1号溝 23図6	仏花瓶	最大径6.1	陶器 にぶい褐灰色	人目線　全体に淡い褐灰色	風呂糸切り	底部に胎土目跡あり　底面は窯面に荒れあり		瀬戸不明	不明
1号溝 23図7	仏花瓶	最大径6.6	陶器 暗灰色　茶灰一茶褐色	暗茶褐色の鉄釉　外面のみ	内面内周部	受け部剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 23図8	仏花瓶	最大径7.2	陶器 灰色　やや軟質	鉄釉　全面	脚手形の耳部貼り付け	不明		肥前系か	不明
1号溝 23図9	仏花瓶 脚手孔耳形	最大径5.8	陶器 茶褐色　白色粒子あり	赤褐色の鉄釉上面のみ	丸耳形の耳部貼り付け　内面絞りの上をヨコナデ	不明		肥前系	不明
1号溝 23図10	仏花瓶 変形	最大径8.3	陶器 赤茶褐色　白色粒子あり	黒灰色の灰釉内面口縁部から内面	外面口縁部は赤褐色の鉄釉上絞り　体部に鉄絞りの跡文　内面ヨコナデ後未調整	不明		肥前系	不明
1号溝 23図11	中皿	胴部径4.6	陶器 灰色　白色粒子あり　軟質	暗茶褐色の鉄釉　外面のみ	外面カキ目　内周ヨコナデ又は未調整	不明		肥前系	不明
1号溝 23図12	中皿	L径(8.4)	陶器 暗灰色	内面口縁部に部分的に鉄釉がかる	外面渦巻に沈線			肥前系	不明
1号溝 23図13	中皿	最大径(12.5)	陶器 暗灰色　胎色やや軟質	灰褐色の鉄釉が胎土、鉄釉の内部に部分的	外周は白化粧土による施文　高台は削り出し	胎下位から高台は絞れ		小石原系	不明
1号溝 23図14 図版6	中皿	底径(9.3)	陶器 暗赤褐色　硬質　白色粒子あり	青茶褐色の鉄釉が内面から底部上で覆える	内外ヨコナデ　見込み回転ナデ　外底部無ヘラケズリ	不明	器壁が厚くつくりが粗い　鉄釉の色合いや底面無釉が特徴的	産地不明 鉄焼地方か	不明
1号溝 23図15	神酒徳利	高台径(3.9)	磁器(染付) 灰色	環頭釉　外面のみ	高台は面り出し	受け部剥ぎ	有田町現の谷窯に廃棄あり	肥前系	1780 / 1860

表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(9)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	焼成技法	所見			
検出番号	形状	(）は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代	
図版番号	遺物名									
1号溝 23B16	陸軍例	胴受け部径 (5.5)	陶器 精緻色	暗灰褐色の施釉 内外に厚く掛かる	不明	不明		肥前系	不明	
1号溝 23B17	藍利 鋼密利	口径(3.2) 最大径(7.4)	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 内面口縁部から外面	外面型紙刷りコバルト染付による梅図文か 内面ヨコナデリ	不明		瀬戸・美濃系	20c 第1四半期	
1号溝 23B18	陸軍不明	底径(10.4)	陶器 灰白～淡灰黄色 鉄釉 やや緻密	茶褐釉 底部以外全面	刷り出しによる上げ底	重付焼成か	底と思われるが高台を持たない	肥前系	不明	
1号溝 23B19	中水注	口径(9.2) 底径(4.2)	陶器 灰白～白色 陶質	灰白色の長石釉 内面口縁部から外面体部1/2	貫入を密所とする 把手欠損 底部回転ヘラケズリ	口縁部焼ぶ 胴下位から底部重焼		瀬戸・美濃系	不明	
1号溝 23B20	陸軍不明	底径(5.8)	陶器 灰白色	透明釉 底部以外全面	刷り出しによる蛇目底	不明		肥前系	不明	
1号溝 23B21	段皿類	口径(7.8) 最大径(9.5)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面手描き外型染付による蝶唐草文・1条界線 天井部2条界線 板状つまみ貼り付け	重付焼成か		肥前系	19c中葉 19c末	
1号溝 23B22	段皿	口径(10.4) 高台径(9.4)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面型紙刷りコバルト染付による唐草文・菊花文	口縁部・高台外面無釉ぎ		肥前系	19c中葉 19c後葉	
1号溝 23B23	段皿	口径(9.6) 高台径(5.5)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	外面手描きコバルト染付による火炎宝珠文	口縁部・高台外面無釉ぎ		肥前系	19c中葉 20c前半	
1号溝 23B24	段皿	口径(12.1) 高台径(8.9)	磁器(染付) 白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	外面網版転写コバルト染付による唐子文・波外線 型打出しによる菊花皿	口縁部・高台外面無釉ぎ		肥前系	19c中葉 20c前半	
1号溝 23B25	段皿	口径(15.0) 高台径(9.1)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面網版転写染付クロムによる竹笹文とコバルトによる梅文鉄絵らし・蔓文	口縁部・高台外面無釉ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1四半期	
1号溝 23B26	段皿	口径5.5 高台径(6.9) 容量2.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き外版染付による網裏草文・1条界線	口縁部・高台外面無釉ぎ		肥前系	19c中葉 19c後葉	
1号溝 23B27	段皿	口径(13.0) 高台径(11.8) 容量4.5	磁器(染付) 白色 粒子あり	白色濃くやや光沢 釉色を変える溝 明釉 全面	手描き コバルト染付による牡丹花文と口縁部1条・体部下位2条界線	口縁部・高台外面無釉ぎ	透明釉の表面をナデている	瀬戸・美濃系か	19c中葉 19c後葉	
1号溝 23B28	香炉1	高台径(6.6)	陶器 赤褐色	やや青色の淡い黒褐色の鉄釉 外面	見込みヨコナデリ 高台削り出し	表面荒けから高 口内端面ぎ		肥前系	不明	
1号溝 23B29	陸軍不明	底径(5.8)	磁器(青磁) 白色	透明釉 内面	型成による凹凸を意匠とする 外底回転ヘラケズリ	底部無調ぎ		肥前系	不明	
1号溝 23B30	小瓶 金彩 平底皿	復元不能	磁器(染付) 白色 粒子あり	透明釉 全面	赤絵付成形 ふくら雀を印刷で描き、形の内凸部の淵い部分に長崎を描種するコバルト染付	重付焼成か		肥前・美濃系か	19c中葉 19c後葉	
1号溝 23B31	船の具足 花形	復元不能	磁器(白磁) 白色	透明釉 上面から開閉	型打ち成形で、花弁部の底部を除刷 底部糸切り	底部無調ぎ	底青者の墓者あり 「青角」か 他にもあるが判読できない	肥前系か	不明	
1号溝 23B32 図版6	汽車茶瓶 (汽車土瓶)	口径5.5 胴長横7.3 容量8.3	陶器 上部青 黄白色 金雲母入る	暗茶褐色の薄い釉薬 外面体部下位以外	型合わせによる成形で、外面は「お天」は陽刻 「土」手は陰刻 把手部は手孔なし 底部糸切り	口縁部無ぎ 底部に焼土目の痕跡の残る低土台付き	ほぼ完形	産地不明	不明	

表4　2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(10)

た。『吉塚本町遺跡』の報告によれば、型物つくりの駅茶瓶は佐賀県三養基郡北茂安町の白石焼で焼かれていたらしいが、これに当たるかは不明。

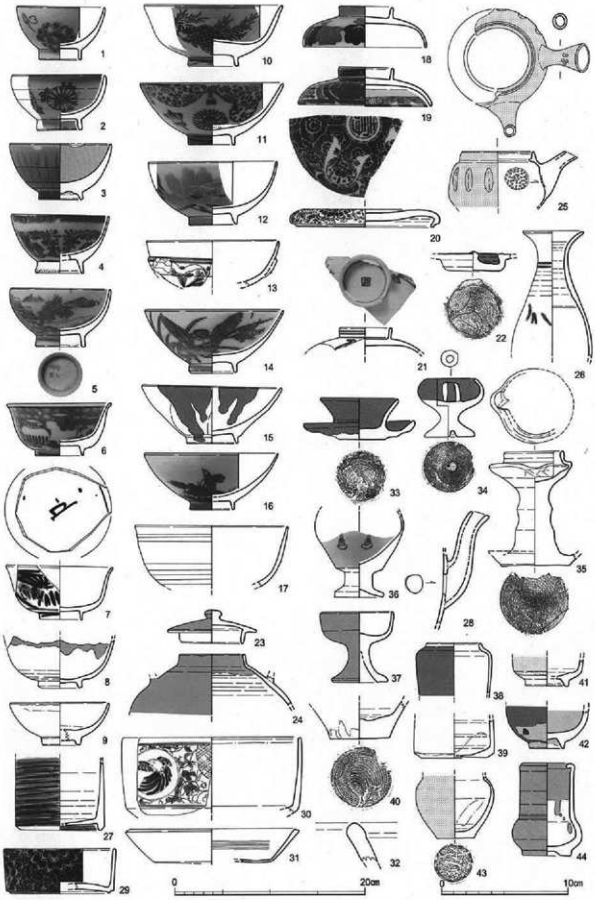
34図23・5～8・10・11の瓦当文様は久留米城下町遺跡でも見られる文様であり、『久留米城外郭　佐々木家敷跡』で分類されている。福岡県内では、筑後地域に流行した文様らしく、福岡城下町や小倉城下町には見られない。

久留米城下町では中心文様が三ッ葉文のG類が多いようだが、本遺跡では菊文を中心文様とするG類が多い。同じ筑後地域でも久留米城下と柳川城下で、使用される文様が異なる可能性がある。

39図9・10は七輪のサナのような形態だが、焼け方の弱い部分があるので、サナのように炭を置いたものではないだろう。むしろ、小型窯の窯道具の一種を想定したい。

43図3は用途不明の木簡で、下端に穿孔があり釘で打ちつけたものかもしれない。表裏の「大」以外は墨痕が薄く判読できない。表面1文字目は「氵」（さんずい）の文字か。2文字目は「大」を重ね書きする。4文字目は「え」の可能性もある。裏面中程に「大」とあり、表裏の「大」は2次的な利用にともなったものだろうか。

釈文　・□□（塗り潰す）「大」こは　ふ□（ケズ）　○
　　・　　大　　○



第24図　2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1（9・22～28・31・38・39・41・43・44は1/4、他は1/3）

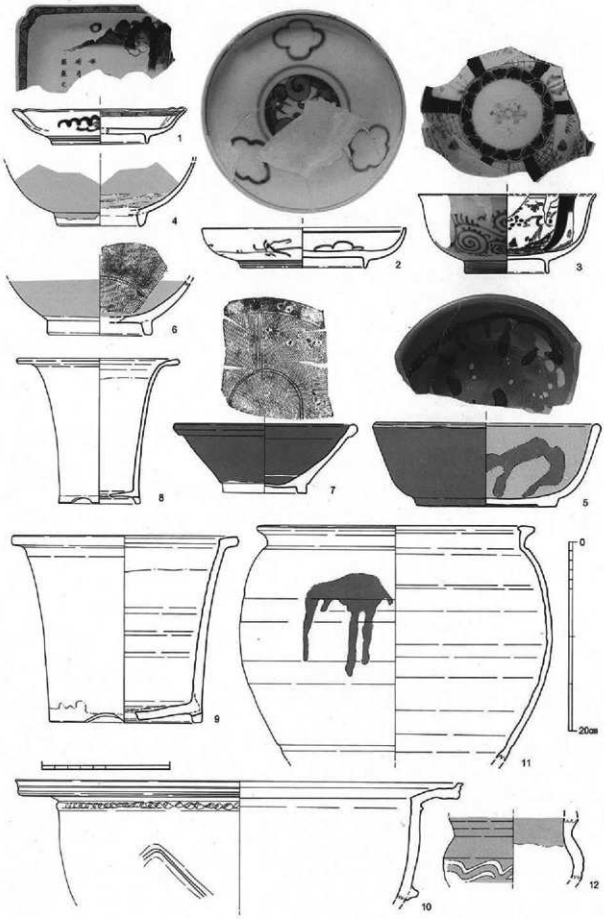
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	軸薬	装飾・成形・調整技法	窯詰技法	所見		
掲図番号	形状	( )は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
2号後 24列1	小杯 大型湯呑み	口径(7.0) 高台径(3.6) 器高4.2	胎質(色)土 白色	透明釉 全面	外部は鉄絵状で縦罫とコバルトの2色刷りによる絵花文 高台側白色	重ね焼は薄い泡明釉がみえることから抜き取りか	10・11は同一個体	肥前系か	19c末 19c前半期
2号後 24列2	小杯 大型湯呑み	口径(7.4) 高台径(3.6) 器高4.3	胎質(色)陶 ガラス質 白色	透明釉 全面	口縁部をロ縁長にコバルト施釉 外面は鉄絵状で縦罫とコ縦罫の鉄絵及び文上絵付け	重ね焼新手		肥前系 大谷窯跡等発掘調査XIII次に類似チップあり	20c上 19c末頃
2号後 24図3 図版6	小杯 大型湯呑み	口径(7.4) 高台径(3.5) 器高4.4	胎質(青磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	クロム青磁釉 高台内以外	外面焼ブランク状の印刷 縁巻き高台	重ね焼新手	L層部の海鼠釉の灯ちてさがから抜取とし肥前とした	瀬戸・美濃系 19c初頃 20c前半期
2号後 24図4 図版6	小杯 大型湯呑み	口径(7.8) 高台径(3.8) 器高4.4	胎質(陶代) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は梅花風型コバルト絵付による絵文か 内面は文様なし 高台内は欠損しているが鉄例から1次焼成内「四」	重ね焼付代痕	1号後12図11と同一個体	肥前・美濃系	19c末 20c前半期
2号後 24図5 図版6	小杯 大型湯呑み	口径(7.8) 高台径(3.9) 器高4.5	胎質(陶代) ガラス質 白色	透明釉 全面	鉄彩上絵の縦罫と色刷りによる宝文と絵の口縁部文 内面は鉄絵状で「絵」状の文様 高台内部は無文で「絵」状の文様	重ね焼付代痕	1号後12図11と同一個体	肥前・美濃系	19c末 20c前半期
2号後 24図6 図版6	小杯 大型湯呑み	口径(8.2) 高台径(3.9) 器高4.3	胎質(陶代) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面鉄絵状で縦罫とコバルト絵付による宝文 内面は鉄絵状で縦罫とコバルト絵付 高台内部は無文	重ね焼は薄い泡明釉がみえることから抜き取りか	福岡県豊前諸窯2集に類似	福岡県・美濃系	20c前半 19c前半
2号後 24図7 図版6	小杯 湯呑み 大型湯呑み	口径(8.2) 高台径(3.3) 器高4.2	胎質(陶代) ガラス質 白色	透明釉 全面	外部は鉄絵状で縦罫とコバルト絵付による宝 内面は鉄絵状で縦罫とコバルト絵付 高台内部は無文	重ね焼は薄い泡明釉がみえることから抜き取りか		肥前・美濃系	19c前半期 20c前半期
2号後 24図8 図版6	小杯 湯呑み	口径(8.3) 高台径(3.3) 器高4.3	胎質(陶代) ガラス質 白色	透明釉 全面	内外ロ縁部鉄絵を上絵付	重ね焼付代痕		肥前・美濃系	19c前半期
2号後 24図9	小杯	口径(10.2) 高台径(4.0) 器高5.1	陶質 軟質の灰白色	底部内を呈する低火度の灰釉 高台内以外全面	高台部下面	重ね焼付代痕 ミニ陶器 見込みは絵の目鼻描写		産地不明 窯が、美濃系の焼物に近いが、肥前系の要素	不明
2号後 24図10	小鉢 湯呑形	口径(10.8) 高台径(4.1) 器高4.8	胎質(陶代) ガラス質 白色	透明釉 全面	外部は鉄絵状で縦罫とコバルト絵付 内部は鉄絵状で縦罫とコバルト絵付	重ね焼付代痕 見込みは絵の目鼻描写		肥前系	19c前半
2号後 24図11	中鉢	口径(11.2) 高台径(3.7) 器高5.9	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外部は型紙刷りによる梅花文などと平塩の単線 コバルト絵付	重ね焼新手 蛇目跡あり 見込みは絵の目鼻描写	瀬戸田山窯に在文・梅花文に同じモチーフがある	肥前系 瀬戸田窯瀬戸田山窯	19c前半 20c前半期
2号後 24図12	中鉢	口径(10.2) 高台径(3.8) 器高5.3	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外部は2コバ印刷の牡丹文で、在は鳴鶴と芝円子、葉脈はクロム、茎と茎はコバルト	重ね焼新手 外部に重ね焼した型紙刷りコバルト絵付中縁の縦罫が絵柄	24図11と同様で、絵柄する鉄釉も同様	肥前系	20c前半期 19c前半期
2号後 24図13	中鉢	口径(10.4)	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外部は2コバ印刷の牡丹文で、在は鳴鶴と芝円子、葉脈はクロム、茎と茎はコバルト	重ね焼新手 外部に重ね焼した型紙刷りコバルト絵付中縁の縦罫が絵柄	24図11と同様で、絵柄する鉄釉も同様	肥前系	19c前半期 20c前半期
2号後 24図14 図版6 平戸	中鉢	口径(10.9) 高台径(3.8) 器高5.0	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外部は2コバ印刷コバルト絵付による梅と蝶文	重ね焼新手		肥前系	20c前1四半期
2号後 24図15	中鉢 人角面取り 平戸	口径(10.9) 高台径(4.0) 器高5.4	胎質(内磁) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	内外鉄絵の蛮文 掛け	重ね焼付代痕		肥前・美濃系	20c前1四半期
2号後 24図16 図版6 平戸	中鉢	口径(10.9) 高台径(3.8) 器高5.0	胎質(陶代) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	外面鉄絵風型コバルト絵付による山水型花文	重ね焼付代痕 ガラス質は抜取		肥前・美濃系	20c前1四半期
2号後 24図17 平戸	中鉢	口径(12.0)	陶質 上質い灰黒色 焼良	焼物 全面 釉はいい鼠黒色	外面カキ目による濃淡を表現としたものか	不明		小石原系	不明
2号後 24図18	小鉢盃	口径9.8 つまみ径4.3 高台3.3	胎質(陶代) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	外面コバ印刷コバルト絵付による雨瓜蛮文	つまみ部巻付痕 ガラス質	完形	肥前系	4期
2号後 24図19	中鉢盃	口径(10.6) つまみ径(4.0) 高台3.3	胎質(陶代) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	外部手描コバルト絵付による松文・蛸唐草文 高台は平坦さによる縦線文 内面口縁部に巻たた蛮文	つまみ部巻付痕 ガラス質		肥前系	不明
2号後 24図20	深皿盃	口径(10.8) 最大径(11.8) 器高4	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りコバルト絵付による花鳥文に蛇文 天井部に「斗」字文	受け部輪跡		肥前系	不明
2号後 24図21	中鉢盃	つまみ径(4.2)	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外周高台の間隔は2コバ印刷 稚拙な型紙刷 在は鳥、位文の行は赤の上絵付け 胴部はコバルト手描き蛮文、天井部に赤で「絵」字の上絵付	重ね焼付代痕 ガラス質		肥前系	19c前半期 20c前2期
2号後 24図22	上級盃	底径5.4 つまみ径1.8 器高2.1	陶質 軟質灰色	受け部分と外面 上質の み	底部高台	底部高台目跡あり		肥前系	19c中期 20c前期
2号後 24図23	土瓶盃 有上級	口径(6.5) つまみ径1 器高3.9	陶質 軟質灰色	鐵釉系 外面から内面口縁部	受け部分	鐵下は鉄釉ガ	24図24とセットをなす	肥前系	19c中期 20c前期
2号後 24図24	土瓶	口径(7.0)	陶質 軟質灰色	鐵釉系 外面から内面口縁部	内面にヘラケズリ痕	口縁部輪跡ガ	24図23とセットをなす	肥前系	19c中期 20c前期
2号後 24図25	急須	口径6.8 つまみ径1.7	陶質 ガラス質 白色	底台色の系は薄 釉を内面口縁部 高台内底 見えあり	注口部の形は薄 注口部の文様が見内側の四代縁文を上絵付け 把手は中央で、縦花形の造かし	受け部輪跡ガ 内面輪跡	1号後22図3とセットをなす	瀬戸・美濃系	20c前半
2号後 24図26	中鉢	口径6.6 最大径8.5	焼質 灰白色 黒色粒子あり	鐵釉 全面	外底手描き線付による2条罫線・蛮文 内面ヘラケズリ	不明		肥前系	不明
2号後 24図27	中鉢	高台径9.3 最大径9.2	胎質 灰白色 黒色粒子あり	鐵釉 外面	外底刷毛目状施釉 内面ヘラケズリ	不明		肥前系	不明
2号後 24図28	中木片	復元不能	胎質(白磁) ガラス質 灰白色	透明釉 注口内以外全面	帯孔1つのみ	不明		瀬戸・美濃系	不明
2号後 24図29	段重	口径(8.8) 高台径(7.6) 器高3.3	胎質(陶代) 灰白色	透明釉 全面	外面型紙刷りコバルト絵付による亀花文	口縁部・高台外重輪跡ガ		肥前系	19c末 20c前半期
2号後 24図30 図版6	段重小蓋等	口径(14.0)	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外面は平描きコバルト絵付による蛸唐草・蛸・蛸・蛸で蛸唐草文・蛸手文・鳥文文を上絵付け	口縁部輪跡ガ		肥前系	不明
2号後 24図31 図版6	中皿小盃	口径(18.2) 高台径(12.4) 器高3.6	上質陶 にぶい黄褐色 金属呼吸ない	外面	外面は型紙上蛮形桜水模様 内面ヨコハケ 見込みは目鼻のパケ	重ね焼成不良で沃焼	外面水模様であり 鉄釉し成型ないので大量生産か	在地系	不明
2号後 24図32 図版6	火鉢か	復元不能	土質 黄白色 精良で金属なし	——	内外ヨコナデ	不明	胎土から湯焼統的可能性が高い	柳川市湯焼統	不明
2号後 24図33 図版6	灯明受皿	口径6.1 高台3.7 器高2.1	陶質 灰白色 やや粗良	鐵釉の赤にかい褐色系の釉薬が高台部の縁から	底部糸切り	底部に目跡あり 糸切下駄痕跡あり 内面は無釉		肥前系	不明
2号後 24図34 図版6	香炉 白竹たんこ 白竹	口径3.1 高台径3.9 器高4.6	陶質 灰白色 やや粗良	鐵釉 全面	内部鉄絵の表現 内部から外面線罫 中央まで	見込みに軸土等を大量付着に大の、中位から鉄釉に切ったものを芯立てとして貼り付ける 高台内部は無文 高台部内に釉流部の痕	底面離盛のため 胎土上部の部	ほぼ完形 小石原系	不明
2号後 24図35	灯明受皿 白皿灯	口径4.7 底径2.5 器高0.9	胎質 粗質 やや粗良	鐵釉 全面	型紙刷りの蛸唐草 蛸が底部以外	底部糸切り	表裏に胎土目跡あり	肥前系	不明
2号後 24図36	脚付き杯	最大径(7.8) 高台径(3.9)	胎質(陶代) 白色	透明釉 全面	外面は金彩上絵付による蛸文 高台部下面に型付け跡のに削っている	重ね焼付代痕	高台部都は無釉	肥前系か	不明

表5　2次調査2号溝状遺構出土遺物観察表(1)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
2号溝 24図37	仏飯器	口径(5.8) 高台径(4.4) 器高5.6	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　杯内から外面	全面コバルト染付　脚内部は絞りののち脚部を回転ナデ	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c中葉 / 20c前葉
2号溝 24図38	小壺 肩衝形 茶入れ	口径(5.8) 最大径(8.0)	陶器 暗灰色　堅緻	外面口縁下から鉄天目釉	—	口唇部釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図39	小壺 茶入れ	口径(8.3) 最大径(8.5)	陶器 暗灰色　白色粒子あり	暗灰緑色の灰釉を内外体部下位まで掛ける	底部回転ヘラケズリ	外面体部下位から底部は釉剥ぎ	1号溝22図24と同一個体	肥前系	不明
2号溝 24図40 図版8	小壺 茶入れ	高台径4.7	陶器 にぶい暗黄灰色 やや軟質	外面体部下位まで暗褐色の鉄釉、内面は褐色の薄い鉄釉	底部糸切り	高台胎土目跡		産地不明 釉調が肥前系に近い	不明
2号溝 24図41	小壺 茶入れ	高台径4.7	陶器 にぶい暗黄灰色 やや軟質	外面体部下位まで鉄釉の上に白化粧土	高台削り出し	体部下位から高台内まで釉剥ぎ	内面露胎なので、口が狭まる器形	産地不明	不明
2号溝 24図42 図版8	小壺 茶入れ	高台径2.6	陶器 黒灰色　硬質	褐色の厚い鉄釉の上に外面体部中位まで黒釉を掛け	高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図43	小壺	底径4.0 最大径8.2	土師器 黄橙色　軟質 金雲母あり	外面から外底まで白化粧土かけ	底部糸切り	不明		在地系	不明
2号溝 24図44	小瓶 線香立てか	口径5.8 高台径5.1 器高9.8	磁器(青磁) 白色	内面口縁部から外面に淡緑色の青磁釉	—	畳付釉剥ぎ　砂目跡付着	口縁部を内側に折り曲げるのは肥前の香炉に多い特徴	肥前系	不明
2号溝 25図1 図版7	小皿	口径9.5 高台径3.8 器高2.7	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	内面は手描き呉須染付による2条の界線内に鳥居と樹文	見込み蛇の目釉剥ぎ内に崩れた源氏香文か	口唇部の打ち欠きが黒変しているので、灯明皿として利用	肥前系	19c中葉 / 19c後半
2号溝 25図2	小皿	口径(10.8) 高台径(6.8) 器高2.1	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	口唇部口紅装飾（口紅・縁錆）　銅版転写クロム染付による重菱形繋ぎ地に桜花文	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1四半期
2号溝 25図3 図版7	小皿	口径10.6 高台径5.8 器高2.3	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	口唇部口紅装飾（口紅・縁錆）　銅版転写クロム染付による内面口縁部の雷文帯と牡丹文と見込みの雷文帯内に「寿」字文	畳付部は薄い透明釉があることから拭き取りか		瀬戸・美濃系	20c第1四半期
2号溝 25図4	小皿	口径9.9 高台径3.9 器高2.6	磁器(染付) 白色 白色粒子あり	透明釉　全面	コバルト手描染付により内面から見込みに梅樹文と菊文	畳付釉剥ぎ 見込み蛇の目釉剥ぎは下絵が残る		肥前系か	19c末 / 20c第1四半期
2号溝 25図5	五寸皿 輪花形 並皿	口径12.8 高台径8.6 器高3.3	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	型紙摺りコバルト染付により内面の青海波地文に窓絵内菊文と見込みの[illegible]文帯内に環状松竹梅　手描きによる外面の唐草文　体部下位に1条、高台に1条界線　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	畳付から外輪部まで釉剥ぎ　畳付にアルミナ付着	完全に一致しないが塩田町志田窯に近い	肥前系 嬉野市志田か	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図6	五寸皿 輪花形 並皿	口径13.8 高台径8.8 器高3.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	型紙摺りコバルト染付により外面草花文、内面に花唐文に窓絵内菊文、見込みに[illegible]文帯内に環状松竹梅　手描きによる外面体部下位に1条、高台に1条界線　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	畳付から外輪部まで釉剥ぎ　畳付にアルミナ付着		肥前系	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図7 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径(13.2) 高台径(8.4) 器高3.4	磁器(染付) 灰白色　焼成不良で陶質に近い	発色不良の透明釉　全面	口唇部口紅状施文　コバルト型紙摺り染付により内面から見込みは青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊・捩じり円文　手描きにより外面波文　体部下位に1条、高台に2条界線　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ	コバルトも発色不良　25図8と同一器種	肥前系	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図8 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径(13.2) 高台径9.0 器高3.4	磁器(染付) 灰白色　焼成不良で陶質に近い	発色不良の透明釉　全面	口唇部口紅状施文　コバルト型紙摺り染付により内面から見込みは青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊・捩じり円文　手描きにより外面波文　体部下位に1条、高台に2条界線　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ	25図7と同一器種	肥前系	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図9 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径(13.0) 高台径8.2 器高3.3	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	型紙摺りコバルト染付により内面に青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊・笹・文　見込みに3箇所のハリ目跡　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	高台内面から外輪部まで釉剥ぎ　見込みに三足ハマ使用	完全に一致しないが文様構成が武雄市皿山窯に近い	肥前系 武雄市皿山窯か	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図10 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径12.4 高台径8.0 器高3.4	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	型紙摺りコバルト染付により外面草花文、内面から見込みは青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊・笹・文　手描きにより外面体部下位に1条、高台に2条界線　口唇部口紅装飾（口紅・縁錆）状コバルト施釉　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする　外底に墨書あり	高台外輪部のみ釉剥ぎ　見込みの釉剥ぎは下絵が残る	完全に一致しないが文様構成が武雄市皿山窯に近い	肥前系 武雄市皿山窯か	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図11 図版7	五寸皿 輪花形	口径13.0 高台径8.0 器高3.2	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	型紙摺りコバルト染付により外面草花文、内面花地文に牡丹花文と鳥と草花を描いた額窓文、窓絵内菊文　手描きによる外面体部下位に1条、高台に2条界線　口唇部口紅状施文　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする　外底に墨書あり	高台内面から外輪部まで釉剥ぎ　見込みの釉剥ぎは下絵が残る	蛇の目高台外輪部の墨書判読不能	肥前系	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 25図12 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径12.6 高台径8.0 器高3.2	磁器(染付) 灰白色	発色不良の透明釉で乳白色 全面	型紙摺りコバルト染付により外面草花文、内面花地文に牡丹花文と鳥と草花を描いた額窓文、窓絵内菊文　手描きによる外面体部下位に1条、高台に2条界線　口唇部口紅状施文　型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする　外底に墨書あり	高台内面から外輪部まで釉剥ぎ	蛇の目高台外輪部の墨書判読不能	肥前系	19c中葉 / 20c第1四半期
2号溝 26図1	中皿 方形	長軸(17.8) 短軸(16.4) 器高3.6	磁器(染付) 白色　粒子あり	柿釉で乳白色 全面	手描きコバルト染付による外面変形唐草文か　体部下位に1条、高台に2条界線　内面に口縁部互い違いの斜線繋ぎ文帯内に山水文と[illegible]文　型打ち成形後、高台貼り付け	畳付釉拭き取り		肥前系	19c中葉 / 20c前葉
2号溝 26図2	五寸皿 並皿	口径15.2 高台径9.3 器高3.0	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	手描きコバルト染付による外面唐草文　体部下位に1条、高台に2条界線　内面は口縁下に1条界線　扇形窓文　見込みに1条界線内に蝸牛文か　型打ち成形後、高台貼り付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c中葉 / 20c前葉
2号溝 26図3	中鉢 芙蓉手	口径(18.9) 高台径(8.8) 器高8.4	磁器(色絵) 白色	透明釉　全面	手描きコバルト染付による外面蛸唐草文　体部下位に1条、高台に2条界線、内面は区画文帯・環状三つ巴文帯　区画帯内山水文の芙蓉文と見込みの花文は赤・緑・茶彩による上絵付け　高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 / 20c前葉
2号溝 26図4 図版8	中鉢（片口鉢か）	高台径(9.4)	陶器 淡灰～黄白色 やや軟質　精良	鉛釉掛け	見込みに藁灰釉の掛け流し	高台釉剥ぎ	釉調と胎の特徴から1号溝18図4を口縁とする片口鉢だろう	高取系	不明
2号溝 26図5 図版7	中鉢	口径(24.0) 高台径(14.7) 器高8.8	陶器 明黄褐色　土師質でやや軟質　精良	外面は鉄釉を高台内まで、内面は光沢のない薄い鉄釉	手描きコバルト染付により外面蛸唐草文　体部下位に1条、高台に2条界線　内面に光沢のある鉄釉の掛け流し　高台削り出し	畳付釉剥ぎ		産地不明	19c中葉 / 20c前葉
2号溝 26図6 図版8	擂鉢	高台径(11.9)	陶器 黄橙～淡灰色 軟質	外面鉛釉　内面鉄釉	ロクロ成形　外面ヨコナデ　擂り目16本単位　交差方向の擂り目なし	畳付から高台釉剥ぎ 見込みに砂目跡	畳付の外縁に重ね焼き時に下にあった擂鉢の擂り目跡付着	肥前系	19c / 20c前葉
2号溝 26図7 図版8	擂鉢 小型	口径(19.4) 高台径(8.8) 器高7.4	陶器 にぶい黄灰白色 軟質	暗赤色で一部黒色に変色する鉄釉を薄く全面に掛ける	口縁玉縁状に肥厚する　擂目上端ナデ揃え　擂り目21本単位　擂り目幅やや広い　高台削り出しで、体部を垂直に切るのが特徴的	見込みに重ね焼き痕　畳付の外縁が重ね焼き時の接触のため[illegible]	胎土が特徴的　1号溝18図10と同一個体	須佐唐津系	19c / 20c前葉
2号溝 26図8 図版7	小鉢 植木鉢	口径(17.1) 高台径(8.6) 器高15.4	陶器 黄白色　金雲母入る 軟質　土師質に近い	黒釉を内面口縁部から外面腰下位まで薄く掛ける	見込み中央に穿孔あり　高台削り出しで、弧形の透かし穴あり	高台釉剥ぎ		産地不明	19c / 20c前葉
2号溝 26図9 図版7	大鉢 植木鉢	口径(24.8) 高台径(16.0) 器高19.8	陶器 明灰黄褐色　白色粒子多い　粗放	濃緑灰色を呈する藁灰釉を内面口縁～外面に掛ける	見込み中央に穿孔あり　弧形の透かし穴あり	見込みに重ね焼き痕跡あり　底部の中央が下がるのは重ね焼きした頭の個体を置いた窪みのためだろう　高台内に胎土目付着		小石原系	19c / 20c前葉
2号溝 26図10	中鉢 植木鉢	口径(47.0)	陶器 明黄灰褐色	暗赤褐色を呈する鉄釉を全面に掛ける	外面口縁下に刻目突帯・胴中位に断面三角形の波状突帯貼り付け	不明	口縁形態は高取・小石原系の甕に多い特徴	小石原系	19c / 20c前葉
2号溝 26図11 図版8	中甕	口径(29.0) 最大径(32.8)	陶器 灰色　やや軟質 白色粒子多い	淡緑灰色を呈する藁灰釉を全面に掛ける	外面肩部に鉄釉を流し掛け　口縁内側を肥厚して口唇部平坦面を広げる	不明		肥前系か	19c中葉 / 20c初頭
2号溝 26図12 図版8	器種不明	最大径(14.8)	土師質土器 黄橙色　金雲母・角閃石入る　軟質	赤色顔料のスリップを内面口縁～外面に掛ける	外面はスリップを掛けたのち波状文を回転で施文	不明		在地系か	19c / 20c前葉

表5　2次調査2号溝状遺構出土遺物観察表(2)

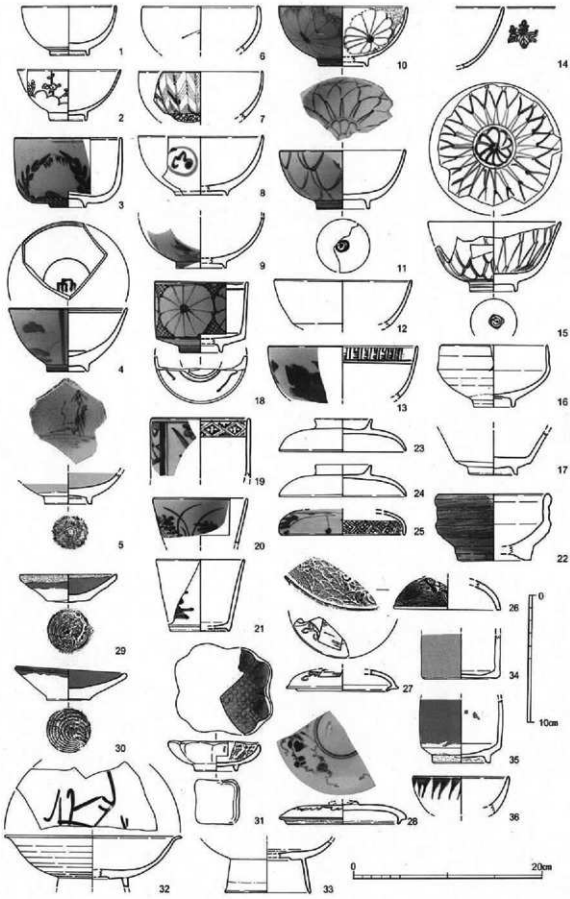
第25図　2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2（1/3）



第26図　2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3（2は1/3、他は1/4）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・底形・装飾技法	窯詰技法	所見		
掲図番号	形状	(）は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	遺物名								
5号窯 27図1	小椀 丸形	口径(7.6) 底径3.2 器高3.9	胎質(染付) 灰白色	胎質(染付) 灰白色	青みがかった灰白色の透明釉 全面	外面側下位と高台に手描き呉須染付による蓮弁文 内面は底部に蛇の目釉剥ぎ	重付焼剥ぎ 一部砂目付着 見込みに状痕あり	大きりが密の谷東で多く作られた小椀に近い	肥前系 1700 / 1740
5号窯 27図2	小椀 丸形	口径(8.4) 高台径2.5 器高4.1	胎質(色絵) 白色	胎質(色絵) 白色	透明釉 全面	外面は赤彩による梅鉢文の上絵付け 赤彩は刺蛾している	重付焼剥ぎ 見込みに砂目跡		肥前系 不明
5号窯 27図3	小椀	口径(8.6) 高台径(3.0) 器高5.4	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付による草花文と口縁部に1条弁線	重付焼剥ぎ	焼成時の歪みあり	肥前系 1700 / 1740
5号窯 27図4	小椀 丸形	口径(9.4) 高台径(3.4) 器高5.0	胎質(色絵) 白色 黒色粒子多い	胎質(色絵) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による方形区画中の草花文と蓮弁に2条線 内面は口縁部に2条弁線 見込みに三条鋸歯内の蛇目釉文	重付焼剥ぎ		肥前系 1680 / 1740
5号窯 27図5	中椀	高台径2.3	陶質 灰色 鉄質	黄白色の灰釉 重付 高台内重跡	高台部ヨリ出して、外底に沈線あり	不明	京焼系風陶器		肥前系 18c前葉
5号窯 27図6	中椀 半球形 小丸底	口径(9.5)	陶質 灰黒色 やや軟質	低火度の透明釉 青	外面に崩れた鉄錆の山水文	不明	京焼系風陶器		肥前系 18c後葉
5号窯 27図7	中椀 半球形 小丸底	口径(10.0)	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による矢紋文と水紋文	不明		肥前系 1710 / 1740
5号窯 27図8	中椀 半球形 小丸底	口径(10.0) 高台径4.1 器高4.65	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	青みのある透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による丸に崩れた「沸」	重付焼剥ぎ	志田西山1号窯の集落より、「沸」の字崩れの歪んが大きい	肥前系 1710 / 1750
5号窯 27図9	中椀	高台径(4.0)	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による蕨紋文	抜付焼剥ぎ		肥前系 1710 / 1750
5号窯 27図10	中椀 浅半球形 小丸底	口径(10.2) 高台径4.0 器高4.0	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による亀甲紋もしくは水紋文	重付焼剥ぎ		肥前系 1710 / 1750
5号窯 27図11	中椀 浅半球形 小丸底	口径(10.6) 高台径4.3 器高4.6	胎質(染付) 白色 黒色粒子あり	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による雲竜文と草花文 内面は刺蛾文 見込みは手描花文 蛇蛇は崩れた鋸歯	重付焼剥ぎ	春花文の描き方が城跡町首田2号窯に近い	肥前系 1700 / 1750
5号窯 27図12	中椀	口径(11.0)	陶質 白色	黒釉 全面 にぶい灰褐色 硬質	——	——	不明		肥前系 不明
5号窯 27図13	中椀 鉢型形	口径(11.8)	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による蕨紋文と草花文 内面は七チーフ化した梵字文様帯	不明		肥前系 18c中葉か
5号窯 27図14	中椀	復元不能	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	外面はコンニャク印判呉須染付による桐文	不明		肥前系 1700 / 1750
5号窯 27図15	中椀 浅半球形	口径10.5 高台径(3.5) 器高5.5	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	青みがかった透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による刺蛾で囲いた二重線目文と柳下伝に三条、高台には条線 内面に刺目文 見込みは手描花文 蛇蛇は崩れた鋸歯	重付焼剥ぎ	春花文の描き方が城跡町首田2号窯に近い	肥前系 1700 / 1750
5号窯 27図16	中椀 鉢状形 厚手底	口径(11.2) 高台径(4.2) 器高4.9	陶質 灰黄色 硬質で 半磁器質	低火度の透明釉 青 貫入あり 釉下 高台内重跡	外面は蕨紋による山水文か 高台部ヨリ出し	——	京焼系風陶器		肥前系 櫻井市志田西山1号窯に類似あり 18c前葉
5号窯 27図17	中椀 鉢鋸形	高台径(4.0)	胎質(石絵) 白色	低火度の透明釉 青 貫入あり 釉下 高台内重跡	——	——	重付焼剥ぎ		肥前系 1740 / 1750
5号窯 27図18	中椀 鉢形 同形鋸	口径(7.4) 高台径3.5 器高3.5	胎質(染付) 灰白色	胎質(染付) 灰白色	透明釉 全面 やや発色不良	外面は手描き呉須染付による等角蕨もしくは梵子文 内面は刺蛾に2条線 見込みにムムカの文様	重付焼剥ぎ		肥前系 1770 / 1780
5号窯 27図19	中椀 鉢形 同形鋸	口径(8.0)	胎質(染付) 白色 黒色粒子あり	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による区画内花文 内面は口縁部に四方蕨文様帯	不明		肥前系 1740 / 1780
5号窯 27図20	碗口	口径(7.6)	胎質(染付) 灰白色	胎質(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による草束文	不明		肥前系 不明
5号窯 27図21	碗口	口径(7.1) 高台径(4.6 器高3.7	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による山水文と2条弁線	重付焼剥ぎ		肥前系 1750 / 1780
5号窯 27図22	碗 大人れ・ 蓋沙	口径(9.4) 高台径(5.5) 器高5.3	胎質 赤褐色 素人動かる いつくりした赤	鉄釉(外面) 暗茶褐色 透明釉(内面)	鉄釉は鉄滓の粒子状を斜めに施す 内面は刷毛テデ 高台削り出し	赤内外面に抜土目跡	重付焼剥ぎ		肥前系 不明
5号窯 27図23	碗蓋	口径(10.1) つまみ径(4.9) 器高2.6	胎質(白磁) 白色	胎質(白磁) 白色	透明釉	——	つまみ重付焼剥ぎ		肥前系 1730 / 1740
5号窯 27図24	碗蓋	口径(10.1) つまみ径(4.9) 器高2.5	胎質(白磁) 白色	胎質(白磁) 白色	透明釉	——	つまみ重付焼剥ぎ		肥前系 1730 / 1740
5号窯 27図25	碗蓋	口径(10.0)	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	透明釉	外面は手描き呉須染付による中国風の城廓と崖 内面は円線部に四方蕨文様帯	不明		肥前系 1770 / 1780
5号窯 27図26 図版7	合子蓋	口径(8.4)	胎質(石絵) 白色	胎質(石絵) 白色	透明釉	外面は刷毛目状形で印刷された野海波文と松(葉は黒の上絵付、淡と着物は淡色でいる)	合子の身と蓋なる内面被覆部を釉剥ぎ	海中の栗を前っていない女性像	肥前系 不明
5号窯 27図27	鉢蓋	口径(7.2)	胎質(染付) 白色 黒色粒子多い	胎質(染付) 白色	透明釉	外面は枝角文と草束文 枝角文は縁(淡色)、草束文は赤の上絵付	身と蓋なる内面被覆部を釉剥ぎ 砂目付着		肥前系 1700 / 1780
5号窯 27図28	鉢蓋	口径(9.6)	胎質(染付) 白色	透明釉	外面は手描き呉須染付によるつる草文と天井部は2条弁線内に菊状つまみ	身と蓋なる内面被覆部を釉剥ぎ 砂目付着			肥前系 1700 / 1780
5号窯 27図29	小皿	口径(7.8) 底径3.4 器高2.4	陶質 熱感不良のため 白色	陶質 熱感不良のため 白色	釉掛を内面から外側に下がる 高台まで掛ける	外底糸切り	抜土目跡見られる 一部重ね焼付 砂目付着	口縁部に煤付着 灯明皿として使用	肥前系 武雄市鹿島B窯に近い 1690 / 1750
5号窯 27図30	小皿	口径(9.0) 底径3.4 器高2.4	陶質 赤茶褐色 白色粒子あり	陶質 赤茶褐色 白色	釉掛を内面から外側に下がる 高台まで掛ける	外底糸切り	外底部に抜土目跡あり	口縁部に煤付着 灯明皿として使用	肥前系 武雄市鹿島B窯に類似あり 1690 / 1750
5号窯 27図31	壺形底 平底型	底径(8.6) 器高(7.7) 器高2.4	胎質(染付) 白色	胎質(染付) 白色	青みがかった透明釉 全面	小型で成形 型紙刷り呉須染付によるダミ文と鼎紋子文	重付焼剥ぎ	口縁部に煤付着 灯明皿として使用	肥前系 武雄市鹿島産に類似あり 1690 / 1750
5号窯 27図32	高台付杯	口径(18.6)	陶質 灰黄色 軟質で 粗砂質 素人あり	低火度の透明釉	外面は蕨紋による山水文か 底部を若干残して削り出す	不明	京焼系風陶器		肥前系 櫻井市志田西山1号窯に類似あり 1690 / 1780

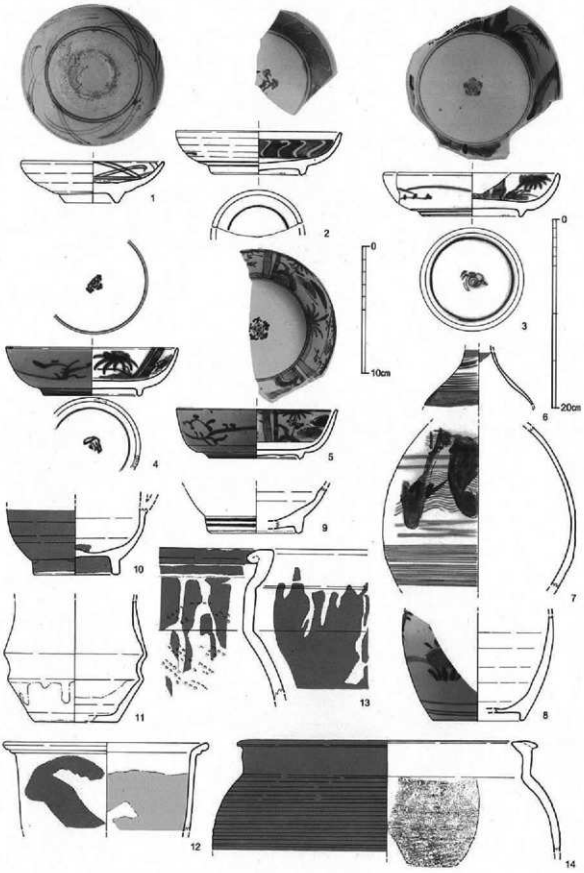
表6 2次調査5号清状遺構出土遺物観察表(1)



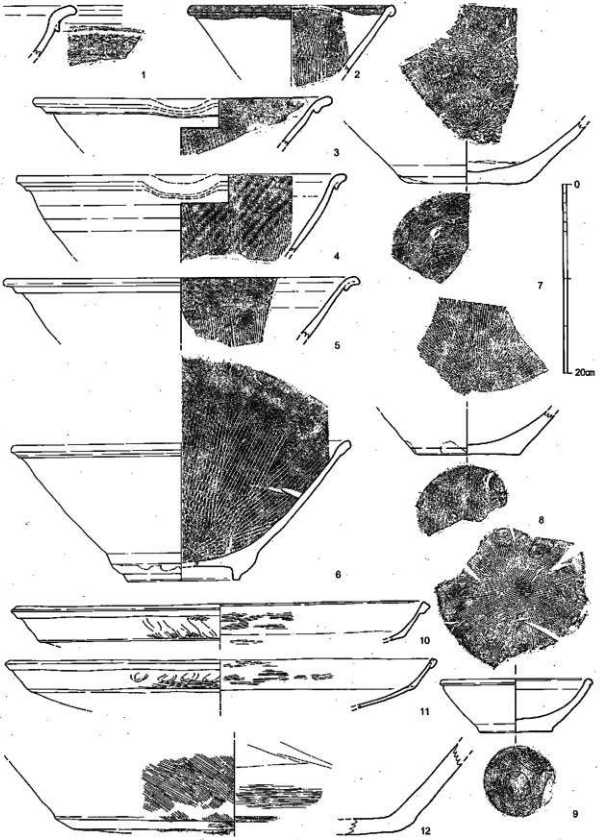
第27図　2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1（32・33は1/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・底形・装飾技法	廃棄技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
掘図番号	形状	( )は復元値	胎の特徴						
図版番号	遺物名								
5号後 27図33	高台付杯	高台径(9.6)	陶器 灰黒色 緻密で赤褐鉄色 混入あり	透明	低火度の透明釉	底面を都刃底に削り出す	見込みに絞の目 釉剥ぎ 高台縁 は焼炭多	京焼系風陶器	肥前系 肥前窯古田西山1号窯に類焼あり	1690 / 1780
5号後 27図34	瓶か	底径6.2	磁器(青磁) 白色	透明	外面のみ	鉄製施布	不明	内面条紋で魚鱗丸がないので、江蘇産は欠まっている	肥前系	不明
5号後 27図35	小皿 型型形 薄入れ	高台径4.6	陶器 にぶい灰褐色 緻密	透明	熟練を外周体部下位まで	高台削り出し	高台にアルミナ付着		肥前系	不明
5号後 27図36	仏飯器	口径(7.8)	磁器(染付) 白色	透明釉	四隅方文鳥居手描き染付	不明	不明		肥前系 武雄市鹿島産に類似あり	1690 / 1780
5号後 28図1	玉子皿	口径(17.8) 底径11.0 器高3.0	磁器(染付) 乳白色	透明釉	内面は手描き外側染付による側面で描いた二重網目文 胴下位に2条線	見込みに絞の目 釉剥ぎ 高台縁 は焼炭多部目付着	光彩品	肥前系 波佐見町黄瀬山産	1750 / 1810
5号後 28図2	五寸皿	口径(13.0) 底径7.5 器高3.4	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面は手描き外側染付による2条線 内面は蓮弁による放射文 見込みは二コンニャク目刷による五弁花文 高台は1条線	骨付焼物ボ 砂目付着	骨付焼物ボ 砂目付着	肥前系 波佐見か	1680 / 1740
5号後 28図3	天寸皿	口径(14.0) 底径6.0 器高3.5	磁器(染付) 灰白 黒色粒子あり	透明釉	外面は手描き鳥居模様による縦書文と鳥居下位と背面下位に2条線 内面は外側文 見込みはコンニャク印刷による五弁花文 内面は外側文 胴下1条線内面は雲龍	骨付焼台が 砂目付着	骨付焼台が 砂目付着	肥前系 波佐見か	1680 / 1740
5号後 28図4	五寸皿	口径(13.5) 底径(7.7) 器高3.8	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子多い	透明釉	外面は手描き鳥居模様による縦書文と背部下位に1条、鳥居下位に2条線 内面は竹笹文 見込みに手描きによる五弁花文	骨付焼物ボ 一部砂目付着	骨付焼物ボ 一部砂目付着	肥前系	1740 / 1780
5号後 28図5	中鉢	口径(12.6) 底径7.0 器高3.9	磁器(染付) 白色	透明釉 貫入あり	外面唐草文 胴部下位に1条、高台下位に2条線 内面に竹笹文 見込みに手描きによる五弁花文	骨付から高台内部の目痕跡ア 焼付に一部骨付目痕	高台が長方形山型に近く、脚が特徴的	肥前系 波佐見 長与町長与山窯	1680 / 1740
5号後 28図6	中鉢	小片のため復元し	陶器 にぶい褐灰色	透明釉	外面は雷紋に内位置を胴部目状に施文し、通常輪鉢は内面は雷紋 口縁部は内外鉄釉	不明	不明	肥前系	1690 / 1780
5号後 28図7 / 図版7	大鉢 二郎坊鉢	最大径(20.2)	陶器 ピンク軟質の煙褐色	透明	外面の下半は鉄釉を細巻目状に施釉、上半は口化粧土を掛け上後赤鉄文状に試き刷り、その後鉄状に試き取る その中に種種の蛇と鳥付 内面は加藤ヘラテズリで調整	不明	不明	肥前系 佐賀市富士町西山1号窯に類焼あり	1690 / 1750
5号後 28図8	中鉢	最大径(12.0) 高台径(7.2)	磁器(染付) 白色	透明釉 貫入あり	外面は手描き外側染付による花卓文 体部下位に1条、高台下位に2条線 内面は竹笹文 蓮弁目刷り 二重網目	受け焼台ボ	受け焼台ボ	肥前系	18c後半
5号後 28図9	中鉢	高台径(7.5)	磁器(染付) 焼成不良のために赤黄灰白色の軟質胎	透明釉だが、焼成不良のために赤黄灰白色	外面は手描き鳥居模様付による高台の2条線 外面胴部へ7箇所	焼付焼台ボ	焼付焼台ボ	肥前系	不明
5号後 28図10 / 図版8	中鉢	最大径(10.8) 底径(6.5)	陶器 暗黄灰色	鉄釉 外面底有 内面無釉	胴中位に格状沈線手あり 底部削り出し	焼付にアルミナ付着	焼付にアルミナ付着	肥前系	不明
5号後 28図11	中鉢	最大径15.0 底径8.4	陶器 にぶい灰黒色	鉄釉 外面底有 内面無釉	外面は底部へラ切りか	底部釉剥ぎ	1号大上流10間20 上段一間部の貯蔵性あり	高取	不明
5号後 28図12	小型壺 半胴壺	口径(21.6)	陶器 にぶい赤褐色	白濁釉	外面は鉄絵による絞文	不明	不明	肥前系	不明
5号後 28図13	大壺 ハンズボイ	復元不能	陶器 赤褐色	黒い鉄釉 全面 上半部に白土掛け 口唇部は上から垂り	口縁部折り曲げ 内面にヌタケ出て具疲残る 外面ケズリ長胴 底ケズリ	不明	1号大上流10間19 上段一間部の貯蔵性あり	肥前系	18c前半
5号後 28図14	中壺	口径(31.6)	陶器 赤褐色	黒い鉄釉 外面 内面無釉	外面の頸部から肩部に凹線帯 口唇部肥厚	口唇部釉剥ぎ	口唇部釉剥ぎ	肥前系	17c後半
5号後 29図1 / 図版7	壺か	復元不能	陶器 暗黒灰色	暗灰褐色の油 い鉄釉 全面 光沢なし	外面の体部をヌタケ状形成、口縁下に突帯を貼り付けてヌタケ	不明	不明	肥前系 武雄市富士町西山1号窯に類焼あり	1690 / 1750
5号後 29図2	小型壺か	口径(22.6)	陶器 暗黒紫色	内外鉄釉の上に暗褐色の黒赤褐色の鉄釉	口唇部肥厚 蓋目上端水平処理 蓋り目9本単位 ロクロ成形 蓋目上端ナデ調え	不明	不明	肥前系 武雄市鹿島産か	1650 / 1690
5号後 29図3	壺か	口径(31.8)	陶器 赤黒茶色	暗灰黒色の鉄釉 全面 光沢なし	口唇部肥厚 ロクロ成形 外面ヨコナデ 蓋目上端ナデ調え 蓋り目10本以上	不明	不明	肥前系	1750 / 1860
5号後 29図4	壺か	口径(37.6)	陶器 赤黒灰色	暗灰黒色の鉄釉 全面 光沢あり	口唇部肥厚 ロクロ成形 外面ヨコナデ 蓋目上端ナデ調え 蓋り目15本単位 強く調整	不明	不明	肥前系	1750 / 1860
5号後 29図5	壺か	口径(37.6)	陶器 赤黒色	暗灰黒色の鉄釉 全面 光沢あり	口唇部肥厚 ロクロ成形 外面ヨコナデ 蓋目上端ナデ調え 蓋り目15本単位 強く調整	不明	不明	肥前系	1750 / 1860
5号後 29図6	胴鉢	口径(35.8) 底径推(12.0) 器高14.5	陶器 赤黒色	暗灰黒色の鉄釉 全面 光沢なし	口唇部肥厚 ロクロ成形 外面ヨコナデ 内面横目上端ナデ調え 横目17本単位	不明	外面は鉄釉を掛ける前に粗く強布した上半のみ重ね焼き	肥前系	1750 / 1860
5号後 29図7	擂鉢	底径(12.6)	陶器 赤黒色	無釉	ロクロ成形 ヨコナデ 内面横目上端ナデ調え 擂り目13本単位	素焼後に胎土補修3箇所 見込みに胎土目跡3箇所	素焼後に胎土補修3箇所 見込みに胎土目跡3箇所	肥前系	不明
5号後 29図8	擂鉢	底径(11.0)	陶器 灰黒色～灰赤褐色 粗い胎土	黒い鉄釉 全面 口唇部から鉄釉為 垂タイプだろう	ロクロ成形 ヨコナデ 横目上端ナデ調え 擂り目16本単位	底部釉に新十目 部3箇所	口唇部の鉄釉の特徴から東部窯の可能性高い	肥前系 武雄市東麻生か	不明
5号後 29図9 / 図版8	小型擂鉢	口径(16.6) 底径(6.0) 器高3.6	陶器 暗灰黒色 にぶい赤褐色	暗灰黒色の鉄釉 全面 光沢なし	口唇部肥厚 ロクロ成形 外面ヨコナデ 横目上端ナデ調え 擂り目16本単位	底部釉に新十目 部3箇所 見込み中央に胎土補修	底部釉と中央に新十目部3箇所 見込み中央に胎土補修	小石原系か	不明
5号後 29図10	壺か	口径(42.8)	土師器 暗黒 金黒赤色 にぶい赤褐色	—	胴公部浮さえの強横ミハケ 口縁突帯貼付け	不明	外面煤付着	在地系	不明
5号後 29図11	壺か	口径(45.5)	土師器 暗黒 金黒赤色 にぶい赤褐色	—	外面は横台浮さえの強横ミハケ 口縁突帯貼付け 内面は丁寧なヨコハケ	不明	外面煤付着	在地系	不明
5号後 29図12	人面	底径(38.0)	土師器 暗黒 金黒赤色 にぶい赤褐色	—	外面胴の方向のハケ 内面ヨコハケ 底部にもハケあり	不明	内外面ともに部面の荒れがない	在地系	不明
5号後 30図1	鉢 火鉢か	復元不能	瓦質土器 軟質 にぶい赤黒色 全面母目立つ	—	内外ヨコナデ 内面は使用のため器面摩滅	不明	不明	在地系	不明
5号後 30図2	鉢 火鉢か	復元不能	瓦質土器 軟質 暗灰色 全面母目立つ	—	外面ヨコナデ 内面ヨコハケのちナデ	不明	不明	在地系	不明

表6　2次調査5号溝状遺構出土遺物観察表(2)



第28図　2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2（6・7・11～14は1/4、他は1/3）



第29図　2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3 (1/4)

2号溝状遺構（図版6・7・9・10）

24図21の上絵付けの「肥」という銘は、浮羽市日詰遺跡2字調査3号攪乱坑に類例が見られる。ゴム印判の飯碗と共伴しており、統制番号が付いていないが戦時統制期のものと考えられる。

24図25には1号溝22図3のタイプの蓋がつく。浮羽市堂畑遺跡2区にセットの出土例あり。38図5は上面の中央に融着のない部分が帯状にある。何かに接していたようだが、他のものと異なり全面に融着があり、接した面も焼けている。

40図1～3は個体の平坦な部分を積み上げており、積み上げた側面の一面が焼けているので、複数積み上げて鍛冶炉の熱を避けるための炉壁のようなものか、あるいは小型の窯の壁かもしれない。

41図18・20の戸車はアルミナが付着する面がある。窯道具として使用した例があることから、釉着防止のためのものであろう。側面が摩滅しているので、窯道具として使用しつつ、戸車として出荷したものと思われる。

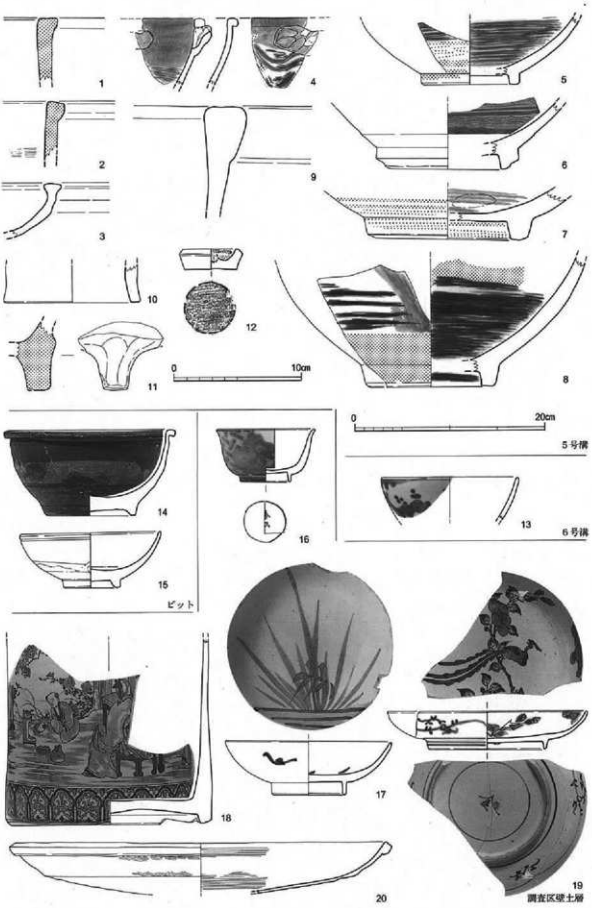
5号溝（図版7～10）

39図16は他のサナ状土製品とは厚さや火熱による融着が異なっており、七輪のサナそのものであろう。40図10は9のような器形になると思われる。口縁下に穿孔があるが、機能がわからない。固体するためのものだろうか。40図11は、下面外面が斜めに削られており、下面に融解物がかぶっていることから、本来下方が空いていた甑のような器形を想定している。

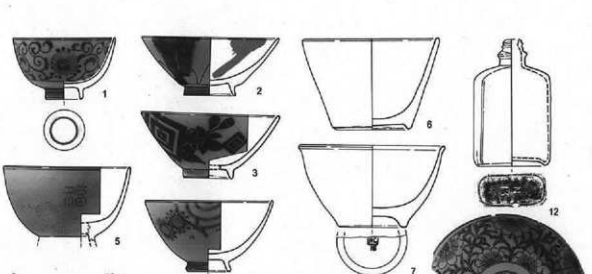
43図1は桁に挿し込み床の間など小空間を仕切る板の柱材と推定した。

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		推定産地	推定年代
検図番号	形状						特記事項			
図版番号	遺物名	（）は復元値	胎の特徴							
5号溝 30図3 図版8	鉢	復元不能	陶器 緻質色 やや軟	見込部の透明釉 全面 良入あり やや不良ぶり	外面ヨコナデの痕あり	不明	口縁形状が肥前系の擂り鉢に近い		産地不明	不明
5号溝 30図4	鉢	復元不能	陶器 にぶい橙色 やや軟質 白色粒子あり	比較鉄色の鉄釉と白濁釉付き。外面は白化粧土で全面覆状に施す取り。その下に白化粧土の縦毛引文を1本ずつ施す。片口部は粗いオ土鉢を連結 内面下半は白化粧土の横毛目文	不明	30図5と同一個体の可能性あり		肥前系	1690 / 1750
5号溝 30図5	中鉢 片口	高台径(16.4)	陶器 にぶい橙色 やや軟質 白色粒子あり	灰黄緑色の灰釉 全面 全面	外部は上半部は切り込みを取り、全体は鉄釉の横引き文 内面は下半部は白化粧土の波状刷毛目文	器台から高台内は露胎	30図4と同一個体の可能性あり		肥前系	1690 / 1750
5号溝 30図6	入碗	高台径(12.3)	陶器 橙色 やや軟質 白色粒子多い	陶器 橙色 やや軟質 白色粒子多い	外面はコマ文状の無釉部多い 内面は白化粧土を全面状に拭き取ったのち波状に拭き取り高台内縦刷の切り込あり	見込み に胎土目跡あり	胎は志田西山産に近い		肥前系	1690 / 1750
5号溝 30図7	大鉢	高台径(17.0)	陶器 橙色 やや軟質 白色粒子多い	不明	外面から外底は鉄釉の縦毛目文 内面から見込み白化粧土の波状刷毛目文取り	見込みに胎土目跡あり 外部表面 重ね合わせ痕あり	胎は志田西山産に近い		肥前系	1690 / 1750
5号溝 30図8	平鍋 半鍋蓋	高台径(13.3)	陶器 明灰褐色 白色粒子 緻質	半底は白化粧土の厚状状 下部は鉄釉上掛け 内部の下底は鉄釉の横い刷毛目文 半底は鉄釉上掛け	外面ヨコナデ	不明	器台様式が 足 込みに小型器種の特徴あり	型型が薄い 貼土が特徴的	肥前系	19 c
5号溝 30図9 図版8	入鍋	復元不能	土師器 全面 赤っぽい やや軟質 砂粒白色	土師器 全面 赤っぽい やや軟質 砂粒白色	内外ヨコナデ	不明	内外部色 付着物なし 容器の乱れあり		在地系	不明
5号溝 30図10	高台付鉢 大鉢か	高台径(14.2)	瓦質土器 軟質 灰黑色 全面赤っぽい	瓦質土器 軟質 灰黑色 全面赤っぽい	内外ヨコナデ	不明			在地系	不明
5号溝 30図11	陶付鉢 大鉢か	高台径(14.2)	瓦質土器 軟質 暗灰色 全面赤っぽい	瓦質土器 軟質 暗灰色 全面赤っぽい	内外ヨコナデ	不明			在地系	不明
5号溝 30図12 図版8	灯明皿	口径4.5 高台径4.3	土師器 赤褐色 黑白色 雲母 全面赤っぽい	土師器 赤褐色 黑白色 雲母 全面赤っぽい	内外ヨコナデ	不明	内面煤付き		御川寺窯地跡	不明
6号溝 30図13	中鉢	口径(10.6)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は平面3段状付による草花文	不明			肥前系	1700 / 1750
ピット1 30図14	小鉢 丸底・脚付	口径(13.2) 高台径6.7 脚高7.9	陶器 橙褐色 長石粒多いやや白っぽい	陶器 橙褐色 長石粒多いやや白っぽい	外面の表面下半は鉄釉の縦毛目文 口縁別り 高台部から内底まで	焼付から高台内 脚部 口縁部 脚部底			肥前系	不明
ピット6 30図15 図版8	小鉢	口径11.0 高台径4.4 脚高4.3	陶器 灰白色 軟質	鉄釉色の鉄釉 全面 ダラス質 白色	口縁下に沈線あり	見込みに鉛の目跡あり	完形品		肥前系	不明
溝状遺構2番 30図16	小皿 碗底形	口径(7.8) 高台径(4.0) 脚高4.15	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外部は鉄釉及び コバルト染付による雷紋文の帯文に色付文 高台は1本弁縁内「合名」	重ね焼き	重ね焼き痕あり		肥前・鍋島系	不明
溝状遺構2番 30図17 図版8	丸平皿	口径(12.6) 高台径(7.0) 脚高3.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 発色不良で乳白色を呈す	外面は手描き呉須染付による鳥蝶化した鳥文 見込みは蓮唐文	重ね焼き	重ね焼き痕		不明	不明
溝状遺構2番 30図18	火鉢	高台径31.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 外面 内面・高台内 無釉	外部は鉄釉及び コバルト染付による草入山水文・法華文 高台に1本形の波かし文	重ね焼き	1号溝21図12と同一個体の可能性あり		肥前系	不明
溝状遺構 30図19 図版8	五寸皿	口径(12.6) 高台径(7.0) 脚高3.7	磁器(染付) 灰白色 黑色粒子あり	透明釉 全面 全体がやや白濁 発色良	外部は平面3段状呉須付による唐草文と松葉下 松に1本 高台内2本弁縁 見込みに花束と楕円文 裏銘は「高台内「合」」	高台内バリ目跡			肥前系	18 c 後半 19 c 前半
溝状遺構 30図20	鉢蓋	口径(40.0)	土師器 明黑 全面赤っぽい 黑白粒色	土師器 明黑 全面赤っぽい 黑白粒色	口縁受部内面 外面は鉄分を含む赤褐色 いハケ 内面は丁寧なヨコハケ	不明	外面煤付着		在地系	不明

表7　2次調査5・6号溝状遺構、ピット・調査区撹乱出土遺物観察表



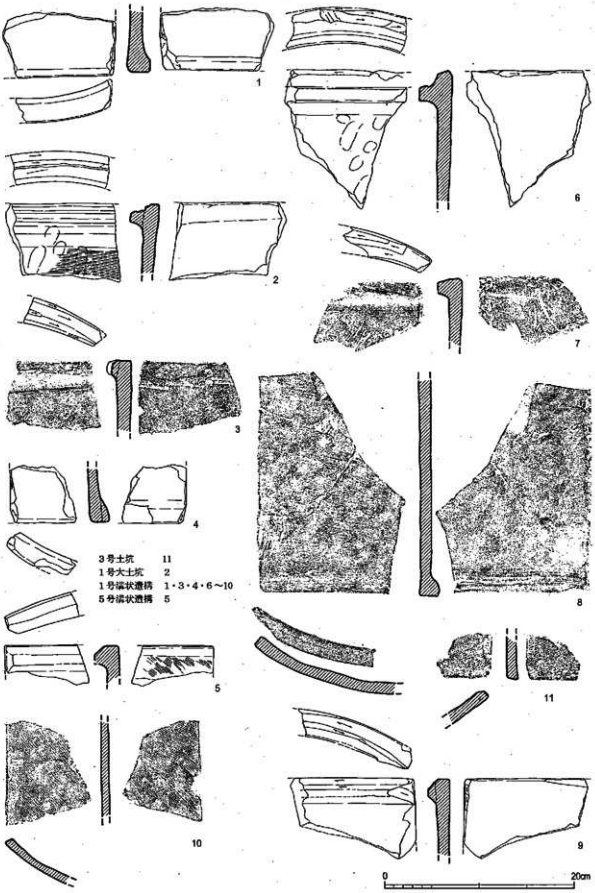
第30図　2次調査5・6号溝状遺構、ピット、調査区壁土層出土土器・陶磁器実測図(5～10・18～20は1/4、他は1/3)



第31図　2次調査客土出土磁器実測図（5は1/4、他は1/3）

遺構名 掲図番号	器種 器形	法量(cm) （）は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	釉	調整・成形・装飾技法	施釉技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
遺構番号	器形名									
客土中 31図1 図版8	小杯 丸型茶器か	口径6.0 高台径3.0 器高4.8	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	調整は高台に2条界線と規格印にゴム印判コバルト染付による格章花文　外面は高台内に糸界線　高台部ヨ出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20ｃ第2四半期
客土中 31図2 図版8	中鉢 八角取り平鉢	口径11.0 高台径3.2 器高4.6	磁器(白磁) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	内外鉄釉の流し掛け　高台削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20ｃ第1四半期
客土中 31図3	中鉢 振鉢	口径11.0 高台径5.9 器高4.2	磁器(染付) ガラス質　灰白色	やや暗い透明釉　全面	釉	外面は銅版転写コバルト染付による多重四角文・桜花文	畳付釉剥ぎ 胎目部付着		肥前系	20ｃ第2四半期
客土中 31図4	中鉢 振鉢	口径(10.2) 高台径(5.6) 器高5.6	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	外面はゴム印判コバルト染付による花文・変形文と手描きによる線(7分の1)赤彩像　内面は高台部廻りにゴム印判による「福」　高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸系 規格茶器の「福」から遡り幕末かもしれない	19ｃ末 | 20ｃ前半
客土中 31図5	中鉢	口径(13.4)	磁器(染付) 白色	乳白色を呈する透明釉　全面	釉	外面は界線は手描き、「福」字は型紙刷りコバルト染付による「寿」文と花文は銅版転写の薄いコバルトによる染付　高台廻り出し	不明	胡麻手桑皿向けの輸出品として制作されたもの	肥前系 桑島北前町遺山頭に類例がある	19ｃ末 | 20ｃ前半
客土中 31図6	中鉢 国民食器か	口径(10.8) 器台径(6.4) 器高7.2	磁器(白磁) 灰白色	透明釉　全面	釉	高台部ヨ出し	畳付釉剥ぎ	紙製番号が付いていないが、国民食器か	肥前系	3ｃ第1四半期 | 3ｃ第2四半期
客土中 31図7	中鉢 国民食器か	口径(11.6) 高台径(5.6) 器高6.5	磁器(白磁) 灰白色	透明釉　全面	釉	削り出し高台　裏銘はコバルトゴム印判染付による方形区画内に「肥」と16	畳付釉剥ぎ		有田・波佐見以外の肥前系 「肥」の番号から	1811～1826 規格統制期
客土中 31図8	小杯 従軍記念	口径(5.2) 高台径(2.4) 器高2.9	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	型押し成形による高台部を桜花弁形に種形口縁部は正円子を口縁状に施釉　内面から見込みに金彩上絵付でを読める　銘例はトラック金	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	3ｃ第1四半期 | 3ｃ第2四半期
客土中 31図9	小皿	口径(9.1) 高台径3.2 器高2.0	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	内面から見込みは界線間に銅版転写四色2回刷りコバルト染付による梅樹文　口唇部に口紅装飾（口唇・縁銘）	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	3ｃ第1四半期 | 3ｃ第2四半期
客土中 31図10	小皿	口径(13.4) 高台径(8.8) 器高3.8	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	ゴム印判コバルト染付による変形した鉄と梅　陰各2のマーク　絵の目高台	絵の目高台の外輪部釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	3ｃ第1四半期 | 3ｃ第2四半期
客土中 31図11 図版8	小皿	口径13.0 高台径2.4 器高2.7	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	釉	内面から見込みは銅版転写クロム金付による多線間の花文　口唇部に口紅装飾（口縁・縁銘）	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	3ｃ第1四半期 | 3ｃ第2四半期
客土中 31図12 図版8	小瓶	口径1.0 高台径4.2 高台径4.5	磁器(白磁) 白色	透明釉　全面	釉	鋳造と成形か　裏銘は「N13」の刻印あり　刻印の意味不明　巻貝底	絵の目高台の外輪部釉剥ぎ	完形	産地不明	不明

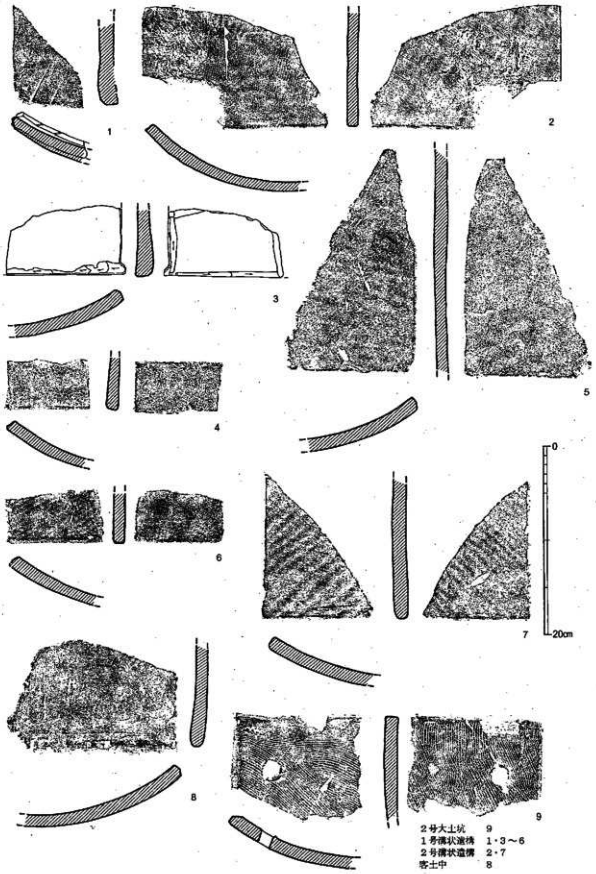
表8　2次調査客土出土磁器観察表



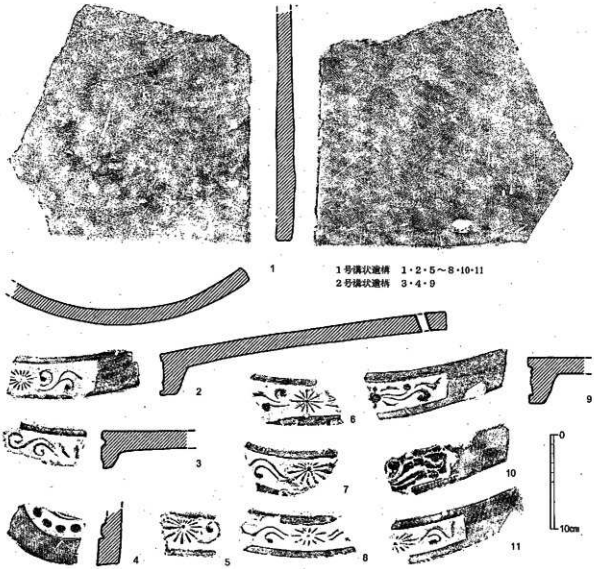
第32図　2次調査出土瓦実測図1(1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	色調	調整・成形・装飾技法					焼成技法	所見	
種別番号	形状				凹面	凸面	上端面・下端面	側端面			特記事項	推定産地
図版番号	遺物名	()は復元値	胎の特徴									
1号側 32図1	平瓦	厚3.1~1.3 重量の厚さ2.6	瓦質(土師質) 密多粗色 やや軟質 長石等多い	灰赤褐色	凹部ナデ、凸部面縦方向ナデ 端部不明 調整後端部は凸面部分のみ面取り 下端部は凸面ナデ 凹面面取り部ナデ	面部縦合後ナデ 角部は削り部ナデ	面部縦合後ナデ	面部縦合後ナデ	小点から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭	在地系
1号土坑 32図2	平瓦	厚3.4~1.5 重量の厚さ3.4	瓦質 堅緻色 やや軟質 長石等少ない	濃黒色~にぶい淡黒色	凹部ハケ、凸部面縦方向ナデ 調整不明 下端部は凹面ナデ	面部ハケ、凸部面縦方向ナデ 調整不明 下端部は凹面ナデ	面部縦合後ナデ	面部縦合後ナデ	不明	一枚作り	焼ろ不明瞭 凸面が軟質しているので、凸面が上面	在地系
1号溝 32図3	平瓦	厚3.1~1.7 重量の厚さ3.2	瓦質 密多 やや軟質 角閃石目立つ	にぶい灰色	凹面目の細かいハケ 調整後、面部をカット 側端部海面面取り 下端部は両面ナデ 凸面ナデ	凹面目の細かいハケ 調整後、面部をカット 側端部海面面取り 下端部は両面ナデ	面部縦合後ナデ	面部縦合後ナデ	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭 凹面ナデ部に指紋残る	在地系
1号側 32図4	平瓦	厚3.3 重量の厚さ3.6	瓦質(土師質) 密多粗色 やや軟質 角閃石目立つ	にぶい黄橙色~にぶい黄褐色	凹凸両面はコナデ調整後、側面を面取り 下端部は未処理、下端部は両面ともナデ	面取り長ハケ状のナデ	面取り長ハケ状のナデ	凸面部から平面を下端部から抜面を面取り、切断面を面取り	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭	在地系
5号側 32図5 図版9	平瓦	厚3.3 重量の厚さ3.7 ~2.5	瓦質(土師質) にぶい密~粗色 やや軟質 角閃石目立つ	灰白色	凸面は縦の細かいハケ、凹面不明 調整後、側面をカット 端端部の面取り部 下端部は両面ナデ	凸面は縦の細かいハケ、凹面不明 調整後、側面をカット 端端部の面取り部 下端部は両面ナデ	面部縦合後ナデ	面部縦合後ナデ	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭	在地系
1号側 32図6 図版9	平瓦	厚3.1~1.3 重量の厚さ2.5	瓦質(土師質) 密多粗色 やや軟質 角閃石目立つ	にぶい淡灰色	凹面目の細かいハケ 調整後、側面をカット 側端部は海面面取り 下端部は凹面ナデ、凸面はタズリで成形あり	凹面目の細かいハケ 調整後、側面をカット 側端部は海面面取り 下端部は凹面ナデ、凸面はタズリで成形あり	面部縦合後ナデ	面部縦合後ナデ	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭	在地系
1号側 32図7 図版9	平瓦	厚3.1~1.4 重量の厚さ2.2	瓦質(土師質) 密粗色 やや軟質 金雲母あり	褐色	凹面ナデ凸面の細いハケ 調整後、側面をカット 側端部は海面面取り 下端部は凹面ナデ	面部縦合後ナデ 角部は削り部ナデ	面部縦合後ナデ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭 凹面ナデ部に指紋残る	在地系
1号側 32図8 図版9	平瓦	厚3.1~1.4 重量の厚さ2.9	瓦質(土師質) 密粗~密色 軟質 金雲母あり	黄橙色	凹面ナデ凸面の細いハケ 調整後、側面をカット 端端部は海面面取り 下端部は凹面ナデ、凸面はタズリで成形あり	凹面ナデ凸面の細いハケ 調整後、側面をカット 角部は削り部ナデ	面部縦合後ナデ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭 凸面が軟質しているので、凸面が上面	在地系
1号溝 32図9	平瓦	厚3.0~0.9	瓦質 密多 軟質	黒灰色	凹凸両面縦方向の幅2.0cmの細いハケ調整後、側面をカット 角部は削り部ナデ	ハケ	切断後未調整	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭	在地系
3号土坑 32図11	平瓦	厚2.1~1.2	瓦質 密灰白~黒灰色 軟質 金雲母あり	黒灰~灰褐色	凹凸両面縦方向の幅2.0cmの細いハケ調整後、側面を面取り、角部を面取り	ハケ	切断後未調整	ハケ	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭	在地系
1号溝 33図1	平瓦	厚3.1~1.3	瓦質(土師質) 密小灰黒色 やや軟質 金雲母なし	にぶい褐黄~灰黒色	凹面縦のナデ調整後、側面をカット 端端部は凸面海面面取り、凹面は面取り 上端面は凹面ナデ、凸面はナデ	凹面縦のナデ調整後、側面をカット 端端部は凸面海面面取り、凹面は面取り 上端面は凹面ナデ、凸面はナデ	ケズリ	ケズリのため切断方法不明	ケズリのため切断方法不明	一枚作り	焼ろ不明瞭 側面の上端部がわずかに窪んでいる	在地系
2号溝 33図2	平瓦	厚5.0~1.2	瓦質 密白~黒灰色 軟質 金雲母あり	灰白色	凸面縦方向の幅1.5cmの細かいハケ調整後、側面をカット 上端面のナデ目ナデ 凸面は面取り 下端面は凹面ナデ、凸面はナデ	凸面縦方向の幅1.5cmの細かいハケ調整後、側面をカット 上端面のナデ目ナデ 凸面は面取り 下端面は凹面ナデ、凸面はナデ	ハケ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭 凸面が軟質しているので、凸面が上面	在地系
1号溝 33図3 図版9	平瓦	厚3.2~1.5	瓦質(土師質) 密灰白~黒灰色 軟質 金雲母なし	にぶい褐灰色~にぶい黒褐色	凸面縦方向の幅1.5cmの細かいハケ調整後、側面をカット 端端部は面取り 上端面は凹面ナデ 凸面は面取り 下端面は凹面ナデ、凸面はナデ	凸面縦方向の幅1.5cmの細かいハケ調整後、側面をカット 端端部は面取り 上端面は凹面ナデ 凸面は面取り 下端面は凹面ナデ、凸面はナデ	面取り長ハケ状のナデ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	切断後未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭 凹面ナデ部に指紋残る	在地系
1号溝 33図4	平瓦	厚3.0~1.6	瓦質(土師質) にぶい褐黄~灰黒色 やや軟質 金雲母なし	にぶい褐黄~灰黒色	凹面縦のナデ調整後、側面をカット 端端部は凸面海面面取り、凹面は面取り 上端面は凹面ナデ、凸面はナデ	凹面縦のナデ調整後、側面をカット 端端部は凸面海面面取り、凹面は面取り 上端面は凹面ナデ、凸面はナデ	粗いハケ	ケズリ	ケズリのため切断方法不明	一枚作り	焼ろ不明瞭 側面の上端部がわずかに窪んでいる	在地系
1号溝 33図5	平瓦	厚3.3~1.4	瓦質(土師質) 灰黒色~暗黒色 軟質 金雲母あり	黄橙色	凹凸両面縦方向のナデ調整後、側面をカット 端端部は丸面を面取り	ナデ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	一枚作り	焼ろ不明瞭 凸面は他成形のナデ痕残るいい足跡あり	在地系
1号溝 33図6	平瓦	厚3.2~1.4	瓦質(土師質) 密灰黒色 軟質 白色粒子多い	にぶい黄橙色	凹凸両面ナデ調整後、側面をカット	ナデ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は未調整	一枚作り		在地系
2号溝 33図7	平瓦	厚3.2~1.5	瓦質(土師質) 密灰黒色 軟質 角閃石多い	黒灰~灰褐色	凹凸両面縦方向のナデ調整後、側面をカット 側端部は未処理、上端面はナデ	凹凸両面縦方向のナデ調整後、側面をカット 側端部は未処理、上端面はナデ	ハケ状のナデで丸く仕上げている	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は丸く	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は丸く	一枚作り	焼成不良のため砂質の骨質色、灰白色	在地系
客土中 33図8	平瓦	厚3.2~1.5	瓦質(土師質) 密灰黒色 軟質 角閃石目立つ	黄橙色	凹凸両面縦方向のハケ状ナデ調整後、側面をカット 側端部は未処理、上端面はナデ	面取り長ナデ状のナデ調整後、側面をカット 側端部は未処理、上端面はナデ	面取り長ナデ状のナデ調整後、側面を成形	凸面部から横方向に折り、折った部分は丸く	凸面部から横方向に折り、折った部分は丸く	一枚作り	凹面中央が軟成していることから、西面を上にとがる	在地系
2号土坑 33図9 図版9	平瓦	厚3.4	瓦質(土師質) 密灰黒色 軟質 角閃石多い	灰~灰白色	凹凸両面縦方向の幅3.0cm程の目の粗いハケ調整後、側面をカット 端端部は海面面取り 上端面は凹面の面取り 下端面は凹面ナデ、側面は面取り	凹凸両面縦方向の幅3.0cm程の目の粗いハケ調整後、側面をカット 端端部は海面面取り 上端面は凹面の面取り 下端面は凹面ナデ、側面は面取り	カット後ケズリ	カット後ケズリ	カット後ケズリ	一枚作り	焼ろ不明瞭 凹面は中央が軟成	在地系
1号溝 34図1 図版9	平瓦	厚3.6	瓦質(土師質) 黒灰色 軟質 白色粒子多い	にぶい黄橙色	凹凸両面縦方向の幅2.0cmの目の細かいハケ調整後、側面をカット 側端部は丸面、上端面は凹面ナデ	凹凸両面縦方向の幅2.0cmの目の細かいハケ調整後、側面をカット 側端部は丸面、上端面は凹面ナデ	カット後丸くケズリ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は丸くケズリ	凸面から切り目を入れて割り、折った部分は丸くケズリ	一枚作り	焼ろ不明瞭 凹面は中央が軟成	在地系
1号溝 34図2	軒平瓦	厚3.2 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	巻近辺文	不明			久留米城下町B類に近い	不明
2号溝 34図3	軒平瓦	厚3.2 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	三巴唐草文	不明				不明
2号溝 34図4	軒丸瓦	厚3.4 軒面幅(15.0)	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	巡文笠中心巴文	不明				不明
1号溝 34図5	軒平瓦	厚3.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	唐草巴文	不明			久留米城下町C類に近い	不明
1号溝 34図6	軒平瓦	厚3.4 面作(15.0)	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	唐草巴文	不明			久留米城下町C類に近い	不明
1号溝 34図7	軒平瓦	厚3.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	唐草巴文	不明			久留米城下町C類に近い	不明
1号溝 34図8	軒平瓦	厚3.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	唐草巴文	不明			久留米城下町C類に近い	不明
2号溝 34図9	軒平瓦	厚3.4 軒面幅4.9	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	宝珠辺唐文	ナデ				不明
1号溝 34図10 図版9	軒平瓦	厚3.4 軒面幅4.3	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	中心文不明 唐草文 端に丸十字あり	ナデ			34図6・7と同形か	不明

表9　2次調査出土瓦観察表(1)



第33図　2次調査出土瓦実測図2 (1/4)

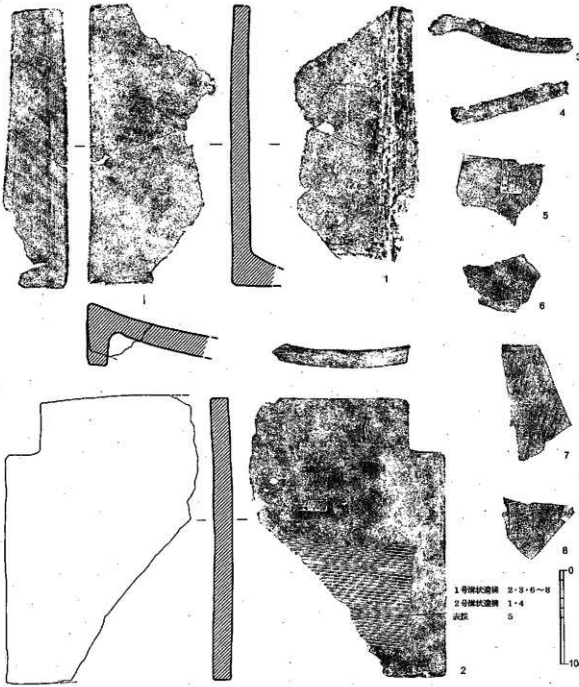


第34図　2次調査出土瓦実測図3(1/4)

44図10は指輪のように見えるが、真鍮製であることから指貫と判断した。41図27は鳥村製鈴虫香油で大分県炭窯Ⅱ区ＳＫ１に蓋付きの類例あり。41図29は「桃谷順天館」製煉り白粉の瓶であろう。大分県炭窯Ⅱ区ＳＫ１に類例あり。41図34は東京の堀越嘉太郎商店製ホーカー液で大分県炭窯Ⅱ区ＳＫ１に類例あり。41図37・38は同一規格のおはじきでもう１点じゃんけんの「ぐー」がスタンプされたものがあったが、整理中に紛失してしまった。41図40は糸で筏状に編んだ敷台と思われる。緊縛痕は残っていなかったが、ガラス棒が横に並んで出土した。

客土層（図版８）

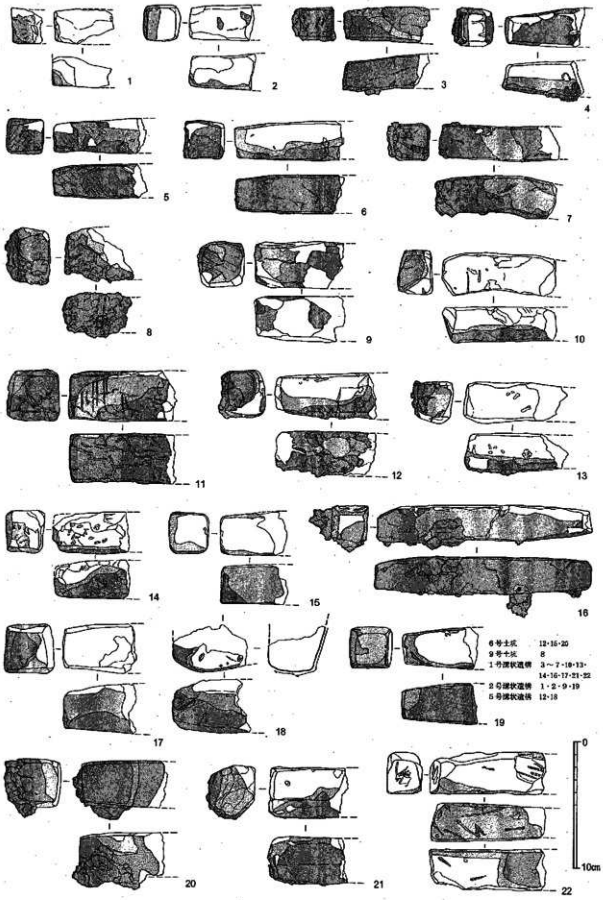
客土層出土遺物は本来考古資料とするべきではないが、戦時資料が出土していることから、共伴する残りのよい磁器とともに掲載した。



第35図　2次調査出土瓦実測図4 (1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の組成	色調	調整・成形・装飾技法					製作技法	所見	
掲図番号	形状	()は復元値	胎の特徴		凹面	凸面	上端面・下端面	側面			特記事項	推定産地
図版番号	通称名											
1号煙 34図11	軒平瓦	厚3.2.4 軒面幅4.6	瓦質 黒灰色　硬質	灰色	ナデ	――	瓦質文	ナデ			入型未統下胴G刻に近い	不明
2号煙 35図1	袖瓦	厚3.2.0 現存24.7 側面幅5.4	瓦質 灰黒～灰白色 硬質	淡灰茶色の上に灰黒～灰白色	有効部分都は面のナデ調整後にナデ	刻面部分都は面のナデ調整後にナデ	ナデ	ナデ				不明
2号煙 35図2	平瓦	厚3.2.1	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	ナデ	製作面のスタンプ　中央に無字を入れた「天」か「元」と「武蔵国金門郡田村丁紀刊」と紀銘	上端面に「上」と「八又」か「紀」のスタンプ	ナデ				不明
2号煙 35図3	平瓦	厚3.2.0	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	――	――	製作面のスタンプ　無字へに「加」	ナデ				不明
2号煙 35図4	平瓦	厚3.2.0	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	――	――	製作面のスタンプ　無字「紀」とのみ読める	ナデ				不明
2号煙 35図5	平瓦	厚3.1.8	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	ナデ	製作面のスタンプ　「□岡寺□」「川巧部　江埼銘　数田□紀」	短辺のスタンプ	ナデ				不明
2号煙 35図6	平瓦	厚3.1.8	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	ナデ	製作面のスタンプ　中央に無字を入れた「田銘」と数字の「四」と金門の「門」「月名の「月」と「名」	――	ナデ				不明
2号煙 35図7	平瓦	厚3.1.8	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	ナデ	製作面のスタンプ　中央に無字を入れた「技銘」と「武門部除水」と都田村の「柳田」が残る	――	ナデ				不明
2号煙 35図8	平瓦	厚3.1.8	瓦質 黒灰色　硬質	黒色	ナデ	製作面のスタンプ　中央に無字を入れた「技銘」と「武門部除水」と都田村の「柳田」が残る	――	ナデ				不明

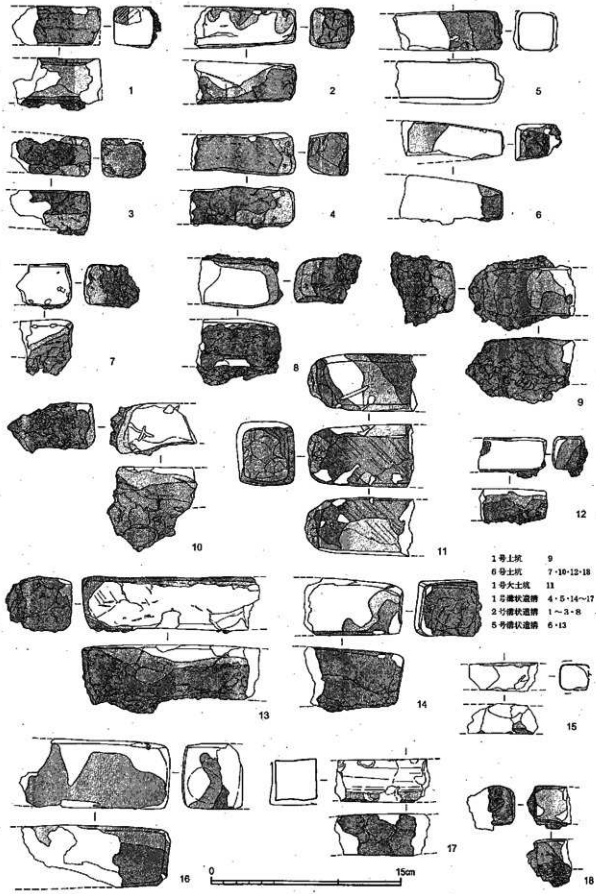
表9　2次調査出土瓦観察表(2)



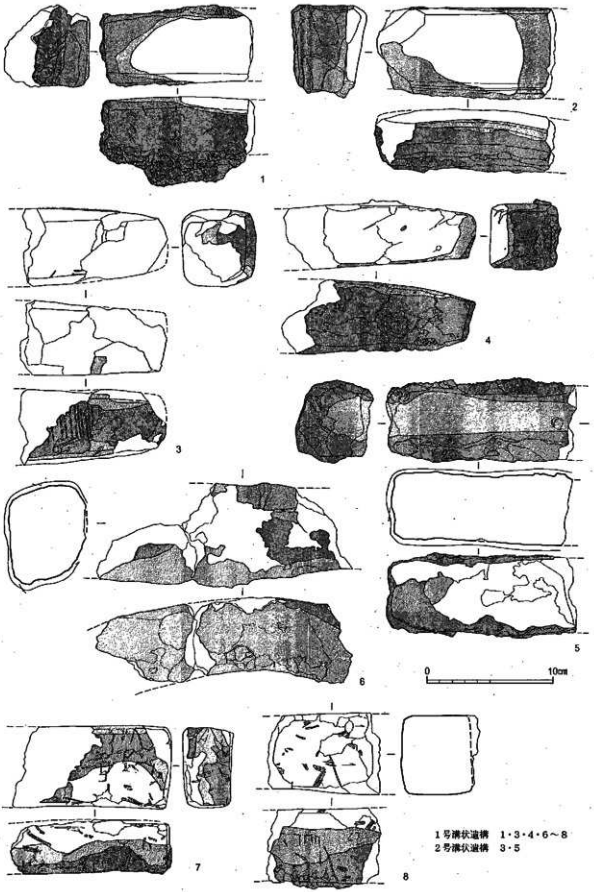
第36図　2次調査出土不明土製品実測図1 (1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	各面の特徴
掃図番号	形状	(）は復元値	胎の特徴	
図版番号	遺存名			
2号後36図1	土製品不明無紋状土製品	長5.7 高2.2 幅2.8 重17.9	土師質 精緻色 黒匠質 砂 褐色粒子 含む	面は平滑に整形され、天側した面を無くす面と小口面が例ている
2号後36図2 図版9	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重4.2	土師質 雲母色 金雲母 含む	面は平滑に整形され、下面がよく磨けており、側面と小口面は下半分が無くなっている。上面は丸く整形されている
1号溝36図3	不明品無紋状土製品	長3.4 高1.8 幅2.2 重2.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 上側に離象あり
1号溝36図4	不明品無紋状土製品	長3.6 高1.8 幅2.6 重3.6	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 上側に離象あり
1号溝36図5	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高1.5 幅2.6 重3.1	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図6	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子	面は平坦に整形され、小口部は面に一部がよく磨けており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面は離象あり
1号溝36図7	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図8	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 含む	面は平坦に整形され、小口部は面に一部がよく磨けており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面に離象あり
1号溝36図9	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図10	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図11	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
9号土坑34図1	土製品不明無紋状土製品	長5.4 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子少ない	上面が平面に整形され、多用は見ていない 全面がよく磨けており 上側面と上側面に焼けの跡が残っている 上面は小口面に離象あり
2号溝36図9	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高1.8 幅2.6 重3.2	土師質 緻密な一般胎色 全雲母含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図10	土製品不明無紋状土製品	長3.8 高1.8 幅3.6 重4.2	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
5号後36図11	土製品不明無紋状土製品	長3.5 高1.8 幅3.6 重4.2	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 含む	面は平坦に整形され、小口部は面に一部がよく磨けており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面に離象あり
6号土坑36図12	土製品不明無紋状土製品	長3.7 高2.2 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図13	土製品不明無紋状土製品	長3.7 高2.5 幅3.6 重5.4	土師質 緻密な一般胎色 黒雲母含む	上面は平坦で、整形されるもの 上側は丸く磨けており 側面と小口面は下半分が磨かれている 下面は離象あり
1号溝36図14	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.0 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 黒雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
2号溝36図15	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.2	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦に整形され、小口部は面に一部がよく磨けており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面は離象あり
1号溝36図16	土製品不明無紋状土製品	長3.5 高2.5 幅3.6 重3.2	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図17	土製品不明無紋状土製品	長3.5 高2.0 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 金雲母・白色粒子含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
5号後36図18	土製品不明無紋状土製品	長3.7 高2.2 幅3.6 重3.6	土師質 緻密な一般胎色 金雲母・白色粒子含む 一部に雲母含む	面は平坦に整形されており、側面は凹凸をなしており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面は離象あり
2号後36図19	土製品不明無紋状土製品	長3.8 高2.5 幅3.6 重4.2	土師質 緻密な一般胎色 雲母含む 一部に雲母	面は平坦に整形され、小口部は面に一部がよく磨けており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面は離象あり
6号土坑36図20	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦に整形され、小口部は面に一部がよく磨けており、側面と小口面は下半分が磨かれている 上面は丸く整形されている 上側は丸く磨けており 上面と側面は下半分が磨かれている 下面は離象あり
1号溝36図21	土製品不明無紋状土製品	長2.6 高2.3 幅3.6 重2.0	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子	上面に平面部があり、他面は出ふを 下面は、上面が磨かれており 下面は、上面と小口面はよく磨けている
1号溝36図22	土製品不明無紋状土製品	長3.9 高3.3 幅4.6 重8.2	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	表面平面に整形され、下面は磨けている 下面に離象あり
2号後37図1	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高3.3 幅4.6 重7.2	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 金雲母 含む	面は平坦に整形され、下面は磨けている 下面に離象あり
2号後37図2	土製品不明無紋状土製品	長3.7 高3.3 幅4.6 重7.2	土師質 緻密な一般胎色 内色粒子 金雲母 含む	面は平坦に整形され、下面は磨けている 下面に離象あり
2号後37図3	土製品不明無紋状土製品	長3.6.3 高3.3 幅4.6 重7.2	土師質 緻密な一般胎色 黒匠質 含む	面は平坦に整形されているが変形している。下面は、下面がよく磨けている 下面に離象あり
1号後37図4	土製品不明無紋状土製品	長3.4.5 高2.5 幅3.4 重7.1	土師質 緻密な一般胎色 金雲母 含む	面は平坦に整形され、オサメ手形の跡のナデが見られる。下面が、よく磨けており 側面は、下面と小口面は下半分が磨かれている。また凹凸が見られている
1号後37図5	土製品不明無紋状土製品	長3.8.6 高3.3 幅4.6 重7.2	土師質 緻密な一般胎色 黒匠質 含む	面は平坦に整形され、オサメ手形の跡のナデが見られる。下面が、よく磨けており 側面は、下面と小口面は下半分が磨かれている。また凹凸が見られている
5号後37図6	土製品不明無紋状土製品	長3.7.9 高3.3 幅4.6 重7.2	土師質 緻密な一般胎色 金雲母 含む	面は平坦に整形され、下面と小口面が磨かれている 下面が、よく磨けており 側面は、下面と小口面は下半分が磨かれている 上面は凹凸があり
6号土坑37図7	土製品不明無紋状土製品	長3.7 高2.2 幅3.6 重4.2	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図23	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図24	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図25	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図26	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図27	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図28	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図29	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図30	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図31	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図32	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図33	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図34	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図35	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図36	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図37	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図38	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図39	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図40	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図41	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図42	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図43	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図44	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝36図45	土製品不明無紋状土製品	長3.6 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
6号土坑37図1	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図2	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図3	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図4	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図5	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図6	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図7	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図8	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図9	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図10	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図11	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図12	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図13	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図14	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図15	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図16	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図17	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図18	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図19	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図20	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図21	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図22	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図23	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図24	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図25	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図26	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図27	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図28	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図29	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図30	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図31	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図32	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図33	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図34	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図35	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図36	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図37	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図38	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図39	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図40	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図41	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図42	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図43	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図44	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり
1号溝37図45	土製品不明無紋状土製品	長3.4 高2.2 幅3.6 重3.4	土師質 緻密な一般胎色 白色粒子 金雲母 含む	面は平坦が認められ 全面よく磨けているが上側と上側面に焼けの跡が残っている 下面に離象あり

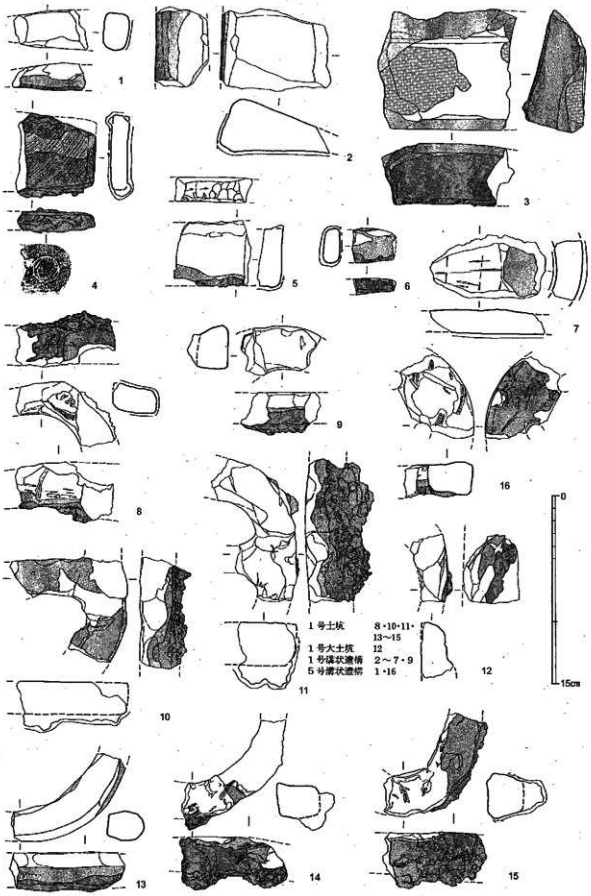
表10　2次調査出土不明土製品観察表(1)



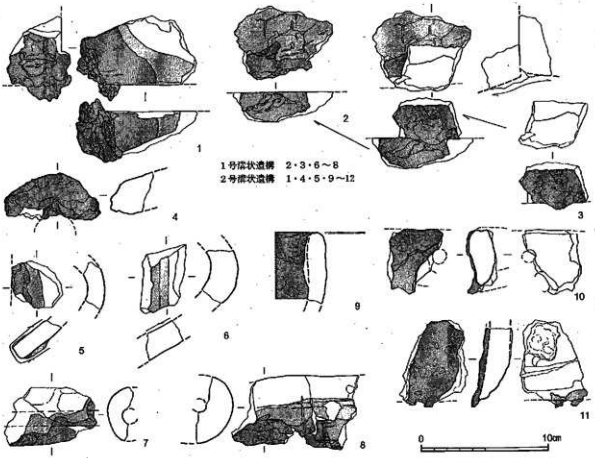
第37図　2次調査出土不明土製品実測図2 (1/3)



第38図　2次調査出土不明土製品実測図3 (1/3)



第39図　2次調査出土不明土製品・サナ状土製品実測図(1/3)

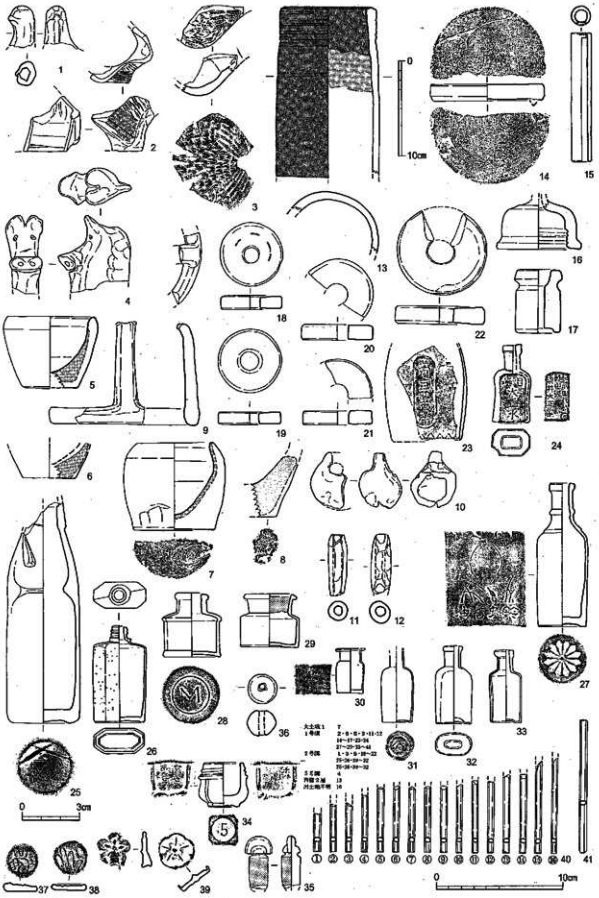


第40図　2次調査出土炉壁状土製品・輪羽口・湯口実測図(1/3)

遺構名 掲図番号 図版番号	器種 形状 道路名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	各面の特徴
1号十抗 39図11 図版9	土製品 ヤナ状土製品	長8.11.3 高5.3.4 幅3.7重量93g	土師質 橙黄色～黄灰色 長石混多い	上面のみ平坦で、上部を下にして作ったものか　下面のみよく焼けており編目がつく　側面は下半分が焼けている
1号大土抗 39図12	土製品 ヤナ状土製品	長5.5.4 高2.3.4 幅3.2重量39g	土師質 暗黄色～灰色系 黒色混多い	上面のみ平坦で、上部を下にして作ったものか　下面のみよく焼けており側面がつく　側面は下半分が焼けている
1号十抗 39図13 図版9	土製品 ヤナ状土製品	長5.8.9 高5.3.1 幅3.3重量74g	土師質 暗橙色～暗黄灰色、石英混多い　白粒子多い	上面のみ平坦で、上部を下にして作ったものか　下面のみよく焼けており、側面は下半分が焼けている
1号土抗 39図14	土製品 ヤナ状土製品	長3.8.9 高3.2.1 幅2.8重量35g	土師質 暗黄色～黄橙色 黒粒混多い	上面のみ平坦で、上部を下にして作ったものか　側面、下部、側面がよく焼けており、編目がつく　上面は焼けが弱い
1号十抗 39図15	土製品 ヤナ状土製品	長3.8.3 高2.3.4 幅2.6重量16g	土師質 暗橙色～黄橙色 黒粒混多い	上面のみ平坦で、上部を下にして作ったものか　下面、側面がよく焼けている。編目がつく　上面は焼けが弱い部分あり
5号遺 39図16 図版9	土製品 ヤナ状土製品	長5.6.3 高3.2.7 幅3.5重量64g	河原質で砂粒が多い 暗橙色～暗黄灰色 金雲母・黒粒混入	河原質で砂粒が多い　下面のみよく焼けており編目がつく　側面は下半分が焼けている　上面は焼けがとんど焼けていない
2号炉 40図1 図版9	土製品 炉壁状土製品	長5.8.5 高3.3.3 幅4.9重量150g	土師質 暗橙色～黄橙色 白粒子多い	側面の平坦部　上部は平滑な平面で、小さな穴が多い　平面でかなり焼けている　表面が剥離によるものか　ことから、内部の熱を直ちにいち早く吸収する
1号炉 40図2	土製品 炉壁状土製品	長5.7.8 高3.6.5 幅3.7重量70g	土師質 暗橙灰色～黄橙色 白粒子多い	2面は平坦面で、小穴状は熱発散し、ハの字状に裏から表へ向かって焼けが強い
2号炉 40図3	土製品 炉壁状土製品	長5.4.5 高3.3.7 幅3.7重量47g	土師質 暗黄灰色～黄橙色 白粒子多い	2面は平坦面で、小穴状は熱発散し、ハの字状に裏から表へ向かって焼けが強い

遺構名 掲図番号 図版番号	器種 形状 道路名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	各面の特徴
2号炉 40図4	土製品 輪羽口	長5.3.3 径(10.2) 孔径(1.6)	土師質 暗黄灰色～黄橙色 白粒子多い	先端部で炭化はガラス化
1号炉 40図5	土製品 輪羽口	長3.4.0 径(4.5) 孔径(1.5)重量26g	土師質 暗橙色～暗灰色、石英混入 白粒子多い　金雲母多い	先端がガラス化している
2号炉 40図6	土製品 輪羽口	長3.5. 径(7.0) 孔径(1.5)	土師質 暗黄灰色～黄橙色、石英混入 白粒子多い　長石	先端まで溶かで炭化している　一部は黄灰～紫褐色を呈する
1号炉 40図7	土製品 輪羽口	長3.7.2 径(4.5) 孔径(1.3)	土師質 暗褐灰色～淡黄色 白粒子多い	先端に近い部分が溶融ガラスとなり焼けており、一部は黄灰～褐橙色を呈する
1号炉 40図8	土製品 輪羽口	長3.10.0 径(5.0) 孔径(1.0)	土師質 暗黄灰色～黄橙色 白粒子多い	先端に近い部分が溶融ガラスとなり焼けており、一部は黄灰～褐橙色を呈する
2号炉 40図9 図版9	土製品 湯口	厚4.4.5 径(15cm前後)	土師質 黒灰色～淡橙色 白粒子多い	外面に取者はなく、内外の跡が明瞭　外面は黄橙色、内面は黒灰色を呈する
2号炉 40図10 図版9	土製品 湯口	厚5.5.1 径(10cm前後)	土師質 黒灰色～暗黄灰色 白粒子多い	内面に取者あり、外側は剥落　円形と三角形の穿孔がある
2号炉 40図11 図版9	土製品 湯口	厚6.7.7 径(10cm前後)	土師質 暗灰～暗黄灰、石英 粒子・白粒子多い	内面に補修あり、ド部の孔から下に垂れており、外面は孔の周りが熱変している

表10　2次調査出土不明土製品観察表(2)



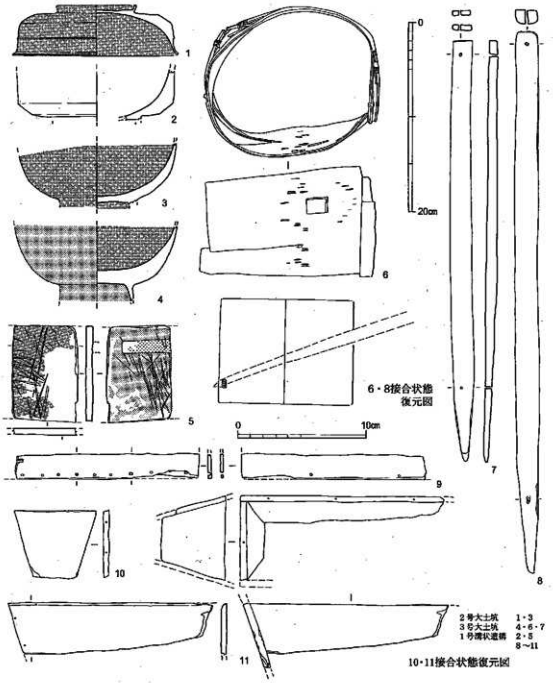
第41図　２次調査出土土製品・ガラス製品実測図（１・３・９・13・26は1/4、37～39は1/2、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の特徴	色調	調整・成形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	産地推定	推定年代
掃部寮号	形状	(　)は復元値							
国版番号	器称名								
2号溝 41図2 図版9	十脚付 鉢蓋	口径22.6/22.7 器高22.8/22.2	土師質 密 黒褐色、軟質 金雲母多い	褐灰色	型合わせでナデ仕上げ	不明	合わせ目が残り、合わせうしずれている 彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田幾か	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図2 図版9	土製品 高坏	足幅4.9 受幅6.0 高2.4.3	土師質 密 黒褐色、軟質 金雲母多い	褐灰色	石石の型合わせでナデ仕上げ	不明	中央で下部が窄いているので畿内か 彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田幾か	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図3 図版9	土製品 鉢蓋	口径22.6/22.7 器高22.8/22.2	土師質 密 黒褐色、軟質 金雲母多い	褐灰色	上下の型合わせ　摘孔あり	不明	合わせ目でケズ痕している　彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田幾か	19c ↓ 20c前葉
5号溝 41図4 図版9	土製品 皿形	足幅5.8 型幅2.9	土師質 黄灰褐色、軟質	黄灰褐色	平型わで丁寧なつくり	不明	彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田幾か 胎土とは異なる	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図5 図版9	小皿	口径(7.6) 底径(4.4) 器高2.5	土師質 黄灰白色、軟質	内外黄灰白色が、内面は上部淡く赤味を帯び、底部は赤味を帯び	底部技法・調整不明瞭　口縁部を内側まで内外ナデ　外底部欠損のため切り離し方法不明	不明		在地系	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図6	小皿 燈明皿	口径(7.8) 底径(4.4) 器高2.4	土師質 黄灰白色、軟質 金雲母多い	内外黄灰白色が、内面は上部淡く赤味を帯び、底部は赤味を帯び	底部のため表裏不明瞭　内面は内外ナデ　糸切り	不明		在地系	19c ↓ 20c前葉
19大土坑 41図7	小皿 燈明皿	口径(15.8) 底径(9.4) 器高3.4	土師質 黄灰白色、軟質 金雲母多い	内外黄灰白色が、内面は上部淡く赤味を帯び、底部は赤味を帯び	ロクロ成形　下位はケズリ状のナデ　口縁部ヨコナデ　糸切り	不明		在地系	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図8	小皿 燈明皿	口径(7.8) 底径(4.4) 器高2.4	土師質 黄灰白色、軟質 金雲母多い	内外黄灰白色が、内面は上部淡く赤味を帯び、底部は赤味を帯び	ひずんでいるため反転復元できない　内外ナデ　糸切り	不明		在地系	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図9	土製品 皿形	底径(15.8) 器高(0.9)	土師質 黄灰白色、軟質 無孔	灰白色	平型わでナデ仕上げ	不明	底面は段階のため型押痕跡 使用のため温度	筑後不明 在地が新では少	19c ↓ 20c前葉
新4溝不明 41図10	土製品 上台	横大径(2.4) 型高3.9 重量6g	土師質 密 黄褐色、軟質 混入砂多い	褐黄色	手捏ねでナデ仕上げ　下位に長方形の孔　つまみに穿孔	不明		在地系 筑後市水田幾か	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図11	土製品 上台	最大径 8.3×1.8図87 底厚9.2g	土師質 密 赤褐色、軟質 混入砂少ない	黄褐色	手捏ねでナデ仕上げ	不明		在地系 筑後市水田幾か	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図12	土製品 上台	最大(4.6) 径6.1×1.8図87 重量18.1g	土師質 密 赤褐色、軟質 混入砂多い	黄褐色	手捏ねでナデ仕上げ	不明		在地系 筑後市水田幾か	19c ↓ 20c前葉
表6層確認 41図13 図版9	土管	口径(10.2) 最大径(11.0)	陶器 緻密、軟質　白色粒子少 ケズ痕入り多い	外面から内面に掛け赤褐色の上に淡い黄色の釉一部掛	口縁部の化粧は面作りによるものか　内面は調整なし	—	鉄釉の痕跡が小石状態に近い	筑後不明 筑前村小石原焼	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図14 図版9	無頭具 4足ハマ	径9.0 厚5.1.4	砂質(白色) 白色	明灰色	横置ナデ　上下両面糸切り　下面に足の痕跡多くあり	—	焼成色調の差で使用段階の差を推いたとわかる	高取不明	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図15	碗不明 碗台	径8.10.2 底1.1 高1.6図82	砂質(白磁) 白色	内面と上下端部に淡い白色の釉掛	上面のみ一部に歪み	—		肥前系	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図16	配電盤の蓋か	幅8.4.8 重量48.g	硬質(白磁) 白色　ガラス質 キメ粗は荒砂	内外面に孔内の部分の表面に淡い黄色の釉掛	硬質が露胎	—	側面にネジ状のあるス型配電盤の中パーツであろう	瀬戸・美濃系	19c ↓ 20c後葉
1号溝 41図17	碗不 ノップ脚か	径3.8 底径3.0 高0.6図82	硬質(白磁) 白色	全面に孔白色の透明釉	—	青白状の下面高台に削削ま	純なし	肥前系	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図18	戸車	径5.0 厚2.1.5 軸径2.9g	硬質(白磁) 白色	軸孔内面と側面に淡い釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り　上下面面取ヘラケズリ	上下面にアルミナ付着　弓具あのハマとしても転用したか	使用のため側面が摩滅している	肥前系	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図19	戸車	径5.0 厚2.1.5 軸径2.9g	硬質(白磁) 白色	軸孔内面と側面に淡い釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り　上下面面取ヘラケズリ	—		肥前系	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図20	戸車	径5.6 厚2.1.6 軸径2.9g	硬質(白磁) 灰白色　黒色粒子多い	軸孔内面と側面に淡い釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り　上下面面取ヘラケズリ	上下面にアルミナ付着　弓具あのハマとしても転用したか		肥前系	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図21	戸車	径5.6 厚2.1.6 軸径2.9g	硬質(白磁) 白色	軸孔内面と側面に淡い釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り　上下面面取ヘラケズリ	—		肥前系	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図22	戸車	径7.2 厚2.1.1 軸径2.9g	硬質(白磁) 白色　黒色粒子多い	軸孔内面と側面に淡い釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り　上下面面取ヘラケズリ	—	使用のため側面と上面摩滅が摩滅している	肥前系	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図23 図版9	小瓶	最大径6.6 底径(3.5) 高最13g	緻密ガラス 気泡なし	—	鋳造　外面に「帝国万歳」と刻印文の陰刻	—	刻印の部分わず、羽根に「万歳」の文字が残っている	明治以降	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図24 図版9	小瓶 とじ込み栓 首部欠	口径1.6 底径4.3.0 胴最7径6.0g	緻密ガラス 気泡なし	—	鋳造　側面の一角に古風用のガラス棒をセット下する溝あり　上げ底	—	一部に「万歳」「天皇」対象に「帝国万歳」刻印が残っている	不明	19c ↓ 20c前半
2号溝 41図25	瓶 ラムネ瓶	最大径6.6 底径4.5 高最383g	青色ガラス 気泡あり	—	鋳造　上げ底　歪等の痕跡あり	—	—	不明	19c ↓ 20c前葉
2号溝 41図26	小瓶 銅キャップ 化粧瓶	口径1.6 底径4.0/5.4 胴最7径6.0g	緻色ガラス 気泡多い	—	鋳造　型合わせの鋳型で斜めの接合部が残る	—		不明	19c ↓ 20c前半
1号溝 41図27	小瓶 とじ込み栓 骨水瓶	口径3.0 底径3.8 胴径3.5径18g	透明ガラス 気泡なし	—	鋳造　型合わせの鋳型で接合部が残る　花形を模倣	—	側面に「鈴虫香味」と表裏の部位が明瞭されている	梅村製造所後	1912 (大正元)年～
1号溝 41図28	小瓶 とじ込み栓 インク瓶	口径7.7 底径4.6 胴径2.9径8g	透明ガラス 気泡なし	—	鋳造　型合わせの鋳型で接合部が残る　上げ底　円に縦平を描刻	—	「ヲ」の線刻から東京市丸善インク製とわかる	—	1878～
1号溝 41図29	小瓶 とじ込み栓 ビール瓶	口径4.2 底径4.6 胴径2.9径6g	透明ガラス 気泡なし	—	吹き中成　接合後口縁を裏返して切り取げている　底と接する口縁部は割りつぶし　上げ底	—	大分県広瀬町「ビール」に銘刻あり	「純分取不明」製瓶の自動の製造	19c ↓ 20c前半
2号溝 41図30 図版9	小瓶 とじ込み栓 銅キャップ	口径2.3 底径2.1 胴径3.5径12g	緻密ガラス 気泡あり	—	鋳造　型合わせの鋳型で接合部が残る　口縁部の歪み	—	側面に「安市　安物」と陽刻されており、衣類系である	不明	19c ↓ 20c前後
2号溝 41図31	小瓶 とじ込み栓 高級水	口径1.5 底径3.8 胴径4.0径13g	透明ガラス 気泡なし	—	鋳造　型合わせの鋳型で接合部が残る　口縁歪みの歪みあり　上げ底	—	歪みあり	不明	19c ↓ 20c前後
2号溝 41図32	小瓶 とじ込み栓 清水か	口径1.5 底径2.9 胴径4.0径13g	透明ガラス 気泡なし	—	鋳造　型合わせの鋳型で接合部が残る　口縁歪みの歪みあり　上げ底　小さな凹点あり	—	気泡以外に側面に歪みがある	不明	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図33	小瓶 とじ込み栓 清水か	口径1.5 底径2.9 胴径4.0径13g	透明ガラス 気泡なし	—	鋳造　型合わせの鋳型で接合部が残る　上げ底　歪等の痕跡あり	—	—	不明	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図34	小瓶 銅キャップ 化粧瓶	口径5.2 底径3.4 胴径3.9径8g	白ガラス	—	鋳造　「ホーカー」「愛媛県松柳九一一七七号」と陽刻	—	「ホーカー」は品番か、白粉系で、他の容器から愛媛だろう	東京の福島商太郎商店説	1912～
1号溝 41図35 図版9	小瓶型 とじ込み栓	口径3.6 底径3.4 胴径3.9径8g	透明ガラス 気泡なし	—	吹き中成　胴の口縁部と底部を部分的に割りつぶし大胴してっかり　切り離し底部ヨコナデ	—	—	不明	19c ↓ 20c前葉
1号溝 41図36	玉巻の玉	径1.4.0図83 厚5.1.3 重量6.0.g	緻一白ガラス 気泡なし	—	巻き製法	—	—	—	19c ↓ 20c前葉

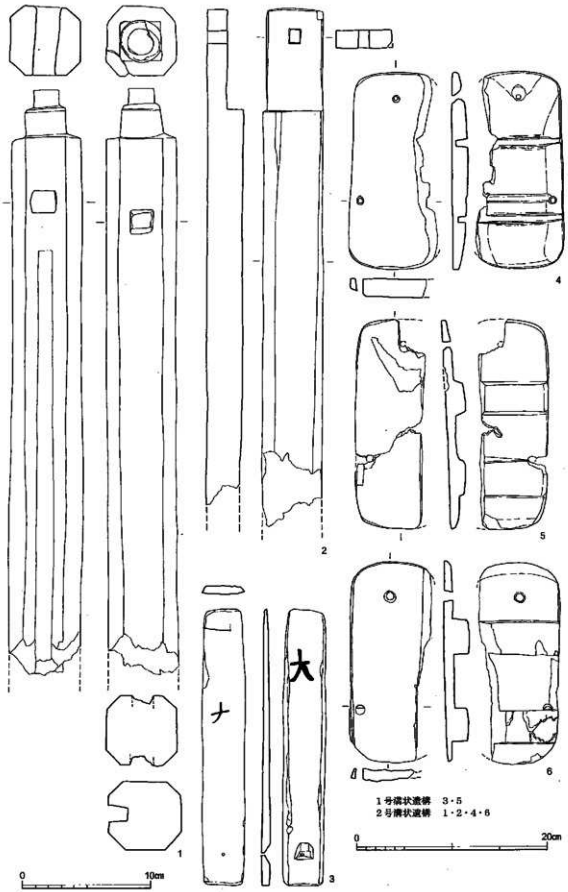
表11　2次調査出土土・ガラス製品観察表

31図８は「輜重自動車班」と読める従軍記念杯で、トラックらしいモチーフの上に数字の18と読める記号がある。輜重兵第18大隊は明治40年頃には北九州市小倉にあったが、41年に三井郡国分村（現小郡市）に移っているので、この隊に所属した人物のものかもしれない。

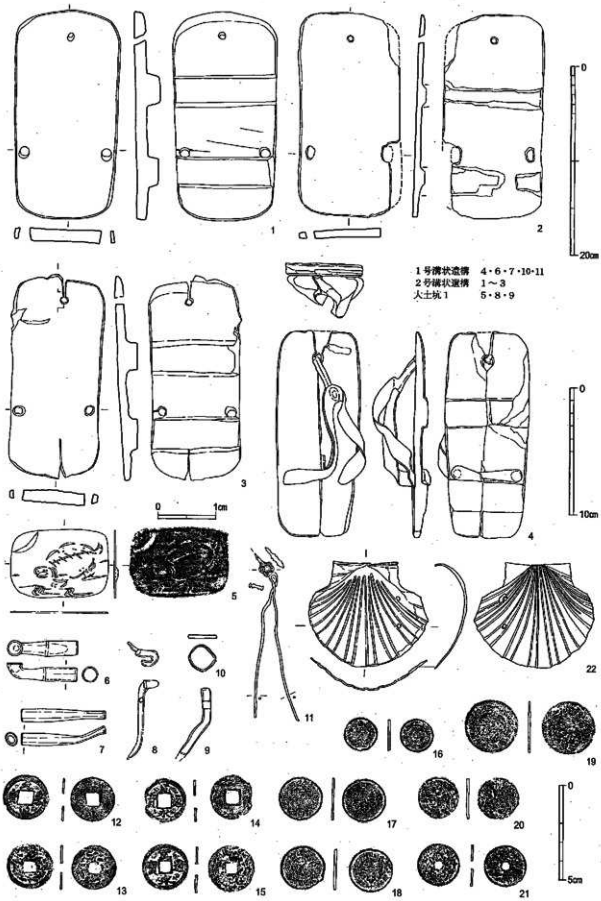
２次調査から出土した遺物は、溝状遺構のものがほとんどであった。この溝状遺構は現行のクリークの東壁部であることから、最深部を調査することはできなかった。そのため、最も古い時期の資料を得られなかった可能性が高い。



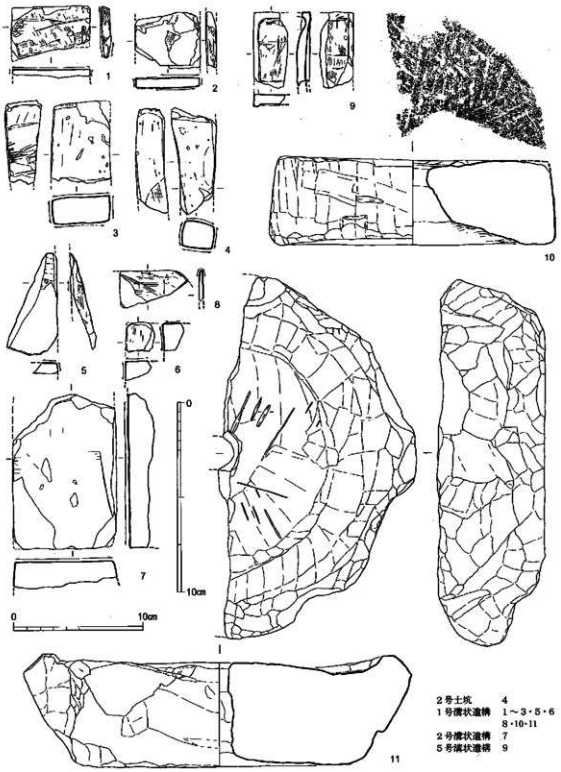
第42図　２次調査出土木製品実測図１（１～５・９は1/3、他は1/4）



第43図　2次調査出土木製品実測図2（3は1/3、他は1/4）



第44図　2次調査出土木・金属・貝製品実測図(1～4は1/4、5は1/1、6～10・22は1/3、11～21は1/2)



第45図　2次調査出土石製品実測図（10・11は1/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	調整・成形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	重定番号	挿図番号
挿図番号 形状		( )は復元値	胎の特徴					
図版番号	遺物名							
1号房 41図37 図版9	おはじき	最大径1.8 厚0.5 重2.3g	緑ガラス 気泡あり 縞状に暗緑色が入る	縁金 上縁にヒャムけんの「ちょき」のスタンプ	——		不明	19c 20c前葉
1号房 41図38 図版9	おはじき	最大径1.8 厚0.5 重2.4g	白ガラス 気泡あり 縞状に暗緑色が入る	縁金 上縁にヒャムけんの「ぴー」のスタンプ	——		不明	19c 20c前葉
1号房 41図39 図版9	おはじき	長軸1.8 厚0.6 重2.4g	緑色ガラス 縞状に暗緑色が入る	縁金 板花形の縁端に上縁から花のスタンプ	——		不明	19c 20c前葉
1号房 41図40	ガラス製すのこ状敷き台	最長7.5 幅0.6 厚0.4	緑色ガラス	縁金 縁部をカットした後、部分的に面取りしている 41図41と同じもの	——	墨跡の残存のみ実測したが、両端欠損したものは敬遠める	不明	19c 20c前葉
1号房 41図41 図版9	ガラス製すのこ状敷き台	長さ10.5 幅0.6 厚0.4 最長8.5g	緑色ガラス	縁金 端部を カットした後、部分的に面取りしている	——	墨跡の残存のみ実測したが、両端欠損したものは敬遠める	不明	19c 20c前葉

遺構名	器種	法量(cm)	特徴	調整・成形・装飾技法	製作技法	特徴	重定番号	挿図番号
挿図番号 形状		( )は復元値						
図版番号	遺物名							
大十坑2 42図1 図版10	中勝瓶 タメ形	最径(12.6) 最高(2.5) つまみ径(6.4)	下地は赤泥 赤釉全面	鉄釉	型2 轆0.3	欠損部はわからないが底部がつくものと思われる		
1号遺上層 42図2	中勝瓶 丸形	最大径(12.4) 高台径(6.4)	鉄化しており詳不明	鉄釉	型3.1 轆0.1	横型 頸部は異常で中央に径0.4の孔あり その周囲に0.2の突みがあり ガラスを詰めふたしたものか		
大土坑2 42図3 図版10	中汁椀 丸形	最大径(12.4) 高台径(6.4)	下地は鉄泥 赤釉全面	鉄釉 44図12 図版10	型2 轆0.12	全面10%程剥離 文字は墨書している		
3号大土坑 42図4 図版10	中鉢椀 丸形	最大径(12.6) 高台径(6.4)	下地は鉄泥 外面と外底は黒釉 内面は赤釉	鉄釉 44図13 図版10	型2.35 轆0.15	しんにょうの字体が特徴的だが一致するものがない 胎土は黒色 1636(寛永11)以降		
人七坑3 42図5 図版10	不明木製 不明	長5.7.5 幅4.6 厚3.0.6	下地は鉄泥 表面は赤釉 裏面は黒釉 裏面には方形の穿のない凹部があり、一部しかない 内部は黒 表裏共ともに釉が残るとされる程として再利用したか	鉄釉 44図14 図版10	型2.22 轆0.13	断面木で、「人」の字体が底部で、横に続きであり、別の用途していることから 1706(宝永5)年以降		
3号大土坑 42図6 図版10	柄杓	径(14.0) 高(11.8)	柄を挿す為の孔があり、柄部の穿の為と同じ孔で下の用途を補強している ヴナムが大きく 鉄釉は復元値	鉄釉 44図15 図版10	型2.45 轆0.14	古家本で、字体の小変化のため始金に一致しないが宝永13年から寛永17年頃鋳のものだろう 1636(寛永13)～1640(寛永17)年頃鋳		
3号大土坑 42図7 図版10	柄杓の柄	最5.4.5 幅2.5 厚0.9	2重側に穿孔があり、先端部の穿孔位置が先端から離れているので、別の部品が側に挿ぐことがわかる	鉄釉 44図16 図版10	型1.6 轆0.14	大正2年鋳あり		
1号遺 42図8 図版10	柄杓の柄	長さ60.2 幅2.4 厚3.5	2重側に穿孔があり、先端部の穿孔位置が先端から離れているので、別の部品が側に挿ぐことがわかる	鉄釉 44図17 図版10	型2.25 轆0.11	大正10年鋳あり		
1号遺 42図9 図版10	鉄製鍋の脚取 骨ヶ	長さ6.4 高3.7.2 厚3.0.5	内面に10個並 外端に2個穿の末引孔があり、内端は異端しているので 側面の下端部にあたる	鉄釉 44図18 図版10	型2.25 轆0.11	昭和13年鋳あり		
1号房上層 42図10 図版10	鉄製鍋の脚取	長さ22.5 高3.5.4 厚3.0.5	脚部断面 2箇所、上面に1箇所木釘があり、上下部分的のものであるとから、横脚する小口部上 鋳型	鉄釉 44図19 図版10	型2.6 轆0.14	明治6年鋳あり		
1号房上層 42図11 図版10	鉄製鍋の脚取	長さ21.3 高3.2.0 厚3.3.3	内面垂直に2箇所、上面に3箇所木釘があり、上面が鋳めであることから、横脚する 側面上 鋳型	鉄釉 44図20 図版10	型2.1 轆0.11	鋳部が欠損している		
2号遺南井 43図1 図版10	鉄無釉杯	長さ71.2 幅7.1 厚3.7.3	下部の脚は四角錐の上に円柱状を並す 側面の脚は上が実用 下は木製が残っている 脚のある上端から離れたところに脚があり、同じく側面に板の付は心込み鋳がある	鉄釉 44図21 図版10	型2.5 轆0.11	大正12年鋳あり		
2号遺南井 43図2 図版10	鉄無釉杯	長さ52.9 幅5.3 厚3.3.3	上端の脚は板状で留め孔があるので、側面で鋳型であろう	鉄釉 44図22 図版10	型3.8.2 轆0.3	赤良の内面を利用 鋳と接合する穿孔2つあり		
1号房 43図3 図版10	木製	最大径11.8 高3.6 厚3.0.6	上が高く下端に穿孔しているので何か上打ちつけたもの 表は「大」、裏は「大」だけ読み取れる	鉄釉 45図1	型5.4.0 轆7.7 厚1.2 厚度22.8g	柿品片切鉋 仕上げ版 裏面は刺板 側面・上転面は底形時の研磨 下面は欠損 鉋刃は研ぎ直され再利用されている 1 面使用		
2号遺下層 43図4 図版10	高麗下駄	最大7.20.9 幅10.4 厚3.2.0	側面は曲げている 目孔は両方から穿孔されている 裏面には穿をつなぐ溝があり、表に抜を通すタイプ	鉄釉 45図2	型5.4.4 轆5.8 厚3.5.8度27.g	柿品片切鉋 仕上げ版 側面は底形時の研磨 2 面使用		
1号遺 43図5	遠麗下駄	長さ22.3 幅7.2 厚3.2.2	快適が前歯より細り減っている 目孔は両方から穿孔されている	鉄釉 45図3	型5.6.6 轆4.8 厚3.5.8度13.1g	柿沉切 (大革石) 製 仕上げ版 上端面は底形時の研磨 側面に刃跡が多く残る 4 面使用		
2号遺 43図6 図版10	遠麗下駄	長さ21.3 幅6.2 厚3.2.7	歯の擦り減り少しない	鉄釉 45図4	型5.8.3 轆5.3 厚3.2.4度度40.g	柿沉切 (天革石) 製 仕上げ版 上端面は底形時の研磨 4 面使用		
2号遺下層 44図1 図版10	遠麗下駄	長さ22.0 幅11.9 厚3.2.8	快適が前歯より細り減っている 目孔は斜めに穿孔されている	鉄釉 45図5	型5.6 轆6.7 厚3.1.7度度30.4g	百姓鉋 仕上げ版 上端面・裏面は底形時の研磨 1 面使用 欠損あり		
2号遺 44図2 図版10	遠麗下駄	長さ21.5 幅10.6 厚3.1.4	両歯ともほとんどくなるほど擦り減っている 目孔は斜めに穿孔されている	鉄釉 45図6	型5.2.2 轆4.2 厚3.1.6度度13.g	鉋刃は底形時の研磨 1 面使用		
2号房 44図3 図版10	遠麗下駄	長さ21.8 幅9.8 厚3.2.3	両歯ともほとんどくなるほど擦り減っている 目孔の為縁を両辺から穿孔されている	鉄釉 45図7	型5.3.3 轆5.3 厚3.6度度34.g	柿品片切鉋 仕上げ版 裏面は欠損 下端面・側面は底形時の研磨 1 面使用		
1号房 44図4 図版10	遠麗下駄 ゴム製品	長さ22.3 幅3.4	両歯ともほとんどくなるほど擦り減っている 金ゴムの為縁を両辺から穿孔されている 穿の為	鉄釉 45図8	型5.12.3 轆8.0 厚2.8度度9.5g	柿品片切鉋 横型 木神に入る部分は樹脂 さも欠くなっている 横脚は先端をもつ 使用痕は底方向で強い		
1号大土坑 44図5 図版10	舞り板	長さ24.4 幅4.4 厚2.0.05	側面に鋸で裁断したもの 月と水面の為 鋸刃は底面方向に傾き 穿を使っているとう だ 小さいことから盗ひ入れ袋の金具か	鉄釉 45図9	型5.6.0 轆6.6 厚1.8度度9.5g	柿品片切鉋 横型 木神に入る部分は樹脂 さも欠くなっている 横脚は先端をもつ 使用痕は底方向で強い		
1号遺上層 44図6 図版10	キセル用	長さ5.4 幅2.2 厚0.7度度17.8g	側面 樹脂製 鉋刃の跡が残っている 合わせ目が下面にある 水管が残っている	鉄釉 45図10	型5.2.2 轆2.0 厚0.7度度2.9g	柿品片切鉋 横型 木神に入る部分は樹脂 さも欠くなっている 横脚は先端をもつ 使用痕は底方向で強い		
1号房上層 44図7 図版10	キセル用 ハロ	長さ6.5 幅3.6 厚0.7	側面 樹脂製 合わせ目が下面にある 水管が残っている	鉄釉 45図11	型5.2.2 轆2.0 厚0.7度度2.9g	柿品片切鉋 横型 木神に入る部分は樹脂 さも欠くなっている 横脚は先端をもつ 使用痕は底方向で強い		
1号大土坑 44図8 図版10	釘	長さ6.2 幅2.2 重量6.g	上部を丸く曲げて留めている	鉄釉 45図12 図版10	長軸20.7 短軸(40.4) 径2.1.6 孔径3.6 重量7790.g	柿葺で手孔穿の黒区色の銅区皆無 八ム面 ハ型が 組ハノ工鋳が残る 鋳り目が鋳鋳 上下面方部は欠損 下部の孔口と鋳 鋳の巾手の鋳り出されている		
1号大土坑 44図9 図版10	釘	長さ5.2 幅2.2 重量7.g	頭は潰れているが、やや歪がっている	鉄釉 45図13 図版10	長軸20.7 短軸(40.4) 径2.1.6 孔径3.6 重量7790.g	柿葺で手孔穿の黒区色の銅区皆無 八ム面 ハ型が 組ハノ工鋳が残る 鋳り目が鋳鋳 上下面方部は欠損 下部の孔口と鋳 鋳の巾手の鋳り出されている		

表12　2次調査出土ガラス・木・金属・石製品観察表

3．3次調査

矢加部町屋敷遺跡3次調査では、土坑6基、溝状遺構5条などを検出した。基盤層は中央部から西半分が緩やかに下がっている。

東壁土層断面図（第48図2）のように、東端部には遺構面が2枚あり、調査した遺構面の50cm上に18世紀後半から19世紀中葉の遺構面が存在していた。隣接する2次調査の成果や調査区内の中央から西部が大きく攪乱を受けていたことから単層と誤認して掘削してしまった。

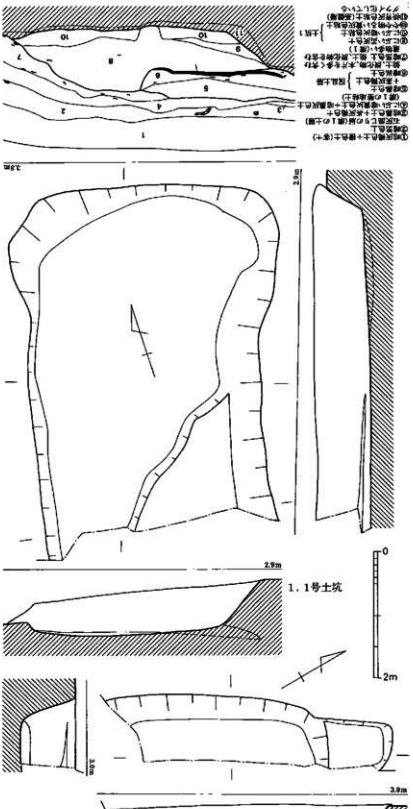
1）遺構

a）土坑

5号土坑は、遺構名を5号溝状遺構に付け替えており、欠番とする。8号土坑は調査時に土坑としていたが、4次調査の結果から、包含層の落ち込みと判断した。

1号土坑（図版11－2、第46図）

調査区中央南端に位置する平面方形の土坑で、南辺は調査区外に出ている。そのため長辺は調査区内で3.60m以上、短辺は2.87mを測る。主軸方向はN－17°20′－E。西辺は戦後の堆積層である暗黒色土層に切



第46図　3次調査1・2号土坑実測図(1/60)

られており、東辺はゴムを含む攪乱土坑に切られている。土層から見ると本来の掘り込み面はもっと高く、深さは98cm程あったようだが、検出面からは76cm程度であった。

埋土は粘土層で、自然堆積でなく一度に埋め戻した状態であった。

出土遺物は比較的少なく、廃棄土坑ではないようだ。年代は17世紀末～18世紀初頭。

2号土坑（図版11－3、第46図）

調査区南東隅に位置し、調査区外に遺構のほとんどが出ており、4次調査で東側の続きが検出され、平面方形の土坑であることが確認できた。調査区内の残存長で長軸457cm、短軸102cmで、深さは最深部で105cm程度。主軸方向はN－29°30′－E。

出土遺物はわずかで、小片が多いため年代は不明。

3号土坑（図版11－4・5、第47図）

調査区中央に位置する平面長方形の土坑である。主軸方向はN－69°－Wで、北西に位置するほぼ同規模の4号土坑と主軸方向を等しくする。長軸が426cm、短軸157cmで、最深部で55cm程である。埋土は灰色土である。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。

4号土坑（図版12－1・3、第47図）

調査区中央に位置する平面長方形の土坑である。主軸方向はN－69°－Wで、南東に位置するほぼ同規模の3号土坑と主軸方向を等しくする。長軸が451cm、短軸154cmで、最深部で92cmを測る。床面直上に中央部に木皮が敷かれていた。鉄滓が1点のみ出土している。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は19世紀前葉～中葉。

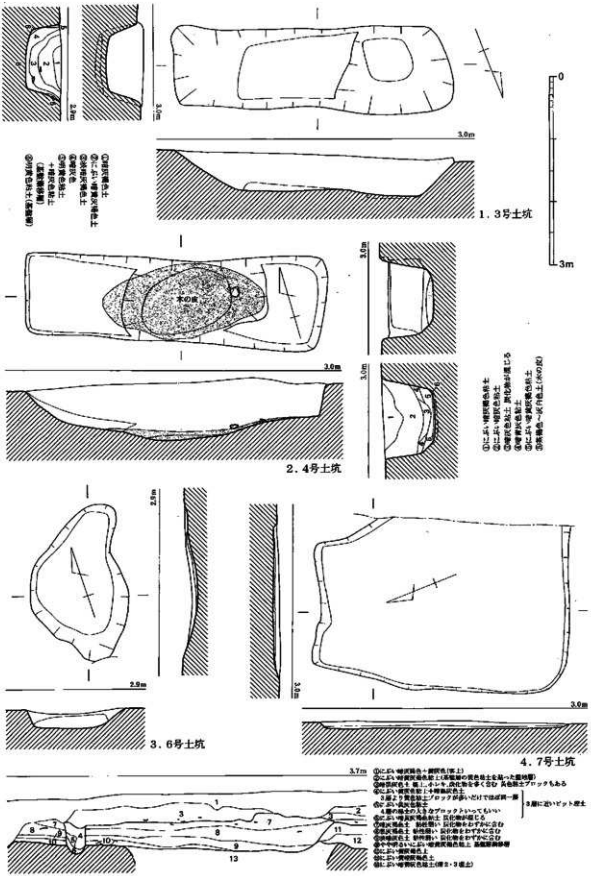
6号土坑（図版12－2、第47図）

調査区北西に位置する不整形な土坑である。長軸が254cm、短軸152cm。削平されており深さは28cm程しか残っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、埋土は灰褐色土の単一層であった。主軸方向はN－17°20′－Eをとる。

出土遺物はわずかで小片が多いため、年代は不明。

7号土坑（図版12－4・5、第47図）

調査区北東隅に位置する平面方形の土坑である。東端は調査区外に出ており、4次調査で続きが検出された。北端は緩やかに立ち上がっているため削平でプランが不明確になっている。2・3号溝状遺構を切っており、残存部で長軸が406cm、短軸は283cmであろう。主軸方向はN－22°－Eをとる。検出面を下げすぎているが、土層断面では最深部で60cm程残っていた。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不確定だか19世紀中葉の包含層の下から検出されており、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。



第47図　3次調査3・4・6・7号土坑実測図(1/60)

b）溝状遺構

1号溝状遺構（図版11－1、第3図）

調査区の西半に位置し、東西に引き込みが走る。西に隣接する現存クリークの一部であり、2次調査の1号溝状遺構と同一遺構である。上位に戦後の堆積層が被っており、これに切られている範囲を攪乱と判断した。隣接するクリークを護岸しているコンクリートにヒビが入っており、上位の戦後の堆積層を除去するとクリークの水圧で護岸が崩壊する可能性があったので、西部は戦後の堆積層を掘削しないものとし、掘削可能な範囲のみを調査した。南部では1号土坑を切っており、この切り合い部の東壁には杭で押さえられた横木が置かれていた。

この隣接クリークは調査終了後の工事に伴う掘削状況を見ることができた。標高0mぐらいまで掘削したところで底面が出ており、底付近からは18世紀後半代の染付が出土していた。また、2号溝状遺構を切っていたことから、18世紀中葉～後葉に掘削されたと思われる。

2号溝状遺構（図版11－1・13－1～3、第3・48図）

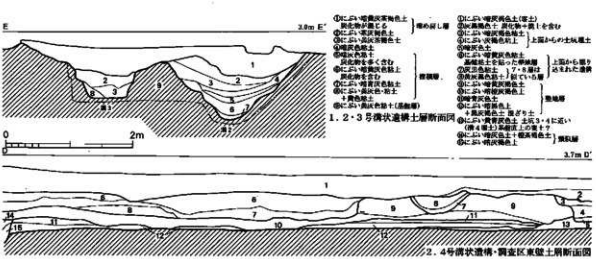
調査区の北部を直線的にほぼ東西に走る溝で、7号土坑と1号溝状遺構に切られている。3号溝状遺構とは併走しているが、東部で切り合いが認められ、3号溝状遺構に切られている。床面は西に向かって下がっており1号溝状遺構に接して排水できるようになっていたものと思われる。幅は225cm程、深さは110cm程あり、断面V字状で土層から掘り直しが見られる。3号溝状遺構とは掘り直し時の溝底面の高さが等しく、埋土が同じであることから併存していた可能性がある。

出土遺物は少なく中位から硯が、下位から大甕が出土している。時期は17世紀第3四半期か。

3号溝状遺構（図版11－1・13－4、第3・48図）

調査区の北部を直線的にほぼ東西に走る溝で、7号土坑と1号溝状遺構に切られている。2号溝状遺構とは併走しているが、東部で切り合いが認められ、2号溝状遺構を切っている。2号溝状遺構の掘り直し段階の溝底と深さがほぼ等しく、埋土も同じであることから併存していた可能性がある。断面Y字形で検出面の幅は270cm程、深さは80cm程である。

出土遺物は少なく時期は不明。



第48図　3次調査2～4号溝状遺構、調査区東壁土層断面実測図(1/60)

4号溝状遺構（図版11－1、第3・48図）

調査区の南西を直線的にN－15°－Eに走る溝で、南側調査区外に続いているが、4次調査では検出できなかった。北側は削られてなくなっていた。非常に小さい溝で、東壁土層断面でも20cm程度しかなく、幅も50cm程であった。埋土が特徴的で黄色粘土が目立つ。出土遺物は少ないが、この埋土から、幕末から明治のものと思われる。

5号溝状遺構（図版11－1、第3図）

調査区の中央を直線的にN－15°－Eに走る溝だが、210cmほどの長さしか検出されなかったので、当初は土坑と認識していた。幅39cm、深さ8cmと規模も小さく、区画的な意味か、横木を据えた可能性をもつ。出土遺物も少なく、時期は不明。

2）遺物

出土遺物の記述については観察表に掲載しているが、付記するべき遺物についてのみ記述する。

1号土坑（図版15）

49図4は底部穿孔をもつかわらけで、行灯など灯火具の底板などに釘で打ちつけて灯明皿の受け皿としたものでろう。49図4・5は胎土から蒲池焼の可能性が高い。49図10は肥前系の陶器製皿・鉢に多く見られる白化粧土拭き取りによる波状文を模倣したもので、高取・小石原系。

1号溝状遺構（図版14～17）

50図2は、杉形碗で肥前系では類例を見ないが、胎土から肥前系と推定。50図3は龍泉窯の青磁で蓮弁が凹線で表現されたもの。混入品であろう。50図15はイッチン掛けの瓶で釉の特徴から筑後市赤坂焼に類例が求められるが、小片のため器形が不明瞭なので確定できない。

51図15は大型の菱物で、合子か段重の蓋になる。51図18・20は胎土から筑後地域の焼き物と考えられる。形態的には51図19の博多瓦町焼の七輪に近い形態になろう。

52図10の土瓶は19世紀中葉に口縁部が肥厚するものが見られる。52図11は土師質の土管で胎土から筑後地域の焼き物だろう。

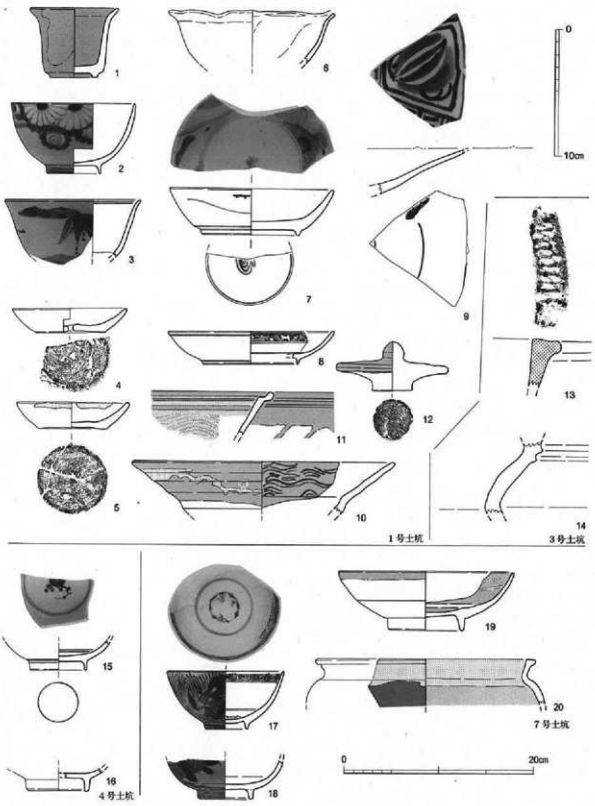
53図11は盛り絵で横書きの文字が書かれているが、判読できない。53図24は龍泉窯青磁で混入品。53図20は肥前系の染付碗だが、胎土や器形が特徴的であり、肥前以外で焼かれた可能性もある。53図29は底部の糸切りが2方向にあるが、偶発的なものだろう。

54図3は高台をきれいに打ち欠いて平坦にしている。高台が破損したので再利用するための工夫であろう。54図15は嬉野市塩田東山・西山窯採集品に類例があるが、モチーフは同じだが細部で異なるので窯を特定できない。

57図4・6と57図5は同じ刷毛目文鉢だが、胎土の特徴から前者はみやま市高田町の二川焼と考えた。57図15は磁器質だが、藁灰釉が掛かっている。福岡県内の窯の製品かもしれない。

58図2は釉薬が天目釉のように光沢を持つ黒だが、この器形は鉛釉にほぼ限定されており、胎が半磁器状に硬化しているので、焼成過剰で鉛釉が変色したものと考えられる。

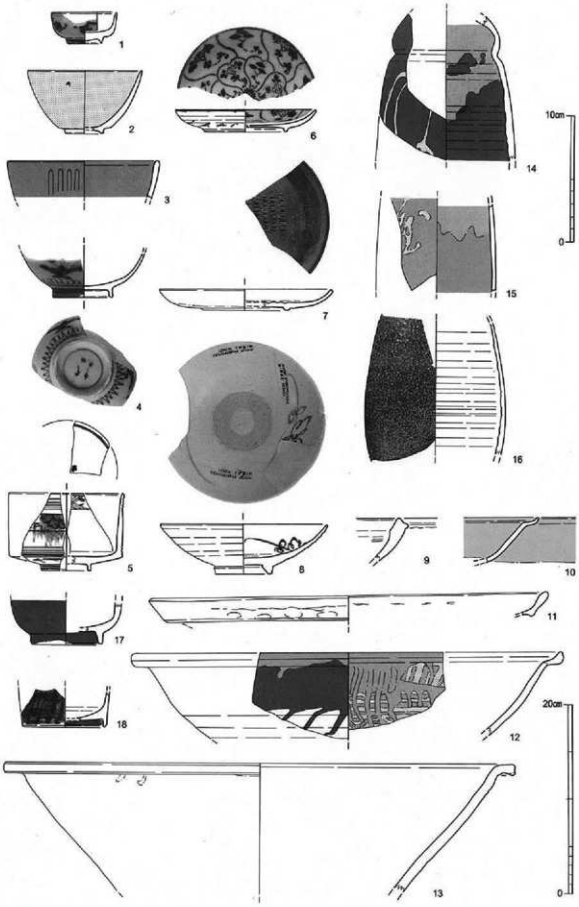
59図10は胎土が博多瓦町焼に近いが、器形が不明確なので確定できない。



第49図　3次調査1・3・4・7号土坑出土土器・陶磁器実測図1（11・14・19・20は1/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯焚技法	所見			推定年代
掘調番号	形状	( )は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代	
図版番号	器名									
1号土坑 49図1 図版14	小杯	口径(7.0) 高台径3.7 器高2.2	灰白	灰釉(半磁器) 内面全面 外面 胴部	にぶい赤茶褐色の鉄釉海 全面	轆轤の上掛け	焼付砂目付き	東海不明	東海不明	不明
1号土坑 49図2 図版14	中碗	口径(9.8) 高台径4.2 器高5.6	灰白	灰釉(染付) 内面全面 外面 胴部	透明釉 全面	平形文	重ね焼き	肥前系	肥前系	1680 / 1700
1号土坑 49図3	中碗	口径(10.6)	灰白	灰釉(染付) 口縁部	手描き鳥獣風花草文	手描き鳥獣風花草文	不明	肥前系	肥前系	1650 / 1860
1号土坑 49図4 図版15	小皿	口径9.8 底径5.2 高台径1.9	灰白	灰釉	内外面ヘラナデとかき目	内外面ヘラナデとかき目	不明	瀬戸系	梅田市潜地蔵	不明
1号土坑 49図5 図版15	小皿	口径9.8 底径5.5 高台径2.6	灰白	土師器	内外面ヘラナデ	内外面ヘラナデ	不明	内外の山磨部に鉄付きあり 打明後 全面なし	梅田市潜地蔵	不明
1号土坑 49図6	小碗	口径(11.2)	灰白	磁器(染付) 口縁部	鉄釉の花弁	型打ち成形か	不明	加工が特徴的	肥前系	1680 / 1740
1号土坑 49図7	小皿	口径(12.8) 高台径(7.5) 器高2.7	灰白	磁器(染付) 内面全面 外面 高台	透明釉 全面	手描き四隅分割による外面雷文	重ね焼による	唐津焼系	肥前系	1820 / 1860
1号土坑 49図8	小皿	口径(12.0) 高台径(7.0) 器高(2.4)	灰白	磁器(染付) 内面全面 外面 胴部	透明釉 全面	手描き四隅分割による外面草花文	重ね焼による	唐津焼系	肥前系	1820 / 1860
1号土坑 49図9	中皿	口径(20.6)	灰白	磁器(染付) 内面全面	透明釉 全面	手描き四隅分割による外面草花文	重ね焼による	唐津焼系	肥前系	19ヶ世紀
1号土坑 49図10 図版15	中皿	口径(20.6)	灰白	陶器 鉄色	鉄釉の水滴を内面に施釉	内面底部轆上掛け	不明	有田町中百川窯に類例あり	肥前系 有田町中百川窯	1650 / 1670
1号土坑 49図11	中碗	復元不明	灰白	磁器(染付) 内面	鉄釉の水滴を内面に施釉	内面底部轆上掛け	不明	肥前系鉄絵文だが、白化粧土を使用してない	有田・小石原系	不明
1号土坑 49図12	土師器	口径(9.8) 器高3.5	灰白	土師器	鉄釉の水滴を内面に施釉	内面底部轆上掛け	不明	鉄絵系鉄絵文だが、白化粧土を使用してない	高取系	1690 / 1750
1号土坑 49図13 図版14	鉢	復元不明	灰白	磁器(染付) 内面全面 外面 胴部	鉄釉の水滴を内面に施釉	内面轆成の上掛け	不明	下部は轆成を取りなかで土師器	高取系か	不明
3号土坑 49図14 図版15	鉢	復元不明	灰白	磁器(染付) 内面全面 外面 胴部	鉄釉の水滴	内外轆成のため調整不明	口縁部は2列刻文	不明	在地	12ヶ後半 / 13ヶ前半
3号土坑 49図15	大碗	復元不明	灰白	磁器(染付) 内面	鉄釉の水滴	内外ヨコナデ	不明	不明	肥前系	17ヶ後半
4号土坑 49図16	中碗	底径(4.4)	灰白	磁器(染付) 内面	透明釉 全面	手描き四隅分割による外面草花文	重ね焼による	見込みのキチーフ	肥前系	1820 / 1860
4号土坑 49図17	中碗	底径(5.0)	灰白	磁器(染付) 内面	鉄釉	不明	重ね焼による	不明	肥前系	不明
7号土坑 49図18	中碗	口径(9.2) 高台径(3.3) 器高4.5	灰白	磁器(染付) 白色	青みがかった透明釉 全面	手描き コバルト染付による外面	重ね焼による	唐津焼系	肥前系	19ヶ中葉
7号土坑 49図19	中碗	底径(4.4)	灰白	磁器(染付)	透明釉 全面	花唐草 平行線	型ハケ 1条の押線	コバルト染付	重ね焼による	19ヶ中葉
7号土坑 49図20	中皿	口径(18.4) 高台径(8.0) 器高(3.2)	灰白	陶器	底台内の底部	外面は白化粧土の鉄色文	高台径の目	唐津焼系	重ね焼による	不明
7号土坑 49図21	中碗	口径(23.2)	灰白	陶器	鉄色を下掛けし、外面から内面まで口縁部に白化粧土を掛け、その上に金属酸化物掛け	外面胴部には鉄絵の装飾	不明	不明	肥前系	不明
1号遺構北土壙 50図1	小碗	口径(15.2) 高台径(5.8) 器高(2.5)	灰白	磁器(染付)	透明釉 全面	鉄下文 型ハケ 1条、高台に1条の押線	重ね焼による	唐津焼系	肥前系	不明
1号遺構北土壙 50図2	中碗	口径(9.0) 高台径(3.0) 器高5.9	灰白	陶器(中磁器) 内面 外面白色	型打ち成形	高台面ヘラ削り	重ね焼による	唐津焼系	肥前系	不明
1号遺構北土壙 50図3	中碗	口径(12.0)	灰白	磁器(青磁) 白色	型打ち成形	高台面ヘラ削り	重ね焼による	唐津焼系	中国・海外系窯	15ヶ後半 / 16ヶ前半
1号遺構北土壙 50図4	中碗	高台径4.6	灰白	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き鳥獣風花草文	胴下位に1条の押線と高台に2条押線	重ね焼による	肥前系	18ヶ中葉か
1号遺構北土壙 50図5	中碗	口径(9.0) 高台径4.0 器高3.2	灰白	磁器(染付) 白色	青味のある透明釉 全面	外面に沿って1条と胴下位に4条の定線	中位に手書き鳥獣風花草文と定型雷文	重ね焼による	肥前系	18ヶ中葉か
1号遺構北土壙 50図6	小皿	口径(11.0) 高台径4.2 器高1.8	灰白	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	口縁部にコバルトを口縁に線状塗布	内面赤みを帯び、文様見込みに点線状に塗布	唐津焼系	肥前系	19ヶ末 / 20ヶ初頭
1号遺構北土壙 50図7	広口壺	口径(13.4) 底径(7.7) 器高17	灰白	陶器	底部を口縁部に2度重ね 丸くし 全体を仕上げ	底部に2条の押線	胴下半は露胎	胴下半は露胎	小石原系	不明
1号遺構北土壙 50図8	小皿	口径(13.1) 高台径5 器高4.0	灰白	磁器(染付) 白色	鉄釉の滴下 全面	内面にやや厚めた海鼠文と前絵風文	胴下半は露胎 見込み絵の目幅	中国上陸地や朝鮮	肥前	1650 / 1680
1号遺構北土壙 50図9	鉢	復元不明	灰黒	瓦質 灰色 黒褐色	――	外面ナデ 内面ハケをナデ消し	不明	不明	在地系	不明
1号遺構北土壙 50図10	鉢	復元不明	灰白	陶器 鉄色	内面鉄釉の上に鉄鉄色の沢	――	胴下半は露胎	胴下半は露胎	肥前系	不明
1号遺構北土壙 50図11	鉢	復元不明	灰白	土師器 白 磁器(一般白色 金 黒 白磁手釉	――	外面口縁部に沿って1行線	口縁下はオサエ	不明	1部郷外国に類似する	在地系
1号遺構北土壙 50図12 図版15	鉢	口径(45.6)	灰白	土師器 磁器(一般白色 金 黒 白磁	外面は横刷毛の鉄釉の上に灰釉掛け	内面は白化粧土の巻状鉄釉を取りのべち	不明	不明	肥前系	1690 / 1750
1号遺構北土壙 50図13 図版15	鉢	口径(40.0)	灰白	陶器 黄白 鉄 黒	外面は横刷毛の鉄釉の上に灰釉掛け	内面は白化粧土の巻状鉄釉を取りのべち	不明	不明	在地系	1690
1号遺構北土壙 50図14	中碗	最大径(10.0)	灰白	磁器(染付) 内面全面 外面 胴部	鉄釉の点滴を内面に施釉	外面はイッチン掛けによる雷文	内面は黒	不明	東海呼金張焼東	1750 / 1860
1号遺構北土壙 50図15	中碗	最大径(9.3)	灰白	陶器 鉄色	鉄釉の点滴を内面に施釉	外面はイッチン掛けによる文字と思われるが小片のため解読できない	不明	筑後市津家焼か	東海不明	不明
1号遺構北土壙 50図16	中碗	最大径(11.0)	灰白	磁器(染付) 内面 黒褐色 白色	青味色の灰釉 外面	外面は雷文を高台	不明	上野か小石原系	不明	不明

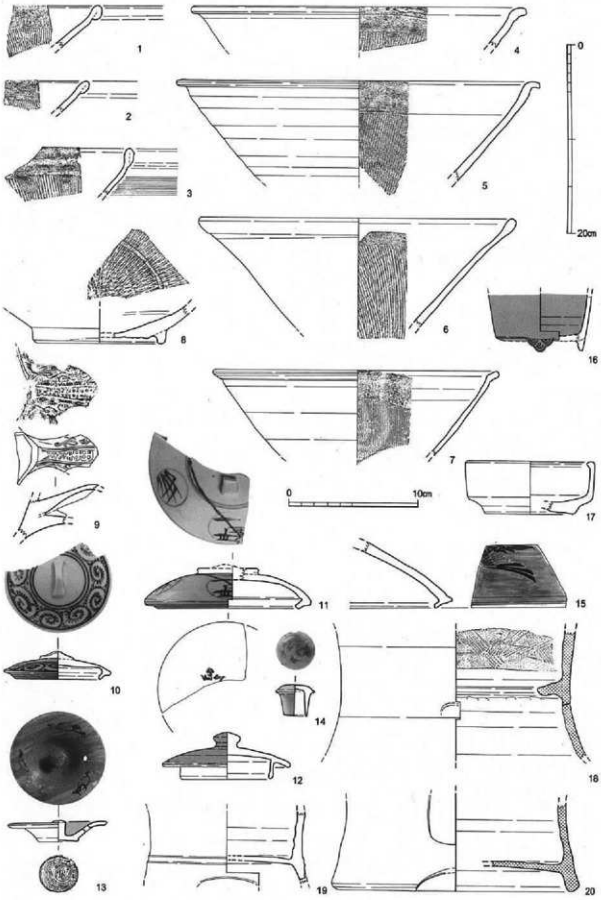
表13　3次調査土坑・1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表



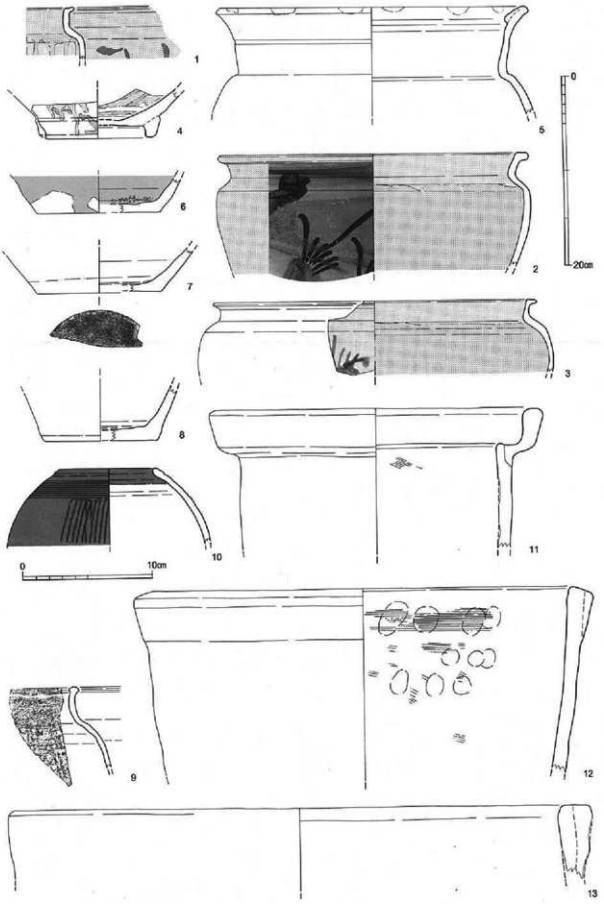
第50図　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図1（9・11・12は1/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の視覚	釉実	調整・底形・装飾技法	焼結技法	所見			
掲図番号	形状	( )は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	器称名								
1号墳第6上層 50図17	小壺	高台径(5.6)	胎容 にぶい黄橙色 硬質	黒褐 外面	—	叩付痕跡又 砂目痕付き		肥前系	不明
1号墳第6上層 50図18	瓶	高台径(6.6)	胎容 黒色粒子多	褐色の釉を目状 及び内上に伏熱 流し掛け 外面	—	叩付痕跡又		肥前系	不明
1号墳第6上層 51図1	陽炎	復元不能	胎容 灰褐色 軟質 白色粒子入る	内外褐褐色の 厚い鉄釉	削目上端ナデ調え 摺り目単位不明	不明		小石原系	不明
1号墳第6上層 51図2	陽炎	復元不能	胎容 褐色 軟質	内外茶褐色の 厚い鉄釉	削目上端ナデ調え 摺り目単位不明	不明		小石原系	不明
1号墳第6上層 51図3	陽炎	復元不能	胎容 暗赤茶褐～黒灰色 砂粒 白色粒子多う	茶褐色の鉄釉 外面は多く、内 側は之字状	外面体部に小さな 凹目による皮膚付痕の痕 跡あ 削目上端ナデ調え 摺り目単位不明	不明		高取系	不明
1号墳第6上層 51図4	陽炎	口径(35.6)	胎容 にぶい黄橙色 やや 硬質 白色粒子多う	明褐色の鉄釉 厚鉄付 全面	削目上端ナデ調え 摺り目単位不明	不明		肥前系	18c中葉 ～ 19c代
1号墳第6上層 51図5	陽炎	口径(28.0)	胎容 にぶい黄橙色 やや硬質	暗茶褐色の鉄 釉砂状付 全 面	削目上端ナデ調え 摺り目23単位	不明		肥前系	18c中葉 ～ 19c代
1号墳第6上層 51図6	陽炎	口径(28.0)	胎容 にぶい黄橙色 やや硬質	茶褐色の鉄釉 厚鉄付 全	削目上端ナデ調え 摺り目単位不明	不明		小石原系	18c中葉 ～ 19c代
1号墳第6上層 51図7	陽炎	口径(30.0)	胎容 暗赤褐色 硬質	暗茶褐色の鉄 釉厚鉄付 全面	削目上端ナデ調え 摺り目31単位	不明		肥前系	18c中葉 ～ 19c代
1号墳第6上層 51図8	陽炎	高台径(14.6)	胎容 茶褐色 やや軟	暗茶褐色の鉄 釉厚鉄付 全面	削目上端ナデ調え 摺り目単位不明 高台貼 付付	叩付痕跡又は 足跡あり 砂目 痕付がある		肥前系	18c中葉 ～ 19c代
1号墳第6上層 51図9	行平鍋	長さ(6.8) 最大径(2.5)	胎容 黄灰白色 軟質 白色	褐色は釉掛きの表 面状斑付 内面 は鉄水の滴痕	把手は上下平分で二型押し成形して接合し、 体部に貼着 上半部は之字線が横巡	不明	把手の文様は文字 のようにみえるが、 判読できない	瀬戸系明	不明
1号墳第6上層 51図10	合子蓋	鉄釉径 2 口縁径6.4 器高2.4	胎容 白色	石英が赤かった 淡明釉 全面	人為的に巻状つまみ貼り付け 上2条、下1 条の原線の中に細線巡り文 内側底面に多数の墨書 「■■」まで判読できる	逆り器輪側ま 砂目付痕		肥前系	1820 ～ 1860
1号墳第6上層 51図11	合子蓋	鉄釉径(3.0) 口縁径(1.1) 器高(3.1)	胎容 にぶい黄橙色	やや明いい淡明 釉 全面	天井部に巻状つまみ貼り付け 手縁3条凹線状により 天井部外側とする。下1条の線巡りの中に巻線付き 内側天井に多数の墨書 「■■」まで判読できる	逆り器輪側ま 砂目付痕	逆り器の底あり	肥前系	1820 ～ 1860
1号墳第6上層 51図12	上取鉢	鉄釉径10.0 口縁径7.3 器高3.7	胎容 明赤褐色 やや 軟質	明茶褐色の鉄 釉 全面	天井部にボタン状つまみ貼り付け	逆輪から下部は 輪状を取り		肥前系	1750 ～ 1860
1号墳第6上層 51図13	皆皿	鉄釉径7.7 底径3.1 器高1.5	胎容 黄色 軟質	鉄水滴の斑状 褐色の鉄釉 上面	つまみ貼り付け 底気孔あり 外面は内化粧 土を薄く掛けた後、鉄釉 底部糸切り	逆輪から下部は 輪状を取り	ほぼ完形	高取系か	1750 ～ 1860
1号墳第6上層 51図14	鉢蓋	鉄釉径3.1 口縁径1.9 器高1.4	胎容(朱付) 白色	透明釉 全面	上面に花文 コバルト顔付 鉄板刷り	重付輪側ま	ほぼ完形	瀬戸・美濃系	不明
1号墳第6上層 51図15 同図16	鉢蓋か	復元不能	胎容(朱付) 白色	濃明釉を全面 掛けた後、外 面のみ鉄釉	沃形の輪郭線の間に黒・緑・白・青彩で羽を 描いた上絵付けの亀甲文様	重付輪状3取り		肥前系	不明
1号墳第6上層 51図17	鉢か1	底径(6.0)	胎容(背面) 灰白色	淡緑青色の青 磁釉 全面	底部は並行した線状による櫛手文印刷された波 山形の線を貼り付け	重付輪側ま		龍戸・美濃系	不明
1号墳第6上層 51図18 同図19	壺か	口径(10.2) 最大径(7.2) 器高4.1	胎容(背面) 灰白色	淡緑色の青磁 釉 全面	—	高台輪側ま		肥前系	不明
1号墳第6上層 51図20 同図21	七輪	最小径(24.2)	上段部 青白色、軟質 白色粒子 赤茶色多い	外面は「寿なナデ 梅円形の突起孔のコーナー 部がある 内面は交差櫛状ヘラナデが上に施さ れている タガの下は横付痕		高台輪側ま		在地系	不明
1号墳第6上層 51図22 同図23	七輪	最小径(24.2)	十間部 青白色、軟質 白色 粒子 赤茶色多い	外面は「寿なヨコナデ 2条突帯 高台は平 梅円形の薄かし穴		不明		博多又町焼か	不明
1号墳第6上層 51図24	七輪	最小径(23.6)	上段部 にぶい赤白色、軟質 白色粒子 赤茶色多い	外面は「平なナデで梅円形の中央孔のコーナー 部にある 内面は縦行櫛 高台は平梅円形の 薄かし穴		不明		在地系	不明
1号墳第6上層 51図25	中皿 ハンズーボ	復元不能	胎容 明赤褐色	内面は鉄釉、外面 は鉄釉	内面は鉄釉 松文か	不明	胎は黒灰色なのは 焼成不良のためか	肥前系	不明
1号墳第6上層 52図2	中皿 ハンズーボ	口径(32.6)	胎容 灰色 硬質 軟 良	外面は鉄釉 松文か	外面は鉄釉 松文か	不明		肥前系	不明
1号墳第6上層 52図3	中皿 ハンズーボ	口径(34.0)	胎容 暗赤褐～黒灰色	外面は鉄釉 松文か	外面は鉄釉 松文か	不明		肥前系	不明
1号墳第6上層 52図4	中皿か中鉢	底径(12.2)	胎容 赤茶褐色	外面は鉄釉の上に緑色の灰釉を掛け、その上に白化粧土を 流し掛け 内面は白化粧土の上に鉄釉が掛かっている		足込みか砂目跡	胎は黒灰色なのは 焼成不良のためか	肥前系	不明
1号墳第6上層 52図5	中皿 ハンズーボ	口径(32.6)	胎容 明赤褐色 硬質	茶褐色の鉄釉 厚鉄付	—	口何部に抽土目跡		肥前系	19c後半代
1号墳第6上層 52図6 同図7	小皿か小鉢	底径(9.6)	胎容 明赤褐色 硬質	緑灰色の灰釉 内面～外面ナ デまで	—	底部に強了4mの 焼き付の痕跡 見 込み1条目付痕	胎土は硬質の頑丈 製品	高取系	不明
1号墳第6上層 52図7	小皿か小鉢	底径(13.6)	胎容 明赤～黄褐色 軟質	明黄色の鉄釉 内全～外面ナ デまで	底部糸切り	見込みに砂目跡	胎土は原位置に近い	高取系	不明
1号墳第6上層 52図8 同図9	小皿か小鉢	底径(11.8)	胎容 淡灰黄～黄白色 軟質	天灰色の鉄釉 全面	—	底部に焼き付の 痕跡 胴下部は 高台を貼り		高取系	不明
1号墳第6上層 52図9	小皿	復元不能	胎容 にぶい暗黒褐～ 明赤褐色、軟質	茶褐色の鉄釉 厚鉄付	内面は格子目タタキ目で具痕	不明	上部は11mの段で、 底部が厚い「ハ」 字型の小皿に近い	肥前系	不明
1号墳第6上層 52図10	土瓶 蓋付形	口径(7.6)	胎容 にぶい灰黄色	黒褐 外面～ 内面上縁部	外面は4本縦位の凹線を口縁下に横方向、体 部に縦方向に施文	口唇部触側ま	口縁部の特徴から 19c中葉以降と推 定	肥前系か	19c後半代
1号墳第6上層 52図11 同図12	土瓶	口縁径(35.8) 胴部径(28.5)	十間部 にぶい黄橙色、軟質 白色・黒色粒子入る	—	内面は八ケモテ ナデ消し	不明	外面は縦式のために 口縁部径、内面は 底のため種類なに変化	在地系	不明
1号墳第6上層 52図13	大皿	口径(48.0)	上部部 にぶい黄灰褐色 ～にぶい灰黄色	—	口縁部肥厚 外面のヨコハケナデ消し 内面 は縦方上げ底のオサエの後ヨコハケ、ナデ消 し	不明	外面の間隔相当で、 内側は変化 ていない がおかやなし	在地系	不明
1号墳第6上層 52図13	大皿	口径(62.0)	上部部 灰白色 やや硬質 白色粒子多い	—	口縁部肥厚 外面の縦櫛痕 内面は口縁下 が縦櫛削落	不明	縦型櫛目から推測 として使用していた	在地系	不明

表14　3次調査1号深状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表



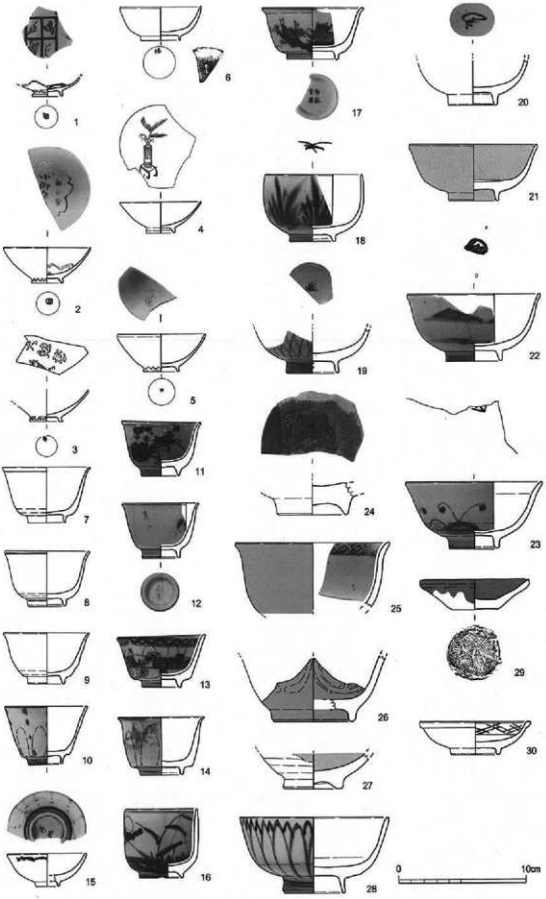
第51図　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図2（9～17は1/3、他は1/4）



第52図　3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図3（10は1/3、他は1/4）

遺構名	器種	法量(cm)	胎の模様	釉薬	調整・成形・装飾技法	廃棄技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
例)試掘番号 回転番号	形状 造形名	( )は復元値	胎の特徴						
1号側溝北上端 53区1	小杯 返	高台径(4.4) 器高2.5	磨砂(急付) 白色	透明釉 全面	千鳥ヨコバル急付により外面は高台に回凸文 見込みに金砂で4方向すき間風刷り ヨコバル上縁付け 金砂を一部ふき取られた「指」あ	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	肥前系	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区2	小杯 返	(口径(6.8) 高台径2.5 器高2.8	ガラス質 白色	透明釉 全面	千鳥ヨコバル急付により外面は高台に回凸文 見込みに金砂で4方向すき間風刷り ヨコバル上縁付けされている 高台は面取りして削られている	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区3	小杯 返	高台径2.6	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	千鳥ヨコバル急付により外面は高台に回凸文 見込みに金砂で2方向すき間がとられている「指」は金砂刷ぎ ヨコバル上縁付けされている 高台は面取りして削られている	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区4	小杯 返	口径6.5 高台径2.4 器高2.5	磨砂(急付) 白色	透明釉 全面	見込みは金砂で覆ヨススキが、腰部で花弁と合所が弾かれている	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	肥前系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区5	小杯 返	口径(7.0) 高台径(2.9) 器高2.9	磨砂(急付) 白色	透明釉 全面	千鳥きヨコバル急付により外面は高台に回凸文 見込みに金砂で4方向すき間風刷り ヨコバル上縁付けされている 高台は「目」手の文様化	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	肥前系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区6	小杯	口径(5.6) 高台径(3.0) 器高2.7	磨砂(急付) 胴部 白色 表面	低火度の透明釉 全面	表面のスタンプがあるが判断できない 千鳥ヨコバル急付	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	産地不明	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区7	小杯 輪状形	口径(6.8) 高台径(3.0) 器高4.4	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	千鳥ヨコバル急付により外面口縁下に1条、胴下位に2条弾痕	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区8	小杯 輪状形	口径(6.6) 高台径(3.0) 器高4.4	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	コバルト手描き急付による外面口縁下に1条、胴下位に2条弾痕	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区9 同区14	小杯 輪状形	口径(6.6) 高台径(3.0) 器高4.9	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	――	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区10	小杯 輪状形	口径6.4 高台径2.7 器高4.6	磨砂(急付) ガラス質 灰白 色 黒斑あり	透明釉 全面	外面は凸角面取り 千鳥きヨコバル急付による口縁下に1条、胴部文、胴下位に2条弾痕 高台円凸文	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区11 同区14	小杯 輪状形	口径(5.3) 高台径3.1 器高4.3	磨砂(急付) 白色 ガラス質 若干の泥斑跡	透明釉 全面	焼成の割れは入る、若干は歪曲、粘土で「天」「口」のうち文字が刻印されている 見込みは金砂の痕跡はこ3条 胴下 底の痕跡とは金砂の上絵付痕が残り出	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区12	小杯 輪状形	口径5.9 高台径2.9 器高2.1	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	コバルト手描き急付による外面口縁下に1条、石文と同定できない文字、胴下位に2条弾痕 底部は1条弾痕内に鋼鉄「久」刻印	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区13 同区14	小杯 輪状形	口径(7.8) 高台径3.1 器高4.1	磨砂(急付) 文形のため粘土 質	透明釉 全面	外面は凸角面取り 千鳥ヨコバル急付により外面口縁下に平走線雷文文様 中位に若文と点文に無文数心 手描きにより胴下に1条、底部に2条弾痕	柴付釉刷ぎ	取り部分が付れている	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区14	小杯 輪状形	口径(7.6) 高台径2.6 器高3.6	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	入角面取り 月・星・梅は胴部取り、口縁下に1条、高台に1条弾痕は手描き コバルト急付	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ取り	肥前系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区15	小杯	口径(6.0) 高台径1.8 器高2.3	磨砂(急付) 縁が歪った状態 で高さ	透明釉 全面	千鳥き兵庫助急付により外面 崩れた花文か	柴付釉刷ぎ	柴付釉刷ぎ	胎が特徴的	肥前系 唐津系 瀬戸・美濃か
1号側溝北上端 53区16 同区14	小杯 高台丸形 無釉	口径5.2 高台径3.5 器高2.9	磨砂(急付) 灰白色	透明釉 全面	コバルト手描き急付により外面は月・雲・スス キ・鳥の群れが手彫化し一刷りして描かれる 口縁下に1条、胴下位に1条、底部に2条弾痕	柴付釉刷ぎ	光形	肥前系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区17	小杯 輪状形	口径(7.6) 高台径3.9 器高2.8	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	やや染色感くし 孔口位の通明釉 全面	外面の胴のうち鳥は胴部刷り、口縁下に1条、胴下位に1条弾痕は手描きのコバルト急付 底部は「梅鉢紋」刻印	柴付釉刷ぎ	瀬戸・美濃系	19c第4 四半期
1号側溝北上端 53区18	小碗 平縁形	口径(7.7) 高台径(3.6) 器高3.3	磨砂(急付) 灰白色	透明釉 全面	千鳥き兵庫助急付により外面草文 見込みに線文	柴付釉刷ぎ	外傷の歪みあり	肥前系	1820 ~ 1850
1号側溝北上端 53区19	中鉢	高台径4.2	磨砂(急付) 灰色	透明釉 全面	千鳥き兵庫助急付により外面1条弾痕上に網目文 見込み1条弾痕内に草文	柴付釉刷ぎ 砂目付痕		肥前系 瀬戸から産反形であろう	1820 ~ 1850
1号側溝北上端 53区20	中鉢	高台径4.0	磨砂(急付) 白色 黒色斑が 多い 光沢あり	どろっとあるが 全面釉 全 面	外側手描き急付により見込みは岩波文か	高台外縁部砂面 ヨ 砂目付痕	胎・釉薬が特徴的	産地不明 器形も特徴的	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区21	中鉢 輪状形	口径(4.0) 高台径(4.0) 器高4.5	磨砂 丈が高る灰色	透明釉 底部 全面	底部 全面 貫入あり	柴付釉刷ぎ 見込み部の見込み 手彫アルミ手鉋等	胎が特徴的	肥前系 瀬戸・美濃以外か	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区22	中鉢 輪状形	口径(10.6) 高台径(5.5) 器高5.3	磨砂(急付) 灰白色	孔口位の通明釉 全面	手描き兵庫助急付により外面山水文 見込みは無点文文様	柴付釉刷ぎ 見込みにハリ目 線2つあり		肥前系	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区23	中鉢 輪状形	口径(10.8) 高台径(4.0) 器高5.3	磨砂(急付) ガラス質 白色	透明釉 全面	千描きコバルト急付により外面草文 高台側を出し	柴付釉刷ぎ	胎が特徴的	産地不明	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区24	中鉢	高台径5.6	磨砂(急付) 灰色	鉛釉色の青磁釉 高台以外全面 貫入あり	印刷	柴付釉刷ぎ		中国・陶来窯	15c前半 代
1号側溝北上端 53区25	中鉢 輪状形 釉付部は 釉付部は	口径(12.2)	磨砂(新分け者鉢) 白色 黒色斑が あり	外面は鉛釉色の青磁釉 内面は透明釉	手描き兵庫助急付により内面口縁下四方唐文帯	柴付釉刷ぎ		肥前系	1820 ~ 1850
1号側溝北上端 53区26 同区15	中鉢 輪状形	高台径(6.2)	磨砂(者鉢) 灰白色	透明釉の青磁 釉 全面	外面は無刷ぎで雷紋が覆ったため白く見えるス ズ釉入り 内面は無紋になる	柴付釉刷ぎ		肥前系	不明
1号側溝北上端 53区27	中鉢	高台径4.7	陶器 内へ開いた色 黒 ・白色紋子あり	鉛系の緑釉 貫入あり 内面 から外面釉中位	回転ヘラケズリ 高台側り出し			肥前系か	1690 ~ 1780
1号側溝北上端 53区28	中鉢	口径11.7 高台径5.0 器高6.1	磨砂(急付) 灰白色	透明釉 全面	千描きコバルト急付により外面草文 高台2条弾痕 高台側り出し	柴付釉刷ぎ		肥前系	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区29 同区14	小皿	口径6.6 高台径3.3 器高2.3	陶器 粗製色 白色紋 子あり 軟質	粗糸系黒色の鉛釉 内面から外面口縁 部に貫釉	糸切りが2方向にあり	3箇所に胎土目 跡		小石原系	19c中葉 ~ 19c末
1号側溝北上端 53区30	小皿	口径6.4 高台径3.5 器高2.6	陶器 灰白色	黒色系の透明釉 内面から外面口縁 部に貫釉	玉石口縁 手描き兵庫助急付により 内面に線下格子目文帯	柴付釉刷ぎ		肥前系 波佐見系	1820 ~ 1850
1号側溝北上端 54区1	中鉢 輪状形	口径10.0 高台径(3.8) 器高5.0	磨砂(急付) 灰白色	透明釉 全面	型紙摺りコバルト急付により外面は入角文に桜花文数点と、内面は線雷紋文帯 見込みは無点文	柴付釉刷ぎ 見込みにハリ目 線3箇所アルミ ヤ付痕	ハリ目線の位置から本来5箇所あった	肥前 武雄市皿山窯	19c後半 四半期
1号側溝北上端 54区2	中鉢 輪状形	口径10.0 高台径(3.8) 器高5.0	磨砂(急付) 灰白色	透明釉 全面	型紙摺りコバルト急付により外面は入角文に桜花文数点と、内面は線雷紋文帯 見込みは無点文 内面は線雷紋文帯 高台内面は下位の雷紋は平彫る 口縁部は「花紋」にコバルト塗釉	柴付釉刷ぎ 見込みにハリ目 線5箇所		肥前 武雄市皿山窯	19c後半 四半期

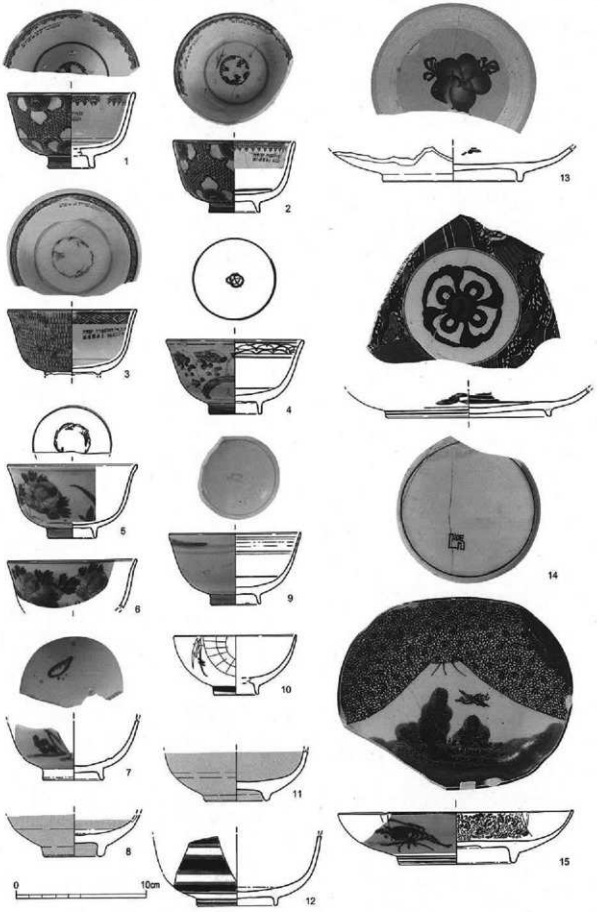
表15　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土土器・陶磁器観察表(1)



第53図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(1/3)

遺物名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・底形・装飾技法	高台技法	所見		推定年代
神岡番号	形状	(　)は復元値	胎の特徴				特記事項	推定産地	
現取番号	遺物名								
1 中嶋馬出古墳 54図12 図版14	中嶋 瓶尻形	口径10.0 高さ16.3 頸径5.2	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	手捻き無底後付けにより外面は無れた後底部素面 高台は付け足 内面は上端下部及び下端 上条線 見込み注目された後状態行無文 高台を打ちぬいて平坦に仕上げる	—	伊那谷地区からの出土の火鉢を再利用したもの	陶磁器 瀬戸市市田1号窯か	19ｃ末4 四半期
1 中嶋馬出古墳 54図4 図版14	中嶋 瓶尻形	口径10.2 高さ16.2 頸径5.4	磁器(染付) 灰白色	微色不良ぶれ 透明釉　全面	手捻き無底後付けにより外面は無れた不明 上条線 内面は上端下部及び下端 上条線 底部 ヘラ削 見込み注目 高台は無 上端状態行無文 高台削り出し 底は付高台に近いつくり	高台内は無施釉		肥前系	19ｃ中葉 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 54図5	中嶋 瓶尻形	口径(9.9) 高さ(17.2) 頸径5.9	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子あり	透明釉　全面	手捻きコバルト染付により外面は外方文 内面は口縁下に2条線 高台は無 見込みは上条線 内面は上条線 内面文	畳付釉剥ぎ	54図6とは別個体 62図6の蓋とセット	肥前系	19ｃ中葉 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 54図6 図版14	中嶋 瓶尻形	口径(8.8)	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子あり	透明釉　全面	手捻きコバルト染付により外面は外方文 内面は口縁下に2条線 高台は無 見込みは上条線 内面文	畳付釉剥ぎ	54図5とは別個体 62図6の蓋とセット	肥前系	19ｃ中葉 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 54図7	中嶋 瓶尻形	高台径4.7	磁器(染付) 白色	透明釉　全面 貫入あり	手捻き高台張付けにより外面は水車文 見込みは蓮弁文	畳付釉剥ぎ	畳付釉剥ぎ 砂付 見込みの蛇の目釉剥ぎ 胴部部分の高台の重ねた痕	肥前系	19ｃ後半 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 54図8	中嶋	高台径(4.7)	陶器 瓦質灰色 硬質	鉄釉 暗黒灰褐色	高台削り出し	畳付釉剥ぎ砂付 胴部部分に胴部部分の高台の重ねた痕	見込みの蛇の目釉剥ぎ	肥前系	19ｃ後半3 四半期
1 中嶋馬出古墳 54図9	中嶋 瓶尻形	口径(10.4) 高さ(6.0) 頸径5.7	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子あり	透明釉　全面	高台2条線手捻き高張付けにより外面は水文 内面は口縁下に2条線 内面は上端下部 上条線 見込みは蓮弁文 高台張文様 胴下位に1条 見込みは蓮弁文	畳付釉剥ぎ	被成不良で焼色那	肥前系	19ｃ後半3 四半期
1 中嶋馬出古墳 54図10	中嶋 丸鍋	口径9.6 高さ(3.3) 頸径4.7	磁器(色絵) 白色 黒色粒子あり	透明釉　全面	外面は雑色上に金彩の太線文と不明文 コバルトの不明文 高台の水彩の彩文を下位付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 54図11	小鉢	高台径5.1	磁器 不透明白色 やや粒子あり 黒色粒子あり	不透明白色の釉薬	高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 54図12	小鉢	高台径(6.0)	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	手捻き高張付けにより胴部内に鳳凰と鹿い鳥 高台を交互に胴下端文と高台2条線	畳付釉剥ぎ 見込み内底釉剥ぎ	畳形から年代を推定	肥前系	1790 1860
1 中嶋馬出古墳 54図13	小皿	高台径(11.0)	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	手捻きコバルト染付による内面文様不明 見込み花文	畳付釉剥ぎ 見込み蛇の目釉剥ぎ 胴部部分 長方形 高台	胎が特徴的	肥前系	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 54図14	小皿	高台径13.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	手捻きコバルト染付により内外面文様不明 外面底部外部線2条 見込み花文 高張外部内に中央が凸状 ヘラで調整「花」	畳付釉ぶき取り	高張から水田町蛸唐草一重か	肥前系 有田町蛸唐草	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 55図1	中鉢 瓶形	口径18.3 高さ(9.1) 頸径14.3 底径9.2	磁器 染付 白色	乳白色の透明釉 全面	胎内引に無が薄く 胴下位 内面は口縁下に2条線 胴部 手捻きコバルト染付により外面胴部に鳳凰文 内面は口縁下に2条線 内面は上端下部 上条線 内面は上端下部 上条線 内面は上端下部 上条線 見込みは蓮弁文 高台は上条線 高台は上条線 高台は上条線	畳付は無釉ぶし 胴部部分 高台は無釉ぶ	植野古窯跡窯出土 青山遺跡無出土 鳳凰	肥前系 瀬戸市窯田か	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 55図2	小皿	口径(8.8) 高さ(4.3) 頸径4.2	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子あり	透明釉　全面	外面は胴部ヘラ削りの後ていねいなヘラ削 手捻き無張付けにより内面から見込みは様子文	畳付釉剥ぎ 見込み蛇の目釉剥ぎ 胴部部分 ヘラ削	畳付は無釉ぶし ていねいな見込 無釉部	肥前系 後世見系	1820 1860
1 中嶋馬出古墳 55図3 図版14	小皿	口径9.6 高さ(2.4) 頸径2.4	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	外面は胴部ヘラ削りの後が多く入る 手捻き内面底部ヘラ削り 内面は中央に凸 高張文 見込みは崩れた蓮文	畳付は無釉ぶし 見込は蛇の目釉剥ぎ 胴部部分 高台は無釉ぶし	口縁部に打ち込み 高台は無釉ぶし 胴部部分	肥前系 後世見系	19ｃ中葉
1 中嶋馬出古墳 55図4 図版14	小皿	口径9.3 高さ(2.3) 頸径2.2	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子あり	貫入がかった 黄褐色 全面	胎内に無が多く 胴下位 内面は上条線 上条線 上条線 見込みは様子文 高台は上条線	畳付は無釉ぶし ていない 見込は蛇の目釉剥ぎ 胴部部分 高台は無釉ぶし	口縁部に打ち込み 高台は無釉ぶ	肥前系	19ｃ中葉
1 中嶋馬出古墳 55図5	小皿	口径9.8 高さ(3.6) 頸径4.8	磁器(染付) グラス質 白色	透明釉　全面	見込みに型打ち成形で無ぶ「鹿」文の胴部は 指で 型打ち成形後 ろくろ成形の高台貼り付け	畳付釉剥ぎ 見込は蛇の目釉剥ぎ 胴部部分 高台は無釉ぶ	外面中位と底部間に工具痕あり	佐賀系	19ｃ後半 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 55図6	小皿	口径(12.0) 高さ(2.7) 頸径3.2	磁器(染付) 黒色粒子あり	貫入がかった 褐色 全面	口縁部折り返しで高張口縁にしている 手捻き高台無釉ぶし内面底部ヘラ削り 内面は中央に凸 見込みは蓮弁文 蛇の目高台釉ぶし 見込は蛇の目高台釉ぶ	畳付釉剥ぎ 見込は蛇の目釉剥ぎ 胴部部分 蛇の目高台の目釉剥ぎ	畳付は無釉ぶ 蛇の目高台の目釉剥ぎ	肥前系 後世見系	1820 1860
1 中嶋馬出古墳 55図7	小皿	口径(11.1) 高さ(2.4) 頸径2.0	磁器(染付) グラス質 白色	透明釉　全面	内面は水彩による上絵付けがあるが文様不明	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 55図8	小皿	口径(12.4) 高さ(2.6) 頸径2.3	磁器(染付) 白色	貫入がかった 褐色 全面	型成形でコバルト染付により内面から見込みは風風・丸文など 高張は「花」か	畳付釉剥ぎ		肥前系	19ｃ末 末3期
1 中嶋馬出古墳 55図9	小皿	口径8.6 高さ2.4 頸径2.3	陶器 黒色 粒子多	にぶい灰白色の釉薬 内部の小穴露呈	底部糸切り	貼土目部3箇所	灯明皿としての使用痕なし	小石原系	不明
1 中嶋馬出古墳 55図10 図版14	小皿	口径8.6 高さ3.7 頸径2.4	陶器 赤褐黄色 軟質	にぶい灰褐色の釉薬 内部の小穴露呈 内部中位で平坦	底部糸切り	貼土目部不明	灯明皿としての使用痕なし	肥前系	不明
1 中嶋馬出古墳 55図16	小皿	口径9.8 高さ5.9 頸径1.8	磁器(青磁) グラス質 白色	ドロム青磁釉 全面	見込みの花鳥と蝶の枝・葉・花はクロム 花弁は白磁	畳付釉剥ぎ	口は完形	瀬戸・美濃系	19ｃ後3 四半期
1 中嶋馬出古墳 55図11 図版14	丸才瓶 輪花口縁	口径13.9 高さ(6.5) 頸径3.9	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	型打ち成形で輪花口縁成形 外底は蛇の目高台 胴部型打ちコバルト染付 縦線間 胴下位に1条 胴部から見込みは青海波円文・梅唐文	畳付は無釉ぶしていない 蛇の目高台の目は無釉ぶ		肥前系	19ｃ後半 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 55図12 図版14	中瓶 輪花口縁	口径(18.0) 高さ(12.6) 頸径2.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉　全面	口縁部口縁部 「口縁」線部 胴部に型打ちスタンプ型花口縁成形 胴下位に1条 胴部から見込みは「花」外面底部に高張 内面に線部の蓮文 高台は上条線 高台は上条線 コンニャク印刷	畳付釉剥ぎ		肥前系	1680 1700
1 中嶋馬出古墳 56図11	中皿	口径(21.6) 高台径(13.7) 頸径3.4	磁器(染付) 白色	透明釉　全面 貫入あり	手捻き高張付けにより胴部内面文 内面は縁下に内方唐文様 唐文 唐文は上下 上条線 上条線 内面は上条線 内面は上条線 「大内唐文様」 高台は2重線内に「花」	畳付釉剥ぎ	畳形は1700～1740 型成形から 蛇の目高台釉剥ぎ 1650～1780年代	肥前系	1700 1740
1 中嶋馬出古墳 56図1	中瓶 輪花口縁 なまず皿	高台径8.1	磁器(染付) グラス質 白色	貫入がかった 褐色 全面	手捻きコバルト染付により見込みは1条線 胴下位 蛇の目高台	畳付は無釉ぶしていない 蛇の目高台の目は無釉ぶ 見込みにハリ目		肥前系	19ｃ中葉 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 56図2	中皿 輪花口縁 なまず皿	口径12.9 高台径8.5 頸径4.0	磁器(染付) グラス質 白色	透明釉　全面	型打ち成形で輪花口縁成形 口縁部は口縁部 胴部 型成形コバルト染付 胴下位に1条 見込みは2条 高張内に「花」	畳付は無釉ぶしていない 蛇の目高台の目は無釉ぶ 蛇の目高台の目は無釉ぶ 見込みにハリ目		瀬戸・美濃系	19ｃ中葉 19ｃ末
1 中嶋馬出古墳 56図3	天才瓶 輪花口縁 なまず皿	口径13.8 高台径8.5 頸径4.0	磁器(染付) グラス質 白色	青い透明釉 全面	型打ち成形で輪花口縁成形 蛇の目高台 型成形コバルト染付 胴下位に1条 胴部内面文様 内面の青海波文様 「花」 型内底 見込みの多重線 型打ち成形で輪花口縁成形 型打ち成形 「鹿」 高台の2条線 高台は2重線 高台は「花」	畳付は無釉ぶしていない 蛇の目高台の目は無釉ぶ 蛇の目高台の目は無釉ぶ 見込みにハリ目	型成形から年代を推定	肥前系	19ｃ後4 四半期

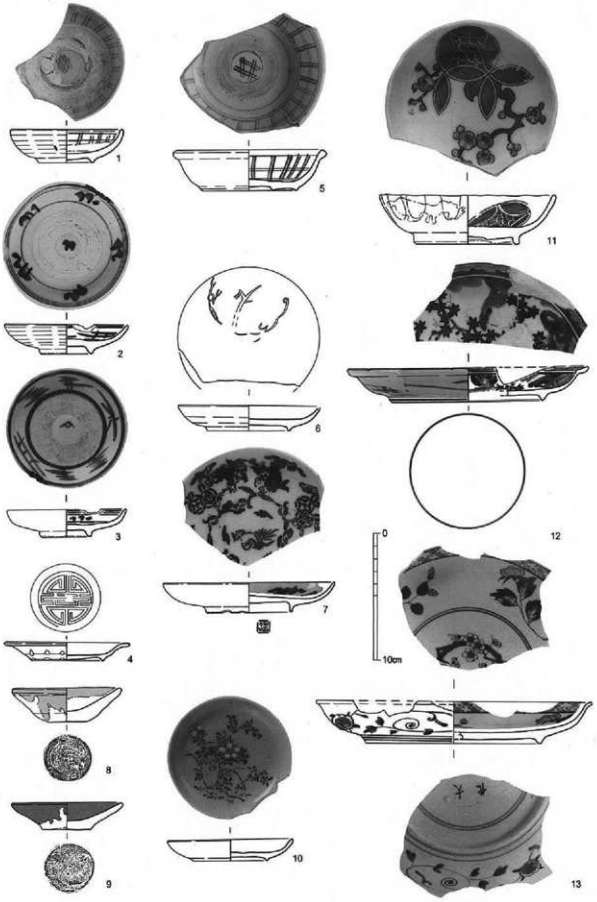
表15　3次調査1号清状遺構暗黒色土層出土土土器・陶磁器観察表(2)



第54図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図2 (1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の臨界	脚部	調整・成形・装飾技法	底部技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
掃除番号 形状 部区番号 遺物名	形状	()は復元値	胎の特徴						
1号側溝発掘区第56図6	五寸皿 稜を口縁なエ丁皿	口径14.0 高台径8.9 器高3.7	砂粒(角付)白色	逆朝軸 全面	型打ち成形で稜部は稜形 底の周囲をコバ入り粘土で外面の周囲を形成 内面の稜線で、見込みの全面平ら、口の方、三重重文線用に墨を入れて左の1条 高台の2条弗線は手彫る 口縁部の口縁部調整	底付は無調整 高台の内面は軸剥ぎ	見込部分の目跡部分 全面に内ハリ目あり 重文付墨	肥前系	19c 冬4 円卓部
1号側溝発掘区第56図5	八寸皿 方形	口径14.8 高台径5.6 器高2.6	砂粒(角付)白色	強い朝軸 全面	強い朝軸 全面	全体軸剥ぎ		肥前系	19c 20c 前半
1号側溝発掘区第56図6	中碗 八角調度り	口径14.8 高台径5.6 器高6.1	砂粒(角付)灰白色	にごりの多い 逆朝軸 全面	型打ち成形で八角形口縁 角は空間を持つ平坦な台 底全体に上から粘土を足して外れた部 修復文字線 見込みは不明文線 高台側を出し	全体軸剥ぎ		肥前系 波佐見系	19c 中葉
1号側溝発掘区第56図7	中碗	口径14.0	砂粒(角付)白色	逆朝軸 全面	手捻き外見角付 二ヶ外面の部底近辺、内面口縁下に格子目文字、その下に2条弗線	不明		肥前系	19c 中葉
1号側溝発掘区第56図8	中碗	高台径9.1	陶器 黄緑灰色	淡緑灰色の光沢 内面の高台部と見込で 見込み	内面は台化粧 その部毛目文 高台側り出し	見込み部の目跡部分 全体外面に内ハリ目あり		肥前系	18c 後半 20c 前半
1号側溝発掘区第56図9	中碗	高台径7.5	陶器(半磁器) 白色 光沢あり	暗緑灰色の青磁釉 全面 光沢あり	高台側り出し	全体軸剥ぎ 見込みに内ハリ目あり	特徴的な胎	肥前系か	19c 末 20c 前半
1号側溝発掘区第56図10	中碗	高台径16.2	陶器 明るい黄色 ガラス質 全体に光沢	低火度の鉄釉の青磁 内面から裏下に 光沢あり	外面カキ目 断面台形の貼り付け高台 底部ヘラ削	輪下位指紋付き取り		産地不明	不明
1号側溝発掘区第56図11	小碗	高台径16.4	陶器 黄色白 ガラス質 全体に光沢	陶器 黄色白 ガラス質 全体に光沢	口縁部肥厚 内面カキ目	不明	発色不良の不良品	高取系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第56図12	小碗 片口か	高台径10.0	陶器(半磁) 白色 黄色 ガラス	陶器(半磁) 白色 黄色 ガラス	高台断り出し	全体から胎の目跡部分 高台の目跡は軸剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第56図13	小皿か仏花瓶	高台径12.0	陶器 赤褐色 白色粒 ガラス質 光沢あり	褐色の光沢 外面	外面断り目状強調 内面部分ナデ 受け台から内面は発色していない	全体軸状き取り	内面の部分はかろうあり 肥前系胎の目又後を模倣か	小石原系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第56図14	中碗	口径(16.8) 器高推(14.6) 底径(6.4)	陶器 黄緑色 緑灰 褐色 全面	長石一部発色の黄緑 褐灰 褐色 全面	外面は鉄釉の粒状文上絵付け 内面は煙草花文 見込みは小明文線 高台側り出し	車付は無跡ずいぶん 底の目跡の目部は軸剥ぎ	2次調査と中碗17図4と同型	産地不明	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第56図15	皿	口径(9.2) 底径推(4.4) 器高3.8	陶器(磁) 白色	逆朝軸 全面	外面手捻きコマ目ト角付けにより崩れた幾何模様と絞文	内面は輪積と高台部は軸剥ぎ		肥前系	19c 後半 20c 前半
1号側溝発掘区第56図16	小型仏壇か	口径(19.0)	陶器(土師質) 褐灰色 緑灰 褐色 全面ヤキ直か	——	外面丁寧なミガキ 内面は内部底近を貼り付け ヨコナデ	不明	口縁部煤付着	在地系か	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第56図17	中碗 火鉢	胴径(17.2)	瓦質 褐色色 灰質 白雲母多く含む	——	外面丁寧なミガキ	不明	然付痕跡	在地系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図1	大鉢	口径(28.6)	陶器(色絵) 灰白色 淡色粒子多い	逆朝軸 全面	外面胴上半は鉄釉、下半は鉄釉の上に鉄の絵描きで花弁文様を上絵付け 内面は煙草花文 見込みは小明文線 高台側り出し	不明		肥前系	19c 後葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図2	皿	口径(24.8)	磁器(白) 白色	逆朝軸 全面	外底平坦さコマ目と角付けにより外面は側中位に石目 内側は縦横に上下、下2条の界線内に鉄釉文様二丸文を	不明	不明	肥前系	19c 後葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図3	大鉢	口径(30.0)	陶器 赤褐色 緑灰 褐色 青丸粒子入る	本胴色の鉄釉 全面	口縁部は折り返して肥厚	不明	被木跡か	肥前系	19c 後葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図4	入碗	口径15.2 器高推(5.8) 底径推(4.4)	陶器 褐灰色 緑灰 白色粒子入る 光沢あり	外面は鉄釉を掛けた後、白化粧土を中位まで掛けて鉄絵に 鉄絵文様を、鉄釉を掛ける 内面は白化粧土の上に高台側輪郭り 貼り付け高台 底部は目線ヘラ削り		重付無跡ず 見込みに砂目跡あり	ほぼ完形で地味味の整みあり	みやま市二川焼	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図5	大鉢	口径(39.8) 器高推(17.6) 底径(17.6) 高台径16.6	陶器 暗茶褐色 光沢あり	外面は鉄釉を掛けた後、白化粧土を胴中位まで掛けて巻状に 鉄絵文様を、鉄釉を掛ける 内面は白化粧土を縦横に上下に鉄絵 輪郭り		重付無跡ず 見込みは使用の為 重付や見込みに砂目跡なし	見込みは使用の為 重付や見込みに砂目跡なし	肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図6	大鉢	口径(44.0)	陶器 褐灰色 緑灰 白色粒子入る 光沢あり	外面は白化粧土を胴中位まで掛けて巻状に鉄絵文様を、鉄釉を掛ける 内面は白化粧土を縦横に上下に鉄絵輪郭		不明	外面は天無絵模様 不明	みやま市二川焼	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図7	大鉢か中碗	高台径(10.1)	陶器 黄色白	外面は無釉 内面は鉄釉	外面は本格色の鉄釉 内面は鉄釉の鉄絵 高台外面の鉄釉	輪郭ずと高台部は軸剥ぎ	胎が特徴的だが、産地不明なのが残念	産地不明	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図8	大鉢か中碗	高台径(10.0)	陶器 黄緑灰色 灰色 鉄質	外面は無釉色の鉄釉と上部鉄絵色の鉄絵釉 中位に墨線 墨線を出し 鉄釉外胴は貼り巻とし	外面は無釉色の鉄釉と上部鉄絵色の鉄絵釉 内面は白化粧土の上に高台側輪郭 貼り付け高台 底部は目線ヘラ削り	輪郭軸状き取り	胎が特徴的だが、産地不明なのが残念	産地不明	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図9	大鉢	復元不能	陶器 褐色 鉄質 白色粒子多く入る	植質現色の鉄釉 全面に薄掛け	——	不明	貼り目はないが、欠損部に貼り目をつけ直かか	小石原か	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図10	入碗	復元不能	陶器 赤褐色 硬質 褐色	口縁部は白化粧土を掛けて巻状に鉄絵文様 内面は白化粧土し 鉄絵に全面酒類釉掛け		不明		肥前系か	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図11	小碗	口径(16.6) 高台径(9.6) 器高5.5	陶器 黄緑灰色 鉄質 全体ガラス質 褐色	淡灰のある釉 全面	外周部下部に突帯 巴線によるものか 貼り付け高台か	輪郭ずと胎	特徴的な胎	在地系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図12	大鉢 火鉢	口径(47.0) 器底(36.4) 器高(16.6)	瓦質(土師質) にぶい黄灰一等 灰色 鉄質	外周は鉄釉の鉄釉と上部鉄絵色の鉄釉	外周は口縁部貼り付けによる肥厚 貼り付け後強力なハケ調整、強度に問題に強度 口縁部に強度 ヨコナデ 鉄釉は下部	不明		在地系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図13	蓋か	丸型(9.2) 器高(3.0) 摘径(3.7) 厚さ(1.6)	磁器(色絵) 白色 高台部下位まで 褐色	乳白色の透明釉 胴 内面から高台下位まで 全面	手捻りと2段摂線 赤彩手描き上絵付け 高台側り出し	高台外周無釉剥ず		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第57図14	仏飯器	口径(6.2) 高台径3.8 器高5.6	磁器(白) 白色	逆朝軸 全面	胴部文 コマ目ト角付	受け部剥ず 一部胴目付着	胎部の微細は開り時のもの	肥前系	1690 ↓ 1780
1号側溝発掘区第57図15	仏飯器	高台径8.5	磁器 白色	ごちうのるように 黒色粒子の鉄釉多い	底中央部は削り	底端部軸剥き取り	肥前系の不良品か 産地不明 仏飯器は内の製品なのが残	産地不明	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第58図1	片口碗	口径(23.0)	陶器 赤褐色 鉄質 白雲母 全体ガラス質 褐色	粒状石英の鉄釉 内部に鉄釉から内に鉄釉が	口縁部は大く折り曲げて玉縁状 外面片口の部分はナデ 片口内側はナメリ 貼り目34本単位	不明		高取系	不明
1号側溝発掘区第58図2	片口碗	口径(22.4) 高台径12.6	陶器(半磁器) にぶい黄白色 硬質	黒色と白色の中間色 ガラス質 鉄釉の多い	口縁部は大く折り曲げて玉縁状 鍋の縁い 貼り目34本単位 貼り目上端ナデ調え	不明	天目釉のようだが胎が特徴的でしかの天皮式と推測	高取系	不明
1号側溝発掘区第58図3	擂鉢	口径(32.0)	陶器 にぶい黄白色 ガラス質 光沢あり	鉄釉多量色の鉄釉 内部に鉄釉から内に鉄釉が	口縁部は丸く玉縁状に肥厚 鍋の縁い 貼り目34本単位 貼り目上端ナデ調え	不明		小石原系	19c 中葉 20c 前半
1号側溝発掘区第58図4	擂鉢	口径(38.0)	陶器 暗赤茶褐色	鉄釉茶褐色の鉄釉 内外光沢あり	口縁部は折り曲げて厚肉な下端状に肥厚 貼り目36本単位 貼り目上端ナデ調え	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半

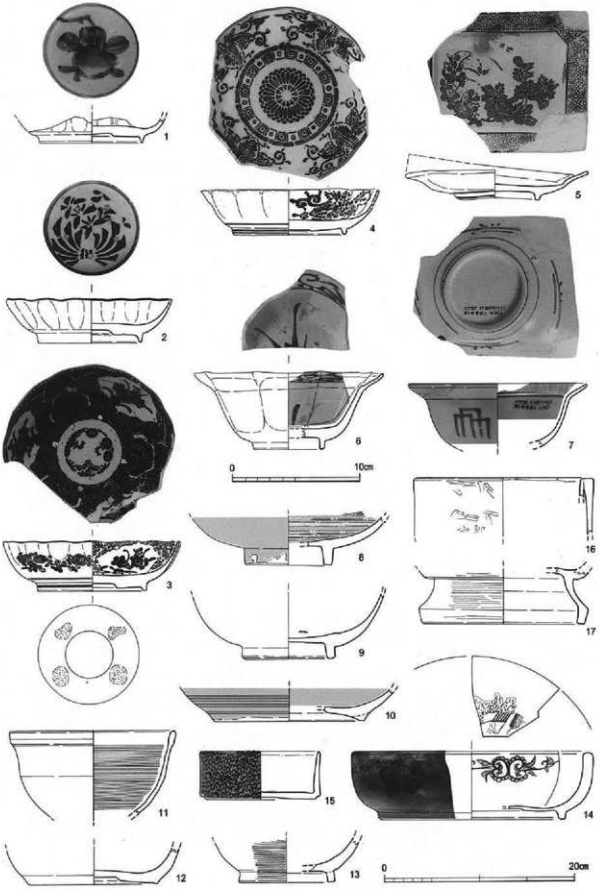
表15 3次調査1号清状遺構暗黒色土層出土土土器・陶磁器観察表(a)



第55図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図3 (1/3)

遺構名	器種	法量(cm) ( )は長径	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	底部技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
博物館番号 現地番号	形状 遺転名		胎の特徴						
1号暗渠色土層 50図5	碗類	底況不明	陶器 砂質粗色 白色粒子大 緻密	灰釉 全面	外面口縁下は凹線状のヨコナデ 内面の口縁状文は細に粘結あり 撫り具痕位不明 焼台上端ナデ痕	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 50図6	小皿	口径(10.6)	陶器 砂質 赤灰みを帯び 緻密 白色粒子少し	透明釉 全面	—	不明	胎土から三川焼の可能性高い	肥前系か みやま市二川焼か	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 58図7	小皿	口径(18.0)	陶器 灰色 硬質	外面は胴上半から底部 内面は全面 灰釉	外面は口縁部撫り曲げて平坐にする 肩部に凹線状の調整痕が曲げ直し	上部は撫釉抜き取り		高取系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 58図8	小皿	口径(14.0)	陶器 灰色 硬質	赤褐色の鉄釉 全面	口縁を内側に折り返して肥厚 外面の胴部に2条沈線	不明	特徴的な口縁形態	唐津不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 58図9 B89区15	大碗	復元不能	土器(土師質) にぶい黄橙褐色 軟質	—	口縁部肥厚後ナデ 外面口縁下ハケ調整 内面ヨコハケ後、5本単位の櫛書き文布施文	不明	口縁部は無文	在地系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 58図10 B89区15	火鉢か	口径(40.0)	土器(土師質) にぶい黄橙色 軟質	—	口縁部肥厚後ナデ 外面口縁は横ハケ、上段下は斜のハケ調整 内面ヨコハケ後、5本単位の櫛書き文芯施文	不明		在地系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 58図11	火鉢	口径(60.4)	土器 にぶい橙褐色 軟質 白色粒子多く含む	—	外面口縁下は面取り調整の不明 ヨコナデ 内面は全ヨコナデ	不明	内面にキラキラ付着していず、外面の調整痕から推測して可能	在地系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 58図12	大鍋	口径(62.6)	土器 暗赤褐色 軟質 白色粒子多く含む	—	外面は口縁上は丁寧なのち荒雑状を呈する ヨコナデ 内面口縁はナデ 口縁上は凹線	不明	内面にカキメ付着しているが、外面の調整痕から推測して可能	在地系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図1	大鍋	口径(29.0) 現在(22.2)	陶器 明灰色 黒色粒子多い 緻密	外面から内面口縁部に白化粧土を掛け、外面から内面口縁まで透明釉掛け 黒い斑点	外面から内面口縁部に白化粧土を掛け、外面から内面口縁まで透明釉掛け 黒い斑点	無下位は釉抜き取り	胴上部と底部は凹上接合	小石原系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図2 B89区14	大鍋 鉢か鉢	口径37.0	陶器 黄橙~褐色 黒色粒子多く含む	内外黄茶褐色の灰釉を掛けた後、外面胴上位から内面に白化粧土	内外黄茶褐色の灰釉を掛けた後、外面胴上位から内面に白化粧土	不明		小石原系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図3	大鉢	最大径(46.4)	陶器 黄褐灰色 緻密	暗茶褐色の灰釉 全面	外面口縁下の突帯・面取調整・底部荒丁は抜き付け	不明		肥前系か	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図4 B89区15	小瓶	高台径8.4	陶器 灰白色 黒色粒子多い 粗状	胴部の上に高台部に鉄釉かける 外面のみ	外面高台に手描きコバルト染付による四角連文	無付釉刷毛	間と接合	唐津・小石原系か	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図5 B89区15	小瓶	高台径7.6	陶器 明灰色 黒色粒子多く含む 粗状	暗褐茶褐色の鉄釉 全面	外面高台に手描きコバルト染付による四角連文	底付釉刷毛		小石原系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図6	小瓶 徳利か	底径5.9	陶器(磁付) ガラス質 白色	褐鉄釉 外面一円口縁部	手描きコバルト染付による外面四面に2条、胴下位に1条沈線 底部外縁はカット	底部は釉刷毛		瀬戸・美濃系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図7	小皿	口径(10.0)	陶器 にぶい橙褐灰色 緻密 明灰	緑釉 外面のみ 光沢あり	底部から内面口縁部	口縁部釉刷毛 底と重ね焼きしたか	黒ねばきする部分あることから窯焚ころ	高取・小石原系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図8	小皿	底径(4.9)	陶器 灰色 精良	低火度の灰色の灰釉 外面のみ	外面から内面口縁部	無付釉刷毛	黒ねばきする部分あることから窯焚ころか	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図9	小皿	高台径(6.4)	陶器 明赤褐色 緻密	暗茶褐色の鉄釉 全面呼称付け	高台削り出し	高台外面から後付け鉄釉あり	外面の釉抜き跡あるの	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図10	小型皿か	口径(16.9)	土師器 にぶい赤褐色 白色粒子入る 緻密	—	外面口縁部ヨコナデ、口縁下に有状把手貼り付け、貼り付け痕は明瞭 内面底部を掻き、上面は削り出す	不明	胎土は極多瓦可能性に近い	産地不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図11	徳利 壺か	口径(37.0)	土師器 にぶい黄橙褐色 軟質 内面白粒多い	—	面に沿、窯跡部は肥厚させナデ 外面はハケ調整 底部の接合部はオサエ 内面上面は ナデ調	不明	胎土が特徴的で在地的でないない	産地不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 59図12	七輪	口径(21.0)	土師器 にぶい橙褐色 軟質 白色粒子入る	スリップ 外面から口縁部 内面全面	口縁部は内側に折り曲げて口唇部を成形、外面は多段 押圧は粗雑 口唇部につまみ状突帯 内面突帯の間は平坦 内面下面と底面はケズリ 粗ナデ	不明	つまみ状突起は手応の底部と上面の形の変化は不明	福岡市博多区周辺	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図1	行平鍋か	器径(18.0)	陶器 灰色 緻密 精良	鉄釉内面のみ	暗茶褐色の鉄釉を胴毛中間に施釉、その上に紙ブラシ3列以上	暗茶褐鉄釉抜き取り	胎土が特徴的で高取系に近い	高取不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図2	土鍋蓋	器径(19.0)	陶器 灰白色 軟質 精良	淡灰色の鉄釉 全面	蓋文が蓋で補われる	無釉鉄抜き取り	胎土から在地系か 蓋部による支脚も特異	在地系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図4	土鍋	復元不能	陶器 にぶい暗灰色 白色粒子多い	茶褐色の鉄釉 全面	蓋内側の蓋受部を印刷された把手を貼り付け 光沢ある鉄釉の鉄火度の鉄釉を印刷の上面のみ	不明		唐津不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図5	土鍋	口径(13.8) 最大径(14.2)	土師器 灰色 緻密 精良	低火度の透明釉 全面	口縁を折り曲げて直立字形に成形口縁下に鉄ブラシ3列以上	口縁部無釉刷毛 蓋と重ね焼きするため	—	産地不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図6	土鍋	口径(18.0)	陶器 灰白色 金雲母多い	明茶灰色の光沢ある低火度の鉄釉 内面胴中位以下	口縁部を掻き	—	外面の煤付着	肥前不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図7	土鍋	口径(17.0)	陶器 暗赤褐色 緻密	内面から外面口縁下で鉄釉を掛けた後、暗茶褐色の光沢ある低火度の鉄釉を同じ範囲に掛ける	口縁部を折り返して直立 口縁部を折り返して直立	口縁部の釉抜き跡ないので取り扱きなし	外面の煤付着	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図8	土鍋	口径(14.6)	陶器 にぶい橙黄白色	口縁部を掻きして受け皿を成形 骨灰釉を掛けた後胴上位形の把手貼り付け 把手部は光沢ある鉄釉内面胴中位まで光沢ある低火度の鉄釉	受け皿を成形 骨灰釉を掛けた後胴上位形の把手貼り付け 把手部は光沢ある鉄釉内面胴中位まで光沢ある低火度の鉄釉	受け皿釉刷毛	外面の煤付着 内面は使用による炭化物痕がある	産地不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図9	土鍋	口径(19.7) 高台径(8.1) 器高7.0	陶器 青灰色 精良	口縁部を掻きして受け皿を成形、高台を削り出した後胴上位形の把手貼り付け 把手部は光沢ある鉄釉 内面胴上位以下と外面口縁部から胴中位まで光沢ある低火度の鉄釉 外面は底部で使用 上げ底で器端底状を呈する	口縁部を掻きして受け皿を成形、高台を削り出した後胴上位形の把手貼り付け 把手部は光沢ある鉄釉 内面胴上位以下と外面口縁部から胴中位まで光沢ある低火度の鉄釉 外面は底部で使用 上げ底で器端底状を呈する 底部外縁に沈線	外面の煤付着	産地不明	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図10	土鍋	底径(6.5) 器高(3.2)	陶器 暗褐色 精良	茶褐色の鉄釉 全面	胴中位以下に把手を貼り付け 外面胴部は鉄釉 内面胴部にも鉄釉 高台平坦	不明		肥前系か	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図11	碗か 鉢か 紅皿	口径6.0 器高(2.2) 器高2.0	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉 内面から外面口縁部まで施釉	型押し成形で蛸唐草文を印刷	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図12 B89区14	碗か 鉢か 紅皿	口径6.0 器高(2.2) 器高2.0	磁器(白磁) 白色粒子入る 緻密	乳白色の透明釉 全面	型押し成形で蛸唐草文を印刷	不明	完形	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号暗渠色土層 60図13 B89区15	灯明受皿	灯明受皿2 最大径(7.4) 器高(2.4) 底径(3.6)	陶器 にぶい橙黄褐色 粗状	茶褐色の鉄釉 内面から全体	受け部装着 底部糸切り	2箇所に胎土目跡あり		肥前系	19c中葉 / 20c前半

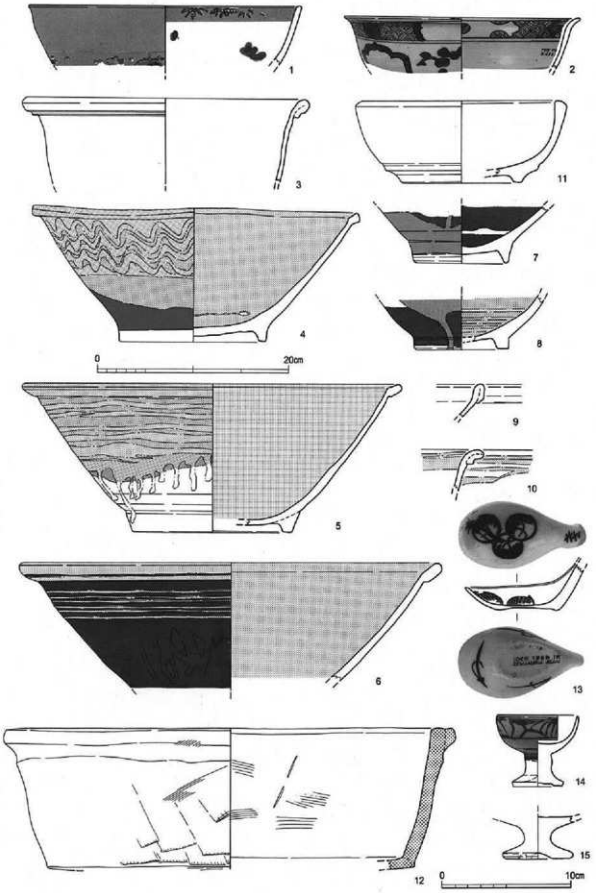
表15　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土土器・陶磁器観察表(4)



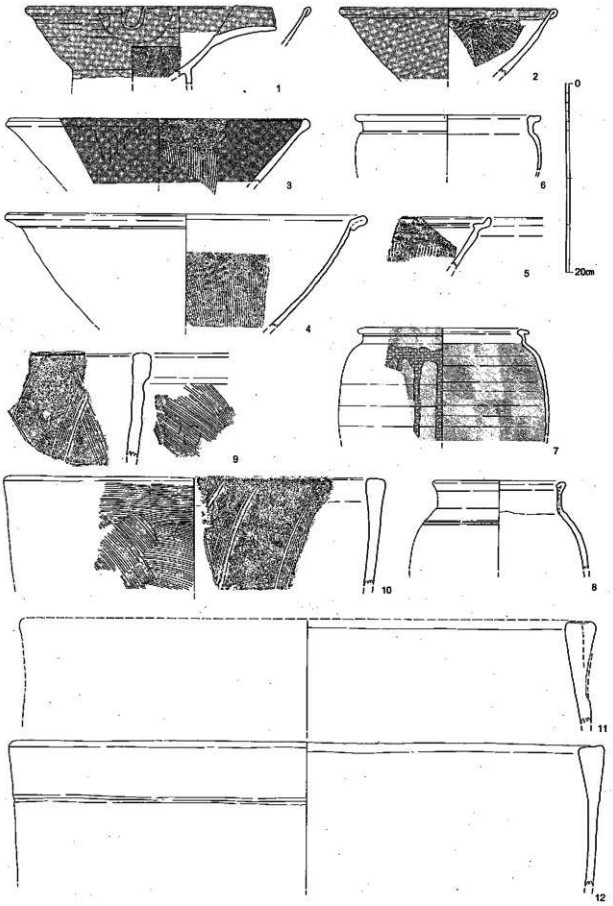
第56図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図4（8・10・11・13・16・17は/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	貼の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	雲母技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
検出番号 図版番号	形状 器形名	(　)は復元値	貼の特徴						
1号遺構黒土層 60図14	灯明受皿	受け部径5.0 器高2.1 径高2.5 底部厚2.8	南部 整形色　白色粒子あり	無釉	受け部装着　底部糸切り	脚上目跡あり	受け部口縁に煤付着	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 60図15	土管	受け部径5.0 胴部径2.4	南側(土師質) 表面色　紫黒白粒子多い	内外明褐色の飴釉　光沢あり	内面カキ目	不明		小石原系か	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 60図16	炉形土器	長軸(25.0) 内径(20.0)	土師器 にぶい黄橙色　角閃石　長石目立つ	口縁部にペンコロナケ。内面全面	型成形の胴部にU字型全　外面口縁下は同転コロナケ。横部は未調整。テデフ真剣	不明	U字型部は側壁していないので取り外し可能なもの	在地系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図1	土瓶蓋	摘径8.0 受け径8.0 器高3.2	陶器 灰色　光沢あり	緑灰色の灰釉を施器まで	入井部にボタン状つまみ貼り付け　外面輪縁に近接　天井部にイッチャンで「L」字と点の受け部装着	受け部下端状ある取り	受け部下端に取り付	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図2 図版16	土瓶蓋	摘径9.2 受け径8.8 器高2.8	陶器 赤茶褐色　精良 子入る	茶褐色の釉を施器まで	天井部にボタン状つまみ貼り付け　輪縁部端受け部装着	受け部下端状ある取り	受け部の始	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図3 図版16	土瓶蓋	摘径9.4 つまみ径2.2	陶器 赤褐一部灰色　精良	暗灰白色の赤釉　光沢あり	天井部に陸状つまみ貼り付け　受け部装着	受け部下やや内傾する釉掛内全面	白色粒子が混状に入る特徴的な釉	高取系か	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図4 図版16	土瓶蓋	摘径6.2	陶器 黄褐色　軟質	茶褐色の薄い鉄釉を被覆まで	——	受け部下端状ある取り		小石原系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図5 図版16	土瓶蓋	摘径9.8 胴径8.0 器高2.1	陶器 淡灰色　白色粒子入る	暗茶褐色の鉄釉を被覆まで光沢あり	胴部扁平へ前り	受け部下端状ある取り		高取系か	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図6 図版16	土瓶	復元不能	陶器 赤褐色	黒褐色の軟一部赤褐かぶり内部上部まで　光沢なし	押し部穿孔3つ部と接合　方形の板状の把手	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図7 図版16	土瓶	復元不能	陶器 黒灰一部灰色　白色粒子入る　やや精良	にぶい橙褐灰色の灰釉を部分的ガレつきあり	注口部穿孔1つ部と接合	不明		小石原系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図8 図版16	土瓶	復元不能	陶器 褐灰白色　精良	黄灰白色の光石釉	注口部穿孔3つ部と接合	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図9 図版16	土瓶	復元不能	陶器 にぶい橙赤灰色　精良	濃茶褐色の光沢釉の鉄釉を施器まで	注口部穿孔3つ部と接合　方形の板状の把手	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図10	土瓶 胴下側部 骨土器	口径(8.6) 最大径(16.6)	陶器 にぶい橙赤灰色	白褐色の鉄釉を被覆まで	山形把手貼り付け　内面胴部は自化粘土の釉　胴下位は滑刺釉の	口縁部は鉄釉無装飾取り		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図11	土瓶 胴中側部 骨土器	口径(8.1) 最大径(16.6)	陶器 暗赤褐色　精良	白褐色の鉄釉を被覆まで	山形把手貼り付　内面口縁部は自化粘土の釉　胴下位は滑刺釉の	口縁部は鉄釉無装飾取り		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図12 図版16	土瓶 最下側部 骨土器	口径(8.4) 最大径(18.2)	陶器 暗赤褐色　精良	茶灰白色の鉄釉を部分的ガレ　内面は胴部上部まで	山形把手貼り付　外面口縁下に台を貼　胴下位は自化粘土の釉　胴中位以下は鉄釉の釉	口縁部は鉄釉無装飾取り		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図13 図版16	土瓶 胴下側部 骨土器	底径(7.5) 最大径(16.1)	陶器 暗赤褐色　硬質	褐灰白色釉を白化粘土の釉を部分的ガレ　内面は胴下部まで鉄釉の	注口部穿孔3つ部と接合　方形の板状の把手　見込み部は鉄釉の釉　胴下位は鉄釉の釉	上げ底で鉄釉状態で見る		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図14 図版16	土瓶 胴部形	最大径(19.6)	陶器 赤褐灰色　硬質	暗茶灰褐色の鉄釉を部分的ガレ　内面白化粘土の釉	注口部穿孔3つ部と接合　山形の把手	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図15 図版16	土瓶	口径(7.6) 最大径(16.2)	陶器 灰一黒灰色　硬質	褐茶灰褐色の鉄釉　光沢あり	注口部穿孔3つ部と接合	口縁部は鉄釉無装飾取り		高取系か	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図16	土瓶	底径(7.0)	陶器 にぶい黒灰色　硬質	内面は鉄釉の釉の釉残	天井部内側に陸状がある　ケケカナであれば「冷イ」とおめる　足底はあり	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 61図17 図版16	土瓶	底径(7.4)	陶器 暗赤褐色　精良	内部部は鉄釉の釉残　光沢あり	天井部内側に陸状がある　ケケカナであれば「冷イ」とおめる　足底はあり	不明		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図1 図版16	魚信皿	底径(8.4) 器高(1.5)	陶器 にぶい灰褐色　硬質　白色粒子混入	内部部は鉄釉の釉残　光沢あり	高台外周に不整為コバルト塗付による四角点入　三角点を線で上下に連結　内面は放射状に線を描く	高台内接底部は無釉　底部は平　底部は外縁に鉄釉あり	鉄釉底部の無い肥前系の可能性	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図2 図版16	魚信皿	底径(8.2) 器高(1.1)	陶器 灰色　精良	内部部は鉄釉の釉残　光沢あり	高台外周に不整為コバルト塗付による四角点入　三角点を線で上下に連結　内面は放射状に線を描く	高台内接底部は無釉　底部は平　底部は外縁に鉄釉あり	鉄釉底部の無い肥前系の可能性	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図3 図版16	魚信皿	底径(8.2) 器高(1.1)	陶器 灰色　精良	内部部は鉄釉の釉残　光沢あり	高台外周に不整為コバルト塗付による四角点入　三角点を線で上下に連結　内面は放射状に線を描く	高台内接底部は無釉　底部は平　底部は外縁に鉄釉あり	鉄釉底部の無い肥前系の可能性	肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図4 図版16	碗蓋	摘径6.5 つまみ径1.5 器高2.5	磁器(染付) ガラス質　白色	透明釉　全面	つまみに四角形　天井部に平面為点を線で上下に連結　天井部内面に三本線描　内面は放射状に線を描く　つまみ部与由し	つまみ畳付釉剥ぎ		肥前系 有田町小樽窯か	1830 / 1860
1号遺構黒土層 62図5	碗蓋	摘径8.4 つまみ径3.8 器高2.9	磁器(染付) 灰白色　黒色粒子あり	透明釉　全面	天井部内側に陸状がある　ケケカナであれば「冷イ」とおめる　足底はあり	つまみ畳付釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図6	碗蓋	摘径8.6 つまみ径4.0 器高2.9	磁器(染付) 灰白色　精良	透明釉　全面	手描き呉須染付により雪文の上に乗せて	畳上釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図7	碗蓋	摘径8.6 つまみ径4.0 器高2.6	磁器(染付) 灰白色　精良	透明釉　全面	手描き呉須染付により雪文の上に乗せて花蕊文　天井部の三本線描　内面は放射状に線を描く　つまみ部与由し	天井部内側に陸状がある　ケケカナであれば「冷イ」とおめる　足底は畳部無釉有釉あり		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図8	碗蓋	摘径8.9	磁器(染付) 灰白色　精良	透明釉　全面	手描き呉須染付により雪文の上に乗せて	畳上釉剥ぎ		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図9	蓋	摘径16.1 天井部厚7.9 器高3.9	磁器(染付) 白色	透明釉　全面	手描きコバルト塗付により花蕊文　天井部の三本線描　内面は放射状に線を描く　つまみ部与由し	天井部内側に陸状がある　ケケカナであれば「冷イ」とおめる　足底は畳部無釉有釉あり		肥前系	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図10	急須蓋	摘径(7.3) 天井径(6.4) 器高(0.9)	磁器 灰色　精良　硬質	天井内を透明釉　外周の為釉	外周部に溶解釉の支輪　天井為面に型打ち成形の凸状為あり	胴端釉剥ぎ取り		関西系か	19c中葉 / 20c前半
1号遺構黒土層 62図11	蓋	摘径(9.0) 器高(1.1)	磁器(「明精」) 緑がかった明灰色　ガラス質	鉄釉色の高明釉　全面	受け部装着	畳下釉剥ぎ		唐津焼窯跡群多久焼原料産地か	19c中葉 / 20c前半

表15　3次調査1号遺状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(5)

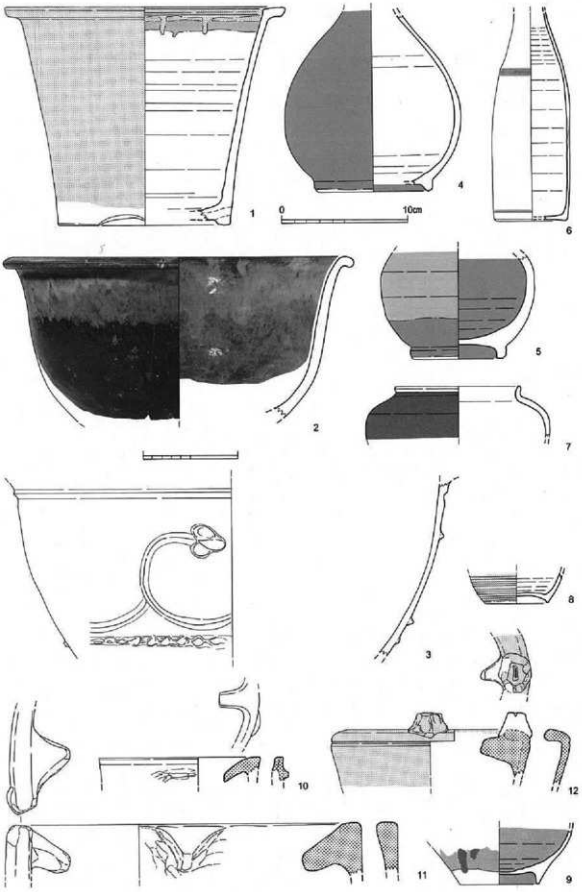


第57図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図5（11・13～15は1/3、他は1/4）

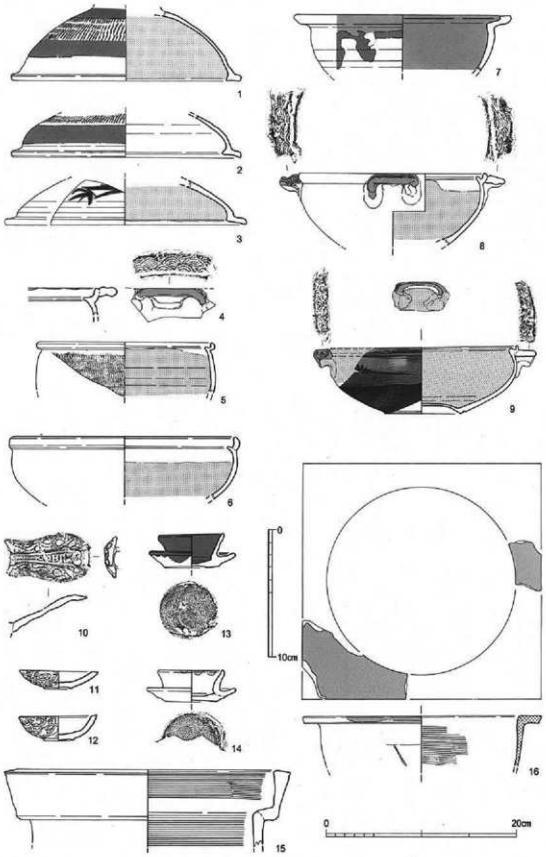


第58図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図6 (1/4)

71



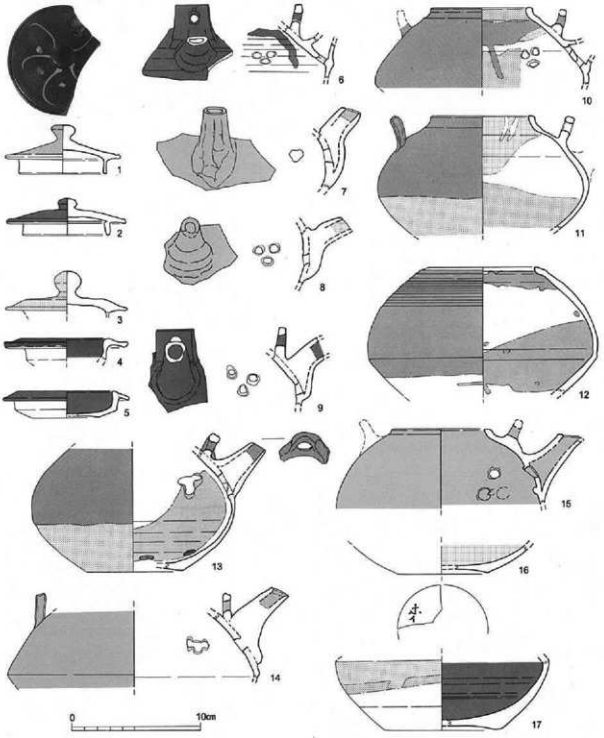
第59図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図7（4～9は1/3、他は1/4）



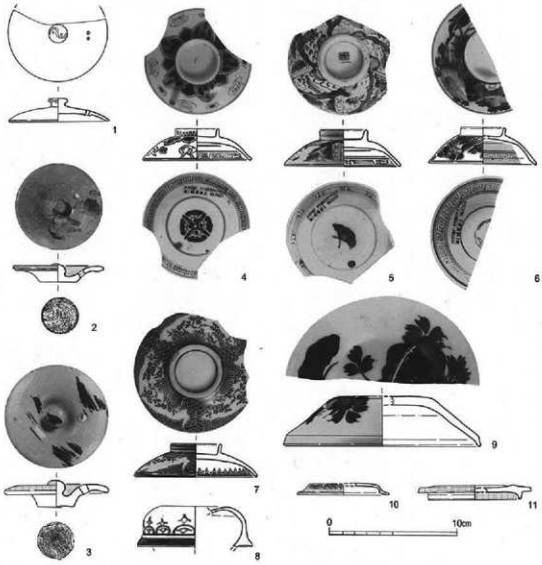
第60図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図8（9・15・16は1/4、他は1/3）

60図３は外面に墨書で文様が描かれる珍しいもので、胎土から在地産とした。60図13は口縁部に煤が付着しており、受け皿ではなく、灯明皿として使用されている。

60図16は炉形土器で、粘土板を貼り合わせて箱形にした板作り成形。外面が未調整で、板の上で成形した粘土板を使用したものか。軟質で薄いことから枠に入れられて使用するもの。



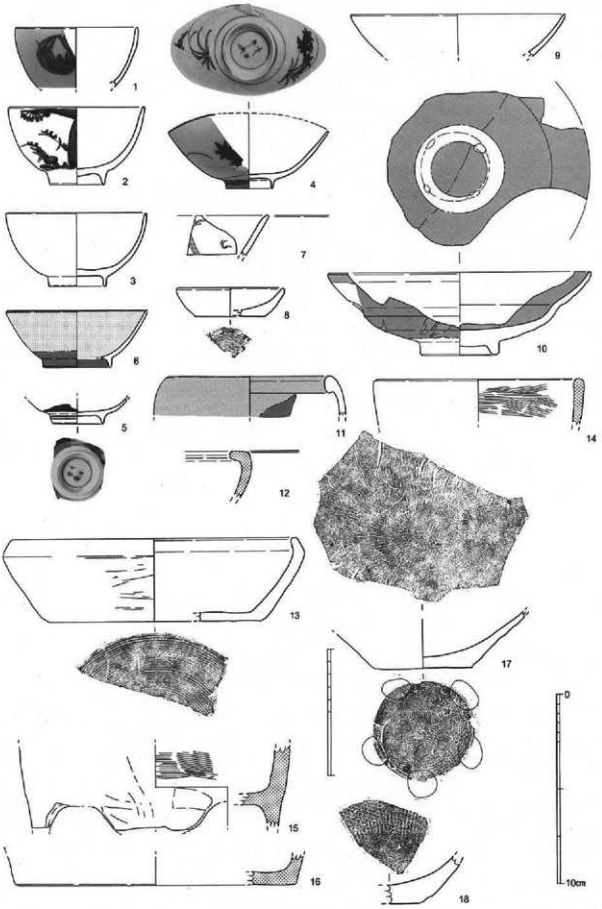
第61図　３次調査１号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図９(1/3)



第62図　3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図10(1/3)

71図11は7～10のるつぼと同じような融着があるが、大きさが異なるので、大型のるつぼか、取瓶であろう。71図12・13はるつぼのように流動する金属が融着ものではなく、内面に均質に融着している。つまり、溶解した金属が流れたものではなく、高い熱を受けたために胎土内の砂粒が溶解したものである。器形は円筒形で、12は下方がすぼんでいる。すぼむ部分の外面は挿入した痕跡があることから、同じような個体を上下に挿し込んで円筒を作っていたものであろう。13は12のように挿入するのではなく、同じ径の個体を積み上げている。口唇部や下端部が熱を受けていないのはそのためである。12・13は数個体積み上げて円筒形にし、火のついた炭を入れる大型の火入れと推定される。こうしたものは常時大量に炭を使用する施設がなければ使用しないので、るつぼともに鋳物工房で使用したものであろう。

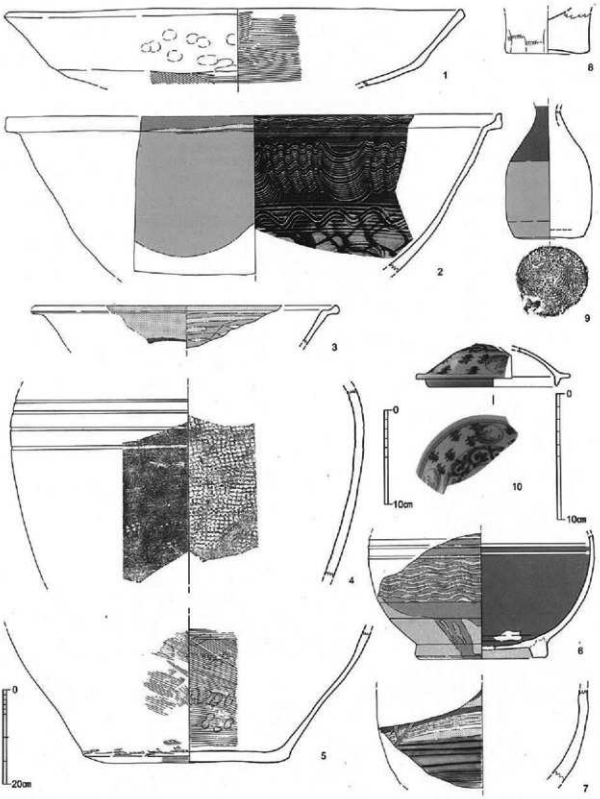
遺構面からは火を受けて赤変した範囲が多く見られたが、炉状に窪まなかったので遺構として認定しなかった。こうした火入れは底がなく、直接地表に置かれたのこうした赤変が生じたのではなかろうか。



第63図　3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1（12～18は1/4、他は1/3）

遺構名	器種	法量(cm)	地の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	廃棄技法	所見		
掲載番号 / 図版番号	形状 / 遺物名	()は復元値	地の特徴				特記事項	推定産地	推定年代
2号炭 63図1	中瓶	口径9.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	コンニャク印刷風装飾付による花唐文	不明		肥前系	1700 / 1740
2号炭 63図2	中瓶	口径10.6 底径6.4 器高8.1	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	手描き外側染付による松樹文か 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	1680 / 1700
2号炭 63図3	中瓶	口径(6.4) 底径(6.2) 器高4.1	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	1680 / 1700
2号炭 63図4 図版15	中瓶	口径(8.0) 高台径3.8 器高(5.0)	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	手描き凡帳紋付による外面縦描きの宝文と胴下位と高台に1条界線とコンニャク印刷による菊唐文 外底は1条界線内に「大明年製」	畳付釉剥ぎ	大きく歪んでいる	肥前系	1690 / 1740
2号炭 63図5	中瓶	高台径4.2	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	手描き凡帳紋付による外面下半文と高台に2条界線 外底は1条界線内に「大明年製」	畳付釉剥ぎ		肥前系	17c後葉 / 18c前葉
2号炭 63図6	中瓶	口径(11.0) 高台径(5.3) 器高7.5	陶器 青灰白色 軟質 精良	青入ある低火度の透明釉 全面	口縁部と胴下位から高台内面は鉄釉	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
2号炭 63図7	中瓶	復元不能	磁器(青磁) 灰色	緑灰色の青磁釉 全面	内面片切り彫りの花文	不明		中国・龍泉窯	12c後半
2号炭 63図8	小瓶 かわらけ	口径6.4 底径4.5 器高2.3	土師器 黄灰白色 軟質 精良	—	内外ヨコナデ 底部糸切り	不明	拍子から箱埋焼と推定	柳川市蒲池城	不明
2号炭 63図9	中瓶	口径(16.8)	陶器 灰白色 やや軟質 精良	低火度の透明釉 全面 貫入あり	—	不明		肥前系	不明
2号炭 63図10	中瓶 二彩出津	口径(20.6) 底径6.2 器高6.5	陶器 灰白色 やや軟質 精良	口縁部から内面は半分褐釉を掛け、千分をそのまま上に胴縁部を掛ける 外面は緑灰色の灰釉を胴下位まで掛けた上に銅鉄高台削り出し 焼付は胴のこすり	見込みに絞り目痕跡あり、そのまま上に拍子釉4つ	畳釉剥ぎ	橋野市内野山北窯に類例あり	肥前系	1690 / 1750
2号炭 63図11	中瓶 火入れか火鉢	口径(12.4)	陶器 灰一黄褐灰色 軟質 白色粒子入る	鉄釉下掛けで内面は口縁部のみ、外面は全面海泉釉上掛け	—	不明		小石原系	不明
2号炭 63図12	中瓶	復元不能	瓦質土器(土師質) 暗褐色 軟質 金雲母あり	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
2号炭 63図13 図版15	中瓶	口径(29.7) 底径(22.0) 器高8.5	土師器 灰白色 精良 軟質	—	外面ケズリ、ミガキは単位不明 内外ヨコナデ 見込みにカキ目	不明	ミガキは工具不明	柳川市蒲池城	不明
2号炭 63図14	中瓶 火入れか火鉢	口径(22.0)	瓦質土器 白灰褐色 硬質 砂粒子・炭多い 上部有	—	外面ヨコナデ 内面ヨコハケ	不明		在地系	不明
2号炭 63図15	中瓶 火鉢	底径(27.0)	瓦質土器 灰一灰白色 やや軟質 白色粒子多い	—	外面ナデ 脚状部あり 内面ヨコハケ 見込みヨコナデ	不明	火損し煤かもしれない	在地系	不明
2号炭 63図16	中瓶 火鉢	底径(27.0)	瓦質土器 黒灰色 白色粒子多い	—	内外・見込みヨコナデ 外底回転ハケ	畳付釉剥ぎ		在地系	不明
2号炭 63図17 図版15	壺類	底径10.4	陶器 黒灰一褐赤褐色 硬質	内外褐釉	外面ヨコナデ 胴張が広く幅の狭い掛り目13本単位 底部糸切り	不明	見込みと外底に拍子目跡5つあり	肥前系	1650 / 1690
2号炭 63図18	胴林	復元不能	陶器 灰褐一褐灰色 やや軟質	内外露釉	外面・外底ヨコナデ 胴張が広く幅の狭い掛り目単位不明 掛り目交差	不明		小石原系か	不明
2号炭 64図1	大鉢	復元不能	瓦質土器 にぶい黒褐色 金雲母・白粒子多い	—	外面口縁部ヨコナデ、胴部に下斜ケナメ・ヨコハケ、口縁部ヨコナデ 内面は下斜ケヨコハケ	不明		在地系	不明
2号炭 64図2 図版16	人鉢 二彩出津	口径(52.0)	陶器 淡赤褐色	外部は灰褐を無中位以上に掛け、外面口縁部から内部は白化粧土を掛けて赤灰に結晶を取り、そのまま上に内化粧土を掛けて底状に拭き取り 最後に外面口縁部から内面に鉄釉流し掛け	—	不明	口縁部部欠損から推定年代幅内の炭焼窯	肥前系	1690 / 1750
2号炭 64図3	大鉢 二彩胴付	口径(31.4)	陶器 白色粒子多い 軟質	外面は胴部の絵模様下地に掛け、そのまま上絞成不良で灰白色に発色した淡褐釉を胴中位以上に掛ける 内面は口縁上を掛けて底状に拭き取り 最後に透明釉絵流し掛け	—	不明	口縁部部欠損から推定年代幅内の炭焼窯	肥前系	1690 / 1750
2号炭 64図4	大鉢	最大径(36.8)	陶器 灰色 硬質 白色粒子多い	暗褐褐色の鉄釉かけ	外面絵子目タテ斜目掛キ 内面絵子目タテ斜目掛し 胴部に沈線4条 内面格子目タテ斜目当て具痕すり消し	不明	貼り付痕跡	瀬戸不明	19c中葉 / 20c前半
2号炭 64図5	大鉢	底径41.0	土師質土器 黄褐一黄白色 粗土多い	—	外面は下部からとへら下斜ケナメハケ 内面はナデまたのち下斜ケナメ・ヨコハケ 見込みは下斜ケハケ 底部糸切り	不明		在地系	不明
2号炭 64図6 図版16	中瓶	最大径(27.2) 高台径(13.2)	陶器 灰褐色 軟質	外面は鉄釉の上に白化粧土を掛けて淡赤灰色に結晶を取り、その後鉄釉は上部を掛 最後に結晶を掛中位まで掛け、内面は鉄釉を掛ける 外底は鉄釉 中位に格状拭き取り 外底は鉄釉付	畳釉剥ぎ 胴部第2 見込みに拍子目痕跡	不明	口縁部部欠損推定年代幅内の炭焼窯	肥前系	1650 / 1750
2号炭 64図7 図版16	小瓶 二彩出津	最大径(16.6)	陶器 黄褐一暗灰褐色	外面は白化粧土を掛ける鉄釉は抹茶色 胴部上部下位は白化粧土に鉄釉 鉄釉は胴下位まで掛ける	—	不明	内面焦付なので取り出せない	瀬戸不明	1690 / 1750
2号炭 64図8	壺	底径6.4	土師質土器 暗灰一黒色 粗土多い 軟質	外面は十字ハケ 見込みは三回転糸切 上打痕	—	不明		在地系	弥生中期前葉
2号炭 64図9 図版16	小瓶 二彩出津	最大径6.6 高台径5.4	陶器 灰色	胴部から底部は丸底をもつ 赤褐釉の上に白化粧土 黒の絵付胴 下に黒釉掛	表面の絵部は丸底をもつ 赤褐釉上に絵付けしているので、焼成方法不明	—		肥前系	17c前葉 / 17c後葉
2号炭 64図10	小鉢蓋	底径(10.0)	磁器(染付) 白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	手描き外底絵付による花唐文 胴部外側内縁部分の下に線帯文と鉄線円文 そのすぐ上に条線帯	受け部釉剥ぎ		肥前系	1650 / 1700
2号炭 65図1	大瓶	口径57.3 最大径55.0	陶器 黒褐色	内外に茶褐色の鉄釉 胴部に銀灰釉付	外面口縁部にナデによる2条凹帯、工字文と八個以上の鉄線文を間に入れ、下に鉄線文と ヨコナデ 口縁部にカキメ	不明	間心円タテ目有 高台内の円は後藤でも台部	肥前系	17c後葉
2号炭 65図2 図版16	大瓶	口径(30.6) 最大径(39.2)	陶器 茶褐色 硬質	茶褐色の鉄釉 胴部に銀灰釉付	外面は絵付目タテ斜目掛キ 内面は胴部絵付目タテ斜目掛キ 内面は胴部絵付目タテ斜目掛キ 外底は鉄釉 中位に格状拭き取り	不明		肥前系	17c後葉

表16 3次調査2号清状遺構出土土器・陶磁器観察表



第64図　3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2（5は1/8、7～10は1/3、他は1/4）

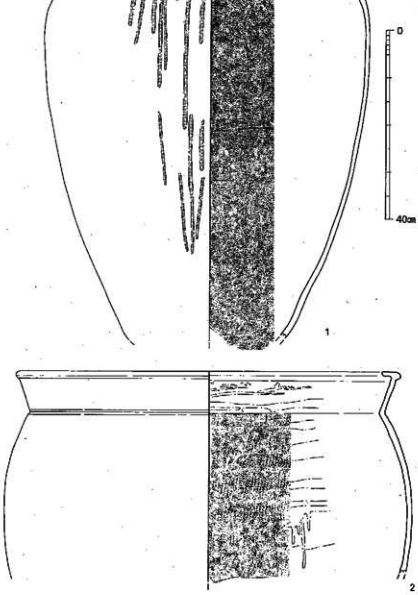
71図16は小型の磁器製人形で、龍だろうか。71図19・20の戸車はアルミナが付着する面がある。窯道具として使用した例があることから、釉着防止のためのものであろう。側面が摩滅しているので、窯道具として使用しつつ、戸車として出荷したものと思われる。

72図２は湯釜片で、薄い鋳造品。１次調査で湯釜の鋳型が出土しており、鋳物工房の製品の可能性もある。72図６は皮靴の底だが、基盤になる１枚の底板の踵ぶに皮を重ね合わせて、鋲で留めるという製法。１号溝状遺構の上限は昭和初期なので、革靴が一般に普及したとはいえない段階であり、この時期に革靴をもつ人物がいたことを示す資料であることから掲載した。

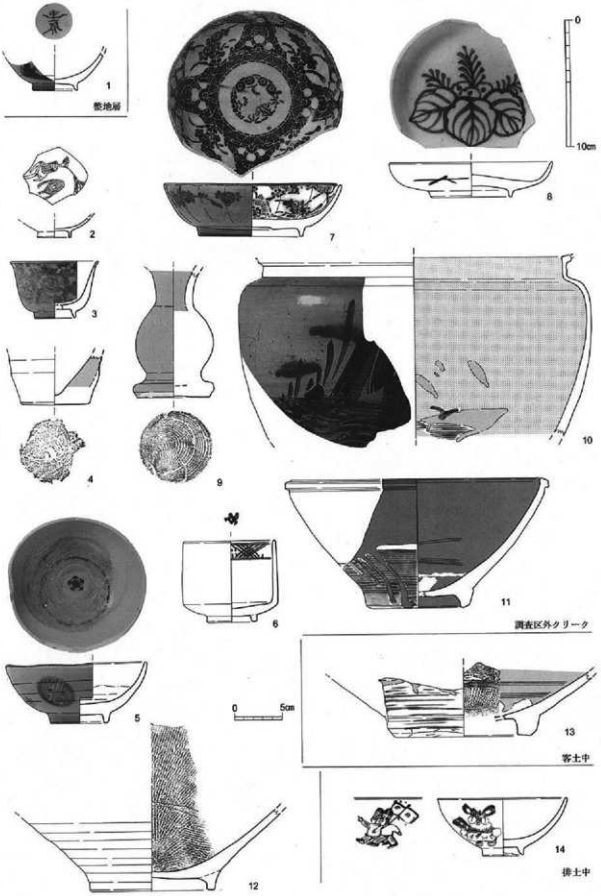
73図５は龍の彫刻だが、扁平で裏面の彫刻はわずかなので、両面は見えるものの裏面は簡略にしたものである。したがって、仏間などの欄干の透かし彫りと推定できる。73図６とは接合しないが、龍の手足のいずれかであろう。73図７は径５cm程の丸木に抉りを入れ、その対面に方形の切り込みをいれたもので、みやま市瀬高町の伝統工芸品である「きじ車」に近い形態である。雉の顔の部分が作られていないが、下面の切り込み部分には車軸を保持する部品が取り付けられたのではないだろうか。瀬高地方で作られたものではなく、子供のおもちゃとして手作りで作ったものかもしれない。彩色は失われているのか、本来なかったのか不明。

73図11・74図１・５・８・75図４は「ぽっくり」と呼ばれる下駄で、赤漆の塗られているものが多い。いずれも小型品であり、女児のものであろう。

七五三などのハレの日用の下駄であろう。歯はあまり擦り減っていない。



第65図　３次調査２号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/8)



第66図　3次調査整地層・調査区外クリーク・排土中・客土中出土土器・陶磁器実測図（10～13は1/4、他は1/3）

遺構名 掲図番号 図版番号	器種 形状 器形名等	法量(cm) ( )は現況値	胎の特徴 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯焼技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
鹿地層 66図1	小碗	高台径(3.4)	明胎(染付) 白色	透明釉　全面 白色	手捻る轆轤挽仕付による若干の歪み　見込みに施れた「蕃」文	重ね焼成か	やや発色悪い丸碗	肥前系	1780 / 1810
排土中 66図2	小杯 蓋	高台径(2.6)	胎陶(染付) 白色	透明釉　全面 白色	内面から見込みはコバルト・金彩でススキを博した花鳥と鉄、赤彩で縁を上絵付け	重ね焼成か		肥前系	19ｃ中葉 / 19ｃ末
区西クリーク3層 66図3	小杯 端反形	口径(5.8) 台径(3.1) 器高4.5	陶器(染付) 灰白色　素質 胎良好	発色不良で乳白色の透明釉 全面	側面縦方コバルト彩・牡丹文と銀の字　重ね焼成か	重ね焼成か		肥前系	19ｃ後半 / 19ｃ中葉
区西クリーク3層 66図4	筒瓶底部	底径5.4	土陶器 青灰色　堆良 焼入微少ない	——	内外ヨコナデ　底部糸切り	不明		在地系	19ｃ中葉 / 20ｃ前半
区西クリーク3層 66図5 図版16	小皿	口径(11.0) 高台径(4.6) 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉　全面 白色	手捻り焼成後仕上げ　轆轤挽及び・丸文 見込みの五弁花文は コンニャク印刷	重ね焼成か　見込み釉状ネ取り　ネのあとに径5.4cmの別釉剥の高台痕あ		肥前 波佐見系	1750 / 1810
客土中 66図6	小碗 半筒形	口径(7.3) 高台径(3.9) 器高4.4	磁器(染付) 灰色	微成不良で灰白色の透明釉 全面	手捻る轆轤挽仕上げ内面に縦目部に施れた四方唐文帯　見込みの五弁花文は コンニャク印刷	重ね焼成か		肥前系	1740 / 1780
区西クリーク3層 66図7	五寸皿 輪花Ｌ縁	口径13.8 高台径8.2 器高1.1	磁器 素地白色　微成不良で鉄質	磁器 発色不良でにぶい明青色の透明釉　全面	型打ち成形で輪花口縁成形　絵の目彫り　型成形ラッチ上仕上げ　内面の花文施に赤彩　内面縁文　見込みの多弁菊花文帯　型成形で輪文　胎土の白土、高台の「金井風」は手捻り　口縁部は上絵付にコバルト施釉	焼付は釉剥ぎしていない　他の目高台の内部は輪目		肥前系	19ｃ後半 / 19ｃ中葉
区西クリーク3層 66図8	小皿	口径12.8 高台径6.3 器高2.8	磁器(染付) 白色	白色　全面 黒色粒子あり	手捻りコバルト彩付による外面無地の高台か内面は例文で花の中は鉄釉の点	重ね焼成か	概文のモチーフから年代を推定した	肥前系	19ｃ後半 / 19ｃ中葉
区西クリーク3層 66図9	小型 鉢ヂ形	口径(5.4) 高台径(3.8) 器高3.4	陶器 明黄褐色、鉄質 白粒子多い	発色不良で青灰色の鉄釉を外面から内面口縁部まで	底部糸切り	底部釉物剥ぎ 胎土目跡見られない	底部が厚い	小石原系	19ｃ中葉 / 20ｃ前半
区西クリーク3層 66図10	中型 ハンゾーガメ	口径(32.0) 最大径(37.2)	陶器 素地色	外面から内部口縁までは白化粧土　外面はその上に鉄釉と封釉の絞文　内面は鉄下地で青りの鉄釉の縁も日状施釉が見られ、全面に灰褐色の灰釉を上掛け	不明			肥前系	18ｃ中葉 / 19ｃ末
区西クリーク3層 66図11	中碗	口径(27.6) 底径(11.0) 器高11.8	陶器 粒茶褐色	外面は暗茶褐色の鉄釉の銀毛日状が点状に見られ上に上半まで鉄釉掛け　内面はハケ刷毛の上に鉄釉掛け　口縁部鉄斑 高台貼り付け	高台貼り付け　重ね焼成かこ　胎土目跡あり	重ね焼成　高台内面に高台を重ね焼き痕の砂目と胎土目跡あり		肥前系	18ｃ中葉 / 19ｃ末
区西クリーク3層 66図12	人形	高台径(13.2)	陶器 微素地一黄灰褐色 白粒子大	不透色の鉄釉 全面	外面に縦入り下部の凹凸あり　三本脚位の横目　高台貼り付け　重ね焼成かこ	胎部釉物剥ぎ 胎目跡あり　高台内の発色不良の鉄釉	外部は柔れ焼きの為に発色不良の鉄釉	小石原系	18ｃ中葉 / 19ｃ末
排土中 66図13	大碗 二重手	高台径(14.0)	陶器 明黄褐色　鉄質 白粒子多い	内面は暗茶褐色の鉄釉の縁は日状大きな釉滴上乗り　内面は深海	高台端を斜めにカット	足部釉物剥ぎ 胎土目跡あり	重ね焼きのため足元から発色不良で鉄色している	肥前系	1650 / 1690
排土中 66図14 図版16	小碗 子供茶碗	口径(10.1) 高台径(3.2) 器高4.6	磁器(染付) 内色　黒色粒子 多い	透明釉　全面	日の丸の旗を所に担いだ兵隊と「バンザイ」の模新等を持つノラクロを黒彩と赤彩で上絵付け	焼付釉剥ぎ	「のらくろ」は1931年から連載されている	肥前系	1931 /

表17　3次調査整地層・客土中・区外クリーク・排土中出土器・陶磁器観察表

2号溝状遺構（図版16・17）

63図7の龍泉窯青磁碗と64図8の弥生土器は混入品であろう。63図8・13のかわらけは胎土から蒲池焼と推定した。

64図9は鉄釉と長石釉の掛け分けで古い様相をもつので、17世紀前葉に遡る可能性もあるが、類例がないため時期を特定できない。

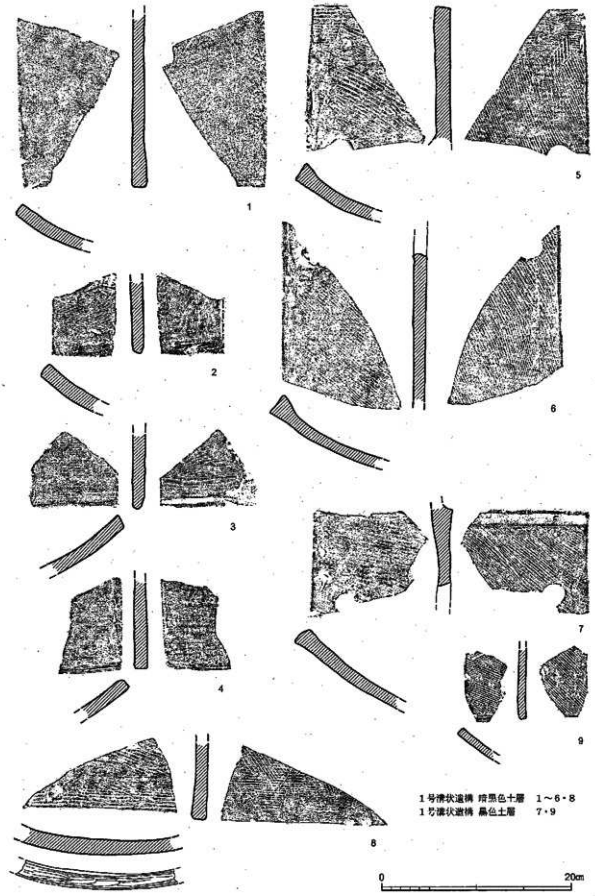
72図7は裏面にいろいろな文様をもつ硯で、小石や刃物の先端のような尖ったもので引っかいたもの。じぐざくな線や、太陽のような文様があるが、特に意味を持たないようだ。

排土中（図版16）

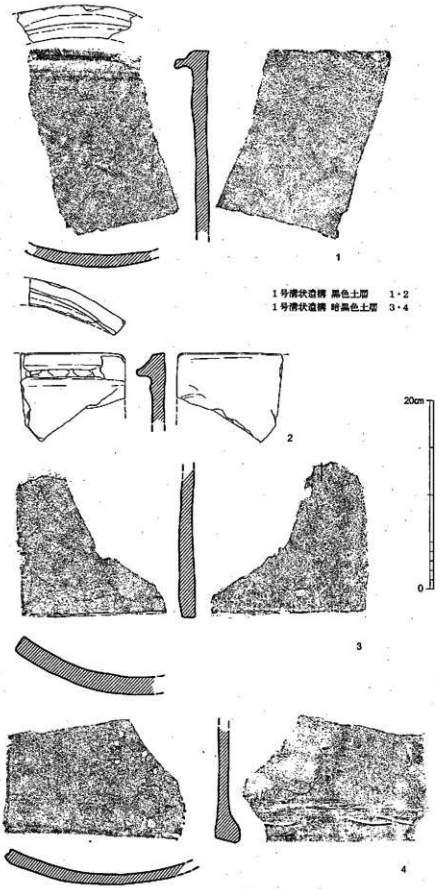
66図14はノラクロと兵隊を描いた子供茶碗で、ノラクロは昭和6（1931）年に連載が開始されているので、それ以降のもの。

客土中（図版17）

71図17は土師質の兵隊人形で、胎土が在地的であることから、筑後地方の土人形で著名な「赤坂人形」に当たるものか。一部に白彩が残っていたので、本来は彩色されていたようだ。



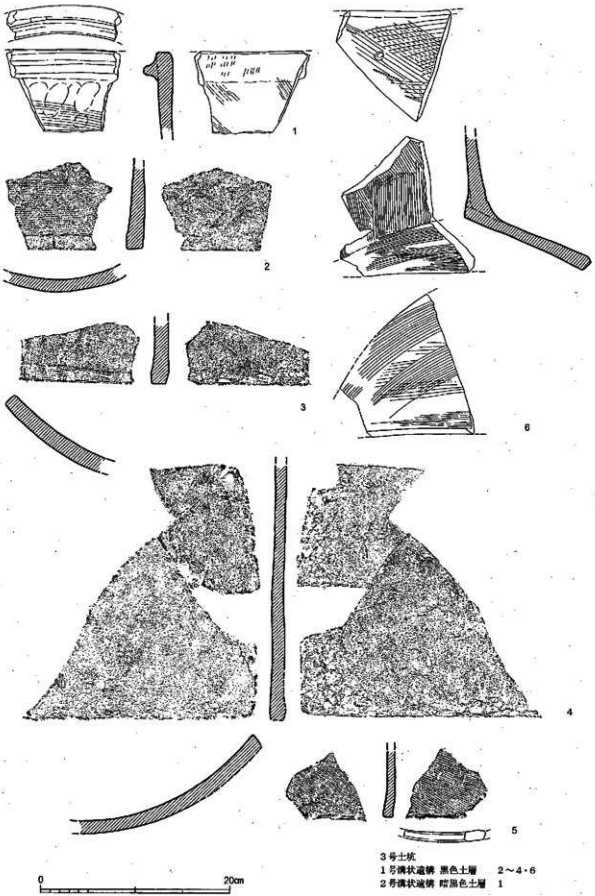
第67図　3次調査出土瓦実測図1 (1/4)



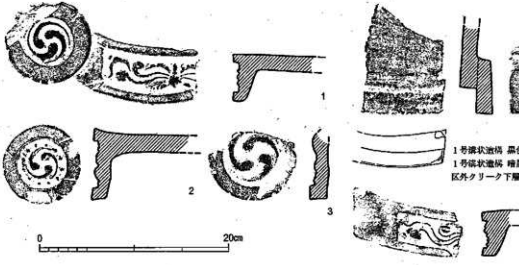
第68図　3次調査出土瓦実測図2 (1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の特徴	色調	調整・成形・装飾技法				製作技法	所見		推定産地	推定年代
掲載番号	形状	( )は復元値			凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面		特記事項			
図版番号	通称名												
1号煙道 黒色土層 67図1	平瓦	厚さ1.2~1.7	瓦質(上層質)にぶい褐灰色 軟 胎 白粒子 金雲母 黒色粒	内外黒灰色	凹凸面縦かいハケ 調整後側面カット	1下端部は凸面ナデ円筒面取り後ナデ	1下端部は凸面ナデ円筒面取り後ナデ	側端部は凸面取り	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図2	平瓦	厚さ1.3~1.5	瓦質(上層質)黄灰 軟 胎 白粒子 金雲母 ゆがみ 風入跡少ない	黄灰白~黄褐灰色	凹凸面ハケ 調整後側面の凸面からカット	下端部の端部は凸面から折り返	側面を面中ヌキでカット 残り2辺は折り返	側面を面中ヌキ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図3	平瓦	厚さ1.3~1.4	瓦質(上層質)暗褐灰色 軟質 白粒子 金雲母 赤石	暗褐灰色	凹凸面ハケ 調整後、側面をカット 側端部周面面取り 下端部ケズリ	下端部の端部はナデで丸み	側面を面中ヌキでカット 残り2辺は調整	側面を面中ヌキでカット 残り2辺は調整	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図4	平瓦	厚さ1.2~1.4	瓦質(上層質)灰~灰白色 軟 質 金雲母含む	灰白色	凹凸面ハケ調整 両面の端部は面取り	下端部は平坦部からかるが端部はナデで丸みをもつ	面取カット後、面取り	面取カット後、面取り	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図5	平瓦	厚さ1.5~1.7	瓦質(上層質)暗褐灰色	黒灰色	凹凸面は丸棒の凸ハケを上端部に施した後、斜め方向に調整 ハケ後、側面をカット 下から径2.9cmの釘孔を穿孔	上端面は最終段ハケ削り	最終段ハケ削り	最終段ヨコナデ	一枚作り	焼き不明瞭 釘孔から上端部とわかる	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図6	平瓦	厚さ1.2~1.3	瓦質(上層質)灰白~灰色 軟 質 白粒子 金雲母多い	黒灰色	凹凸面は丸棒の凸ハケを斜め方向に調整後、側面をカット 凹面側面は下から径2.5cmの釘孔を穿孔	—	上端面は最終段ヨコナデ	最終段ヨコナデ	一枚作り	釘孔から上端部とわかる	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図7	平瓦	厚さ1.1~1.5	瓦質(上層質)灰白~灰色 軟 やや硬質 金雲母多い	黒灰色	凹凸面は丸棒の凸ハケを斜め方向に調整後、側面をカット 凹面側面は下から径2.3cmの釘孔を穿孔	上端面は肥厚部はナデで丸みをもつ	切取後端部はナデで丸みをもつ	切取後端部は台程はナデ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 67図8	平瓦	厚さ1.3~1.6	瓦質(上層質)灰白~灰色 やや軟質 金雲母多い	黒灰色	凹凸面は丸棒の凸ハケを下端部に施した後、斜め方向に調整 凹面のヨコナデ	下端部は面取り	—	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半		
1号煙道 黒色土層 67図9	平瓦	厚さ0.7~0.9	瓦質 灰白色 軟質 金雲母・白色粒子あり	灰白色	凹凸面は丸棒の凸ハケを斜め方向に調整 下端部はナデ	下端部は最終段最後のナデ 角部を斜めにカット	側端部は最終段ヘラケズリ	側端部は最終段ヘラケズリ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 68図1	平瓦	厚さ1.2~1.6	瓦質(上層質)灰褐色 軟質 金雲母多い	黄褐灰色	凹面は丸棒凸ハケ 調整後、凸面の下端部はナデ 凸面の下端部はナデ 凸面はナデエの痕跡が残り、平坦でない	上端部はナデ	—	最終段ナデ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 68図2	平瓦	厚さ1.3~1.5	瓦質(上層質)にぶい黄褐色 軟質 砂粒多い 金雲母・白色粒子多い	黄褐褐色	凹面は丸棒凸ハケ 調整後、凸面は斜めに調整	上端部はナデ	最終段ナデ	最終段ナデ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 68図3	平瓦	厚さ1.3~1.7	瓦質(上層質)黒灰色 軟質 金雲母・白色粒子多い	黒灰色	縦かいハケ調整後下端部をナデし、端部を面取り	縦かいハケ調整後下端部の凹部接合面の後、斜め方向	下端面は最終段ナデ	側面を円筒から面中ヌキでカットし、残り1辺は折り返し最終ナデ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 68図4	平瓦	厚さ1.0~1.2	瓦質(上層質)にぶい褐灰色 軟質 風入跡多い	にぶい黒灰色	縦かいハケ調整後下端部をナデ	縦かいハケ調整後下端部の凹部接合部をナデ	ケズリ	ケズリ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 69図1	平瓦	厚さ1.4	瓦質(上層質)にぶい褐灰色 金雲母・砂粒多い	にぶい黄灰褐色	目の細広かハケ調整後、金雲母・砂粒多い ナデ 端部は縦方向にハケを施した後ナデ	凸面部金雲をナデ、ナデの後、目の細広ハケ調整を縦方向に施し	上端部はケズリ 一番最終は面取り	—	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 69図2	平瓦	厚さ1.0~1.8	瓦質(上層質)にぶい灰白色 金雲母・砂粒多い	黒灰~灰色	目の細広かハケ調整後、下端部をケズリ	ナデ ナデハケの後、ヨコナデ、側面にて端部から斜めのハケ	ナデ	—	一枚作り		在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 69図3	平瓦	厚さ1.0~1.8	瓦質(上層質)灰白色 金雲母・砂粒多い やや軟質	灰色	オサエ後ヨコナデ 下端部をケズリ	目の細かいナデメノハケの後、下端部をケズリ	下端部はナデ 最終は面取り	最終後ケズリ	一枚作り		在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 69図4	平瓦	厚さ1.0~1.6	瓦質(上層質)暗灰色 金雲母・砂粒多い 軟質	暗灰色	目の細かいナメノハケの後、下端部をケズリ	目の細かいナメノハケの後、下端部	下端部はナデ 最終は面取り	最終後ケズリ	一枚作り		在地系	19c / 20c 前半	
3号土坑 69図5	平瓦	厚さ1.0	瓦質 黄灰~灰色 軟 金雲母・白色粒子あり	暗灰黄色	凹凸面目の間隔の広いハケ	凹凸面目の間隔の広いハケ	下端面は平均形の板を使して寄平所に細部はハケ調整	側端面は最終後ヘラケズリ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 69図6	瓦当	厚さ0.7~0.9	瓦質 灰白~灰白色 軟質 金雲母・白色粒子あり	黄灰白色	凹凸ハケをナナメ上に施した後、下端部ナデ強し	凹凸面目の間隔の広いハケ	下端面は台形ミミリの盛みあり	側端面は最終後ヘラケズリ	一枚作り	焼き不明瞭	在地系	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 70図1	軒丸瓦	厚さ1.7 瓦当高5.0 面径9.2	瓦質 にぶい灰白色 硬質	黒灰色	丸瓦部はケズリ	ナデ	中心軸付近部分等上段をナデ上げ下部は凸状はゆるとが凸のみ見られる	—			不明	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 70図2	軒丸瓦	厚さ1.8 面径8.4	瓦質 灰白色 やや軟質	黒色 一部緑化している	丸瓦部はケズリ	ナデ	瓦当に12葉後の花びら紋を巻く巴文	ナデ			不明	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 70図3	軒丸瓦	厚さ2.0 面径9.2	瓦質 灰白色 胎丸 金雲母	黒色 一部緑化	ケズリ	ナデ	瓦当に右に尾を巻く巴文	ナデ			不明	19c / 20c 前半	
区外グリッド2層 70図4	軒平瓦	厚さ1.3 瓦当高5.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色 一部緑化	ナデ	ナデ	珠文帯中心巴文	ナデ			不明	19c / 20c 前半	
1号煙道 黒色土層 70図5	熨斗瓦	厚さ1.8 幅6.8 長さ8.2	瓦質 黒灰色 硬質 胎丸 金雲母入る	灰色	ナデ	受け部を深々し、金台部はナデ	ナデ	—			不明	19c中葉 / 20c 前半	

表18　3次調査出土瓦観察表



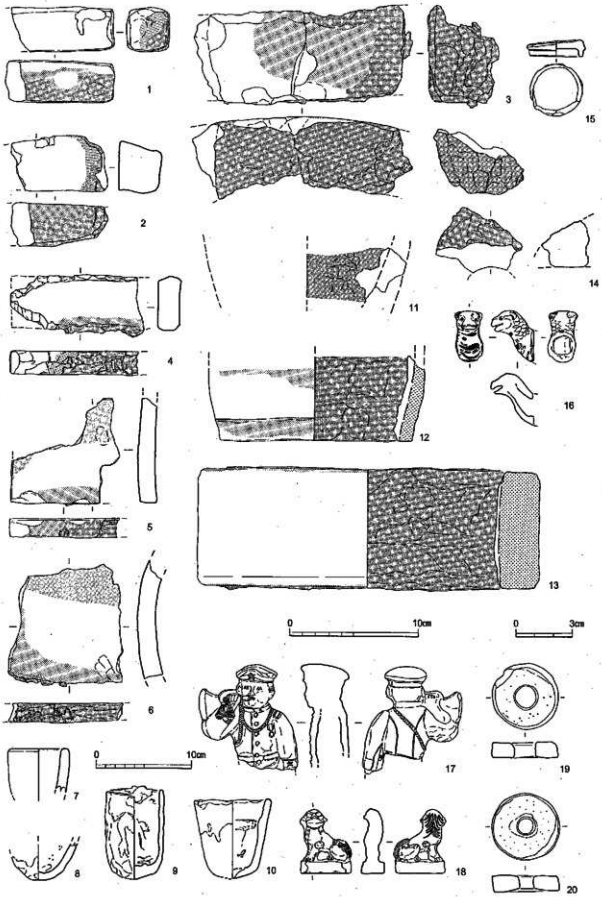
第69図　3次調査出土瓦実測図3 (1/4)



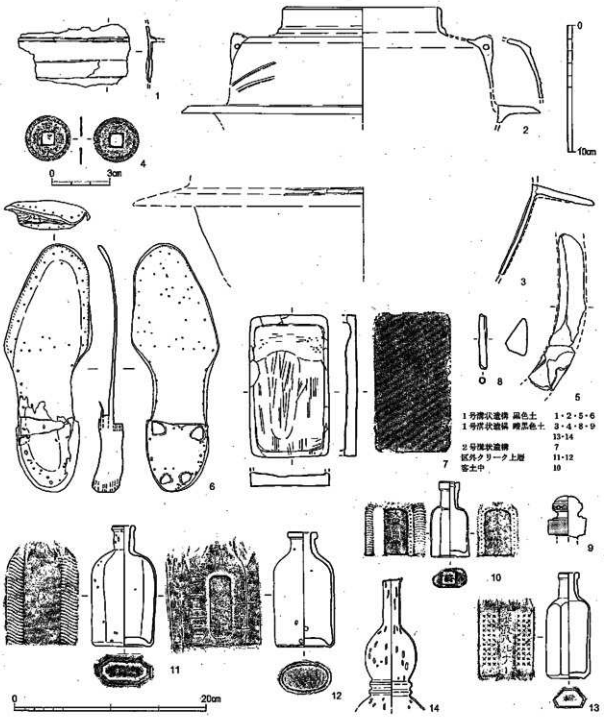
第70図　3次調査出土瓦実測図4（1/4）

遺構名 掲図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) （）は復元値	胎の種類 胎の特徴	製作・成形・装飾技法	遺構名 掲図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) （）は復元値	胎の種類 胎の特徴	製作・成形・装飾技法
7号土坑・7層 71図1	不明瓦状土製品	長8.1 高8.3.2 幅2.8 重量95g	土師質 暗灰黄色～にぶい黄橙色　砂入 砂少なく精良	小口部が角も残っているが粗雑少ない　上面はナデ、他面は粗いナデ 在地系	1号南黒色土層 71図11 図版17	ふつうか取瓦	最大径(15.5) 重量134 g	土師質 明黄橙～黒灰褐色　砂質で細砂	外面は一部しか残っていない　内面には付着物あり　焼き不明瞭　在地系
1号溝暗黒色土層 71図2 図版17	不明棒状土製品	長8.7.6 高8.3.5 幅4.1 重量80 g	土師質 黄橙灰色～暗灰褐色　軟質　白粒子多あり	上面は平用面で、他面は粗いケズリ状のナデで円凸あり　上面を下にして成形したもの　小口部は研磨により丸くしている　上面は1とんど欠けていないが面が荒も欠けている。研磨少ない	1号南暗黒色土層 71図12 図版17	不明土製品	最大径(17.8) 厚径(15.2) 重量65 g	土師質 明黒灰～黄灰色　金雲母・白粒子多あり	外面はあまり欠けておらず、内面には付着物が全面にあり暗灰色、下端外面は例えに接入していたらしく容器が荒れている　在地系
1号溝暗黒色土層 71図3	不明棒状土製品	長8.10.2 高2.1.8 幅4.5 重量315 g	瓦質 灰白色　練し丸が2次焼成を受けたもの	土師質丸型の薄板が使用されたものと考えられていたが、内面にはあまり平ガにナガされており、上端部があまり欠損していない、下面と小口部がくぼんでいるため疑問あり　在地系	1号南暗黒色土層 71図13 図版17	不明土製品	口径(27.0) 厚径3.5 重量537 g	土師質 黄灰黒色　白粒子・金雲母・石英子など混入多い	上・下側部の外面は面取り　外部は欠けていない　内面は付着物が全面にあり暗灰色　上端面は磨滅がある が、下端にはないので、下は折れに接していたようだ　在地系
1号溝暗黒色土層 71図4 図版17	不明棒状土製品	長8.10.2 高3.1.8 幅4.5 重量96 g	瓦質 灰白色　練し丸が2次焼成を受けたもの	練し丸の平瓦を打ち欠いて板状にしたものなので、やや薄い。上下面は平滑にナデられている　打ち欠き面は平面形　1側面のみが欠けているが、磨滅は少ないその他は欠けが弱い	1号南暗黒色土層 71図14	ふいごの羽口	現元不明径 重量81 g	土師質 暗黒色　白粒子など混入多い	外面は付着物とガラス化のため凹凸あり　内面は磨滅あり　在地系
1号溝暗黒色土層 71図5 図版17	不明棒状土製品	長8.11.2 高3.2.0 幅1.1.1重量183 g	瓦質 灰白～黄橙色 練し丸が2次焼成を受けたもの 粗砂	練し丸の平瓦を打ち欠いたもので、やや薄い。上下面は平滑にナデられている　1側面のみが欠けているが、磨滅は少ないその他は欠けが弱い　欠けの強い面の方面に接付者　在地系	1号南暗黒色土層 71図15 図版17	円筒形鞴形製品	径4.4 重量22 g	土師質 白色　ガラス質	組形(鋳型) 白色
1号溝暗黒色土層 71図6 図版17	不明棒状土製品	長8.12.0 高3.3.2 幅3.0 重量341 g	瓦質 灰白～黄橙色 練し丸が2次焼成を受けたもの 粗砂	練し丸の平瓦を打ち欠けたもので、やや薄い。上下面は平行にナガられている　1側面のみが欠けており、磨滅は強くない　その他は欠けが弱い　欠けの強い面の方面に接付者	1号南暗黒色土層 71図16 図版17	鞴型製人形 投付か	長3.3.4 高3.3.9 幅2.1 重量90 g	土師質 白色　ガラス質 粗砂	型合わせをせない型作りの鞴型で穴状部で接合　中空で口まで貫通　外部に造形物の上に鼻・背・ゆ部で土 組付け　型前系
1号溝暗黒色土層 71図7	ふつうか	口径(4.8) 重量20 g	土師質 赤灰～灰色 白色粒子多い 軟質	付着物のため成形不明　内面に付付着物なく、未使用品　外面は欠けて一部ガラス化しており状態りが見られるが、他成時のものか　在地系	6土坑 71図17 図版17	土人形 兵隊人形	長3.7.5 高8.8.2 幅4.8 重量90 g	土師質 黄橙色　軟質 粗砂	裏面の型合わせ痕跡で、中空　合わせ目は下部にナデ消されている　形色が赤っぽくないが焼酒している。当屋から昭和期のものか　在地系
1号溝暗黒色土層 71図8	ふつうか	底径1.2 重量30 g	土師質 白色粒子多い	丸底　付着物のため成形不明　外面は欠けてガラス化内面は付着物あり　在地系	2号溝 71図18	土人形 坐人	長8.4.1 高8.5.1 幅1.6 重量35 g	土師質 黄橙　軟質 粗砂　金雲母多い	裏面の型合わせ痕形　合わせ目残る　土台の底面に穴があるが、底面は磨滅して確認できない　在地系
1号溝黒色土層 71図9 図版17	ふつうか	底径2.8 重量106 g	土師質 変形のため脆不明	丸底　付着物のため調整不明　内外の口部は上部色で色が付着している　外面底部はガラス化している	1号溝暗黒色土層 71図19	戸車	径52 孔径3.5 厚径1.2	鞴型(内面) 口径　黒色粒子あり	輪孔内面と鞴部に滑明痕 同図にアルミナ付着　鞴前系
1号溝暗黒色土層 71図10	ふつうか	口径(6.0) 器高4.2 底径3.2 重量22 g	土師質 灰白色 白色粒子多い	丸底　付着物のため調整不明　内面口径部から外周面上半部に赤色の鉄滓が付着している　外面底部はガラス化している　在地系	1号溝暗黒色土層 71図20	戸車	径5.4 孔径1.1 厚径1.3	鞴型(内面) 灰白色　黒色粒子多い	輪孔内面と鞴部に滑明痕 上面にアルミナ付着　鞴前系

表19　3次調査出土土製品観察表



第71図　3次調査出土土製品実測図（5・6は1/4、他は1/3）



第72図　3次調査出土金属・皮・ガラス製品実測図（4は1/2、6は1/4、他は1/3）

区外クリーク出土遺物

3次調査では、1号溝状遺構は時間的制約と現行クリーク護壁崩落の危険性から、調査区内を完全に掘り下げることはできなかった。そのため、この現行クリークの掘削工事の際に、可能な限り遺物を回収したものが区外クリーク出土遺物である。土層を正確に把握していないが、おおむね上層は1号溝状遺構暗黒色土層に、下層は黒色土層の下位に対応するようだ。

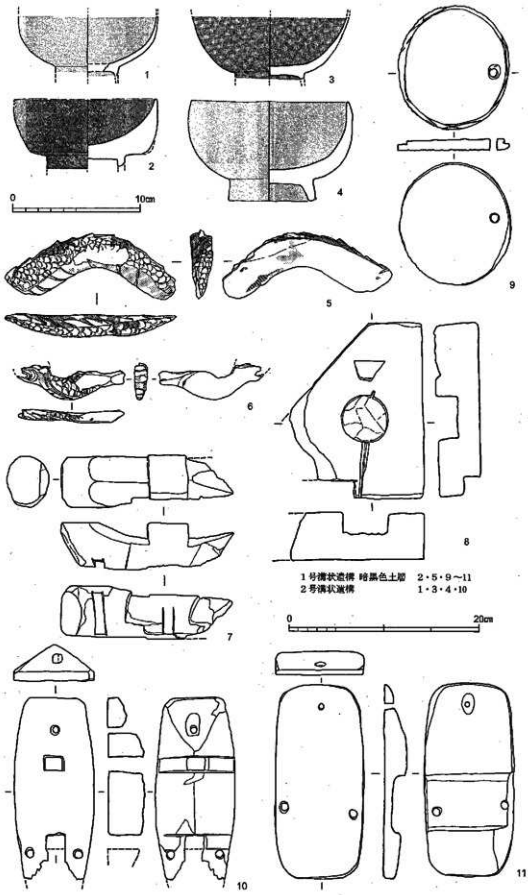
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	調整・成形・装飾技法
1号溝黒色土層 72図1 図版17	不明鉄製品 羽釜か	復元不能 重量53g	胴下位に帯状突帯があり、鍔下がほぼ垂直であることから羽釜と考えられる　鋳造品か
1号溝 72図2 図版17	羽釜	口径(12.8) 鍔径(28.2) 最大胴径(20.6) 重量197g	図上接合で復元しており、各部位は接合しない　胴部には二本突線による隆刻があり、なんらかの文様を構成していただろう　鋳造品
1号溝暗黒色上層 72図3	不明鉄製品 羽釜か	鍔径(36.2) 最大胴径(27.6) 重量409g	鍔が長く胴下位が深いことから羽釜と考えられる　鋳造品か
1号溝 72図4 図版17	銅銭 寛永通宝	径7.2 孔径2.1 器高1.4 重量2.9g	新寛永　しんにょうの点位置が低いことから俗称「不旧手」と呼ばれるものに比定される　1726年（享保11）年か1736（元文元）年初鋳造　摩滅して薄くなっている
1号溝 72図5 図版17	不明鉄製品	長さ6.5 幅2.3 厚さ1.7 重量143g	弧状で断面直角三角形を呈する　剥離した痕跡はないが何らかの部位か　弧状なので五徳の脚がつかない部分か
1号溝 72図6 図版17	皮靴	長さ26.2 幅8.7 厚さ3.2 重量134.8g	皮製　側縁は径2ミリの釘で底から打ちつけたのち縫合している　踵部は上下それぞれ5枚皮を重ねてU字形の釘で留め、径1.5cmほどの鋲で留めている
2号溝 72図7 図版17	硯	長さ11.1 幅6.1 厚さ1.1 重量142.3g	黒灰色の頁岩製　縁部を欠損後研磨して平滑にして使用している　裏面に折れ線などの沈線による文様がある
1号溝 72図8 図版17	石筆	径0.5 長さ4.4 重量4.7g	灰白色の凝灰岩製　側面は研磨されて平滑　先端が使用により斜めの面をもつ
1号溝暗黒色上層 72図9	小瓶蓋 差し込み栓 香水瓶	最大径3.0 重量35.8g	透明ガラス　気泡なし　鋳造らしくつまみ部に楕円文が印刻されている　スリガラスがある
区外クリーク上層 72図10 図版17	小瓶 差し込み栓 目薬瓶	口径2.7 底径4.6 器高5.0 重量25.1g	紺色ガラス　気泡あり　1面に「大学目薬」、裏面に「参天堂薬房」と陽刻で鋳造されている　上げ底で中央に不明文様の刻印あり　口唇部はカット
区外クリーク上層 72図11 図版17	小瓶 差し込み栓	口径1.8 長軸4.8短軸2.7 器高4.2 重量63.9g	透明ガラス　気泡あり　型合わせ鋳造成形　断面長6角形で両面に連続波状文が陽刻で鋳造されている　上げ底
区外クリーク上層 72図12 図版17	小瓶 差し込み栓 薬瓶	口径2.3 長軸4.8短軸2.7 器高3.5 重量78.7g	緑青色ガラス　気泡あり　型合わせ鋳造成形　断面長楕円形で1面に「20・30・40」とメモリが陽刻で鋳造されており、中央に紙ラベルを貼る場所がある
1号溝暗黒色土層 72図13 図版17	小瓶 差し込み栓 薬瓶	口径1.6 長さ3.5　幅1.7 器高8.4 重量31.3g	緑ガラス　気泡なし　「薬液ハルナー」と陽刻で鋳造されており、文字部分の幅が狭くした断面変形6角形　斜めの型合わせで合わせ目の残る
1号溝暗黒色土層 72図14	小瓶 差し込み栓 ニッキ水瓶	口径1.6 最大径5.1 重量25.2g	青緑ガラス　気泡あり　口縁部の切り離し時の細かい打ち欠きが残る
2号溝 73図1 図版17	中型椀 丸形	最大径(11.0) 高台径(5.0)	下地　柿渋 全面　漆 無文　柾目
1号溝暗黒色土層 73図2 図版17	中型椀 腰張形	最大径(11.0) 高台径(5.8)	下地　柿渋 全面黒漆 無文　柾目
2号溝下層 73図3	中型椀 丸形	最大径(12.6) 高台径(5.6)	下地　柿渋 全面黒漆 無文　柾目
2号溝下層 73図4 図版17	中型椀 丸腰形	口径12.4 高台径6.8 器高8.0	下地　柿渋 全面赤漆 無文　柾目
1号溝暗黒色土層 73図5 図版17	不明木製品 龍の彫刻	長さ13.3 幅2.8 厚さ1.7	黒漆を下地に塗って金泥を塗るか被せている　本来全面あったが剥落している　柾目
1号溝暗黒色土層 73図6 図版17	不明木製品 龍の彫刻	長さ8.7 幅1.9 厚さ0.7	黒漆を下地に塗って金泥を塗るか被せている　本来全面あったが剥落している　柾目
1号溝暗黒色上層 73図7 図版17	不明木製品 きし車か	長さ18.1 高さ5.0 厚さ5.5	漆・彩色なし　下面に方形のホゾ状の切り込みがある　柾目

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	調整・成形・装飾技法
1号溝暗黒色土層 73図8 図版17	建築材	長さ18.5 高さ4.5 幅さ12.2 円抗径4.8	側面に枘穴があり、挿し込む材で、一角を斜めにカットしているので建物の角部に設置したもの　板目
1号溝 73図9 図版17	曲げ物 底板	径13.0 厚さ1.2	楕円形を呈しているが乾燥で歪んだためで本来円形　側板を装着する段は直線のカットを巡らせている　板目
2号溝下層 73図10 図版17	差歯下駄 露卯下駄	長さ19.2 幅8.6 厚さ3.8	底面は段をもつ　板目
1号溝暗黒色土層 73図11 図版17	連歯下駄 ぽっくり	口径20.5 幅9.4 厚さ2.6	刳り込み部の角は丸みをもつ　踵部は擦り減っている　板目
1号溝暗黒色土層 74図1 図版17	連歯下駄 ぽっくり	長さ16.7 幅9.2 厚さ2.5	刳り込み部の角は丸みをもつ　踵部はやや擦り減っている　子供用　下地は柿渋で、赤漆塗り　褐色の斜め2本線の文様あり　板目
1号溝暗黒色土層 74図2 図版17	差歯下駄 陰卯下駄	長さ13.2 幅7.7 厚さ3.6	歯はやや擦り減っている　子供用　下地は柿渋で、赤漆塗り　暗赤色の花弁文様あり　板目
1号溝黒色上層 74図3	連歯下駄	長さ20.0 幅9.6 厚さ2.2	歯は後歯が擦り減っている　板目
1号溝黒色土層 74図4	連歯下駄	長さ17.0 幅8.7 厚さ2.2	歯は後歯が擦り減っている　板目
1号溝暗黒色土層 74図5 図版17	連歯下駄 ぽっくり	長さ19.6 幅9.7 厚さ2.0	下地の柿渋と赤漆が　目孔に一部残る　板目
1号溝暗黒色土層 74図6	連歯下駄	長さ21.4 幅9.0 厚さ2.5	歯は後歯が擦り減っている　板目
1号溝暗黒色土層 74図7 図版17	連歯下駄	長さ18.5 幅9.4 厚さ1.8	歯は後歯が擦り減っている　四角内に焼き印があるが摩滅のため不明　板目
1号溝暗黒色土層 74図8 図版17	連歯下駄 ぽっくり	長さ20.4 幅9.4 厚さ2.3	歯は前後とも擦り減っている　板目
1号溝黒色土層 75図1	連歯下駄	長さ14.8 幅8.2 厚さ2.3	歯は前歯が擦り減っている　子供用　板目
1号溝暗黒色土層 75図2	連歯下駄	長さ16.7 幅9.5 厚さ3.2	歯は前歯の片側が擦り減っており、右足用か　板目
1号溝黒色土層 75図3	差歯下駄 陰卯下駄	長さ17.4 幅6.8 厚さ1.9	歯はない　孔部で欠損している　板目
1号溝黒色上層 75図4 図版17	連歯下駄 ぽっくり	長さ15.9 幅8.4 厚さ1.8	裏に楔形の刳り込み　黒・赤漆あり　下地は柿渋か　子供用　板目
1号溝黒色土層 75図5	連歯下駄	長さ20.4 幅9.2 厚さ2.0	歯は後歯が擦り減って段差がなくなっている　板目
1号溝暗黒色土層 75図6 図版17	連歯下駄	長さ19.2 幅9.4 厚さ2.3	歯が失われているが使用したらしく、歯の下面と下駄本体の裏に砂がめり込んでいる　板目
1号溝暗黒色上層 75図7 図版17	連歯下駄	長さ17.7 幅9.1 厚さ1.5	歯は後歯が擦り減って段差がなくなっている　板目
1号溝暗黒色土層 75図8	連歯下駄	長さ18.9 幅9.3 厚さ2.3	鼻緒孔は擦れて細長くなっている　板目

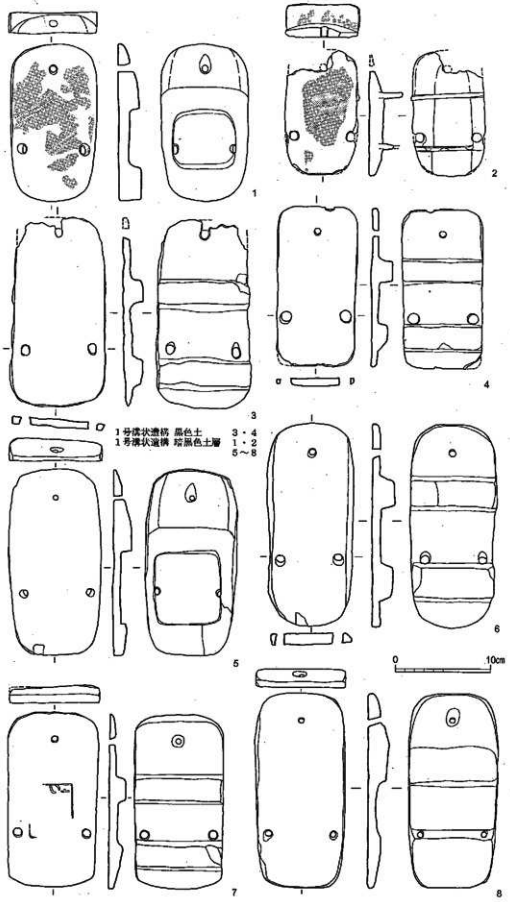
表20　3次調査出土金属・皮・石・ガラス・木製品観察表

Ⅳ. 小　結

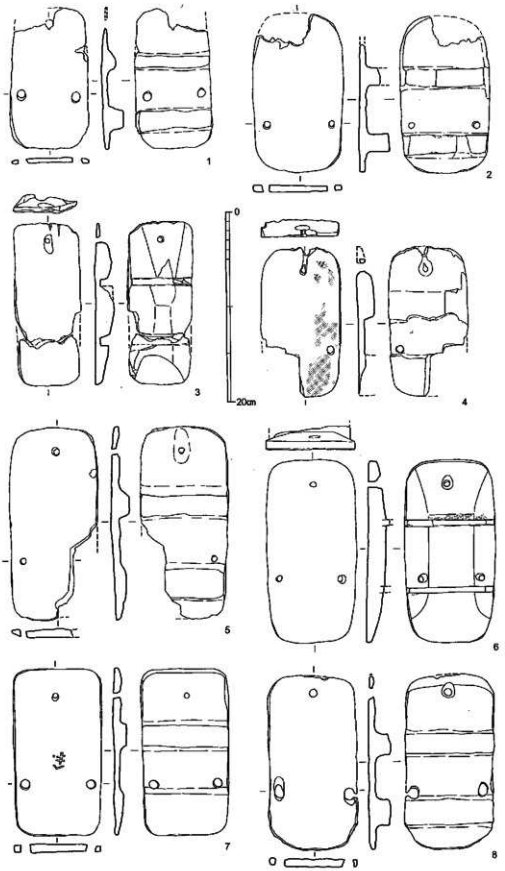
2・3次調査区においては、矢加部町屋敷遺跡の西端の様相を知ることができた。現行の調査区西側のクリークより西は試掘調査の結果、遺構は検出されておらず、このクリークが集落の西境であった。未報告であるが、2・3次調査区は東側の調査区に比べて遺構が希薄であるかわりに、クリークから引き込まれる大きな溝が入っていたため、遺構数に比べて遺物量が多くなった。



第73図　3次調査出土木製品実測図1（1～6は1/3、他は1/4）



第74図　3次調査出土木製品実測図2 (1/4)



第75図　3次調査出土木製品実測図3 (1/4)

また、建物跡が検出されなかったことも、現在の集落の景観からみられるように、このクリーク沿いには建物裏手の空閑地が広がっていたのだろう。２次調査の２号溝からはクリークの水を引き込んで生活に利用していた様子がうかがわれる。

出土遺物のほとんどは陶磁器であるが、意識的に福岡県内産、特に筑後産の土器・陶磁器を掲載しているため、掲載資料だけでは数量的な分析には適さない。陶磁器の約９割は肥前産で、土師質や瓦質土器は在地産がほとんどを占めるようだ。これは、柳川地域は有明海の水運を利用することができたため、陸路で輸送しなければならない高取・小石原焼はシェアを伸ばせなかったためであろう。筑後地域で土師質の土器窯が多いのは良質な粘土が得られるためで、土師質や瓦質土器は在地産がほとんどを占めるのもそのためだろう。

土師質瓦について

本遺跡からは、筑後地域に特有の土師質瓦が多数出土している。土師質瓦の形態は形態・調整方法・色調・胎土の質などから、大きく４種類に分けられる。１つは、２・３次調査区内から出土しなかったが、「水田の赤瓦」と呼ばれるもの。２つめは水田の赤瓦に近い黒いハケメ調整の瓦、３つめは下端部が玉縁状に肥厚するものだが、２・３についてはまだ全体のわかる資料を得ていない。４つめの基部に水返しをもつものは、４次調査で全体の形がわかる資料（76図１）を得ることができたので、ここではこれについてまとめたい。

下に掲載した４次調査出土資料と同じ特徴をもつものは、本書の32図２・３・５・６・７・９、69図１である。色調は茶灰褐色を呈し、ハケ調整を残す1.5cmほど厚さのもので、下部はやや厚い程度で、基部に肥厚した水返しがつく。１枚つくりで、側面は凸面から途中まで裁断し、折り取ったあと、簡単にナデるか、削るものが多い。凹面基部の水返しの上に漆喰状の白色粘土塊が付着しており、ここに別の個体の下端部が乗ることがわかる。

第76図　土師質瓦実測図(1/6)

江戸時代の庶民の家では瓦葺きは禁止されていたはずであり、実際、全面葺くには出土量が少なすぎる。また、燻し瓦とは厚さや大きさが異なるので谷瓦として混用できない。ただし、本遺跡が町屋であることから、火災時の延焼防止のため、軒先だけ質の落ちる安価な瓦を葺いた可能性も考えられる。しかし、平瓦しか見られず、平瓦を交互に葺くには安定性を高めるため漆喰を多用したであろうから、付着していないのは不自然である。

以上のことから現段階で考え得るのは、写真１・２のような雨樋として使用される瓦である。いわゆる谷瓦とは異なるので「樋瓦」とでもいうべきであろうか。屋内であれば強度上も外見上も軟質な土師質でもよく、縦一列に並べるだけであれば、漆喰状の付着物の位置や出土量とも整合する。

写真１　柳川市旧十二丁松藩キヨ氏宅　漏斗谷の樋社出口

写真２　同上　漏斗谷の樋を下から見る

写真１・２『福岡県の民家』より

しかもこのような雨樋を必要とする「漏斗造り」という屋根は筑後地域沿岸部に多く、分布上も一致する。また、写真に残る時期までこうした家屋が残っていたとすれば、近代の燻し瓦に混じる点も理解することができる。

土師質瓦にも多くの種類があり、水返しをもつのはこのタイプのみなので、すべてが雨樋といえないが、検討材料にはなるものと思われる。今後の資料の増加に期待したい。

主要な参考文献

江戸遺跡研究会1993『遺跡に見る幕末から明治』江戸遺跡研究会第６回大会発表要旨

江戸遺跡研究会2001『図説江戸考古学研究事典』

大分県教育委員会・竹田市教育委員会2001『大分県竹田市稲葉川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　四山社製糸工場跡・旧古町橋跡寺田家屋敷跡・武藤家屋敷跡・上家屋敷跡・由学館跡』大分県文化財調査報告書第124集

大分県教育委員会2000『炭竈遺跡』大分県文化財調査報告書第110集

大橋康二『考古学ライブラリー55肥前陶磁』ニューサイエンス社

㈶北九州市教育文化事業団1993『大手町遺跡』北九州市文化財調査報告書第133集

㈶北九州市教育文化事業団1994『京町遺跡３』北九州市文化財調査報告書147集

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』

久留米市教育委員会1995『久留米城外郭　佐々木家屋敷跡』久留米市文化財調査報告書第96集

久留米市教育委員会1999『平成10年度　久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第150集

久留米市教育委員会1996『久留米城両替町遺跡』久留米市文化財調査報告書第116集

久留米市教育委員会2006『京隈侍屋敷遺跡』久留米市文化財調査報告書第220集

佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連合会1999『肥前古陶磁窯跡基礎調査・基本方針策定報告書』

佐賀県立九州陶磁文化館1992『福岡の陶磁展』

佐賀県立九州陶磁文化館2006『近現代肥前陶磁銘款集』

塩田町教育委員会『塩田のやきもの　明治/大正/昭和　第２回特別展』

新宿区厚生部遺跡調査会1992『細工町遺跡』

筑後市教育委員会2005『水田上町遺跡群』筑後市文化財調査報告書第63集

福岡県教育委員会1972『福岡県の民家　民家緊急調査報告書』

福岡県教育委員会1992『吉塚本町遺跡』福岡県文化財調査報告書第97集

福岡県教育委員会2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集

福岡県教育委員会2002『堂畑遺跡Ⅰ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集

福岡県教育委員会2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集

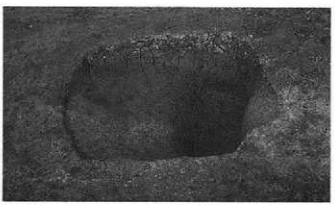
福岡県教育委員会2005『日詰遺跡Ⅱ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第22集

柳川市2002『新柳川明証図会』柳川市史特別編

図　　版

1．2次調査区全景（北東から）

2．1号土坑（西から）



4．2号土坑（南から）

3．1号土坑土層断面（西から）

5．2号土坑木皮出土状態（北から）

7．3号土坑（東から）

6．2号土坑土層断面（南西から）

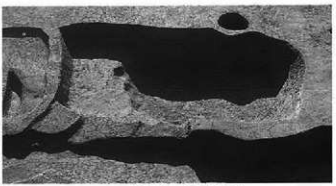
図版 2

1．4号土坑（東から）

4．6号土坑（北西から）

2．4号土坑土層断面（南西から）

5．6号土坑土層断面（北西から）



6．7号土坑（北東から）

3．5号土坑（西から）

7．7号土坑土層断面（北西から）

8．9号土坑（南東から）

9．1号大土坑（南西から）

1．2・3号大土坑（南西から）

2．3号大土坑（南西から）

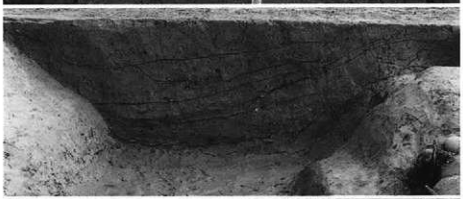
3．3号大土坑漆椀出土状態
（北から）

4．1号溝状遺構土層断面
（北西から）

図版 4

1．2号溝状遺構（西から）

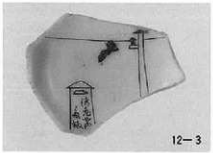
2．2号溝状遺構テラス状遺構
（北から）

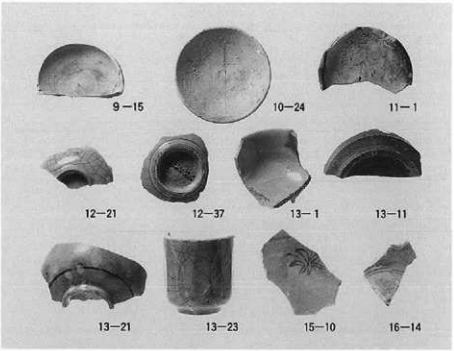


3．2号溝状遺構土層断面
（北西から）

4．5号溝状遺構土層断面
（南西から）

12−1

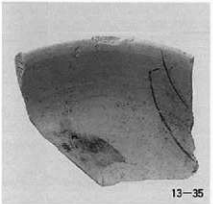

12−3



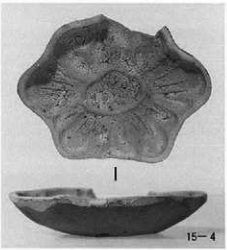
12−16

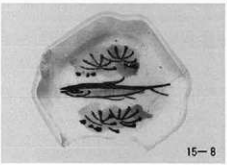
12−33

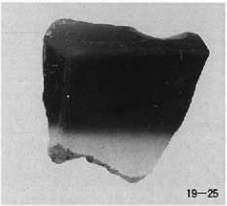
13−18

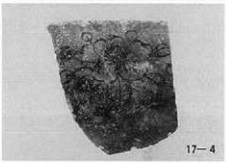

13−35

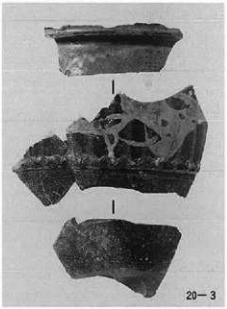
15−2


15−4


15−8

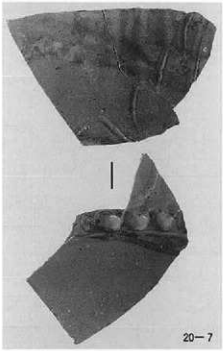

19−25

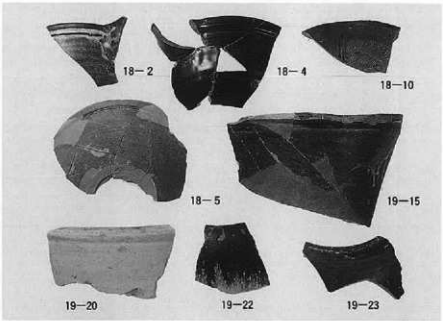

17−4

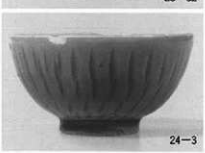

20−3

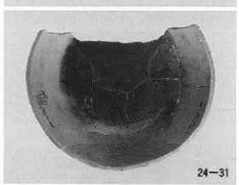
21−5

2次調査出土土器・陶磁器1

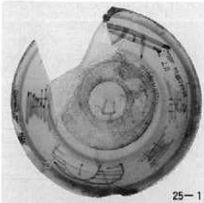




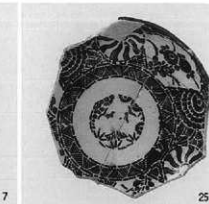




2次調査出土土器・陶磁器2

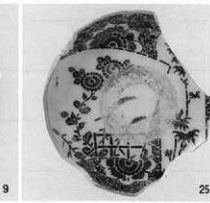

25－1

25－7


25－8

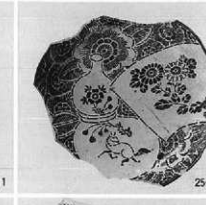
25－3

25－9


25－10

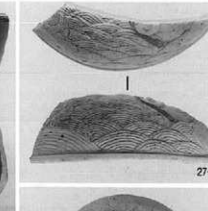
26－8

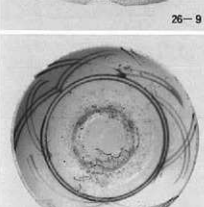
25－11

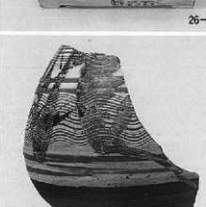

25－12

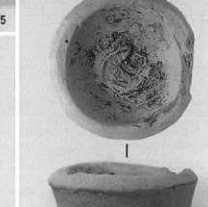
26－9

26－5

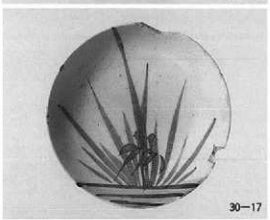

27－26

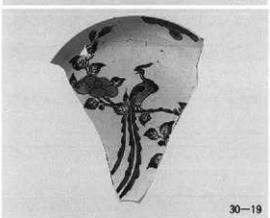

28－1

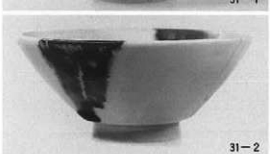

28－7

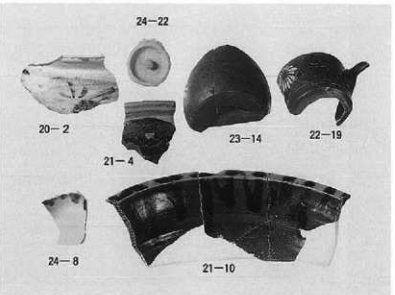

30－12

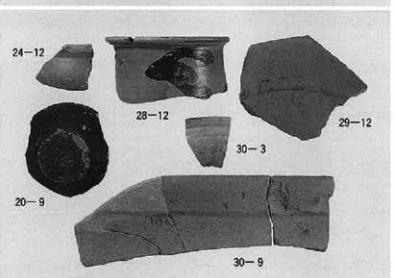
2次調査出土土器・陶磁器3

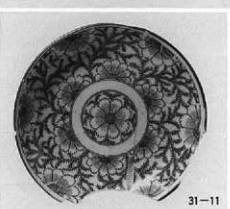




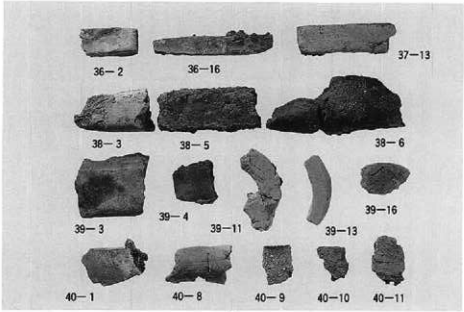


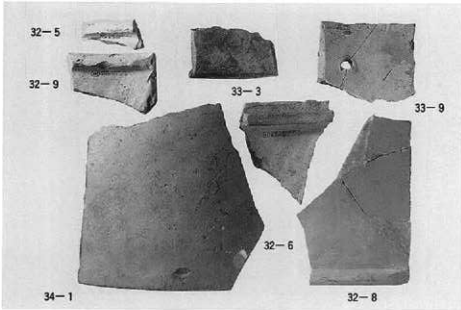




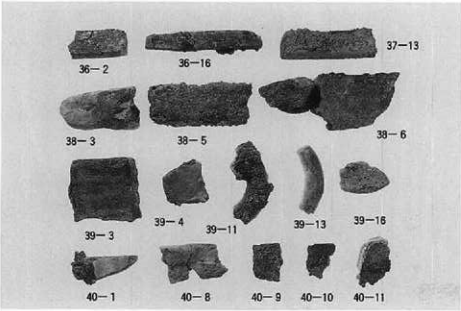


2次調査出土土器・陶磁器4

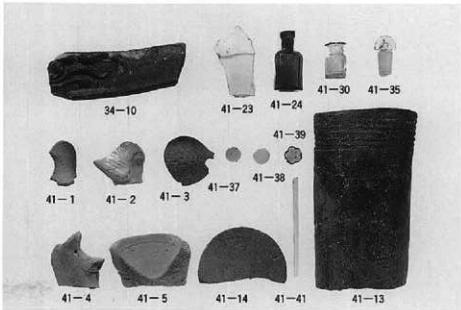




2．2次調査出土瓦



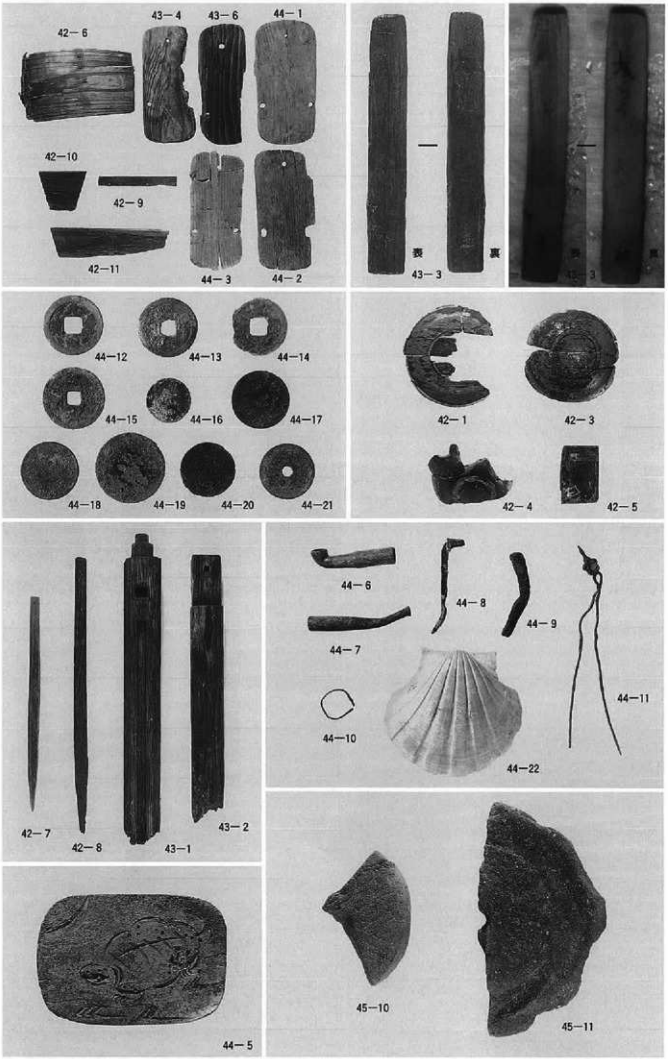
1．2次調査出土不明土製品



4．2次調査出土瓦・土製品・ガラス製品

2次調査出土土製品・瓦

図版 10



2次調査出土木・金属・貝・石製品

1．3次調査区全景（上空から）

2．1号土坑（西から）

3．2号土坑
（北から）

4．3号土坑（北西から）

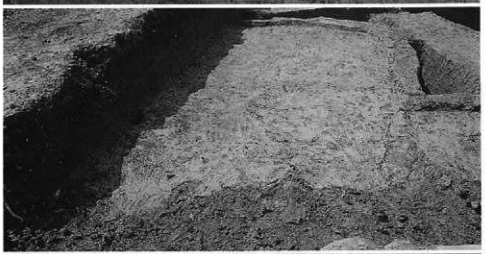
5．3号土坑土層断面（北西から）

図版 12

1．4号土坑（南東から）

2．6号土坑（北から）

3．4号土坑土層断面
（南東から）



4．7号土坑（北から）

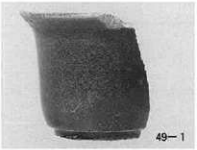
5．7号土坑土層断面
（北西から）

1．2・3号溝状遺構（東から）

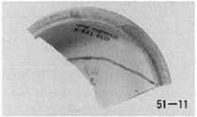
2．2号溝状遺構大甕出土状態
（北から）

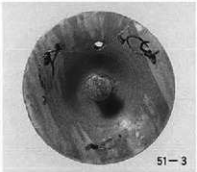
3．2号溝状遺構土層断面
（西から）

4．3号溝状遺構土層断面
（西から）


49—1

49—12


51—11


51—3

54—14

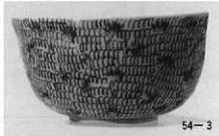
53—9

53—11

53—13

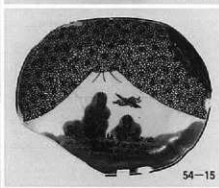
53—16

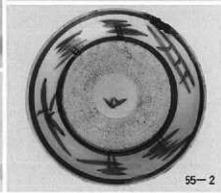
53—29

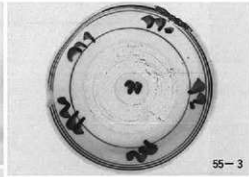

54—3

54—4

54—6


54—15


55—2


55—3

55—9

55—11

56—14

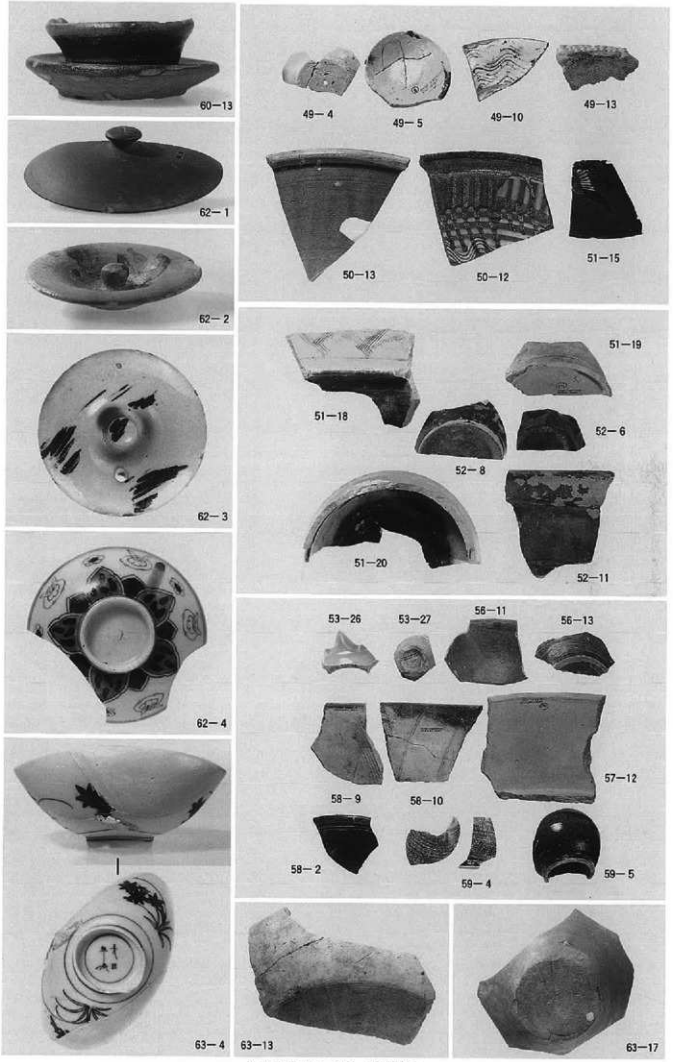
57—4

57—5

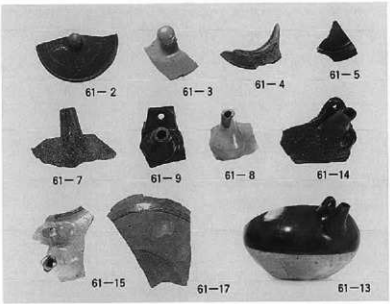
59—2

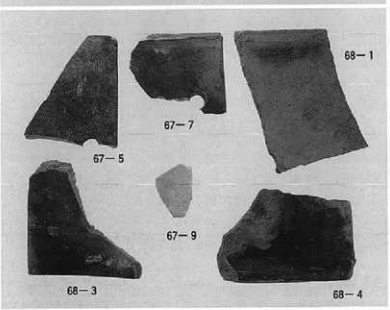
60—12

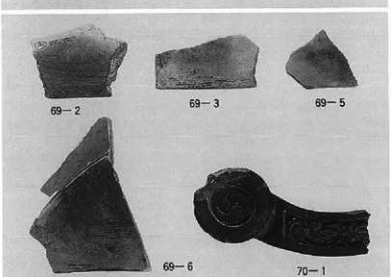
3次調査出土土器・陶磁器1



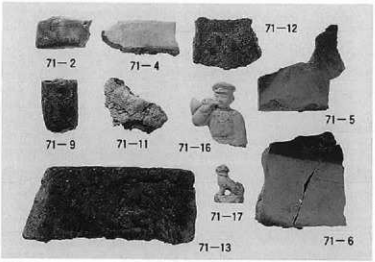
3次調査出土土器・陶磁器2

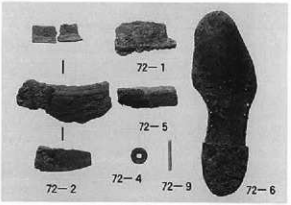


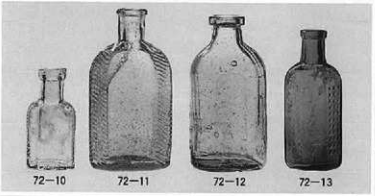


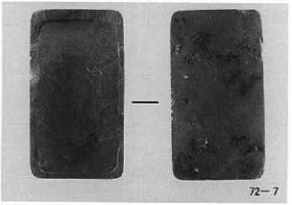


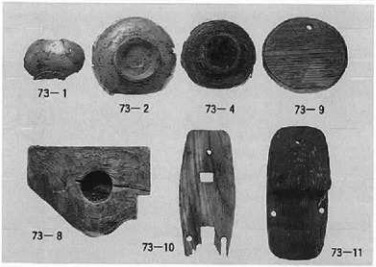
3次調査出土土器・陶磁器3

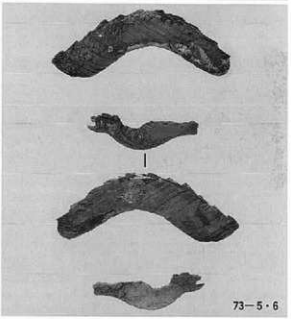


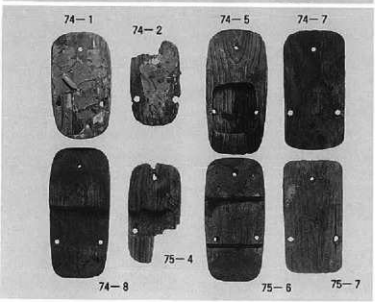


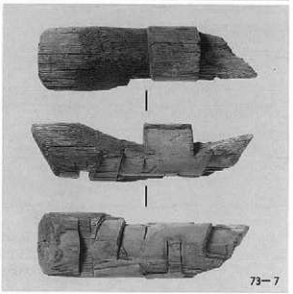












3次調査出土金属・皮・ガラス・石・木製品

報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせき
書名	矢加部町屋敷遺跡Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第3集
編著者名	秦 憲二
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
矢加部 町屋敷遺跡	福岡県柳川市 大字矢加部字 町屋敷	402079	140392	33° 10′ 45″	130° 24′ 43″	2005.10.26～ 2005.12.7 2006.3.17～ 2006.4.24	840㎡	国道 バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢加部 町屋敷遺跡	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑 18 溝状遺構 12	土師器、ガラス製品、キセル、瓦質土器、銅銭、るつぼ、陶磁器、容器形木製品、土人形、瓦、下駄、臼、不明土製品、建築材、硯	筑後地方特有の土師質瓦 近世の鋳造関係遺物

遺跡の概要

本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17c中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連綿と集落が営まれていたことが分かった。町屋の中心部分は今次調査区の東側の久留米柳川街道沿いであり、その通りに面して並ぶ建物群の裏手にあたる。

18c中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、なかでも鋳造関係の遺物が注目される。また、近世の筑後地方に見られる土師質の瓦や高熱を受けた不明土製品も多量に出土している。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 18	登録番号 4

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第3集

矢加部町屋敷遺跡Ⅰ

平成19年(2007年)3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　信光社印刷有限会社
〒838-0065 福岡県朝倉市一木32-1
TEL 0946-22-2831